FINAL HUNTER G ~ファイナルハンターG~

潤虎天下無双乃鬼神超魔人絶倫帝王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＩＮＡＬ　ＨＵＮＴＥＲ　Ｇ　～ファイナルハンターＧ～

【Ｎコード】
Ｎ６５４３Ｑ

【作者名】
潤虎天下無双乃鬼神超魔人絶倫帝王

【あらすじ】
今から1万年前、最強のゴキブリ、チャバネカイザーと最大級の蜘蛛のファントム土蜘蛛が戦いを始めた。２頭の戦いは世界を荒らし、数多の生物や文明を崩壊させ遂には大陸をも飲み込んだ。
世界各国の王たちは連合軍を結成し進軍を試みたが１０００万の軍勢はたった2日で壊滅した。
そして世界は一度、崩れ去った。
それから数千年、モンスターを狩ることで生計を立てる者、ハンタ

ーが現れた。
ポッケ村で生まれた少年、シン・アスカは新米ハンター。
そんな彼のハンター生活が今始まる！

ハンター

“ハンター”。
漢字で書くと“狩人”。
その意味は文字通り、狩る人を指す。
辞書的に言えば、猟を生業としている人のこと。
と、まぁ、前置きは少なめに、ハンターの意味を理解してもらった上で、この物
語を読んでいただけたらと思います。

ここは“ティーズ村”。
日当たりのよい平地に築かれた村であり、確認されている５つの“村”の中では
最も大きな村だ。
半分海、半分山に接し、気候は常夏という温暖な地域である。
シン
『よしよし』
そして、そのティーズ村の中でもひときわ目を引くのが、教会のような外観の建
物のギルド本部である。
“ギルド”というのは、ハンターにおいてのすべてを統括する組織・役所。つま
り、ハンターの総本山ということだ。
ティーズ村を除く４つの村には、それぞれギルドの支部がおかれている。
ハンターたちが隠語で『集会所』と呼んでいるのが、まさしくそれである。

そして今日は、2年に一度のハンター試験合格者、つまり新人ハンターの授章式があるのだ。
なので、ここギルド本部に多くの若者が集まってくる。
このシンという若者もその一人。
係員
『お兄さん、急いでください』
門前で忙しそうにしている係員が声をかけてくれた。シン
『あ、はい。すいません』なぜか謝罪の言葉を述べた後、その係員の指示にしたがって、ギルドの門をくぐった。
シン
「ここからだ。ここからオ　ヤジにつながるんだ」
『』は実際に出している声「」は心の声とする。
シンは内心、そう思い、ハンターの総本山に足を踏み入れたのだった。

ここでシンの紹介をしておこう。
シン・アスカ
このティーズ村よりさらに北に位置するポッケ村という村の出身である。
年齢は17。
ポジティブ思考で、とりあえず前向きな性格。上から目線が嫌いなフツーの男の子。
彼の父はすでに亡くなっているが、“白銀の竜王”の代名詞で呼ばれ、ハンターの間で知らぬ者なしと言われた伝説に語られるハンターである。詳しいことは後

ほど。
そんな父をもったシンがハンターになったのは、単に『父を越えたい』という思
いだけではなかった。
ただ、父を追ってハンターになったのは間違いない。
人の波についていき、行き着いたところはホールだった。例えるなら学校の講堂
のようなところ。
そこにはすでに数十人もの新人ハンターたちが待機していた。
シンもその中に混ざる。
シン
『多いな、こんなに…』
思わず口に出して、辺りを見回してしまった。
そこにはシンが思っていた以上の数の新人ハンターがいた。
やはりというか、当然というか、その中でもやっぱり若い人が多い。
見る限り、１０代後半から２０代前半といったところだろうか。
中には３０代後半ぐらいのマッチョのおっさんもいるにはいるが。
理由を言うなら簡単。
一流のハンターになるには１０年以上の長い時間と経験、修行がいるとされている
からだ。ま、これは一般に言われることであって、例外は多々ある。
シン
「こっちは本物のハンター　か」
今度は口には出さなかった。
シンの目線の先には、目付きが明らかに新人ハンターとは違う人物がいた。
それも一人ではない。
ホールの隅に5人ずつぐらい固まっている。
それは、今、シンたちが目指そうとしている現役のハンターだ。
新人ハンターとベテランハンター、見分けるのは一目瞭然である。

シンは目線の先にいるハンターに少し憧れを感じていた。
そして、そのハンターに今自分が近づこうとしていると思うと、体が身震いをおこす。
シン
『…』
なんだか叫びたい気分だ。何もかも見るものが新鮮で、シンは辺りをキョロキョロと見ていた時、ふと気づく。
みんなの視線が前を向いている。
シンもつられて前、舞台の上の中心を見る。
そこには威厳あるオヤジがいた。
また、その後ろには、これまたベテランハンターと思われるハンターが『休め』のポーズをとって5、6人ほど並んでいる。
ギルドマスター
『新人ハンター諸君、ハン　ター試験合格、おめでと　う』
威厳ある姿から、迫力ある声が放たれた。
このオヤジこそ、ギルドの総帥、ギルドマスターのギルバートである。
また、“ババコンガの擬人化”というすばらしい異名の持ち主。
ギルバートの短い祝辞を機に、新人ハンターの授章式が開会された。
ギルバート
『しかし、気を入れるのは　今、この時からだ。命を　かけ、フィールドへ出て
　いくハンターに、気の緩　みは許されない』
ギルバートのありがたいお言葉。
この後も長ったらしい話が続いた。ま、校長の長い演説と言えば簡単に理解してもらえると思う。

そうは言ってもギルバート自身も、以前は“巨神兵ギルバート”と異名をとった
少しは名の知れたハンターだったのだ。
なので、一概に偽善者のきれいごとというわけではない。
シン
『かぁ～』
最初は気を引き締めていたシンも、妙なため息をつくようになった。
ふと、ギルバートの後ろを見ると、そこに立っているハンターまでが寝ていた。
シンは『うわぁ～…』と思いつつ、その立ったまま寝ている器用なハンターを見
ていた。
小一時間ほど長々とハンターの心得について語っていたギルバートが、後ろに立
っているハンターの一人から紙の束を受け取った。
後ろにいるハンターたちはギルバートの手伝いをしているのだとシンは思った。
ギルバート
『アリシア・エストハイム』
突然、ギルバートが個人名を叫び始めた。
ギルバートの後ろで寝ているハンターに気をとられていたシンは、ギルバートの
一声でハッと我に返る。
アリシア
『はい』
アリシアと呼ばれた女性は一言声を上げ、階段を上り、舞台の上へあがる。
そうして、何かの紙を持って待ち受けるギルバートの方に、ゆっくりと歩み寄る
。

ギルバート
『アリシア・エストハイム　。貴殿を本日をもって、　ギルド公認のハンターと
　なることをここに認める　』
偉そうにそう言い放ち、手に持っていた紙と、何やらカードのようなものを渡した。
アリシアという女性は、頭を下げ、それを受け取る。同時に拍手が起こる。
まるで卒業式だ。卒業証書を渡す校長と、それを受け取る生徒のようだ。
シンも拍手をおくる。
一番最初の見本にしては、完璧だとシンは思った。
さらに、名前が呼ばれていく。
そして――――
ギルバート
『シン・アスカ』
シンの名前が呼ばれた。
渾身の力を腹に込め、
『はい』
と、一言。
アリシアのように階段をあがり、ゆっくりと歩み寄り、ギルバートの前に立つ。
目の前で見ると、さらに圧倒される。
ギルバート
『シン・アスカ。貴殿を本　日をもって、ギルド公認　のハンターとなることを
　ここに認める』
アリシアや他の人と全く同じセリフをはき、紙切れとカードらしき物体を突き出

してくる。
『へっ、こんなもの』とはたき落としたいところだが、ここは見本となったアリシアに習って、頭を下げ、受け取る。
受け取ったものは、認定書とライセンスカード。
認定書とは、いわゆる免許だ。
ライセンスカードとは、ハンターが常時必ず持たなければいけない、携帯型の免許証のようなもの。一般的に『ギルドカード』と呼ばれている。
それを受け取ったシン。
こうして、ハンターとして、ハンターの世界に歩を進めたのだった。

仲間（ダチ）

ギルバート
『シン・アスカ』
自分の名前が呼ばれ、舞台へあがり、ギルバートの前に立つ。
ギルバート
『シン・アスカ。貴殿を本　日をもって、ギルド公認　のハンターとなることを
　ここに認める』
もう言い飽きているだろうとツッコミを入れたくなるほど、何度も言っているセ
リフを口にし、認定書とライセンスカードを渡す。
シンもここは頭を下げて、突き出されたそれを受け取る。
後ろで寝ていたハンター
『…ん？』
シンがちょうど舞台に上がってきた時、さっきまで爆睡していたハンターが目を
覚ました。
その横の女性ハンター
『ちょっと、いつまで寝て　るつもりよ、アンタ』
寝ていたハンターの隣にいた女のハンターが、肘を突き立てて問うてくる。
この二人しか聞こえないほどの極小さな声で。
後ろで寝ていたハンター
『あ？だってジジィの話眠　いだろ？』
ジジィとは、もちろんギルバートのこと。
あきれた顔をする女のハンター。
寝ていたハンターは、ふと前を見る。
シンが認定書とライセンスカードをもらっていたシーンだった。

後ろで寝ていたハンター
『…』
寝ぼけ眼で、シンの顔を凝視する。
シンは気づいていなかったようだが。
後ろで寝ていたハンター
『…ふ～ん』
少しうなづき、また夢へと戻っていく。
その横の女性ハンター
『ハァ…』
ため息をつくのは、その隣の女のハンター。

認定書とライセンスカードを受け取ったシンは、来た方とは反対の階段から降り
、もといた自席へ戻る。
ライセンスカードがすごく気になっているようだ。
シンがライセンスカードを見ていると、残りはすぐに終わった。
するとまたしても、ギルバートの演説が始まった。
ギルバート
『一流のハンターとは、勝　つことだけを考えるので　はなく、臨機応変な考え
　のもと…』
さらに小一時間ほど語りだす。
よくそんなに話すことがあるなと、関心するシンであった。
ギルバート
『これをもち、今年度の授　章式を閉会する』
ギルバートが手短な言葉で最後をくくる。
『やったと終わった～』とどこからともなく聞こえてきそう、辺りはそんな空気
だった。
ギルバートが舞台の上から去っていく。

後ろにいた5人のハンターもギルバートに続く。
シンが気にしていたあの爆睡のハンターは、隣の女性ハンターにぶん殴られ、嫌
な目覚めを味わっていた。今回、この授章式に臨んだ新人ハンターは６４名。
そのうち、８０％が１０代後半から２０代前半の若者だ。
シン
『ふぅ～』
伸びをする。
この後は、受付にて新人ハンターに武具の一式が支給される。
新人ハンターは、この支給される武具をまとい、初めての狩りに出るのだ。
シンはすぐに立ち上がろうとしたが、舞台の右上に飾られているあるものに目が
いった。
シン
『…』
そこには、【粉骨砕身】と書かれていた。
伝説のハンター“白銀の竜王”の格言である。つまりシンの父のことだ。
シンもこの言葉は耳について離れないものになっていた。
その意味は、力続く限り、全力で事にあたること。
シンがその本当の意味を理解するのは、もう少し先になる。
気がつけば、辺りの人は少なくなっていた。皆、武具を受け取りに受付までいっ
たのであろう。
シンも急いで立ち上がり、受付に走る。

受付付近、武具を受け取りにきた新人ハンターでごった返しになっていた。

アウル
『何?今日なんかあったっ　け?』
クエストの申し込みにきた現役のハンターが足を止める。
ちなみに、このアウルは辻江のことです。
スティング
『あ～、アレだろ?授章式　。今日は新人ども授章式　があるのさ』
ステラ
『…そうなの?』
男2人、女1人のペアが、受付で群れる新人ハンターたちを見ている。
受付の女の子たちは、あわてることもなく、慣れた手つきで順番に武具を渡していく。
シンはまだ来ていない。
この時シンは、ホールから受付までの廊下を走っていた。
ハイネ
『ちょっといいかな?』
走るシンの前に、待ち伏せでもしていたのではないかというぐらいのグッドタイミングで青年が現れる。
見たところ、自分と同じくらいか、ちょっと上くらいかな、とシンは勝手な年の推察をした。
シン
『えっと～～…、ハイネ　』
ハイネ
『ピンポ～ン』
さっきの授章式で名前を呼ばれていたのを思い出した。
ハイネは人差し指を立てて、オーバーに喜んだ。
ハイネ

『キミの名前はシンだった　よね？本名でいうとオレ　は、ハイネ・ヴェステン
　フルス』
とりあえず本名を名乗り、自己紹介をする。
やはり年上だろうか。
ハイネ
『単刀直入に言うな？オレ　と組まないか？』
は？、って感じだ。
突然だし、単刀直入すぎだし。
シン
『組むって…』
シンは疑問形に対し、疑問形で返した。
ハイネ
『オレたちって新人じゃん　？で、よく言うだろ。新　人が生き残るにはダチ（仲間）を多く作れって』これはセオリーだ。
一般的によく言われることである。
ハイネ
『で、オレさ、授章式ん時　から、ずっと探してたん　だよ。ダチ（仲間）にすん
　なら誰がいいかな～、っ　てさ』
ハイネがギルドカードを、人差し指の上でクルクル回す。
シン
『それがオレってこと？』ハイネ
『その通り』
ギルドカードをつかみ、親指を立てたポーズをとる。シンはしばらくじっとしていた。
別に、ハイネと仲間になるのが嫌で、考えていたわけではない。
シン

『オッケ』
シンもポケットからギルドカードを取り出し、ハイネのギルドカードに、まるで
乾杯をするように重ねた。ハイネ
『よっしゃ～、これからも　よろしくな、相棒』
調子よく肩に手を回してくる。
シン
『おう』
ハンター人生始まって、最初の仲間（ダチ）ができた。

武器の感触（前書き）

あー文章下手だなぁ

武器の感触

ハンター人生始まって、最初の日に仲間（ダチ）となったシンとハイネ。
さっそく、お互いのギルドカードを交換する。
ギルドカードは、仲間となった人とデータを交換し、情報を伝え合うのだ。
しかし、まだ2人のギルドカードはほとんどが空欄だ。
ギルドカードには、そのハンターの個人情報も記入されているので、2人のギルドカードにはそれぐらいしか書かれていないのだ。
シン
『あ…』
やはりシンが思ったとおりハイネは年上だった。

ここでハイネの紹介をしておこう。
本名、ハイネ・ヴェステンフルス。
北にあるポッケ村とこのティーズ村の間にあるジャンボ村の出身。
年齢は１９。
背丈はシンより一回り高く、見た目はやんちゃなお兄ちゃんといった感じ。
オレンジの長髪が特徴。

お互いのギルドカードを確認しあった後、２人は支給される武具を受け取りに受付に向かった。

アウル
『なぁ、スティング。今年　の新人、例年より多いと　思わね？』
クエストを申し込みにきた3人組のハンターが、新人ハンターでご

った返しにな
っている受付が開くのを待っていた。
スティング
『ああ、そうだな』
ステラ
『…多い』
新人ハンターたちの武具の受け取りは、まだまだ終わりそうになかった。
ハイネ
『うわっ、まだ結構並んで　んな～』
そこへシンとハイネが来る。
2人は列に混ざる。
アウル
『おいおい、どれだけいる　んだよ。５０人越えてんじ　ゃねぇの？』
スティング
『さぁな』
さらに列に並ぶシンたちを見て、アウルたちが文句の混じったグチを口走る。
ハイネ
『お前は何選んだ?』
列に並びなら、ハイネが聞いてきた。
シンは『?』という表情を浮かべる。
ハイネ
『武器だよ、武器。シンは　何選んだんだよ?』
シン
『あ～、そういうことか。　オレは双剣だよ』
支給される武具のうち、武器は全１１種類ある中から好みのものを選べるのだ。
だいたいのハンターは、この最初に選んだ武器の種類を一生使うこ

とになる。
なので、この選択は重要性抜群なのだ。
シン
『ハイネは？』
当然、聞かれたことは聞き返す。
ハイネ
『オレのは見てからのお楽　しみだ』
シン
『何だよ、それ』
談笑している2人は、注目の的だった。
以前にも言ったとおり、新人ハンターはいかに多くの仲間を早いうちに作るのか
で、その後の生き残りがかかってくる。
周りの新人ハンターたちも誰を仲間にしようか、目を光らせている最中だったのだ。
シン
『よろしくお願いします』やっとシンの番がまわってきた。
シンはギルドカードを受付の娘に渡す。
受付には2人の娘が、せっせと動き回っていた。
ピンクと青のメイド服を着た受付嬢の、ピンクの方がシンに応対してくれた。
受付嬢
『シン・アスカ様ですね。　少々お待ちください』
受付の娘はシンのギルドカードを受け取り、一覧表と照らし合わせて確認する。
受付嬢
『確認いたしました。ご希　望の武器は双剣と承って　いますが』
シン
『はい』

受付の娘は後ろの棚から、シン用の防具と武器を持ってくる。
受付嬢
『こちらです。どうぞ』
防具と武器を受付の机の上にのせ、ギルドカードを返す。
シン
『ありがとございます』
受付嬢
『お気をつけて』
笑顔で見送ってくれた。
シンはギルドカードをポケットにしまい、防具と武器を受け取る。
ハイネ
『次はオレだな。その辺で　待っててくれ』
ハイネも武具を受け取る手続きをとる。
シンは、クエストの申し込み待ちをしているアウルたちの後ろに背中合わせで座った。
お互いに知り合いでもないので、意識はしていなかったが。
シンは受け取った武器を観察する。さながら、おもちゃを買ってもらった子供のように。
支給されたのは、防具はチェーンシリーズ。武器はボーンシックル。
撫でてみたり、こづいてみたりと、その武具の感触を味わう。
ハイネ
『よぉ』
ハイネがシンの前に立つ。ハイネもシンと同じく、チェーンシリーズの防具を手にしていた。
シン
『それ…』
シンがハイネの持っている武器を指差す。

それはバカデカい剣。俗にいう大剣だ。
ハイネ
『どうだ?驚いたか?』
防具一式と大剣を手に、ハイネが笑って言った。
大剣、新人ハンターにはあまり好まれない武器である。
一般的には、片手剣もしくは双剣を選ぶのが新人ハンターのセオリーだ。
また、そこから別の種類の武器に乗り替えることもたやすいし。
シン
『おい、大剣って…大丈夫　なのか?』
もう取り返しはつかないが、一応聞いてみる。
ハイネ
『何が?』
シン
『大剣って、扱いづらいっ　て言うし。初心者のお前　には…』
自分のことにはやたら強気なくせに、人のことには必要以上に心配する。
ま、大剣は重量武器の一種なので、扱いが難しいといえばそうなのだが。
ハイネ
『大丈夫だろ。かなり重て　ぇけど…』
その『大丈夫』という言葉に、あながち説得力のないような気がするのは、シン
だけなのだろうか。
ハイネが持っている大剣はバスターソード。
シン
『とりあえず、荷物持って　部屋に帰ろうぜ』
今受け取った武具以外にも、授章式の時にもらった認定証などがある。
それを置きに自室へ戻ろうシンは提案した。

周りを見ると、すでにクエストに出発した新人ハンターもいるようだが。
ハイネ
『そうだな』
ハイネの荷物は特にヤバい。
２人は集会所、もといギルド本部を出る。
ハイネ
『そういや、シンの部屋っ　てどこ?』
ハイネが、荷物を軽く持つ方法を考え、妙なポーズをとりながら聞いてきた。
シン
『Ｆ－３』
シンやハイネのような、他の村から出てきたハンターたちは、この村では寮暮らしとなる。
ハイネ
『なんだ、近いじゃん。オ　レＦ－１』
さっきとは別のポーズだが、これも妙というしかない体勢だ。
しばらく歩いて、２人は別れた。
ハイネ
『２０分後に受付前なぁ』わざわざ、２人が離れてから叫ぶ。
シン
『おう、わかったぁ』
これだけ離れていたら、自然に怒鳴り声っぽくなる。そんなこんなで、自室に帰ってきました。
シン
『よっこいせ』
持っていた武具を床に置き、部屋を見回す。
必要最低限のものしかないが、防具と武器を飾るだけで、一気にハ

ンターの部屋
らしくなった。
シンには、それがとても嬉しかった。

一人前の意味（前書き）

文書くって難しいよね。アーマードコア5まだかなぁー。
出来るだけ早く更新します

一人前の意味

シン
『よし』
シンは鏡の前でチェーンシリーズの防具をまとい、二本の剣を背中に背負った。
鏡の中に“ハンター”の自分がいる、それが何より嬉しかった。
シン
『いけね、忘れるとこだっ　た』
アイテムボックスの上にのせていたポーチに手をのばす。
と、いっても、入っているのは回復薬が３つだけなのだが。
そして最後に剥ぎ取り用のナイフを腰に備え付け、準備完了。
シン
『それじゃ、いってきます』
誰もいない部屋に別れを告げ、集会所に向かう。
外に出ると、今までとは違う気分になる。
自分がハンターの格好をしているからだろう。少しえらくなった気分だ。
頭防具を外し、それを片手で持って歩く。
雑貨屋のおばちゃん
『あれぇ、アンタシンくん　かい？』
かん高い声が、シンの左斜め後方から聞こえてきた。シン
『おばちゃん』
シンが駆け寄る。
雑貨屋のおばちゃん
『やっぱりシンくんだよ。　まぁ、立派な格好して』シンは右手を後頭部にあてて、ベタな照れのポーズをとる。
雑貨屋のおっちゃん

『おうおうシン。何だ、そ　の格好は』
奥からヒゲのおっちゃんが出てくる。
ここは雑貨屋。
多くのハンターが、クエストに出る前にこの雑貨屋で下準備を整える。
それゆえ、この雑貨屋を切り盛りしているおっちゃんとおばちゃんは、多くのハ
ンターと知り合いで、皆からの信頼も厚い。
今日、この時から、シンもそのハンターの一人となったわけだ。
おばちゃん
『確か、今日が授章式だろ　。それなのにもう、クエ　ストに出るのかい？』
シン
『はい。もうこの辺がウズ　ウズしてて』
シンは自分の胸を押さえる。
おっちゃん
『はっはっは～、若いのぉ　～。ワシも若いころは、　そりゃもう…』
おばちゃん
『何言ってんだい。アンタ　はもう』
おばちゃんがおっちゃんを殴った。
ちょっと真面目に痛そう。おばちゃん
『そうだ、これを持っていき　な』
おばちゃんは棚の下から、ボトルを出してきた。
見たところ、回復薬と変わりなさそうだが。
おばちゃん
『これは回復薬グレートっ　ていうんだよ。普通の回　復薬よりもずっとよく効
くよ。アンタがハンター　になった祝いだ。持って　っとくれ』
シンはありがたく受け取った。

シン
『ありがとう、おばちゃん　。それじゃ』
シンは両手で回復薬グレートを受け取り、ポーチにしまうと、すぐに駆け出していった。
おっちゃん
『若いって、いいな』
シンがこのティーズ村にきたのは、３週間ほど前。
それ以来、幾度かこの雑貨屋に立ち寄っていたので、おっちゃんもおばちゃんも
シンのことを覚えてくれていたのだ。

雑貨屋から集会所までは目と鼻の先。
ハイネと約束した２０分後にはまだ余裕があった。
とりあえず、駆け込む。
そこで目にした光景は、さっきと全く変わりないものだった。
まだ、武具の受け取りをやっていた。その列もさっきほどではないが、ちゃんと
現存している。
そしともう一つ、変わらないものが…
アウル
『ああいつになったらク　エスト受注できんだよ』さっきからクエストの申し
込み待ちをしている現役ハンターたちもいた。
スティング
『騒ぐな』
ステラ
『しー』
ステラという女の子が、人差し指を口にあてて言っている。
アウルはガキ扱いされたことがムカついてるようだった。

ハイネ
『おい、シン。こっちこっ　ち』
アウルたちの向こうにハイネがいた。
シンは、文句をタレるアウルたちを横切ってハイネのところに駆け寄る。
シン
『早いな』
ハイネ
『まぁな。早くクエストに　行きたかったし』
シンと同じチェーンシリーズの防具をまとい、背中には大剣。
ハイネ
『と、言っても、まだ武具　受け渡しが終わってない　みたいだから、ちょっと
　待ってようぜ』
待合室のイスに腰かける。ハイネ
『最初のクエストって何だ　ろうな。いきなり討伐ク　エストではないと思うけ
　ど。どっちにしろ、オレ　たち2人でかかりゃ、ク　リアできないクエストな
　んてないだろ』
ハイネが調子よく話を進める。
シン
『あのさ、ハイネ。ちょっ　と相談なんだけど』
ハイネ
『ん？』
少し真面目な顔で話をきりだした。
シン
『最初のクエストさぁ、オ　レ一人で行きたいんだ』シンは率直な思いをそのま
ま言葉にして言った。

ハイネにすればちょっとショックかもしれないと思ったので、言うのを少しためらいはしたが。
ハイネ
『…』
シン
『やっぱりハンターってさ　、何でも一人でできて初　めて一人前になれるんだ
　と思うんだよ。だから初　めのクエストだけは一人　で行きたいんだ』
シンはハイネの様子をうかがうように言葉を進めた。ハイネ
『…』
シン
『ハイネ?』
ハイネは考え込むように一点を見続けている。
ハイネ
『いいな、そういうの』
シン
『へ?』
思わぬセリフが返ってきて、妙な声を出すシン。
ハイネ
『確かにそうだな。オレは　2人で行くつもりだった　けど、そういう考え方も
　あるのか』
思ったより明るい反応で、シンは安心する。
ハイネ
『よし、じゃこうしよう』何かの提案を思いついたようだ。
ハイネ
『オレたち2人で同じクエ　ストに同時に出て、どっ　ちが先にクリアするか』

シン
『つまり競争ってこと?』ハイネが笑って、親指を立てる。
シン
『ＯＫ、それなら』
それならシンも問題なく賛同できる。
ハイネ
『負けた方はお互いの契約　金を負担すること』
シン
『賭けかよ。まぁ、いいけ　どな』
ハイネとシンは手を取り合った。
契約成立の握手だ。
そんなことを話していると、受付の辺りもすいてきた。
ハイネ
『じゃ、行こうか』
シン
『ああ』
２人は初めての狩りに向け、立ち上がった。

出発（前書き）

ＩＳおもしろいなー。私は山田先生が好きです。
最近腋臭が酷くて泣きそう、病院行こうかなー

出発

新人ハンターの防具受け渡しが終了し、ようやく受付が解放された。
とりあえず、受付の2人の女の子たちが背伸びする。アウル
『やっと終わったな～』
そうそうとアウルたちが受付にくる。
彼らも長い時間待っていたのだ。
受付嬢A
『お待たせしてしまってす　いません。新人さんたち　の授章式があって』
一人の受付嬢が丁寧に受け答えする。
この受付嬢はシンたちに武具を渡した人だ。
スティング
『アウルも言ってたことな　んだが、今年の新人、や　けに多くないか？』
緑の髪をした青年がアウルの隣に来て、受付嬢に聞いた。
受付嬢B
『そ～なんだよ。６４人よ、　６４人。例年の2倍近くい　るんだから』
男気のあるもう一人の受付嬢が、スティングの質問に応答する。
スティング
『６４人マジかよ』
ステラ
『…いっぱい』
3人のハンターがクエストを受けに受付に出向く。
そこへ、シンとハイネも混ざるように入っていく。
ハイネ
『あの、クエストの受注っ　てできますか？』
横に並んでいるアウルたちの隣からハイネが声をかける。

受付嬢Ｂ
『あ～、はいはい』
慌てた表情でハイネの前にくる。
受付嬢Ｂ
『あれ、アンタたち新人の　子？』
青のメイド服をきた受付嬢が、ハイネとシンを見て言った。
アウルたちの目もこちらを向いている。
ハイネは『あ、はい、まぁ…』と首をさげながら、ぎこちない返事をする。
受付嬢Ｂ
『そっか。もうクエストに　出るのね。じゃその前に　私たちの自己紹介しとく
　わね』
もう一人のピンクのメイド服を着た受付嬢が、この受付嬢の隣に来た。
受付嬢Ｂ
『私はイク。上位クエスト　の受付を担当してるわ』この男気のある青のメイド
服の受付嬢はイクという。ショートカットのいかにもボーイッシュな女の子だ。
主に上位クエストの受付を担当している。
受付嬢Ａ
『私はサクといいます。こ　の集会所では下位クエス　トの受付担当をさせてい
　ただいてます』
このピンクのメイド服の受付嬢はサクという。
品があって物静かで、理想の女の子といった感じだ。主に下位クエストの受付を
担当している。
イク

『ついでに言っとくと…』イクがアウルたち3人組に目をやる。
シンとハイネもつられて3人組に目を移す。
イク
『こっちの緑がスティング　』
スティング
『ふん』
イクが緑の髪をした青年を指差して、紹介する。
スティングは腕を組ながら答えた。
本名、スティング・オークレー。
イク
『で、こっちの金髪はステ　ラ』
ステラ
『ん?』
次は金髪の少女。
ステラは首をかしげている。
本名、ステラ・ルーシェ。イク
『最後に、このちっこいの　がアウル』
アウル
『なんでオレだけ、そんな　紹介の仕方なんだよ…』イクの目線が、スティング
やステラの時と違い、明らかに下がっている。
アウルは目を反らして反論した。
本名、アウル・ニーダ。
サク
『お2人とも、クエストは　初めてですよね』
ハイネとシンはもちろんと答える。
サクは2人にギルドカードの提示を求める。
そうして2人のギルドカードを受け取ると、サクは受付の棚から用紙を一枚取り
出した。

サク
『現在、あなた方が受注で　きるクエストはこちらに　なっています』
と、言っても、種類は3つしかない。
当然、どれも採取クエストだ。レベルは☆1。
それでもシンとハイネは興味津々にその用紙を見る。そんな2人をアウルたちは
なつかしく思い、かつての自分たちと重ねて見ていた。
アウル
『なぁ、スティング。オレ　たちも』
スティング
『ああ、そうだな。おい、　イク。オレらもクエスト　だ』
スティングたちは要求される前にギルドカードを差し出す。
イクも慣れた手つきでそれを受け取る。
イク
『ランクは？』
スティング
『☆8だ』
わかってもらえてると思うが、イクにクエストを受注するということは、上位だ
ということだ。
つまりシンたちの隣にいる3人のハンターたちはいずれも上位レベルハンターな
のだ。
ハイネ
「☆8？」
ハイネは聞き耳を立てて聞いていた。
☆8のクエストはＨＲ6以上のハンターしか受注できない。
ＨＲ6といえば、一流と呼ばれるレベルなのだ。
ＨＲとクエストの難易度については、後に詳しく説明する。

イクはスティングから言われた☆８のクエストの一覧表の用紙を出す。
シンとハイネが受けるクエストの種類は３つしかないのに対し、スティングたちが受注した☆８のクエストは３０～４０以上の種類がある。
シン
『なぁ、ハイネ。これでいいか？』
シンが一つのクエストを指差す。
ハイネは当然のごとくＯＫサインをだす。
クエスト名【試練２特産キノコを調達せよ】。
このクエストの依頼人はギルドとなっている。
察しのとおり、初めてのクエストはギルドからの依頼の比較的簡単なクエストになっているのだ。
サク
『承知いたしました。クエストナンバー２【試練２特産キノコを調達せよ】
でございますね。では初めに契約金を徴収したいと思います』
サクが契約金である３００ｚを要求する。
２人は契約金を差し出す。サク
『え？２人ご一緒ではないのですか？』
２人とも契約金をだすので、サクがあわてて聞く。
シン
『はい。２人とも別々にこのクエストを』
サクは２人いっしょにクエストに出ると思っていたらしい。
サク
『承知いたしました』
サクはギルドカードを返却する。
サク
『受注完了しました。指定地は密林となっています』

同時にアウルたちのクエストも受注完了したようだ。彼らは3人で行くようだが
。
サク
『奥、右手の出入口から密　林への船が出る船着き場　がございます。では、お
　気をつけて』
サクは深々と頭を下げる。隣では『気ぃつけて行ってこいよ～』とイクがアウル
たちに手を振りながら叫んでいる。
まったく対極の2人だ。
シン
『スティングさんたちはど　こへ行くんですか?』
スティング
『オレはたち密林へ向かう　』
シンの質問に、スティングは顔を向けずに答えた。
世間ではこういうのをクールと呼ぶらしい。
ハイネ
『じゃ、オレたちといっし　ょですね。途中までいっ　しょに行きましょうよ』
ということで、シンたちはアウルたちと同じ船に乗って密林へ行くことになった
。

クエストスタート（前書き）

私の友人の頭にコッペパンを乗せてる奴がいる。
本当に小説って難しいな～。ちなみに病院行ったら腋臭って言われた。
いろいろショック……

クエストスタート

ハイネ
『へぇ、皆さんＨＲ６なん　ですか』
ＨＲ６といえば、一般的に一流ハンターと呼ばれるレベルで、１０年以上の経験、
修行、時間が必要とされている。ただ例外も多々ある。
そして、今目の前にいる３人。
どう見てもまだ２０代。
その若さでＨＲ６とは、驚くばかりである。

今は船の上。
船で密林に向かっている。密林は、巨大な湖に面したところにあるので、そこま
で船で送ってもらうのだ。スティング
『お前たちは何を採りに行　くんだ？』
長槍を持ったスティングがハイネとシンに聞いた。
シン
『特産キノコです』
シンがクエストの詳細が書かれた紙を取り出して言った。
ハンターがクエストに出る際、そのクエストの詳細が書かれた用紙を渡されるの
だ。
支給品は現地に着いた時に渡される。
アウル
『キノコか。確か洞窟ん中　にいっぱいあったよな』ステラ
『うん。イャンクックが寝　るとこ』
教えてくれるのはありがたいが、２人にはどこのことを言っているのかさっぱり

だ。
スティング
『バカ野郎。こいつらは初　めてなんだぞ。んな具体　的なこと教えてもわかん
　ねぇだろ』
アウルとステラは『そうか』と呟いた。
スティング
『いいか、お前たちが拠点　とするキャンプ地に崖か　らつたが垂れ下がってん
だ。それ登ってしばらく　行くと洞窟の入口がある　。そこを入るんだ。でも
　さっきステラが言ったみ　たいにそこは大型のモン　スターの休息ポイントで
もある。気をつけねぇと　いきなり死んじまうぞ』その場所への行き方、さら
に忠告と、いろいろ詳しく聞かせてくれた。
見た目より優しい人だと、シンは思いを改めた。
だってスティングって、目付き怖いもん。
シン
『脅かさないでくださいよ　』
シンが苦笑いする。
ハイネ
『見えてきたぞ、シン』
ハイネが船の外、近づいてくる大陸を指差す。
一面、緑の大地だ。
シン
『…』
見ているだけで気が引き締まる。
シンもハイネも、またアウルたち3人組も同じ気持ちだった。
スティング

『上陸するぞ』
船を砂浜に引き上げる。
船といっても、木オンリーで造ったいかだだが。
そこには別のハンターたちが使用したと思われる別の船(いかだ)が４つあった。
スティング
『よし、ここからは別々だ　な』
スティングが一番に砂浜に降り立つ。
アウルは弓を背中に、矢のケースを腰に備え付けスティングに続く。
ステラはもとから二本の剣を背負っていた。
アウルに続く。
見たとおり、スティングはガンランス、アウルは弓矢、ステラは双剣だ。
今になって気づいたが、３人とも、武器も防具も、シンやハイネの知らないものばかりだ。
シン
『皆さん、ありがとうござ　いましたぁ』
シンは船の上から叫んだ。ハイネ
『またいつか』
ハイネもシンに続ける。
ステラとアウルはこちらを向いて手を振っていたが、スティングは振り向かず、手をあげる。
アウルたちは上位クエストを受けたので、指定地は密林ではなく、密林奥地となる。
上位レベルのハンターになれば、下位ハンターが狩りを行う場所よりもさらに奥になるのだ。

もちろん、それだけモンスターは強く、下位ハンターは奥地への立ち入りを禁じられている。
もし入れば、文字通り、生きて帰ってこれない。
ハイネ
『よし、オレたちも行くか』
ハイネは気合いを入れ直すように、シンの方を見る。シン
『お、おう』
眼前に広がる緑の大地に目をうばわれていたシンが、ぎこちない返事をした。
確かに、見てとれる3つの風景は目をうばわれるほどに美しい。
青く澄み切った空、エメラルドブルーに広がる海、そして翠したたる山々。
天候も快晴なので、ハンターデビューの2人には、まさに最高のスタートだ。
ハイネ
『さっき言ってたとおり、これは賭けをふまえた競争な。このクエストの制限時間は24時間。その間に特産キノコを20個採って、ここに戻ってくること』
クエストには、そのクエスト内容に応じて制限時間が定められている。
今、シンたちが受けたクエストの制限時間は24時間。上位クエストになれば、1週間や2週間、場合によっては1ヶ月というのもザラにある。
シン
『約束通り、負けた方は契約金を全額ゆずる、で問題ないな?』
このクエスト内容は、24時間以内に特産キノコ20本の納品だ。
そして、負けた方は契約金をすべてゆずる。

クエスト成功後、契約金は倍となって返ってくるので、それをすべてくれてやるということだ。

ハイネ

『当たり前よ』

自信気に言ったシンに、同じく自信気に返すハイネ。互いに勝つ気でいる。

まぁ、２人とも、負けた時の悲しみを考えるのではなく、勝った時の喜びと相手を蔑む悦びを考えている。いわゆるポジティブ思考。ハイネ

『もしクエストが成功しなくても、２４時間後にはこの場所に戻ってくること　にしよう』

シン

『つまり、遅くても明日の今ごろには決着がついてるってことか。ジョーだ』

お互いに手を握る。

ハイネ

『じゃ、スタートだ』

握っていた手を離し、軽く叩きあって、お互い別々の道をいく。

目の前には、スティングが言っていた、崖から垂れ下がっているつた、があったが、２人はあえてそれを使わなかった。

アウル

『なぁ、スティング。あの　２人どう思う?』

アウルたちは、上位クエストの拠点となる、密林奥地のキャンプ地を目指して歩いていた。

スティング
『どう、とは？』
先頭を歩くスティングは振り向かずに言ったが、機嫌はいいようだ。
アウルとステラにはわかる。
アウル
『だから、ハンターとして　やっていけるかってこと　』
スティングは数秒の間隔をあけて、
スティング
『大丈夫だ』
と言った。
スティングが根拠のない言葉を口にするのは珍しい。さすがにアウルも驚いた。
なぜかスティングには、その言葉が頭に浮かんできた。いや、その言葉しか浮かんでこなかったのだ。
ステラも笑顔でうなづいている。

勢いよく駆け出したシン。行き着いたのは、林の中。視界はあまりよくない。
細長い木が立ち込める林を、シンはそれをなぎ倒しながら進んでいく。
シン
『あ～、ウザい』
木の葉が顔にあたる。
痛くはないのだが、最高にウザい。
シンは木の葉に対し、無駄にキレている。
すると、深緑の視界の中に動く青い物体が現れた。
そこから『ギャオウ』と、鳥の鳴き声のような声がする。
鳥竜種の一種、青い鱗が特徴のランポスだ。
シン

『モンスターか』
シンはすかさず両手に双剣をとる。
新人ハンターのシンであるが、少しのモンスターの知識ならある。
もちろん、目の前にいるランポスの知識も。
シン
『さぁ、初ハントだ』
シンは双剣を攻防一対の構えをとり、いざ狩り開始。

ＶＳ　ランポス（前書き）

技とか欲しいな、頭にコッペパン乗せてる友人から取って「ｂｒｅａｄ　ｈａｒｖｅｓｔ」とかいいかなー。
腋臭は少しマシになったと思ったら気のせいでした

VS　ランポス

ハイネ
『特産キノコか…。ちっこ　いキノコだから気ぃつけ　て探さねぇとな…』
ハイネもフラフラ歩き回りながら、特産キノコを探していた。
ハイネがいるのは、開けた海岸線だった。
2人が探している特産キノコとは、ハイネが言うように小指ほどしかない小さい
キノコなのだ。
ハイネも少々の知識なら心得ているようだ。もちろんシンも。
ハイネ
「そう言や、スティングさ　んたちが言ってたな。洞　窟ん中にあるとかなんと
か…」
この密林にくるまでの船を上でスティングたちが言っていたことを思い出す。
ハイネは『よし』とうなずくと、スティングたちが言っていた洞窟というのを探
すことにした。

そのころシンは、林の中で遭遇したランポスと交戦中だった。
『あ〝あ〝』という鳴き声とともに、その爪で切り裂いてくる。
シンは防戦一方。両手の剣で、ランポスの攻撃を受け流していた。
シン
『っ…』
ランポスの爪とシンの剣が触れ合う度に、鈍い金属音が響く。
そうしてランポスの攻撃を受け流しているうちに、その攻撃に一定パターンやリ

ズムがあることに気づいてきた。
シン
「そうか。爪で攻撃する時　、後ろ足に力をためて、　一時的に動きを速めてい
　るのか」
シンの推察は当たっている。
ランポスをはじめこの種の鳥竜種は、攻撃の踏み込みの際後ろ足に力をいれ、ス
テップの速さをあげているのだ。
そして一度の踏み込みで繰り出される爪の攻撃は、左右合わせて2回。
シン
「だったら…」
シンは今まで同じ動きでランポスの攻撃を誘う。
ランポスの踏み込み。シンはバックステップ。
ランポスの一撃目（左爪）。シンは右手の剣で受け流す。
ランポスの二撃目（右爪）。シンは左手の剣で受け流す。
ここでランポスの攻撃は一時終了。
シンはこの時を見計らって、ランポスの顔を蹴りあげた。
ランポス
『ぎゃうっ』
と、吠えて後退する。
シンもすかさず間合いをとる。
ランポスも、うかつに攻めようとはしなくなった。
シンも攻撃のコツをつかんできた。
シン
『行くぞ』
先に一歩を踏み出したのはシンだった。
シンが斬りつけるが、ランポスはバックステップで大きく退いた。
シン

『』
さらにランポスは間合いの開いたところから、小さくかがみ、後ろ足をバネに大きく飛び上がった。
シン
『うわあ』
ランポス
『あ〝あ〝』
ランポスはシンに馬乗りになった。
ランポスの牙と片方の爪は両手の剣で防げたが、もう片方の爪はシンの腹部をとらえていた。
防具がなければ貫かれていただろう。
それでも多少の痛みはある。
シン
『くそっ』
剣に噛みついているランポスを振り払おうとするが、ランポスはがっちり噛みついていて離れようとしない。
今度はランポスが、噛みついた剣をシンの手から引き離そうとする。
シン
『この…どきやがれ』
シンはランポスの横っ腹を蹴った。
ランポス
『ぎやぁ』
牙と爪を離し、ふらつくランポス。
シンも即座に立ち上がる。しかし、今ので結構体力を消耗してしまった。
再び、シンが斬り込む。
先ほどと同じくランポスはバックステップで間合いをとる。

そして、後ろ足をバネに飛び上がり、シンを上から襲いかかる。
シン
『はっ、二度も同じ手にか　かるかよ』
ギリギリで右側にかわす。そしてランポスが着地したと同時に、ランポスの背中
に斬りつける。
『ぎゃう』と声をあげ、またしても間合いをとる。
シン
『ちぃ、かすっただけか』斬りつけた、と言っても鱗をはがしたぐらいである。
それでも、剣の先からは、『斬る』という感覚が伝わってきた。
シン
『次で決めてやらぁ』
シンは右手に持つ剣をランポスに向ける。
ランポスも『やれるもんならやってみろ』といった目でシンをにらんでいる。
今度はランポスからの攻撃だ。
一直線に走ってくる。
シンは受けの構えをとる。ランポスは走った勢いをつけたまま、飛び上がった。
シン
『』
勢いをつけたままシンに飛びかかる。
それをシンは、真っ正面から受け止めるようだ。
ランポスの爪が、剣をクロスさせ受けの体勢をとったシンに激突する。
シン
『くっ』
力で押し返された。
シンは後方に吹っ飛び、地面に叩きつけられた。

ランポスは着地後、さらにジャンプし、シンにとどめをしかける。
シン
『…次で終わりだって、言　ったろうが』
シンは剣を握り直し、斜め上から迫るランポスを睨み付けた。
そしてシンは前にかがみ込んだ。
ランポス
『ああ』
爪を突き立てシンに襲いかかる。
シンもランポスに突っ込む。
シン
『』
刹那の瞬間。
シンはランポスの爪を回避し、右手の剣を振り上げた。
剣はランポスの喉元をとらえた。
ランポス
『ああ〝あ〝…』
ランポスはシンを横切って地面に激突した。
血のたまりが広がっていく。
シン
『…オレの勝ちでな』
シンは剣に付着したランポスの血を振り払い、そう呟いた。
そうして一息つき、シンは腰につけていたナイフを抜く。
モンスターを狩った後には、剥ぎ取りを行う。
シンはそのナイフをランポスに突き刺す。
シン
『鱗？』
剥ぎ取れたものは「ランポスの鱗」。
その青い鱗を太陽にかざしてみる。
シンはそれをポーチにしまい、歩きだす。
シン

『ん？あれは…』
シンの目線の先には、群生したキノコがあった。
まるで、ランポスに勝利したシンを祝うように。
シン
『おおお』
全力で駆け寄る。
目的は特産キノコ。
シンはその群生したキノコの中に特産キノコがないか確かめる。
シン
『お～、あるある』
極小サイズのキノコを発見。まさしく特産キノコ。
シンは特産キノコを含め、特産キノコ×４、アオキノコ×３、ニトロダケ×２、
、ドキドキノコ×１。
まずまず滑り出しだ。

ハイネ
『当たれ』
ハイネは石ころを投げていた。
何にかというと、それはランゴスタ。
ちゃんと狩りしろよ、とか、どんだけ暇なんだよ、とかのツッコミは置いといて
、一応まじめにやってます。
ハイネ
『待て～』
そうやってのほほ～んとランゴスタを追いかけながら、特産キノコを探していた
。
そうしているいつの間にか高台にきていた。
ハイネ

『ん？』
すると目の前に、ぱっくり口をあけた黒い入り口が現れた。
ハイネ
『もしかして…例の洞窟か　？』
ハイネが追いかけていたランゴスタがその黒い入り口に入っていく。
これはノリ的に入らないわけにはいかないので、いざその中にレッツゴー。

油断は禁物（前書き）

必殺技名「サンダーフンコロガシ」
だささいなぁ……やっぱり技名は保留かな。
腋臭にちなんで「ワキアット」なんてね

油断は禁物

ハイネ
『ラッキー』
ハイネは期待をこめて洞窟の中に入っていく。
なぜなら、この洞窟の入り口は、スティングが言っていたそれと条件が重なっているからだ。
スティングは…
～～～～～～～～～～～～密林にくるまでの船の上
スティング
『いいか、お前たちが拠点　とするキャンプ地に崖から　らつたが垂れ下がってんだ。それ登ってしばらく　行くと洞窟の入口がある　。そこを入るんだ』
～～～～～～～～～～～～と、言っていた。
つたが垂れ下がっている。そしてそれを登るというのだから、導きだされる答えは、高台だ。
そして高台に今いる。
スティングが指摘していたものかはあやしいが、可能性は高い…と思う。
そしてその高台に、スティングがいう洞窟の入り口もある。
先制点はシンにとられたものの、ハイネも負けてはいない。
ハイネ
『そういえば、イャンクッ　クが出るかもしれないと　も言ってたな…』
一応、これもスティングから忠告は受けている。
しかし、『怖がっていてどうする。行かねばならんのだ』というの

が、ハイネの
性格だ。
ハイネはそんなことを考えつつ、洞窟の入り口に足を踏み入れた。
ハイネ
『おお…』
そこは、天井の岩の割れ目から太陽の光がこぼれる美しい空間だった。
太陽の光があるので、本来地上でしか生えない植物が多く生息している。もちろん、群生したキノコも。
ハイネ
『おいおいおいおい、めちゃくちゃあるじゃんか。ウッハ～。こりゃ、勝ちもらったな』
洞窟の入り口に立って見るだけでも、これだけの数が目に飛び込んでくる。
奥に行けば、一体どのくらいあるんだ、とハイネが心を踊らせる。
ハイネは、イャンクックが出るということ忘れて、奥へと飛び込んでいった。
ハイネ
『うわっ、マジスゲー』
ハイネは群生したキノコに目を向ける。
まずは特産キノコだ。
群生したキノコは、あちこちにある。
一ヶ所ずつ特産キノコを摘んでいく。
ハイネ
『・・・９、１０っと。もう１０個だよ。笑いが止まんねぇぜ。アッハハハ
～』
まるで、マンガの悪役のボス的なノリで、高らかに笑い声をあげる。

一気に個数逆転。
シン４個に対し、ハイネ１０個。
さらに周りを見ればまだたくさんのキノコたちが。
ハイネは向こう側に生えているキノコをとるために、歩き出した。
その時、ハイネの前に影が。
ハイネ
『』
ハイネはすぐに頭上を見上げた。
それと同時に、翼の生えたピンクの物体が降りてきた。
ハイネはすぐに目を戻す。そして確認した。
ハイネ
「イャンクック」
ハイネは即座に大剣のつかに手をかけ、後退する。
土煙が晴れてくる。
しかし、そのイャンクックは全く動く気配を見せない。
ハイネ
『ん？』
それにさっきも『降りてきた』というよりは、『落ちてきた』という方が適切である。
しばらく見ていると、イャンクックのピンクの甲殻がだんだん濃くなってきた。
ていうか、赤くなってきた。
ハイネ
『血？』
思わず、口に出る。
イャンクックの体から多量の血が流れ出している。
それがイャンクックの甲殻を赤く染めていたのだ。
つまり、死んでいる。
ハイネ

『なんだ…、どういうこと　だ?』
すっとぼけて息絶えたイャンクックに近づこうとした時、そのイャンクックの死
骸の上に、さらにデカい影が映し出された。
ハイネ
『』
今度は頭上を見上げることなく後方にさがる。なんとなく、そんなことをしてい
る暇はないように思えたのだ。
『ズドーン』
と、大きな音をたて、何かがイャンクックの死骸の上にのしかかった。
ハイネ
『』
ハイネはさらに後ずさりするしかなかった。
イャンクックよりデカい。見たこともないモンスターが、ハイネの前に降り立っ
た。
ハイネ
『な、なんだ…こいつ?』褐色の甲殻、巨大なハサミ、そして一番の特徴である
大きく反り返った尻尾。
見た目は巨大サソリ。

※ケンくんが作ったモンス　ターです。

名は【針蟲セルケト】。
ランゴスタ等と同じ甲虫種の一種。
見た目はサソリ。
特徴はもちろん尻尾とハサミ。

しかし、セルケトは上位クエスト以上のモンスター。つまり“密林奥地”にいるべきモンスターであって、ここ“密林”にはいないはずなのだ。てゆーか、いてはならないのだ。
それゆえ、ハイネもこの上級モンスター“セルケト”に関する情報は知らない。
けど、一つだけわかる。
『ヤバい…』
さっき血まみれになって落ちてきたイャンクックも、コイツの仕業なのだろう。
ハイネはそう思うと、背筋が凍りつきそうだった。
コイツを見れば、イャンクックなんかまだかわいいものだ、と、そう思えてくる。
ハイネ
『…』
セルケトの迫力に圧倒されたハイネは大剣のつかに手をかけたまま、微動だにしない。
もちろん、最悪の状況を回避する方法を考えているのだが…。
ハイネ
「…逃げ切れるか？」
セルケトのハサミが開閉する度に、『キーン』という鋭い金属音がこの狭い洞窟の空間に鳴り響く。
ハイネは静かに後ずさりする。
セルケト
『カカカ…』
鳴き声というよりは、のどを鳴らしたような音を発する。

しかし、セルケトはハイネを襲おうとはしない。
ハイネ
『…』
時間をかけ、ゆっくりとセルケトから離れていく。
一瞬たりとも気が抜けない状況だった。
数分かけて、入ってきた洞窟の入り口にたどり着いた。
セルケトは唸り声をあげ体をゆらしているものの、襲ってくる気配はない。
ハイネ
『よし』
ここまできたら、と思い一気に洞窟の外へ走り出す。やはり、セルケトが追いかけてはこないようだ。
ハイネ
『…』
ハイネは無言のまま、体力の続く限り、洞窟の入り口から全力疾走で走り去った
。

シン
『よっしゃあ～、またあっ　たぜ～』
シンは小さな池のほとりにいた。
そこにも群生したキノコがある。
シン
『よしっ、半分こえた』
シンは、これで合計１２個の特産キノコを採取していた。
ということは、ハイネより多いのだ。
シン
「今ごろ、何しってかな～　、ハイネ」
ただいま全力疾走中のハイネのことを考えながら、キノコを採って

いた。
ふと顔を上げていると、肌色の球体がぶら下がっていた。
蜂の巣だ。
シン
『そうだ』
以前、父から蜂の巣からもアイテムが採れると聞いたことがあったのを思い出した。
早速、蜂の巣をゴソゴソ。入手できたアイテムは［ハチミツ］。と、もう一つ。
蜂。
シン
『あ゛…』
当然、蜂の巣をゴソゴソしたら蜂が出てくる。
うかつな行為をしたシンに、蜂のおしおきが。
『うわあ』っとシンは顔を手でおおったまま、池にダイブ。
シン
『ふぅ〜、焦った〜』
なんとか蜂を振り切ったシンは、『ランポスよりヤベェな、アイツら（蜂）』と思いながら、蜂の追撃がないことを確認した。
そして、気がつくと、腕の中には金色に光る魚が…。シン
『なんだ、これ？』
シンは［黄金魚］を手に入れた。
ま、シンにはその黄金魚がどれくらいの価値があるのかはわかっていないようだが。

戦術（前書き）

久しぶりの更新です。
なんか友人に「うおりぁぁ！そうりゃぁ！どうりゃぁ！」とか言いながら攻撃された。
まだまだ続くよ腋臭。

戦術

クエスト開始から１０時間。（残りは１４時間）
２人の現在までの成果は…シン
↓ランポスの鱗×１
　ハチミツ×１
　薬草×３
　アオキノコ×４
　ニトロダケ×５
　ドキドキノコ×１
　黄金魚×１
　特産キノコ×１２
　少々の食材

ハイネ
↓ランゴスタの甲殻×１
　石ころ×８
　きれいな貝殻×７
　カラ骨【小】×２
　アオキノコ×５
　マヒダケ×６
　ドキドキノコ×２
　特産キノコ×１０
　少々の食材

確率的に言えば２人とも、まずまずの結果だ。
シンはランポスとの激戦の果てに［ランポスの鱗］を勝ち取った。
ハイネはランゴスタに石ころを投げつけて遊んでいたら、偶然にも体を残した状

態で死んだので［ランゴスタの甲殻］を持っている。他にも、特産キノコを採る
時に別のキノコが採れたりと、２人とも様々な素材を手にしていた。

ハイネ
『ハァハァ…』
ハイネは洞窟から遠く離れたところにいた。
膝に手をつき、肩で息をしている。
スタミナを使いきったという感じだ。
『ぎああ』
甲高い声が、突然ハイネの耳を貫いた。
ハイネ
『』
振り向くと、そこにはすでに飛び上がり爪を突き立てたランポスがいた。
ハイネ
『くぅ』
ハイネはとっさに大剣を手にとり、ランポスの攻撃を防いだ。
攻撃を防がれたランポスはバックステップで間合いをとる。
そこにはもう一頭のランポスがいた。
ハイネ
『ランポスか…。それも２　体も…』
ハイネにとっては、これが初めての狩りだ。
２頭のランポスは、ハイネが無我夢中で全力疾走している時に、たまたまついてきてしまったのだ。
ハイネは無我夢中だったので、ランポスに追われていることも気づいていなかったようだが。
２頭のランポスが揃って飛び上った。

ハイネ
『来いやあ』
1頭のランポスはハイネめがけて、もう1頭のランポスはハイネの背後へ飛んだ
。
まず、直接飛び込んでくるランポスを大剣の刀身でガードする。
ランポスA
『あぎゃ』
ハイネはランポスを弾き返す。
さらに背後に回り込んだランポスが、ハイネに襲いかかる。
ハイネ
『遅いんだよ』
振り向く際の遠心力を利用して、大剣を地面と水平に振るう。
ランポスB
『はぎゃあ』
一刀両断。
リーチの長い大剣で、左側面から真っ二つに斬られた。
ハイネ
『まず1匹』
さっきのランポスがさらに飛びかかりをしかけてくる。
ハイネは大剣を振った威力で地面に突き刺した。
そして振った時の反動を利用して、大剣のつかを軸に逆立ちをした。
そのまま、逆立ちした体勢で飛び込んでくるランポスに、2発の回し蹴り。
ランポスA
『あ〝あ〝』
バランスをくずし、落下するランポス。
ハイネも華麗な動きで着地し、右手に大剣のつかを握って踏み込む。
そして、立ち上がろうとするランポスの頭を左手で押さえ込み、右手の大剣で斬

り裂く。
ランポスはその場に横たわった。
見事なアクロバチックな戦闘だった。所要時間はわずかに３０秒少々。
シンは１頭に２０分ほどかかっていた。
ハイネは２頭に３０秒だ。
ハイネ
『出直してきな』
出直しこいっつったって、もう死んでんだから無理だろ。ってツッコミはご遠慮
ください。ただ、イキってるだけなんで。
大剣のような重量武器は、新人ハンターにはあまり好まれない。
もちろん理由は『重いから』とか『扱いにくいから』など、もっともなものばかりだ。
しかし、ハイネがわざわざこの大剣を選んだのは、ハイネが得意とする戦術【アクロバット】に最も適しているからだ。
例えば、先ほどのように、つかの上で逆立ちする、とか、反動に任せて身体を動
かす、などアクロバットを戦術に取り入れているハイネにとっては願ってもない
武器なのだ。
ハイネ
『じゃ、剥ぎ取りだな』
ハイネは２頭のランポスから剥ぎ取りを行う。
［ランポスの鱗］［ランポスの牙］が手に入った。
ハイネ
『…そうだな。ランポス装　備でも作ってみっか』
ハイネはキノコがいっぱい詰まったポーチにランポスの素材をしま

う。
そうしてまた、特産キノコを探して歩きだす。
洞窟の中で遭遇した、アノ化物に出くわさないよう願って。

シン
『キノコ～、お～いキノコ　～』
恥ずかしくないのか、と言わんばかりの言葉を発しながら特産キノコを探していた。
シンはフラフラっとさ迷っていた時、頭上より黄色い物体が奇襲をしかけてきた。

シン
『』
シンはすかさず緊急回避でかわす。
ハンターらしい動きになってきた。
黄色い物体は奇襲に失敗すると、再び空中へ飛翔していく。
ランゴスタだ。

シン
「虫？」
少し拍子抜けする反応だった。
ランゴスタは空中でUターンすると、再び奇襲へ。
シンはまた緊急回避。

シン
『っ…』
空中からの変則的な攻撃にタイミングが合わない。
それに、ランゴスタには、麻痺性の毒があると聞く。是が非でも攻撃を受けるわけにはいかない。
再度空中でUターンし、また奇襲攻撃。

しかし、ランポスと違い同じ攻撃パターンしかない。シン
『なめんなよ、コラ』
ランゴスタの毒針があたる前に斬り込んだ。
ランゴスタの足を斬り落とした。
緑の血が気持ち悪い。
ひるんだランゴスタに追撃を加える。
シン
『死ねぇ、虫』
とどめの一撃でバラバラに砕け散った。
シン
『うえっ』
防具についたランゴスタの返り血をふきながら、口を押さえるシンだった。
だが、目線の先には…。
シン
『あ、キノコ』
ランゴスタの返り血をふき取り、駆け寄る。
これで、シンの特産キノコは15個となった。

スティングたちが向かった先では…
スティング
『いた、ヤツだ』
真っ暗な洞窟に、3人はいた。
ここが“密林奥地”だ。
アウル
『とりあえず、毒らせるよ？』
ステラ
『うん』
3人は戦闘体勢に入っていた。

これが3人の目的のモンスターだろう。
クエスト開始20時間を越えたところで、やっと見つけることができたようだ。
スティング
『行くぞ』
スティングが先頭にたち、ガンランスの盾を構えて突っ込む。
アウル
『おおぉ』
アウルが気合いのこもった声を発しながら、矢の照準を合わせる。
ステラ
『おー…』
やる気あるのかわからないような声だが、スティングとアウルにはわかっている。
今の返事に、ステラどのような意思がこもっているのか。
ステラは両手に剣を持ち、スティングの左から走り抜ける。
そして、スティングたちの目的。それは…
セルケト
『カアアァ』
皮肉ながら、密林の洞窟でハイネの前に現れた針虫セルケトと同種のものである。
（もちろん、ハイネと遭遇したヤツではない）
いざ、狩り開始。

戦術（後書き）

シン「次回本気出す」

大鎌（前書き）

祝、総合評価４ポイント！
イェーイ！うおりぁ！そうりぁ！どうりぁ！

大鎌

昼間、ランポスを大剣で斬り倒したハイネは刀身に着いた血のりを拭い、背中に背負った。ハイネの周囲にはランポスの臓物が飛び散り血の水溜まりが足元に広がっていた。

ハイネの太い腕から繰り出される一撃は凄まじく、ランポスは全て一刀の下斬り殺されていた。

「ふぅ……」

溜め息を一つ吐き、顔に着いた返り血を手で拭う。既に辺りのランポスの死骸にはカラスが群がり、飛散した内臓を啄んでいた。

空は茜色に染まりもうじき夜が来る。

夜間のモンスターは凶暴である為、新米ハンターのハイネやシンでは危険な時間帯なのだ。

ハイネはもう夜を過ごす為の安全な場所を幾つか確保しているが、シンは未だに見つけられず洞窟の中をさまよっていた。

砥石を取り出して切れ味の落ちた大剣の刃を磨いた。

ハイネが目を付けた安全な場所とは大樹の枝の上であった。１０ｍはあるその大樹の上ならばランポスですら上がって来る事はない。

時刻は7時を回り、周囲が暗闇に溶けて何も見えなくなった。月も雲に隠れて

しまいモンスターが住むこの密林を照らす物は何もない。
枝に身を寄せてハイネはシンの心配をしていた。ハイネよりも知識に疎いシンが簡単に安全な場所を探せるとは到底思えなかったからだ。
一方、シンの方だがハイネの予想通り8時を回った今も寝床を見つけられずにいた。何かの意地なのかシンは一向に洞窟を出ずにずっとその場でキノコを探していた。
凡そ3回のランポスからの襲撃を受けてシンの体力は限界に達している。
息も絶え絶えになりながらシンは岩場に背を向けて休憩を取っていた。
決して安全な場所とは言えないが、拓けた場所に留まるよりは遥かにマシだし背後からの攻撃を考える必要も無い。

「ランゴスタが伊勢エビに見えてきた……」

と呟いていると洞窟の奥から1体のランポスが現れた。これで4回目の攻撃であるが今回は敵の数が違う。
今までは1体か2体のランポスが相手であった為、襲撃を切り抜ける事が出来たが現在、シンは10体のランポスに取り囲まれているのだ。
シンの実力では到底この数を相手には出来ないだろう。
寄ってたかってランポスに切り裂かれ餌になるのが関の山だ。
シンが双剣を構えるとランポス等は姿勢を低く取り、脚に力を込めた。
この姿勢はランポスが飛び込んでくる予備動作であることは今ま

でのランポス
戦で学んだ。
　豁然、１０体のランポスがほぼ同時にシンに飛び込んで来るとシンは身を地に
深く伏せてから地を蹴り低空を飛んだ。
　ランポスの足元をくぐり抜け、袋のネズミ状態から脱出すると即座に視線をラ
ンポス等へと向けた。飛び込み攻撃を外したランポスは仲間同士、頭をぶつけ合
ったり、誤って爪が体に刺さり、少し仲間割れをしていた。
　その隙にシンは急いで逃げようと脚を必死に動かし洞窟の外を目指していると
背中に強烈な衝撃がシンを襲った。
　１体のランポスが逃げるシンを見逃さず攻撃を仕掛けたのだ。気付くとシンの
周りをランポスが包囲していた。
　しかし、シンはまだ諦めてはいなかった。

「ふ～……」

　息を吸い込みそっと瞼を閉じ左手に保持している剣を逆手に持つとシンはゆっ
くりと目を見開いた。
　シンの体から凄まじい殺気が漲り、顔付きもさっきと比べて少しだが険しくな
っている。
　これは双剣を使う者特有の能力“鬼人化”である。攻撃力と身体能力が飛躍的
に向上する反面、防御力は無いに等しい程激減する諸刃の剣と呼べる技である。

鬼人化をまだ極め尽くさない身のシンでは1分しか使用出来ない。
シンを取り囲んだランポスは再び一斉に飛びかかるとシンの姿はその場か忽然
と消え失せた。攻撃の行き場を失ったランポスはまた仲間同士、ぶつかり合う。
最も早く態勢を立て直した1体のランポスはシンに向かって大きな口を開けて
噛み付くが、シンの姿をまた見失ってしまった。
ここにあるかと思えば彼方にある、彼方にあると思えば背後にある。
右へ跳び左へかわし後ろへ退き前へ突く。
鬼人化の恩恵を受けたシンの脚力は目を見張る物がある。既にどのランポスも
シンを捉え切れてはおらず、混乱状態に陥っていた。
好機と見たシンはさっき噛み付いて来たランポスの背後から斬りかかった。
背中の肉が裂け、悲鳴を上げるランポスにシンは追い討ちをかけた。
逆手に持たれた剣を振り上げ、ランポスの頭蓋に決定的な一撃を加えた。
脳天から血を吹き出しランポスは横に倒れる。
ようやく1体を始末したかと思うとシンの背後から2体のランポスが同時に口
を開けて襲いかかって来た。
気配を感じ振り帰ると右手の剣を逆手に持ち直し、一対の剣を2体のランポス
の口に押し込んだ。
上顎を貫き、頭から切っ先が飛び出している。絶命したのを確認すると続いて
4体目の口を喉にかかるまで切り裂いた。

5体、6体と次々にランポスを倒して行き最後の1体に差し掛かった時だ、体が急に重くなり自然と膝を地面に着け、掌から双剣が抜け落ちて行く。

遂に鬼人化の効果が切れてしまったのだ。

耐え難い疲労感に息を荒げ、全身の筋肉が痙攣していた。

最後のランポスは黄色い瞳を光らせながらゆっくりとシンに近付くと鋭い爪を生やした脚でシンを踏みつけ、大地に固定した。

ランポスの牙が並んだ口がシンの首に近寄ってくる。手元には双剣はなく抗う術はなかった。

万事休すそう思い目を瞑ると、ふとシンは夢から覚めたかの様に目を見開くと腰に携えている剥ぎ取り用のナイフを抜き取り、ランポスの足に突き刺した。

悲鳴と共にランポスの拘束が緩むと、足を払いのけ落とした双剣を拾い、ランポスの腹を横一文字に切り裂き、余っている左の剣で首を跳ばした。

大腸が零れ、そこから血と消化しきれていない餌の異臭がシンの鼻をついた。

「アスカ王国（キングダム）。……疲れた。特産キノコなんかどうでもいいやハイネが見つけるし。帰ってウニ食べよ」

双剣を鞘へ戻し洞窟の出口へ向かって歩き出すがシンの体は鉛の様に重くなりピクリとも動かなくなった。

それはシンの背後に立つ何者かの殺気に当てられた為である。歯を食いしばり

振り返ると焦げ茶色のマントで全身を覆い、大鎌を担いだ男であった。

屹立とした大鎌は邪なまでの威厳を放ち、シンは一歩も動けなくなった。

大鎌の男は人なのか悪魔なのか、それさえも曖昧にさせる圧力を漲らせていた。

禍々しい迫力にシンはたまらずその場で嘔吐した。腰が抜けて尻餅をつくがシンの剣を持った右手は、大鎌の男に向け抵抗の意志を見せていた。

しかし、鬼人化したシンであっても戦えば敗北は必至、大鎌の男の背後に映る死という現実が消えない毒針として胸を貫いていた。

クエストクリア（前書き）

エネルギー切れ、文章戻っちゃった。アハハハハハ

クエストクリア

背後から迫る圧倒的なもの。
焦げ茶色の防具をまとった男が、大鎌を振り上げている。
シン
『な…』
その場をわかりやすく絵で表現すると、アリがゾウに踏み潰されそうになっている状況。
もちろん、アリとはシンのこと。ゾウとは大鎌の男のこと。
大鎌の男
『…』
まさしく例えの絵のとおり。
ゾウが一歩踏み出そうとしている先にアリがいるのだ。
アリがゾウの足を受けきれるわけがない。逃げれるわけもない。
圧倒的にすべてが圧倒されていた。
シン
『な…』
大鎌が振り下ろされる。
シンは目を反らすことすらできなかった。
刹那。
明らかに鎌を振り下ろしただけとは思えない地響きが起こった。
シン
『』
さすがにシンも目を閉じていた。
目を閉じていたが、地響きの感覚は伝わってきた。
つまり、それを感じるということはまだ生きている。一振りで地響きを起こすよ
うな斬撃をくらって生きているはずがない、と思ったがシンはおそ

るおそる目を
開けた。
シン
『…』
そこには光輝く（ように見えた）救世主様がいた。
大鎌を刀で受け止めている男。
シン
『…？』
状況がまったく理解できないシン。
救世主様
『何をやっているんです』その言葉は誰に対して言ったのか？シン
？それとも大
鎌の男？
大鎌の男
『…』
大鎌の男は無言のまま、救世主様の刀と大鎌の男の鎌がすれ合う音
だけが聞き取
れた。
大鎌の男
『…』
大鎌の男は救世主様の刀をはじき、左手で何かの玉を地面に投げつ
けた。
救世主様
『』
紫色の煙が立ち込めた。
［毒けむり玉］だ。
大鎌の男はそれに紛れて逃げ去ったようだ。
救世主様はシンを抱いて、走り出す。
救世主様
『息をしちゃダメだ』

救世主様はシンを抱いて走っているにも関わらず、シンが素で全力疾走するよりも速い。

シン

『ん～』

広範囲に散布された紫色の毒けむりがはれてくる。

救世主様は安全を確認し、シンを下ろした。

救世主様

『大丈夫？』

その時初めて救世主様の顔を見た。

知的な感じの物静かで優しそうなお兄さん、って雰囲気だ。

シンは『は、はい』とぎこちなく答える。

救世主様

『じゃ、オレはいくね。さっきのやつみたいなのがいたりするから、気をつけてね』

救世主様はさやに戻した刀を腰にさし、先ほどの大鎌の男を追っていった。

シン

「あの人、太刀の使い手か…」

太刀、切断武器の一種で、一流ハンターに最も好まれている。

シンもそれを踏まえた上で、今の救世主様も相当の実力者だと勘ぐった。

さっきの大鎌の男と今の救世主様、感じはまるで違うが、双方とも強大な力を持っているのに違いない。

ハイネ

『２０個コンプリート』モスの後を追ってキノコを探していたハイネが、つい

に目的の２０個を達成した。
後は生きてキャンプ地まで戻るだけだ。
しかし、モスについていったためキャンプ地からだいぶ離れてしまった。
ハイネ
『時間も、余裕とは言えな　くなってきたからな。早　く戻んねぇと。シンはも
　う終わってたりしてな…　』
ハイネはシンとの賭けの勝敗を考えつつ、キャンプ地に急いだ。

シン
『…』
目の前で起こった強大な力の激突をまだ信じれないでいた。
裂けた地面がその力を物語る。
シン
『夢…じゃないよな』
数秒後にはホントにあった出来事かもあいまいになるくらいだった。
シンは立ち上がって状況を頭の中で整理する。
シン
「あれ…？オレってキノコ　探してたんじゃなかった　っけ？」
シンの頭の中に、先ほどの出来事以前の記憶がよみがえる。
シン
『やっべ。時間やっべ』声に出してあわてふためく。
この時にはすでに、大鎌の男のことも救世主様のことも忘れていた。
一つのことに意識が向けば、他のことは忘れてしまう、シンの性格だ。
刻限まで残り2時間をきっている。
シン
『大丈夫か…？』
シンはあわてて林の中へ戻っていく。

とりあえず、走りながら周りを見回して特産キノコを探す。

シン

『んん～、ねぇな～』

あわてているため見逃しも少々あった。

そうして高台へあがってきた。

『キノコ～』と呟きながら、シンは崖からの景色にも目を向けることなく、特産

キノコを探し続ける。

そしてその時、唯一目に止まったのが、洞窟の入り口。

シン

『洞窟…』

シンはこの時に、スティングの一言を思い出した。

シン

「スティングさんたち、洞　窟の中にいっぱいあるっ　て言ってたよな」

今になってやっとだ。

シンは、スティングの言っていた洞窟がこの目の前のものと信じ、その中に足を

入れる。

ここで思い出してもらいたい。

この洞窟、先日ハイネが針虫セルケトと遭遇したところとまったく同じなのだ。

シン

『ス、スゲー…』

感無量の光景だ。

太陽の光がこぼれる洞窟の中には、まるでキラキラと光る宝物のようにキノコが

生えている。

少なくとも、シンの目にはそう映った。
シンは残り5個の特産キノコを手早く採取し、一瞬考える。
『特産キノコを採り終えた　ので、今すぐ戻る』
『このままもう少し、この　場で採取を続ける』
2択だ。
しかし、答えはすぐに出た。
『このままもう少し、採取　を続ける』と言いたいところだが、時間がわからない以上、『今すぐ戻る』を選択する他なかった。
シンは入ってきた洞窟の入り口に引き返す。
案じていたセルケトの出現はなかった。
シン
『え～と、どうやって帰れ　ばいいんだっけ?』
目の前には崖。
最後の最後に最悪な質問を投げ掛けた。
とりあえず、崖の下を覗いてみる。
シン
『あれって…』
崖下にはキャンプ地が。
『やり～』と声をあげるシン。
さらに運がいいことに、崖下まで伸びるつたまで発見。
シンはつたを握り、滑るように降りていく。
シン
『この賭け、もらった～』急降下しながら叫ぶ。
地面が近づいてもブレーキをかけることなく、直後に手を離し、華麗に着地する
。
目の前には、納品箱と密林まで乗ってきたいかだ。
ハイネの姿はない。
シン

『やったな、賭けはオレの　…』
納品箱に、ポーチにつまっている２０個の特産キノコを納めようと、
蓋を開けた
時…。
ハイネ
『やっと戻ってきたか』
いかだの上からハイネの声が。
シン
『』
シンはギョッとしていかだを見る。
ハイネはいかだのベッドに横たわっていたのだ。
シン
『ハイネ…。じゃ、まさか　…』
シンは青ざめた顔で納品箱の中を確認する。
そこには、すでに２０個の特産キノコが納められていた。
ハイネ
『賭けはオレの勝ちだな』シン
『マジかよ…』
『ニシシ』と笑うハイネの前には、さらに青ざめたシンがしゃがみ
込んでいた。

残り時間、３１分。
ハイネ・ヴェステンフルス、シン・アスカ。
両者クエスト成功。

帰還

ハイネとシン、２人とも見事初クエストクリアだ。
ハイネ
『まぁ、気を落とすな』
シン
『あ〝あ〝あ〝～』
帰りのいかだの上。
シンとハイネが賭けの結果を話し合っていた。
ハイネ
『契約金は３００Ｚだったよな　。つまり６００Ｚだ』
契約金はクエストクリア後に倍になって返ってくる。２人の賭けでは、契約金を
すべて渡すというルールだった。
つまりシンが渡す金は、契約金３００Ｚの倍の６００Ｚだ。
シン
『あ～あ、仕方ないな。で　も絶対勝ったと思ったの　によ』
残り時間３７分で帰ってくるやつのセリフじゃない。
ただハイネも余裕ぶっていたが、さほどシンとは変わらないのだ。
ハイネ
『よし、じゃ次は集めた素　材の自慢でもしようか』ハイネがポーチから何やら
キラキラ光る物を出した。ハイネ
『［きれいな貝殻］だ。換　金するとそこそこになる　んだぜ』
光っていたのは貝殻だ。
それも７枚。
指定の素材をクエスト中に入手すれば、クエスト終了後に金とポッケポイントに
変換してくれるのだ。

［きれいな貝殻］は１枚で１００Ｚ。
ハイネ
『シンはなんかないのか？』
シン
『オレはなぁ…』
シンは例の金色の魚を出してみせた。
ハイネ
『え？お、［黄金魚］』ハイネが目ん玉飛び出しそうな勢いで驚いた。ナイス
リアクション。
シンにはこの［黄金魚］の価値は理解できていないみたいだが、ハイネにはわかる。
ハイネ
『おい…、どこで手にいれ　たんだよ？こんな高級素　材』
ハイネが落ち着きを取り戻し、疑問をシンにぶつける。
シン
『池に飛び込んだら、たま　たま腕の中に…』
［黄金魚］は１匹だいたい相場で２５００Ｚぐらいだ。
場合によっては３０００Ｚを越えることもある。
その後、２人は初クエストの感想などを語り合っていた。

集会所…
戻ってきた。
サク
『シンさん、ハイネさん、　おかえりなさい』
まずサクが深々と頭をさげる。
シンとハイネは一瞬、２人お互いに顔を見合せ、照れながら、
『ただいま』
と、返す。

早速、クエストクリアの手続きをとる。
サク
『お２人とも、クエストク　リアですね』
サクは２人からギルドカードを受け取り、今回のクエストクリアの詳細を記していく。
サク
『では報酬金の１０００Ｚです　。それと契約金６００Ｚをお　返しします』
その後、２人は換金できる素材を金に返る。
シンは合計４１００Ｚ。
ハイネは合計２３００Ｚ。
また、賭けによって…
シン↓３５００Ｚ。
ハイネ↓２９００Ｚ。
となった。
ハイネ
『スティングさんたちは？』
唐突に質問を投げ掛ける。ハイネはそうとうスティングのことが気に入ったようだ。
イク
『スティングたちなら、１０　日は戻らないと思うよ』スティングたちのクエストの受注を行った、上位クエスト担当のイクがハイネの質問に応答する。
イク
『セルケト狩りにいってる　からね、やつら。もしか　したら死んじまってるかもよ』

イクがニシシと笑う。
シン
『セルケト？』
ハイネも同じ質問をしたいという顔をしている。
シンもハイネも聞いたことないモンスターの名前だ。イク、サク
『え～とね…』
イクとサクは互いにスケッチブックを取り出し、何やら描き始めた。
待つこと６０秒。
イク、サク
『こんなの』
イクとサクが同時に自慢の絵を見せる。
まずサクの絵。
めっちゃうまい。
特徴をしっかりとらえ、遠近法などの美術的観点から見てもかなりの代物だ。
とても６０秒で描いたとは思えない。
次にイク。
何これ？糸こんにゃく？
特徴は理解できるので、なんとなくわかるものの、これを描くのに６０秒とは、い
ささか時間の無駄というやつではないか？
隣にサクの絵があるからかやたらに…その…『下手』というやつが目立つ。
まぁ、イク自身、満足気な顔しているのでいいか。
ハイネ
『こいつ…』
ハイネが反応を示す。
イク
『何？セルケト知ってんの　？』
ハイネが黙ってうなづいた。

ハイネ
『こいつ、昨日見た…』
ハイネの一言に、『え?』と声を出し、サクとイクが顔を見合せた。
シンだけは、何のことやら。
イク
『ウソウソ、ありえないあ　りえない』
イクがハイネの発言を全否定する。
イク
『セルケトって密林奥地に　しか生息しないのよ』
それでもハイネは引き下がらない。
ハイネ
『間違いないって』
隣でイクが『ありえない』を主張している中、サクの脳裏にあることが思いうかんだ。
サク
『ねぇイク、セルケトって　もしかしてあのことと…』
サクの一言にイクも『あ』と声をあげる。
サクのいう『あのこと』とに、セルケトがつながったようだ。
イク
『本当に見たの?』
イクは確認するように聞く。
ハイネも『もちろん』と答える。
イク
『こりゃ、ジジィに報告し　た方がいいわね』
イクがサクに同意を求めるように見つめる。
サクもうなづく。
それを待っていたように、イクは受付を離れた。
シン
『どうしたんですか?』

シンが走り去るイクを目で追って、サクに聞いた。
ハイネ
『さっきの“あのこと”って何なんです？』
一人になった受付のサクにシンとハイネが、“あのこと”の詳細について聞く。
サクもはじめは言うべきか迷っていたようだが、ハイネがセルケトと遭遇したと
いうことからこの話になったのでサクも腹をくくったようだ。
サク
『昨日、あなたたちのよう　に授章式そうそうクエス　トに出られた新人ハンタ
　ーの方がほとんどだった　んですが、その中の１／３　の方が戻ってこられない
んです』
シン、ハイネ
『』
２人にはすぐに察しがついた。その人たちはセルケトに襲われたのだと。
特にハイネは直接セルケトと対峙しているので、その意味が重々と理解できた。
シン
『それが、そのセルケトが　原因と…』
サクはゆっくりうなづいた。

イク
『…っつーことなんだよ、　ギル』
イクはギルドマスターであるギルバートの部屋にいた。
密林にセルケトが現れたということを報告しに来たのだ。
ギルバート
『なるほどな…、セルケト　か』

ギルバートが筋肉質の腕を組んで考え込む。
ギルバートにも、多数の新人ハンターが行方不明となっていることは報告されていた。
セルケト出現という答えは、確かに筋がとおる。
新人ハンターはもちろん、そこそこのレベルを持ったハンターですら太刀打ちできないモンスターなのだから。
ギルバート
『ケネス、ヴァニラ、お前　たちはどう思う?』
ギルバートはその部屋の隅で待機している2人のハンターに話をふった。
ケネス
『なんとも言えないな。状　況が状況なだけに』
腰にまるで刀をさすようにライトボウガンをさしているこのハンター。銀髪のテンパが特徴。
ケネス、ケンくんのことです。
ヴァニラ
『あたしは間違いないと思　います』
同じくライトボウガンを持った、金髪のサイドテールの女の子が、ケネスの言葉に続けて発言する。
ケネス
『っていうか、誰なんだよ　?密林にセルケトが出た　なんて、ありそうなデマ
　流してんの』
先ほどイクも言っていたとおり、セルケトは密林奥地に生息するモンスターだ。
そのセルケトが密林に現れて新人ハンターを襲っている、それが行

方不明の原因
。
いかにも面白い答えだ。
イク
『新人ハンターの子よ。ウ　ソはついてないと思うけ　ど』
ハイネのことだ。
もちろんデマやウソなんかではない。
ヴァニラ
『もしセルケトじゃないと　しても、調査は必要よ』ケネス
『なんでそんなにヤル気満　々なんだよ…』
少し反れかけた話題を、ギルバートが修正する。
ギルバート
『いずれにせよ、早めの対　処が必要だな』
ギルバートが横目でケネスを見る。
ケネス
『タダ働きはゴメンだぜ』念を押すように口走る。
ギルバート
『まったく足下を見よって　。安心せい。それなりの　報酬は用意
しておいてや
る』
ギルバートにせかされ、やむを得ず、緊急セルケト討伐クエストを
受けることに
なったケネスとヴァニラ。『ジジィのそれなりって、やたらと少な
いんだよ…』
などとぶつぶつ文句をたれているケネスを無視して、ヴァニラは快
く了承する。
ヴァニラ
『文句言ってる場合じゃな　いでしょ。ホラッ早く』ヴァニラにお
しきられる形
で、無理やりクエストスタートとなった。

休息

密林にセルケトが出現したという噂は、あっという間に広まった。
そのセルケト討伐に駆り出されるケネスとヴァニラの要望で、２人が帰るまでの
間、他のハンターの密林への立ち入りは禁止となった。
ケネスとヴァニラの詳細はまた後ほど。
そのことは集会所の掲示板に書き込まれ、いつも以上にハンターたちの注目を受
けていた。

この日は、シンとハイネが初クエストから帰ってきた次の日。
２人は昨日の疲れをとるために、今日はクエストに出なかった。
シン
『でもハイネってスゲーよ　な』
クエストには出なかったが、やっぱり２人はいっしょにいた。
ハイネは『ん？』と返す。シン
『だって今みんなが、セル　ケトセルケトって騒いで　るじゃん。
あんだけ騒ぐ
　ってことはセルケトって　てはそれだけ強いってこ　とだろ。ハイネはそいつ
　と戦って生き残ったんだ　から』
いや、実際には『生き残った』のではなく『逃げきった』が正しい。
ハイネとしては、その間違いの方がよかったので、否定はしなかった。
しかし、あそこでセルケトが襲ってこなかったのは本当に運がよかったのだ。
そうでなければ、サクが言っていた帰らぬ１／３の一人になっていたのは確実だ。ハ

イネ
『ま、まぁな…』
具体的なことは話さない。話せない。
ハイネ
『そういやスティングさん　たち、そのセルケトを狩　りに行ってるんだろ』
昨日、イクがそう言っていた。
ハイネ
『やっぱスゲーわ、あの人　たち。なんか、実力を見　なくても、その強さがわ
　かるって感じだったじゃ　ん』
確かにそうだ。
あの人たちは強い。
理屈はわからないがシンもそう思っていたのは確かなのだ。
2人は集会所に来た。
そして図書室に向かった。ここはギルドカードを持つ者しか入れない図書室。つ
まり、ハンター専用の資料室なのだ。
そんなところに来て何をするのか？
それはすでにわかってもらえてると思う。
シン
『セルケトの資料っと、ど　こだ？』
棚に並べられている膨大な量の資料を指でおいながら探していく。
目的はセルケトの情報だ。ハイネ
『お、あったぞ。シン』
ハイネは分厚い本を棚から引っ張り出した。
１０００ページはかるく越えているだろうその本に、まるまるセルケトのことが書かれているのだ。

ここでその資料に載っているセルケトの詳細を書かせてもらおう。
名称：針蟲セルケト
部類：甲虫種
特徴：鉄のように硬い殻と　　ハサミ
　　：長く反り返った尻尾詳細
↓針蟲と呼ばれる甲虫種の一種。見た目はサソリの化け物で、好戦的な性格。
褐色の甲殻は鉄のように硬く、並の武器では刃がたたない。
また、別名として“竜を喰らう虫”と呼ばれ、その名のとおり、唯一飛竜種を補
食する甲虫種でもある。
さらに、東の砂漠の村のクロノスでは“聖獣”と呼ばれ崇められている。
主に、密林奥地、砂漠、地底などに生息している。
一番の特徴である反り返った尻尾には、２種類の毒が含まれており、一つは猛毒
状態にする毒。もう一つはスタミナを一気に減少させる毒。
そして一番の特性として、他のモンスターを喰らうことによってセルケト自身の
能力をあげるのだ。
つまり、一概にセルケトをレベル分けすることはできないのだ。
最後に一つ。最近の情報で、まだ確信はないのだが、セルケトには亜種が存在す
るらしい。

その１０００ページを越える資料を簡単に訳させてもらった。
ハイネ
『スゲーな、おい。２種類　の毒って』
シン
『亜種もいるのかよ』

亜種、突然変異で能力的に特化した色違いのモンスターのこと。
その後、2人は昨日稼いだ金で少し買い物をしたり、武具の加工屋に行って今の
武器の強化や新しい防具のレシピを見たりしていた。
スティングたち
『ハァハァ…』
セルケトを狩りにきたスティングたちは、真っ暗な洞窟の中で少しの休息をとっ
ていた。
3人は〈眼光〉というスキルを発動させ、この真っ暗な洞窟の中でも通常どおり
に目を使えるようにしているのだ。
〈眼光〉というスキル、もちろんケンくんが勝手に作ったスキルです。
スティング
『お前ら、大丈夫か?』
ガンランスの槍を地面突き刺し、それにもたれているスティングが2人に聞く。
アウル
『うん。オレは後方で撃っ　てるだけだから』
ステラ
『…平気』
2人とも大丈夫だ、スティングはそう判断した。
ステラ
『、きた』
ステラの一言にアウルとスティングが即座に反応し、三方向に散った。
そこにセルケトが降ってくる。
2秒遅れていたら、あの世だ。
ま、スティングたちのレベルになれば、その2秒を完璧に見きれる

ようにならな
いといけないのだが。
セルケトは飛ぶことはできないものの、ジャンプと素早い動きが特徴だ。
スティング
『まず足を潰す。動きを止　めるぞ。尾とハサミに気　をつけろ』
アウル
『ステラ、左、斬り込める　？』
ステラ
『イケる』
セルケト討伐クエストの制限時間は、１４日。つまり2週間だ。
スティングたちが目安にしている期間は１２日間。
ハンターたちが自分の力量をアピールするために、受注したクエストのレベルと
、クエストクリアした時間を評価する。
つまり、どれだけ難しいクエストをどれだけ早くクリアしたか、ということだ。
ハンターたちはクエストを成功させる傍ら、時間にも気を配っているのだ。

シン
『そうだ。なぁ、ハイネ。　オレたちの受注できるク　エストが増えてるはずだ
　から見に行かないか?』シンたちが受けたクエスト【特産キノコを調達せよ】
は、新人ハンターが一番最初に受けなければいけないクエストの一つなのだ。
そしてこのクエストをクリアすれば、晴れて☆１のクエストを受注できるように
なる。

シンはその☆1のクエストのリストを見に行こうとハイネを誘ったのだ。

ハイネ

『そうだな。昨日はバタバ　タしてて、ゆっくり見れ　なかったし』

ハイネも同意して、再び集会所に向かう。

シン

『サクさん、☆1のクエス　トの一覧表見せてくれま　せんか』

すっかり顔見知りとなった受付のサクとイク。

サク

『サクでいいですよ』

笑いながら☆1のクエストの一覧表を取り出す。

まだ、大したクエストではないがシンもハイネもかぶり付くように見る。

サクにとってはほほえましい光景だ。

シン

『そう言えばさ、昨日、ク　エストの制限時間ギリギ　リの時に、変なハンター
　に襲われたんだよ』

シンの頭に、急にあの大鎌の男と救世主様のことが思いうかんだ。

ハイネ

『襲われた?なんで?』

サク

『どうしたんですか?』

とりあえず質問。

シン自身も、ハイネのセルケトの件ですっかり忘れていた。

シン

『なんかデッカい鎌を持っ　たやつにさ…』

サク

『デッカい鎌』

サクがシンの言葉をさえぎった。

シン
『え、何?どうしたの?』少し驚いたシン。
サクはもっと驚いているようだが。
サク
『その男、焦げ茶色の防具　をしていて頭は頭巾で顔　は見えなかった、とか?
』
見事に言い当てたサク。
シンも『そう、そいつ』と一言。
ハイネ
『何、そいつ有名人?』
そう有名人。
サクは何も言ってないが、そんな空気だった。
サク
『…』
危険人物的なノリか?
シンとハイネはそう思っていた。
まったくそのとおりだ。
サクから言えば、そいつに遭遇したシンが生きていることが不思議なくらいだった。
サク
『その男の名はクルーゼ。《死神衆》の一人だった　ハンターです』
《死神衆》、数年前に存在した死神を名乗る5人組の犯罪集団。現在は解散した
と言われている。

2人の受付娘（前書き）

神回だぜ。あー眠いな～なんか臭うな～

2人の受付娘

シン、ハイネ
『《死神衆》…』

※《死神衆》、数年前まで存在し、5人で構成されていたハンターの犯罪集団。
当時のギルドもその逮捕に全力をあげていたが、その正体すらわからないでいた。結局、誰一人逮捕できないまま時が流れ、現在では解散したと言われている。

サクから言われたその言葉。
実際に対峙したシンは、その言葉に深く納得してしまう。
サク
『ラウ・ル・クルーゼ』
シンとハイネは聞いたことない名前だ。
しかし、サクの口からはサラッと出た。
サク
『ハンターの間じゃ、有名　な名前です。その名は死　を呼ぶと言われ、何より
　恐れられています』
サクが掲示板に目を向ける。
シンとハイネもつられて目を移す。
掲示板には《密林への立ち入りを禁止する》という記事が中心を占領しているが
、その隅には《危険、要注意人物》という古い貼り紙が貼られている。
おそらく、かなり前から貼られているのだろう。

その要注意人物と書かれた貼り紙に、まぎれもなくあの時シンを襲った死神と呼
ばれる男の写真が記載されていた。
シン
『あいつだ…』
要注意人物の写真を見て、シンが呟く。
ハイネ
『アレが死神?』
今度はハイネが疑問形で呟く。
その死神の装備はわからないが、焦げ茶色の防具で頭は頭巾型になっているため
顔はわからない。
それでも、死神ラウ・ル・クルーゼはすべてのハンターの頭の中にとどめられて
いる危険人物。
これはすでに常識として認識されている。
サク
『でもシンさん、あのクル　ーゼに襲われてよく無事　でしたね』
サクが心より喜ぶような口調で言ってくれた。
シン
『あの時、別のハンターに　助けられたんです』
シンはあの時の救世主様を思い返し、そのことを話す。
サク
『助けられたんですか?ク　ルーゼから?』
先ほども言ったとおり、クルーゼは超危険人物。
例え目の前で誰かがクルーゼに襲われていても、助けようなんて思うやつはいな
いだろう。
それを知っているからこそ、サクは『ウソでしょ』を込めた疑問形を放った。

シン
『ホントですホント。黒髪　の眼鏡をかけた…』
黒髪に眼鏡、ありきたりすぎるだろ。
普通ならそう思うが、サクにはたった一人、思いあたる人物がいた。
黒髪に眼鏡、そして何よりクルーゼと対等の実力者。サク
『それって、ハ…』
イク
『ハオのことなんじゃない　？』
隣から元気よく割り込んでくる、青いメイド服の女の子。
イクである。
ハイネ
『ハオ？ハオって、あの“　氷の竜騎士”のハオ・レ　ギンス？』
ハイネが興奮したようにイクに問い詰める。
イクもなんだか嬉しそうに答える。
イク
『そう、そのハオよ。現在　最も“白銀の竜王”に近　いとされる
ハンターの一
　人の』
ハオ・レギンス。現在たった４人しかいないＨＲ１０のハンターの
一人。
“氷の竜騎士”という通り名で呼ばれ、太刀を扱う、文字通り最強
のハンターの
一人だ。
さすがに、シンでも知っている名前だ。
ただ、あの時助けてくれた救世主様が、ハオだとは思わなかったが。
シン
『なんでイクさん、そんな　にテンション高いの？』サク
『ごめんね。この子、ハオ　くんにホレてんの』
なぜかサクが謝る。
イク

『ホレてないわよ～』
ホレてるようだ。
こうしてイクも混ざって、話は再開する。
まずは、シンがクルーゼに襲われハオに助けられた時の状況を語る。
ハイネ
『なぁ、今さらなんだけど　さ、そのクルーゼっての　、ハンターだよな？』
根本的なことを今さら。
サクとイクは『まぁ、一応ね』と答える。
シン
『でも、そんな犯罪者が、　よくハンターやっていら　れるよな』
クルーゼが起こした犯罪は知らないが、手配書Ｓクラスの犯罪者って、相当だ。
そんな犯罪者がハンターを続けられるのか、とシンは思っているのだ。
イク
『ハンターってのは、基本　的に誰でもなれるからな　。老若男女、バカだろう
　が、犯罪者だろうが』
そう、ハンターになるためには、ただ一つ。
ギルドに自分の力を認めさせる。例えば、ハンター試験に合格する等。
これのみが条件なのだ。
それ以外の個人的事情などは、一切関与しない。
そうは言っても、ハンター試験にも色々あるので、一概には言えないのだが。
シン
『確かに…』
ハイネ
『クルーゼの起こした犯罪　って、具体的にどんなの　があるんだ

？』
なんだか自然にタメ口になってきた。
2人と話していたら、その愛想のよさにまるで同級生のように思えてくるのだ。
サク
『密猟、密売、密輸、など　例をあげればキリがあり　ません』
海を隔てた大陸には、大きな町があるという。
密輸の相手はその大陸だ。サク
『シンさん。できれば、ク　ルーゼに遭遇したことは　他言しないでもらえませ
　んか？』
シン
『え？』
死神衆と名を馳せ、未だなお人々の脳裏に焼き付いている悪魔。
そんなやつがこの近辺をうろついていると噂になれば、パニックは必至だ。
シン
『でもそれじゃ、また誰か　がアイツに襲われるかも　…』
サク
『クルーゼの処置はギルド　の方へ要請しておきます　すので』
受付嬢として、ハンターたちの混乱はどうしても避けたいのであろう。
シンも『わかった』と首を縦にふる。
イク
『それにしても、昨日はセ　ルケトで、今日はクルー　ゼか。面倒なものばっか
　持ち帰ってきて。問題児　だな、キミたち』
イクが小悪魔みたいに笑う。
サク
『お2人とも、クエストは　何になさいます？』

サクは受付のテーブルの上にのせてある☆1のクエストの一覧表を見て、思い出
したように聞いてくる。
ハイネ
『今日は行くつもりはない　んだ。ちょっと新しいク　エストが気になって、見
　にきただけなんだよ』
すっかり同級生気分だ。
まだ、サクにタメ口ってのは、少々抵抗はあるが。
サク
『昨日は2人ともお疲れで　したからね』
何しろ、ハイネはセルケトに、シンはクルーゼに遭遇していきなり死ぬ思いをし
たのだから。
シン
『密林はいつ解放されそう　？』
イク
『そうね。今、ハイネくん　が言ってたセルケトを狩　りにいってるやつらがい
　てね。そいつらが帰って　き次第ね』
サクはともかく、イクにまで『くん』づけされるのは、何か恥ずかしい。
ちなみに、そのセルケトを狩りにいっているハンターというのが、この前のケネ
スである。
イク
『んん～、一般的にセルケ　トって討伐すんのに2週　間ぐらいかかんのよ。ま
　ぁ、アイツらなら10日　ぐらいで終わらせんじゃ　ない』
セルケトを10日。

イクはあっさりと言ったが、これは相当難しいことなのだ。
ちなみに、今別のクエストでセルケト討伐に出ているスティングたちは12日を
目安にしている。
ハイネ
『10日か…。じゃ、それ　までオレたちは、別の指　定地のクエストを受けて
　時間を潰しておこうか』ハイネの提案にシンも首を縦にふる。
密林は寒暖の気候がないので、新人ハンターたちには好まれている。
シンたちもしばらくは、密林で腕を磨くつもりだったのだ。
その後、シンとハイネはイクとサクとのおしゃべりでその日を終えた。
明日はクエストに出ようとハイネが言っていた。
もちろん今度は2人いっしょにだ。

その夜、シンはハイネが仲間（ダチ）になってくれてよかったなと、他人にはとて
も言えない恥ずかしいことを考えながら、ベッドに横たわった。

イク
『いい子ね、あの子たち。　なんだか昔を思い出すわ　』
風呂上がりのイクが頭からバスタオルを被って、サクに話しかけた。
もちろん、あの子たちというのはシンとハイネのことだ。
サク
『そうね。ちっちゃいころ　ハオくんとマオくんみたい』
ハオくん、これは先ほどのハオ・レギンスのこと。
マオくん、こいつの詳細はまた後ほど語ろう。
サクもイクと同じことを考えていたようだ。
イク
『これからの成長が楽しみ　ね』

風呂からあがったばかりなのか、顔を赤らめて微笑んだ。
サク
『イクってば、お母さんみ　たい』
サクも笑いかける。
２人は夜遅くまで、昔話を交えてシンとハイネのことを語り合っていた。

運び屋

受付嬢の朝は早い。
太陽が顔を出した後、それに続くように目を覚ます。イク
『あ～、天気いいな。チク　ショー』
窓から射し込める日光と、入り込んだスズメに起こされた。
昨夜は、サクとずっと昔話をしていたので、床についたのも遅かったのだ。
イク
『おはよ～さん』
サクのやつはどうせ起きているな、と思いつつ部屋を出る。
やはりもうサクは起きていた。
サク
『おはよう』
すでにいつものピンクのメイド服に着替えていた。
イク
『早いな～、おい』
目をこすりながら呟く。
まったくどうでもいいような話し方で。
サク
『早いのに越したことはな　いからね』
まったくもって正論。
感心するばかりである。
イクもさっさと顔を洗って、着替えて、パンを口に準備完了。
早速、集会所を解放する。現時刻、５：３０

シン
『あ～～～あ』
シンが起床したのは、太陽もすかっり昇った８：３０のことだった。

シンもイクと同じく、日光とともに部屋に侵入したスズメによって起こされた。
『チュッチュッ』という鳴き声が心地いい。
9：30に集会所へ集合。
時間的にはいい感じだ。
シンは早速着替え、軽く朝食をとる。
そうして朝の身支度を始める。
チェーンシリーズの防具をまとい、ボーンシックルを背に装着。
剥ぎ取りナイフを腰に。
回復薬を3つ、回復薬グレートを1つ、それと昨日買った砥石を3つ入れたポーチを手に準備完了。
少々待ち合わせの時間には早いが、先ほどのサクの一言のように
『早いのに越したことはない』
の意気込みで、マイルームを後にする。
集会所までは徒歩5分。
その間に雑貨屋がある。今朝はおっちゃんがいた。
おっちゃん
『オッス、シン』
シン
『おはようございます』
一言のあいさつ。
おっちゃんは、とりあえず顔見知りのハンターがくるとあいさつする。
気前のいい人なのだ。
目の前に迫ってくる教会のような建物。
初めて入った時はあれだけ緊張したのに、もう3日で慣れてしまった。
サク
『おはようございます』

出迎えはサクの笑顔。
シン
『おはよ』
集会所を見回すとケッコーいる。ハンターが。
クエストから帰ってきたハンターや、シンのようにこれから出発するであろうハンターたち。
ハイネ
『お～い、シ～ン』
壁にもたれているオレンジの髪の青年が手を振っている。
『お～い、シ～ン』って、なんか『おいし～』に聞こえたシンだった。
シン
『もう来てたのかよ』
集合時間までまだ早いぞ、と言いたげな顔でシンが駆け寄る。
ハイネ
『おう』
お前だってそうじゃないか、という顔でハイネが迎えた。
ハイネみたいなやつは、『あ、ゴメン、寝てた』などと言って、遅刻してくるよ
うなイメージがあったが、以外にハイネは時間には厳しいようだ。
ハイネ
『よし、じゃ、早速行くか 』
いざサクのもとへ。
ハイネ
『サク～、☆1のクエスト 頼むよ』
ハイネとシンはギルドカードを差し出す。
サク
『はい、どうぞ』
ハイネとシンのギルドカードと引き換えに、クエストの一覧表を差

し出す。
指定地密林のクエストはすべて削除されていたので、少し種類が少ない。
主に雪山と砂漠だ。
雪山はさっむいとこ。
砂漠はあっついとこ。
寒ければスタミナが削られ、暑ければ体力が削られる。ハンターの常識だ。
密林はそれがないので、好まれているのだ。
シン
『どっちにする?雪山か砂　漠か?寒いか暑いか?』少し悩むところだ。
シンはポッケ村出身というこもあって、冷寒地での狩りは経験済みだ。
サク
『もし、よろしければ、わ　たしが少しアドバイスさ　せていただきましょうか
　?』
迷っている2人に声をかけたのはサクだった。
シンとハイネはちょっと驚いたようすだったが、そのアドバイスを求めることにした。
サク
『砂漠には砂地の高温のエ　リアの他に、低温の洞窟　のエリアがございます。
　暑さ寒さ防ぐクーラード　リンクやホットドリンク　を持っていくにしても、
　砂漠では両方持っていか　ねばはらないので、少々　わずらわしいかと思いま
す』

つまり、雪山をすすめている。
受付に立つ身として、これぐらいの知識は頭に入れておかねばならないのだ。
ハイネ
『そうかそうか。じゃ、雪　山のクエストにすっか』シン
『そうだな』
シンも内心は雪山がいいと思っていたようだ。
これでだいぶしぼられた。あとは、内容で決めるだけだ。
ハイネ
『これなんかどうだ?』
ハイネが指差すさきには、【雪の山のガウシカ】と書かれたクエストが表記されいた。
ガウシカ、ポッケ村で育ったシンにはおなじみのモンスターだ。
シン
『オッケー、それで』
話はまとまった。
サク
『かしこまりました。クエ　ストナンバー3【雪の山　のガウシカ】でございま
すね』
サクがちゃちゃっとクエスト受注の手続きをとる。
サク
『では契約金をいただきま　す。今度はお2人いっし　ょでよろしいですか?』
前回のクエストでは、2人とも別々に出たので、念のためにサクが確認をとる。
2人は『はい』とうなづく。
契約金は４００Ｚだ。
手続きを終えると、2人のギルドカードとクエストの詳細が書かれ

た紙を手渡す
。
サク
『雪山へは気球で向かって　もらいます』
気球は専門の者に乗せてもらう。
主に竜人族が営んでいる。一般に『運び屋』といわれている人々で
ある。
上位以上の高レベルハンターになれば、専用の運び屋がつくくらい、
運び屋はハ
ンターと密接な関係にあるのだ。

運び屋ソーマ
『準備はバッチリだ。さっ　さと乗んな』
運び屋フィンクス
『雪山かよ。さみーな、お　い』
2人の運び屋、どちらも竜人族だ。
シンとハイネは早速、気球のもとへ案内された。
シン
『おお』
ハイネ
『デッケー』
その気球の大きさは、シンとハイネが思っていた以上のデカさだ。
人が乗る部分もはしご付きで二階建てになっている。ソーマ
『ほらほら』
マッチョな青年が急かす。シンとハイネが乗り込み、準備完了。
ソーマ
『フィンクスっ』
フィンクス
『んなデケー声出さなくて　も聞こえてるっつーの』バルーンに浮

遊用の空気を
入れる。
空気を入れられ膨らんだバルーンは、気球のかごもさることながら、
凄まじいデ
カさとなった。
シン
『ウッハー』
ハイネ
『マジ、ハンパねぇ』
さらに驚く2人だった。
雪山は、このティーズをさらに北へあがり、そこにある山脈のことだ。
巨大気球が、空へと舞い上がった。それにしても不思議だ。こんなデカいモンが
飛ぶなんて。
景色がみるみるちっこくなっていく。
気球が気流にのり、竜人族の2人は安定を確認した。ソーマ
『一応、自己紹介しとこう　か』
2人の運び屋が手を止めてシンとハイネの前にくる。ソーマ
『運び屋のソーマだ。見た　とおりの竜人族さ』
30歳前後と思われる竜人族の青年。名はソーマ。
フィンクス
『オレはフィンクス。同じ　く運び屋だ』
年はソーマと同じくらいの竜人族の青年。名はフィンクス。
シン
『シン・アスカ。今年から　ハンターになったんだ。　よろしく』
ハイネ
『ハイネ・ヴェステンフル　で～す。同じく新人ハン　ターで～す』
雪山までは遠い。1日はかかる距離だ。
ちなみにシンの出身であるポッケ村の近く。

気球からの景色は、素晴らしいものだった。
意外にハンターの資格を持っていたソーマとフィンクスに、シンとハイネも話がはずんでいた。

反撃（前書き）

皆さんＩＳで誰が好きですか？私は断然山田先生です。
可愛いな・・・あんな先生が担任ならテストで１００点取れるぜ。
そういえば時々洗面所に陰毛が落ちてるんですけどアレって誰の何でしょうね？

反撃

ソーマ
『そろそろ着くぜ、お２人　さん』
気温はぐっと下がり、辺りの大地は白く色づいてきた。標高が高いので、気圧の
変化に対し、耳が変な感じになる。
シンとハイネはクエストの詳細が書かれた用紙を読んでいた。

【雪の山のガウシカ】
レベルは☆１
報酬金は１５００Ｚ
制限時間は２４時間
指定地は雪山
クリア条件は［ガウシカの角］１０本の納品。

フィンクス
『茂みの中に着陸する。キ　ャンプ地はそこになるな　』
雪山の場合は、密林のように木の上で一夜を明かすということはできない。
理由は簡単。寒いから。
寝たら、そのまま目が覚めないというのがオチだ。
ゆえに、拠点のキャンプ地を選ぶ際には十分か配慮が必要なのである。
気球は小高い崖の上に着陸した。
ソーマ
『オレたちは雪山上空に滞　空しているから、何かあ　ったら合図してくれよ』
キャンプ地にテントなどの小道具を並べ、再び空へ飛び上がってい

く。
シンとハイネはソーマとフィンクスを見送って、クエストスタートだ。
シン
『支給品はっと』
さっそく支給品箱を開け、中を物色する。
［地図］［応急薬］［携帯食料］［ホットドリンク］など、必要最低限のものが
入っている。
当然、仲良く半分こ。
ちょっとここで2人とも同様。
2人とも、ホットドリンクを持ってきていなかったのだ。
一応、支給品にはあるのだが、雪山のクエストに出る以上、ホットドリンクは必
須中の必須アイテムである。
今後、こんなことのないようにと誓うシンとハイネだった。
ハイネ
『よし、しゅっぱ～つ』
勢いよくキャンプ地を後にする。
目的はガウシカだ。
ポッケ村出身のシンにとっては、言わずと知れたモンスターだ。
ガウシカ、雪山に住む草食モンスターで、危害さえくわえなければ気性はおとな
しい。
ハイネ
『まずはガウシカを探さな　いとな』
そう、ほとんどのクエストでは、『狩る』を行う前に『探す』をしなければなら
ない。
今回は目標が複数生息しているのでさほど難しくはないが、本来な

ら指定された
モンスターをピンポイントで探し狩らなければならない。
そのためにも、膨大な数のモンスターの情報をすべて頭に叩き込まなければならないのだ。
それらの知識は勉学によってよりも、経験で身につけるもの、己の体で時間をかけて習得するしかない。
ハンターとは、『経験』がすべてなのだ。
と、まぁ、そんなこと考えたり考えなかったりしつつ、ガウシカについての知識は限りなくゼロに近いハイネは、シンを頼っていた。シン
『雪原にもいるけど、ガウ　シカはこういう場所も好　むんだよ』
ここは緑が顔を出しているエリアだ。雪山では珍しい。
ここではまだホットドリンクを飲まなくても大丈夫。ハイネ
『でも、アレってポポじゃ　ね？』
巨大な毛と肉の塊。
雪山の草食獣ポポである。７頭の群れとなり、シンとハイネの前をのそのそと歩いている。
ハイネ
『肩慣らしに、いっちょや　るか』
［生肉］の調達も踏まえてポポを狩ることになった。目標は、なぜか一番デカいやつ。
ハイネいわく、『ちっこいやつなんてセコいこと言わずに、どど～んとデカいやついっとこうぜ』、と…。シン
『よし、オレが回り込む。　スキをついて斬り込んで　くれ』
ポポは仲間が襲われると、他は逃げる習性がある。

欲張って7頭全部狩ろうとするのは無理だ。
とりあえず目標は一番手前にいる一番デカいポポ。
ハイネの親指を立てたポーズを確認し、シンが駆け出す。
シン
『ハァ』
岩の上を駆け上がり、そこから飛び出して斜め上から斬りかかる。
ポポ
『う〝おぉ』
うめき声をあげるポポ。
やはり鱗がないといっても、一撃で決めることはできない。
シン
『まだまだぁ』
シンは片手の剣を持ち換え、回転斬りをする。
ふらついた足を持ちこたえさせるポポ。
それを見た他のポポは一斉に体勢をかえる。
ハイネ
「チャーンス」
シンの回転斬りの六連撃で弱ったポポを確認し、ハイネも飛び出す。
走り出し、その勢いで大剣を地面に叩きつける。
その反動で思い切りジャンプし、シン同様、上空から大剣を振り下ろす。
ハイネ
『もらったぁ』
ハイネの大剣が手負いのポポに命中しよとした時、
別のポポ
『うおお』
手負いのポポを助けるかのように、別のポポが空中のハイネに体当たりした。
ハイネ
『うぅ』

ハイネは投げ飛ばされ、地面に激突した。
シン
『ハイネ』
さらにハイネに体当たりしたポポが、ハイネに追撃をくわえる。
助けに行こうとしたシンも、手負いのポポの牙に突き飛ばされた。
ハイネに目が
いっていて、ポポの攻撃に気づけなかったのだ。
ハイネ
『くそっ』
大剣でポポの突進をガードする。
しかし、踏ん張りきれていない体勢でガードしたため、防ぎきれず
さらにぶっ飛
んだ。
シン
『ハイネ、逃げろ』
体勢を立て直したシンが、ハイネを追撃しているポポに斬り込む。
ポポは動きを止めた。
そのスキにハイネはポポの側面へ回り込む。ポポは前方にしか突進
しないので、
側面へ回り込めば問題ない。
手負いのポポはその場から逃走。
ポポ
『おお』
ポポはシンを振り払い、手負いのポポを追うようにその場から逃走
する。
場は一気に静まり返る。
シン
『ふぅ～』
シンが腰を落とす。
ハイネ

『いててて…』
ハイネも大事はなさそうだ。
腰を押さえながら、身体を持ち上げる。
シン
『大丈夫か、ハイネ?』
ハイネ
『おう、骨はイッてないみ　たいだ。てて、めっちゃ　痛いけど』
胸（あばら骨付近）を押さえながら、ハイネは答えた。まさか、ポポからこんな反
撃をうけるとは思わなかった。
ポポっていったら、ただの草食獣で、仲間が襲われたらソッコー逃げ出すような
チキンなモンスターなのだ。
ハイネ
『あ～、クエスト開始から　いきなりこんなんかよ。　先が思いやられる～』
シン
『まさかポポにな～』
まぁ、いい経験かもしれない。
どんなモンスターにも、気を抜いてはいけないということだ。
シンが初めてランポスと戦ったあの時の気持ちでいけば、必ず狩ることができる
はずだ。
シン
『ガウシカの前に、ポポを　倒さないとな』
シンが宣言のような口調で言った。
ハイネも最初は『え?』というような反応だったが、『もちろん』という答えが
かえってきた。
『やられっぱなしは趣味じゃねぇ』ってことだろう。

ポポに思いもよらぬ反撃を食わされたシンとハイネは、支給品の「応急薬」を飲んで一息ついていた。

ハイネ

『定説では、ポポは仲間が　傷つけられると逃げ出す　って言われてるけど、ポ　ポも生物だもんな。群れ　を形成してるようなやつ　なんだから、仲間を助け　るぐらいのことしても全　然不思議じゃないんだよ　な』

口にした応急薬を一気飲みする。

正直、一気飲みできるほどウマいものじゃない。シンはそう思いつつ、一気飲み

するハイネの姿を見ながら応急薬を飲んでいた。

シン

『次は遅れをとらねぇさ。　ケンカ売って負けてたん　じゃ、話になんないしな　』

シンは片手で剣をうまく回しながら立ち上がった。

ハイネ

『もちろんそのつもりさ。　負けっぱなしは趣味じゃ　ねぇ、ってな』

同意したハイネも続いて立ち上がる。

目的はガウシカ、の前にポポとなった。

ハイネ

『とりあえず、さっきのポ　ポの群れが逃げてった方　へ行ってみるか』

全快というわけではないが、時間も無限にあるわけではないので、

先を急ぐことにした。

??

『あらあら、ポポなんかにやられちゃって。さぁ、これからどうすんのかな～？』

岩影から、ポポにやられた恥ずかしいシンとハイネの姿をのぞき見ている人物がいた。

シン

『アレ？いねぇぞ、ポポ』そんな追跡者がいることにもまったく気づかず、ポポとの再戦に燃えるシンとハイネは、当のポポを完全に見失っていた。

シン

『もっと奥へ行ってみっか。でもここからはホットドリンクがいるからな～』

唯一、先へ進める岩の間からは、真っ白い冷気がもれている。見るからに寒い。

ここからはホットドリンクが必要になる。

ポッケ村出身のシンには、雪国暮らしの知恵で、どこからホットドリンクを使えばよいのかがなんとなくわかるのだ。

ハイネ

『よっしゃ、やっと雪山らしくなってきた～』

正直、シンは心配していた。

2人が持つホットドリンクはそれぞれ二つずつ。一つの効果持続時間がだいたい

約3時間程度。
つまり、二つ合わせて6時間。それが雪山の冷寒地帯で活動できる時間なのだ。
6時間で、ポポとガウシカを狩らないといけない。
シンには、それが可能なのかと、そう思えていた。
ハイネ
『かんぱ～い』
先ほどの応急薬と同様に、ホットドリンクも一気飲みする。シンの心配を横目にして。
そんなハイネを見ていると、やはり心配しても無駄と思えてくる。
シン
『おう』
シンも一気飲み。
すぐさま、冷寒地帯に突っ込む。
ハイネ
『さっぶ』
やはりホットドリンクを飲んでも、寒いものは寒い。シン
『いた。ポポ』
シンが早速ポポの群れを見つける。
どうやら先ほどの群れとは違うようだ。
シン
『ハイネ』
ハイネを呼ぶが、『ガタガタ』と聞こえるぐらいの音を出して震えている。
その状態で『あに（何）？』とハイネが一言。
シン
『…』
一気に気が抜ける。
とりあえず、聞こえてなかったようなので、目の前のポポの群れを

指差した。
ハイネ
『お、ポポ』
まるで自分が見つけたかのような反応。
寒さもふっ飛んだ…ような気がする。
シン
『そういうことだ。早速、雪辱戦といくか』
リベンジに燃えるシンとハイネ。
作戦は前回と同じ。シンが斬り込んで、ハイネがスキをついてとどめの一撃。注意するはターゲット以外の行動。前回と同じ轍を踏まないように周りにも目を配りつつ、だ。
まず、シンが駆け出す。続いてハイネ。
ポポはシンたちの気配に気付き、多少体勢を変えた。シン
『ハァ』
双剣でクロスに斬り込む。ポポ
『ウォ～ウ』
叫び声をあげるポポ。
それを見た左右のポポは、一気にシンに向き直り、攻撃姿勢をとる。
今度はシンもちゃんと気付けている。
攻撃したポポの左右から、2頭のポポが体当たりを繰り出す。一方、ターゲットのポポは、その他のポポとともに逃げ出す。
ハイネ
『行け、シン』
シンに体当たりをする左のポポに、野球のバットを振る要領で大剣を振るう。
シン
『おう』

水平方向に降った大剣と、ポポのキバが交わる。
ハイネはすかさず体勢を変え、もう一方のポポに蹴りをいれた。
ポポは少しでも攻撃を受けると、ひるんで動きが止まってしまう。
シン
『逃がすかよ』
片手の剣を持ち変え、回転斬りをする。
動きを止めるポポ。
シン
『ハイネ』
一瞬だが2頭のポポを足止めしたハイネが駆け寄ってくる。
さらにその後から先の2頭のポポが。
シンとハイネがすれ違う。シン
『後ろは任せろ』
ハイネ
『サラッと一発で決めてや　るさ』
すれ違いザマの一瞬の会話。
作戦どおりハイネがとどめをさすのだ。シンはその間の時間稼ぎ。
シン
『オウラ、ちょっと黙って　ろ』
2頭のポポの間にはいり、両手の剣でそれぞれに斬り込む。ひるむ2頭のポポ。
ハイネ
『これで幕引きだ』
背負った大剣のつかに手をかけ、ターゲットのポポに詰め寄る。
先ほどのシンの一撃でひるんでいたポポだが、すぐに体勢を立て直し、逃走をはかる。
ハイネは両手で大剣のつかをつかみ、大きく振り上げる。
逃げ出すポポの後ろから、その巨大な刀身は振り下ろされた。
直撃。

大剣の斬撃とともに、ポポはその場に倒れ込んだ。
シン
『後ろだ』
シンの一言に、ハイネは背後を振り向く。
さっきの2頭のポポが迫っていた。
ハイネはうまく前転で、ポポの体当たりを回避した。ハイネ
『ひゅ～、あぶね』
2頭のポポは、倒れた仲間のもとに駆け寄った。
鼻先で横たわる仲間をさすったり、つついたりしている。
しかし、反応はない。
何を察したのか、ポポはハイネやシンに、それ以上の追撃をするでもなく、倒れ
た仲間をおいて立ち去っていった。
シン
『案外強敵だったな』
シンがハイネのもとに駆け寄ってくる。
ハイネ
『ああ、まったくだ』
2人は横たわるポポに近づいて、剥ぎ取りを行った。シン→［生肉］×2
ハイネ→［生肉］［獣骨］［生肉］は調理すると、スタミナ回復のアイテムにな
る。
この先は必須になるアイテムなので、今のうちにためておくのがよいだろう。
ハイネ
『生肉か。焼いたらこんが　り肉とかになるんだよな　。ん?どうやって焼けば
　いいんだ?』
ハイネが大きい声で一人言を言っている。

普通に焼けばいいだろ、そう言ってあげたい。
シンは空を見回している。ハイネ
『どうした?』
ハイネは自分の一人言に反応してくれないシンに、顔を向けて問いかけた。
シン
『早く行こう。ティガレッ　クスとか、来るかもしん　ねぇ』
ハイネ
『て、ティガレックス…。　マジ…?』
雪山の帝王と言っても過言ではないティガレックス、今自分たちが討伐したポポ
の血の匂いを嗅ぎ付けて、この場にくることも考えられなくはない。
ポッケ村育ちのシン。幼いころから、ティガレックスは危険と教えられてきた。
ティガレックスとは遭遇しないことを注意せよ。もし遭遇したら、諦めろ。そう
教え込まれた。
ハイネ
『おいおい、早く行こうぜ　。実力のないやつがティ　ガレックスと出くわすと
　、生きて帰れないってい　うからな』
シン
『おう』
2人は、本当の目的であるガウシカを探し、さらに雪山の奥へと歩を進めた。

吹雪

次第に吹雪がその強さと冷たさを増していく中、ポポとの雪辱戦に勝利を納めた
シンとハイネは、本来の目的であるガウシカを探すべく、さらに雪山の奥へと踏み込んでいた。
ハイネ
『こんなところにガウシカ　なんていんのかよ』
ひどく寒い。
ホットドリンクがなければ、スタミナどころか体力すらけずられそうな勢いだ。
吹雪が強くて、周りを見回すこともできない状況だし。（数m先が見えないってほどでもないが）
シン
『ん～』
シンも唸り声を出す。

追跡者
『ふぅ～、ポポには勝てた　みたいね。よかったよか　った』
吹き荒れる吹雪に気配を隠して、シンとハイネを追跡している。
なんだか安心したような口調も気になる。

相変わらず視界は悪い。
ホワイトアウトまでとは言わないが、これじゃ近辺にガウシカがいても見逃してしまいそうだ。それにティガレックス等の強敵も。
ハイネ

『シン～、なんとかなんね　ぇ～の？』
シン
『なんとかって言われても　な～。雪山にお願いして　、機嫌直してもらうぐら
　いしかないんじゃないか　？』
それを聞いたハイネは、お祈りのポーズをとる。マリア様の像にひざまずく牧師
さんのように。
ハイネ
『何にもなんねぇじゃねぇ　か』
シン
『…』
冗談で言ってみただけだ。祈るだけで吹雪がやんだら苦労はしねぇよ、心の中で
ハイネには伝わらないツッコミをいれておいた。
シン
『まぁ、時間かけるわけに　もいかないしな。最初の　ホットドリンクを飲んで
　から2時間くらいたって　るから、残り1時間。もう1本のホットドリンク
　を合わせて4時間か』
ホットドリンク1本の効き時間は約3時間。
冷寒地帯に入ってすでに2時間がすぎていた。
時間がないのに、吹雪で足止めをくっている場合ではなかった。
シン
『さっさと探そう』
少し焦りを感じたシンは駆け出す。
ハイネ
『お、おい、シン。おいて　くなよ～』
お祈りのポーズを続けていたハイネが、シンを追う。

３０分という短くも吹雪の雪山をさまようにしては長い時間が流れた。
吹雪の中の雪原を駆け回ったシンとハイネ。
シンはポッケ村育ちの眼力をいかして、ホワイトアウト状態の中、ガウシカを探
している。
ハイネはまだお祈りのポーズを続けていた。すでに願い事というのが、『吹雪を
お鎮めください』というのから、『クエストクリアできますように』と、根本か
ら変わっていたのはハイネの内心だけ。
シン
『いた、ガウシカ発見』
ハイネ
『マジでか』
やっと合わせた両手を離した。
シンの行く先にピョンピョンと跳ね回る四足歩行の動物を視認。
頭に角と体の大きさ具合からガウシカに間違いないだろう。
数は６匹。
シン
『さっきも言ったけど、ガ　ウシカはポポと違って、　オレらの気配に気づくだ
　けで距離をとるから、一　発ＫＯで頼むぜ』
ハイネ
『お、おう』
「アレ?そんな話、聞いた　っけ?」
実際聞いていない。ハイネにとっては初耳だ。
やっとのことでガウシカを見つけたシンは、ちょっとと頭がこんがらがっている
のかもしれない。

とりあえずは、そういうことらしいので、そういうことなのだ。
シン
『ハァ』
手早く背から双剣を抜き、ダッシュから斬り込む。さらに連続攻撃。
ポポより体力のないガウシカは、すぐさま力尽きた。ハイネ
『一発ＫＯ、やってやんぜ』
ガウシカの真正面から、大剣を振りかざす。
ガウシカは背を向ける。
ハイネ
『そうら』
リーチの長い大剣を降り下ろす。
『ドスッ』という、斬るというよりかは殴るに近い音がした。
ガウシカは倒れた。
ハイネ
『おう～し』
気持ちよく一発ＫＯをきめたハイネは、大剣を背にし、倒れたガウシカに駆け寄る。
すると、ガウシカは目の前で再び立ち上がった。
ハイネ
『』
ガウシカは角を振り回し、ハイネを威嚇する。
ハイネはその角に突かれ、しりもちをつく形で倒れた。
ガウシカは再び逃走をはかる。
ハイネ
『コンノヤロー、死んだフリなんかしやがって』ハイネもすぐに立ち上がり
、逃げたガウシカを追撃する。
基本的にガウシカは攻撃を加えてこない。
ハイネもすぐに追撃に成功した。

ハイネ
『フン、騙し討ちなんてな　しだぜ』
ハイネは得意気にガウシカを踏みつける。
ハイネ
『さてと、次狩るか』
辺りを見回したところ、跳ね回るガウシカの姿は存在しなかった。
すべてシンが狩り終えていたのだ。
さすが、ポッケ村出身。雪山には強いな、そう思ったハイネは、同時に自分がな
さけなく思えた。だって、騙し討ちとかされたもん。シン
『よし、一通り片付いたぞ　。あとはコイツの角が出　るかどうかだな』
今回のクエストはガウシカの討伐ではなく、ガウシカの角の納品だ。
2人は周囲に散らばるガウシカから、剥ぎ取りを行う。

シン…
↓［ガウシカの角］×3
　［ガウシカの毛皮］×2　　［ホワイトレバー］×1ハイネ…
↓［ガウシカの角］×2
　［ガウシカの毛皮］×2　　［生肉］×2

目的のガウシカの角は2人合計して5本。
納品する数は１０本。
つまり、残り5本だ。
ハイネ
『え～、あと5本も～…』疲れた～、しんどい～、みたいな口調だ。
シン
『ほらほら、時間もねぇん　だから。置いてくぞ?』シンがさっさと進んでいく
。ハイネもしぶしぶ続く。

クエスト開始から5時間経過。
ホットドリンクも2本目を飲み、さらに1時間がすぎていた。つまり、さっきガ
ウシカを倒してから1時間半たったということだ。
その間に、さらにをポポ3匹倒した。しかし、以来ガウシカとは遭遇していない
。

クエストの残り時間はまだまだ余裕だが、ホットドリンクの持続持続が刻々と迫
ってくる。
ハイネ
『けっこうウマいのな、携　帯食料って』
時間的には昼なので、スタミナを回復・持続させるために支給品の携帯食料を飲
みながら、しばしの休憩だ。
シン
『雪原にはいないな～』
ポッケ村出身のシンとしては、意地的なもので、雪山では自分がリードしたいと
思っている。
なんとなくだが、ハンターとしてシンは自分よりハイネの方がレベルが上と思っ
ている。だからせめて、雪山では…、というやつだ。シン
『…洞窟ん中。あそこなら　いるかもしんないな、ガ　ウシカ』
ハイネ
『洞窟？』
ハイネの脳裏に悪夢がよみがえる。
セルケトだ。
前回のクエストで、ハイネは密林の洞窟でセルケトに襲われかけた。
ハイネ

「雪山にセルケトはいない　よな。あの資料にも、セ　ルケトの生息域に雪山は
　含まれてなかったし…」『そ、そうだな』
やや乗り気でないものの、了承するハイネ。顔はちょっと引きつっている。

その背に背負う過去（前書き）

久々にゾイドみたいな～。
ブレードライガーとジェノブレイカーの戦いでも見ようかな。
ＩＳの鈴の不遇っぷりはスゲーな。

その背に背負う過去

吹雪のやむ気配はまったくなかった。
雪山初めてのハイネも、ポッケ村育ちのシンもそう思っていた。
この状況下で洞窟に入るというのは、ある意味得策かもしれない。
ハイネ
『洞窟の中は温かいな』
氷の洞窟、そう呼ぶにふさわしいような雪山のいりくんだ洞窟。
吹雪を遮断できるので直接風を受けることもなく、体感温度は比較的高く感じられた。それでも気温は0。を下回っている。
ハイネ
『アレ？ここどこだ？』
ハイネは地図を見ながらオロオロしている。
支給品で渡された地図にも、雪山の洞窟の鮮明な地形は書かれていない。
なぜなら、常に氷の変形等によって形を変えているからである。
シン
『おい、ハイネ。こっち』シンがアゴで道を示す。その手に地図はない。
そう言えば、支給品の地図もとっていなかったな。
ハイネ
『あ、ああ…』
それを不思議に思いながらも、シンの示す道に歩を進めた。
ハイネ
『シン、ホントにこの道で　あってんの？』
まぁ、地図を持ってないやつに道案内されては、当然の疑問だわな。
シン
『ん、あってるけど？なん　で？』

あたりまえじゃん的なノリで返されてしまった。
ハイネ
『いや、だってシン、地図　持ってないじゃん。なん　で道わかんの？』
シン
『あ～、それはな…』
前を歩いていたシンはハイネに向き直る。
シン
『全部ここに入ってるから　』
シンが人差し指で自分の頭を指す。
ハイネは『え？』という顔をしている。
“雪山”というのは、シヴァ山脈という山脈をまとめた総称だ。
正直、クエストの際、支給品で地図を渡されるので、フィールドの地形を覚えよ
うなんてことはしないし、普通は不可能だ。さらに雪山といえば、常に地形を変
えるフィールド。
シンはその雪山の地形が頭に入っているという。極めてキテレツだ。
それに驚きを見せたハイネの反応は極めて普通だ。
ハイネ
『おいおい、頭に入ってる　って、この雪山の、シヴ　ァ山脈の全部か？』
シン
『いや、全部ってことはな　いけど、この辺りは昔、　父さんとよく来てたから
な。一通りはわかるよ』そういえば、シンはポッケ村出身だったな。改めて思
い知らされたハイネだった。
ハイネ
『父さんとよく来てたって　、シンのオヤジさんもハ　ンター？』

氷の洞窟を進みながら、ハイネがたずねる。
シン
『え、いや、ええ～っと、　ま、まぁな…』
とてつもなく挙動不審だ。ここで思い出してもらいたい。
シンの父は、言わずと知れたあの伝説に語られるハンター、“白銀の竜王”である。
しかし、偉大な父を持つ子はそれに悩む、というのも世の摂理。
シンがまだポッケ村にいたころ、よく父と比較された。
別に父が嫌いなわけではない。息子として誇りに思うし、一人のハンターとして尊敬もしている。
しかし、比べられるのはあまりいい気はしない。特に、そのことについて特別扱いされることは本当に嫌だった。
だからこそ、ハンターとなってからは、自分のことを知らないティーズに行こうと思ったのだ。すべてゼロから始めるために。
なので、たとえハイネと言えど、そのことだけは話したくなかった。
ハイネ
『？』
シン
『ハハハ…』
笑ってごまかす。
明らかにあやしいが、ハイネはそれ以上の追及はしなかった。それがハイネの優しさなのか、ただの単細胞なのかはわからないが。
シン
『そういえば、ハイネって　…』
唐突にあることが頭に浮かんだ。

ハイネ
『ああ、ヴェステンフルス　。今は亡き鳳凰の一族。　オレはその末裔さ♪』
ハイネ・ヴェステンフルス。
鳳凰の一族と言われたヴェステンフルス一族は、すでに滅んでいる。
その唯一の生き残りがハイネだ。
シン
『あ、ごめん。余計なこと　を…』
ハイネ
『気にすんな気にすんな。　オレは気にしてねぇから　』
あくまで明るくふるうハイネ。
ハイネ
『まぁ、一つ言うとすれば　、あんま隠し事はなしな　。分かち合ってこその仲間（ダチ）だ』
シンの父親のことを察してか、ハイネが言う。
シン
『…ああ』
うなづいてみたものの、やはりまだ父親のことは言えなかった。
ハイネ
『よし、それならＯＫ。オ　レにもバンバン質問して　いいぞ』
この性格、モテるだろうな、とシンは内心笑った。
シン
『じゃあさ、彼女いる?』ハイネ
『え　〃…』
シン
『どんな子?』
ハイネ
『いや、まだいるって言っ　てねぇし』
シンの質問に、汗だくになりながら最善の返答をするべく脳ミソを

フル回転させ
るハイネ。
そうしてシンの質問攻撃に、ハイネの精神的体力ゲージが限りなく
ゼロに近づい
たころ、シンが目指していた場所に到着した。
ハイネ
『ハァ～…』
思わずため息が。
シン
『やっぱいたな』
そこは大きく開けた空間。ハイネ
『ああ、余計なものまでい　るけどな』
眼前に広がる氷の空間には2種類の生物が。
一方は、現在捜索中のガウシカ。数は8匹。
もう一方は、雪山唯一の鳥竜種、ギアノスだ。数は3頭。
8匹のガウシカを狩れば、おそらくガウシカの角はすべてそろうだ
ろう。
問題はギアノスだ。
残りのホットドリンクの持続時間は1時間をきっている。
シンはあえて時間のかかるこの場所に来たのだ。ここなら間違いな
くガウシカが
いると確信があったから。ハイネ
『さ～て、選択肢は2つ。　その1、ギアノスを無視　ってガウシ
カだけを手早
　く狩る。その2、ガウシ　カもギアノスもまとめて　すべて狩る。
さぁ～、ど
　っち?』
シン
『どっち?って、考えるま　でもないっしょ?』
ハイネ自身、シンがどっちの選択肢を選ぶのかわかってた上で聞い

ていた。
シン
『ハイネも中途半端なこと　はキライな方だろ』
ハイネ
『やっぱオレ、シンとなら　うまくやれそ♪』
選択肢その2が採用された。
シン
『全部狩ってやる』
勢いに乗り、今回のクエスト最後の戦闘が始まった。
追跡者
『元気ねぇ～、あの2人。　でもちょっと元気すぎる　かな?ムダな動きとかも
　目立つし』
シンたちがいる空間の高台に腰をおろして、眼下で戦いを繰り広げている2人を
見下ろす。
その追跡者のポーチには、すでに10本のガウシカの角が入っていたりする。

その背に背負う過去（後書き）

シン「なあ作者」

作「はい？」

シン「何で１０話だけあんなに強くなったの俺」

作「大人の事情でそれは言えない」

シン「じゃあもう一つ、アウルどこ行った？」

作「しばらく出ないと思うよ。あとキャラ増えたら殺すと思う」

シン「ヒデー・・・」

作「まあ、空気になるくらいなら星にしてやった方がいいんじゃないか」

シン「あとさ技名の話だけどどうすんの？」

作「あぁ・・・バニシング・フィストとかどうよ」

シン「もろパクリだな」

作「ウルティメイト・プラズマ」

シン「ガメラから離れろ」

作「じゃあ技名は保留で」

シン「またか、まあいいけど」

次回もお楽しみ

クエストクリア？

『ギアノスだっちゃ。こんなやつ一人で大丈夫だ、問題ない。行くよ！』

シンは背中の双剣に手をかけ、掛け声と共にギアノスに突進する。

『一人で突っ込んじゃダメやよ！ギアノスは頭が良いから！』

ハイネの忠告を聞かずにシンは行ってしまった。

（この速度で突っ込んだんだ。ギアノスは反応できないこれはいける！勝った。）

シンがそう確信し切りかかった瞬間、思わぬことが起きた。

華麗なバックステップでギアノスはシンの一太刀を回避したのだ。

気づいていたのだ。シンが突進してきていることに。

（読まれていた・・・だと・・・）

突進の勢いを止めることが出来ずシンは地面に倒れこむ。

ギアノスの鋭い爪がシンに襲い掛かった。

（やばいっちゃ！）

そう思った瞬間、ハイネの大剣の一太刀がギアノスの首を吹き飛ばしたのだ。

シンが何事かと見上げる。

『油断したらダメダメよ♪』

そこには満面の笑みを浮かべたハイネが立っていた。

『そうだな、すまない。』

シンは一層身を引き締めるのだった。

二人は一時間ひたすらギアノスを狩り続けた。

彼らの周囲には肉片が飛び散り、ギアノスの内臓や頭が散乱していた。

そしてその飛び散った肉片や内臓は白い雪をどんどん赤く染めてゆく。
もはや真っ白だった雪山は真っ赤になり見る影もない。
そんなことなど気にせず、ただひたすらに剣を振り続ける二人。
二人のチェーンシリーズの防具もまた返り血で真っ赤になっていた。
そして・・・
『ギアノスの残りは？』
シンは息を切らしながらハイネに聞く。
『これで最後だっちゃ！』
ハイネは力を振り絞って、そのまま最後のギアノスの上顎を斬り裂いた。
『これでギアノスは全滅したな』
シンは自分の周りに倒れているギアノスの肉片の残骸を見わたした。
昔、父親と雪山に行ったとき、ギアノスが脅威に感じていたが、自分の手でこれほどまでのギアノスを狩れたことに少しばかり感動を覚えていた。
『それじゃ敵さんもいなくなったし、さっさとガウシカ狩って帰るか』
と大きな声でハイネが言った。
ハイネもまたこれほどまでに自分のハンタースキルが上がっていることに充実感を感じていた。
『なんて子たちなの！？あれほどまでのギアノスの大群をたった一時間程度で狩ってしまうなんて・・・』
たしかにパーティーメンバーが４人なら１時間でギアノスを狩ることは可能だが
彼らは新米ハンターしかも２人でこの大群を狩ってしまったことは前代未聞だった。
そんなことが出来る彼らにとって、ガウシカ８匹なんて造作もないことだった。
シン

↓［ガウシカの角］×３
［ガウシカの毛皮］×２　［生肉］×２
［ホワイトレバー］×１ハイネ
↓［ガウシカの角］×２
［ガウシカの毛皮］×３　［生肉］×１
［ホワイトレバー］×２
目的のガウシカの角はこれでちょうど１０個。
あとはこれを納品したらクエストクリアだ。
『なぁハイネ、クエスト終了時間までまだだいぶあるから、一緒にコッペパン食べないか？』
まだクエストが始まって８時間程度。制限時間は２４時間なので、かなり余ってしまった。
今回は雪山に詳しいシンがいたので、これだけですんだのだ。
『と言っても、ホットドリンクはもうないから、それ使わないエリアで食べることになるけど』
『そうだな。じゃあ食べようか！ただし黒コッペは嫌だぞ？』
余った時間はまだまだあるので、その時間を食事の時間にするのも悪くないだろう。
以前に、クエストのクリア時間がそのハンターの実力を示すと言ったが、この程度のクエストのクリア時間など何の参考にもならない。だったら、その時間を活用する方が頭がいい。
『ところでよ、こっちの時間はいいのか？そろそろ３時間だろ？』
ハイネが空になったホットドリンクのボトルを示す。
『あ、そうだ。忘れてた。急げ』
あわてて駆け出すシン。
やれやれとそれをおいかけるハイネ。

『こんな新人ハンター前代未聞だわ！さっそく報告しに行こ！』
さっと追跡者が立ち上がり、
そのまま姿を消した。

ホットドリンクの持続時間は間に合わなかった。
洞窟の出口ギリギリのところで効果がキレてしまった。
しかし、多少スタミナをけずられた2人であったが、そのまま拠点のキャンプ地
に戻り、集めたガウシカの角を納品する。
これで今回のクエストも見事クリアだ。
シンはその後、ギアノスの返り血で汚れた防具を、冷たい水で洗い流し、ハイネ
と薬草等を採取していた。そうして一通り採取も終わり、今度こそ終わりだ。
2人は雪山上空で滞空している運び屋の2人を呼び、雪山を後にした。

気球の中…
『なぁシン、ポッケ村に戻らなくてもいいのか？ここからなら近いし、オレ
　はいいぜ』
少し考える素振りを見せたが、答えは即答で決まっていた。

彼らが戦闘を行った場所はあまりにも悲惨なものだった。
雪山の半分は真っ赤に染まり、どこの村から雪山をみても真っ白だった雪山は見る影も無くなっていた。さらにはほかの新米ハンターが雪山に行ってもギアノスが全く出てこないという始末。この現象が約一ヶ月間も続いた。
これは後に【雪山の烈火の炎伝説】として未来永劫語り継がれることとなった。

談話室

サク
『おかえりなさい。お疲れ　様でした』
やはり帰ってきて、一番最初に出迎えてくれるのはサクの笑顔だった。
シン
『ただいま』
ハイネ
『クリアしたど～』
雪山までの往復を担当してくれた2人の運び屋、ソーマとフィンクスにしばしの
別れを告げ、今まさに『帰ってきた』というべき状態にある。
シン
『早速お願いします』
シンとハイネはすっかり手慣れた手つきでサクにギルドカードを差し出す。
サクもちゃちゃっと必要事項を記入していく。
サク
『ありがとうございました　。こちら報酬金の１５００ｚ　です。
それから契約金を
お返しします』
サクが2人にギルドカードとともに、報酬金１５００ｚと契約金８００ｚを手渡す。
当然、仲良く半分コ。
2人の分け前は１１５０ｚとなった。
そして精算アイテムを金に代える。主にホワイトレバー（２００ｚ）とポポノタン（１００ｚ）
。

シン
↓合計１８５０ｚ
ハイネ
↓合計１９５０ｚ

の収入となった。まぁ、上々だろう。
シン
『これからどうする、ハイ　ネ？』
現時刻は１８：３０というとてつもなくビミョーな時間なのである。
雪山とこのティーズの距離は、時間で表して約１日。往復して２日。
雪山では半日クエストをしていたので、帰ってきたらちょうどこの
ハンパな時間
帯だったのだ。つまり、２日半、このティーズを離れていた。
帰りの気球の中でそこそこ寝たので、眠気もない。
ハイネ
『んん～』
声を出してうなる。
そこまで深く考える必要もないと思うが。
ハイネ
『とりあえず、ブラブラし　よか。暇だし』
こんな時間でもまだ十分に明るい。
イク
『ホイ、お２人さん。聞い　たよ。ポポにメタメタに　されたんだ
ってな』
サクの隣で別のハンターのクエスト手続きを終えたイクがシンとハ
イネに食らい
つく。
ハイネ
『え〝なんで知って…』ポポにメタメタにされた、一応事実だが、

なんでイク
が知っている？
とたんに恥ずかしさが込み上げてきた。
イク
『チッチッチ、ウチら受付　嬢をナメちゃいけないね　。張り巡らせた情報網は
　海よりも広し…』
サク
『余計なこと言わない。ご　めんなさいね。クエスト　にクリアできたんだから
　、結果オーライよね』
サクがイクを妨げた。
原因は運び屋のソーマとフィンクスだ。
雪山でポポにメタメタにされた場所は吹雪いていなかった。だから、気球に乗っ
た彼らも、上空からシンたちを確認できたのである。シン
『まぁ、事実ですし…』
ハイネ
『でも、後からはちゃんと　狩れたぜ』
それも事実だが、言い訳くさいぞ。
と、まぁ、受付嬢の情報網とやらに驚かされつつ、集会所を後にする。

一応、シンとハイネ、これからも仲間としてやっていく上で、その
『これから』
というのについて話し合うことになった。
ハイネ
『まず話したいことその１　。これからもツーマンセ　ル（２人組）でやっていく
か？だ』

2人はレストラン（カフェ）的な店に入って、屋外の席に座った。
ハイネの質問の意味はわかってもらえると思う。
これからどんどん難易度があがっていくクエストに、このまま2人でいいのか、
ということだ。
シン
『そうだな。確かに、仲間　を増やすってことには文　句はないけど、アテはあ
　るのか』
ハイネ
『ない。だからこれから探　す』
シン
『…どうやって？』
ハイネ
『目星まではつけてないけ　ど、アテはなくないんだ　よ。一応』
と、ハイネは何か策があり気に話しているが、なかなか核心を言おうとしない。
シン
『どういうことだよ？』
すると、1匹のネコがトテトテと寄ってきた。
シンとハイネはハンター。今さらそのネコが直立二足歩行していることに驚くは
ずもない。お察しのとおりアイルーだ。
アイルー
『おきゃくさま、ごちゅう　もんはおきまりニャ？』片言の人語を話すそのネコ
ことアイルーは、まるで田舎から出稼ぎに出てきた少年のようだ。
ハイネ
『そうだな。じゃ、マスタ　ー頼むよ』
アイルー

『ニャ？ハイネ』
今ごろ気づいたのか、ハイネはそんな顔をしていた。アイルー
『ニャア、でもマスターは　うってないニャ。それに　あれ、まずいとおもうニ
　ャ』
ハイネ
『いやいや、そうじゃなく　て。呼んできてくれって　こと』
ハイネの説明に、『なるほどニャ』と片手の手のひらにもう片方の手の拳をのせ
たポーズをとって、今度は四足歩行で走り去っていった。
シン
『何？今のアイルーと知り　合い？』
ハイネ
『まぁな』
あまり多くは語らなかった。わかったのは、今のアイルーの名前が、ロンという
ことだけだった。
しばらくして、ロンがマスターという人を連れてきた。
マスター
『あら、ハイネちゃん。遅　かったわね。なかなか顔　見せないから、例の密林
　のセルケトに襲われたの　かと思ってたのよ』
現れたマスターという人物は、おっさんだった。
名は、シド。
シン
『え～と、ハイネ。もろも　ろの事情を簡潔に分かり　やすく、手短に話しても
　らいたいんだが』
ハイネ
『あいよ』

この店（喫茶店）は『ストレイキャッツ』という。
そして、このストレイキャッツはマスターのシドと、無数（シドもわからないぐらいいっぱい）のアイルーによって経営されている。シドは現役の“美食ハンター”でもある。
美食ハンターとは、普通のハンターと違い、“味”の研究・追究を目的とするハンターのこと。
そしてこのシドは、ハイネのヴェステンフルス一族と古い付き合いがあった。
なので、ハイネと知り合いなのだ。

以上、長い説明にお付き合いくださってありがとうございました。

シン
『美食ハンター…』
美食ハンター、とりあえず、戦闘能力を持った料理人ぐらいに思ってもらえばよい。
当然、美食ハンターも統括しているのはギルドだ。
ハイネ
『シドは昔からの馴染みで　な。知ってのとおりオレ　の一族が滅んだ時も、い　ろいろ世話焼いてくれた　んだ』
シドは美食ハンターとして、自分が研究した料理を提供するために、このティー
ズで店を開いている。
シン

『へぇ～』
シンがマジメにうなづく。シド
『今度はこっちの番よ。こ　のかわいいボウヤは誰か　しら♪』
このおっさん、ハイネが言うような立派な人には見えないんだが。
ハイネ
『オレの仲間（ダチ）。名前　はシンってんだ』
シン
『シン・アスカです。よろ　しくお願いします』
シンは心の中で一定の距離をおき、お辞儀する。
シド
『あら～、やっぱりかわい　いわね～。私はシド・イ　エーガー。よ・ろ・し・
く・ね♪』
うっ、今何かが背中を…。ロン
『ぼくはロンっていいます　。これもよろしくです』先ほどのアイルーが、机の
上に登って、シンに前足を出す。握手を求めているのだろう。
シンは快くその肉球をとった。

シド
『ところでハイネちゃん。　もう初クエストは終えた　んでしょ。どうだった?
　シンちゃんも』
シドがシンたちと同じ席に座る。3人掛けのテーブルなのでちょうどいい。ロンはテーブルの上に座っている。
ハイネ
『どうって、別に普通だっ　たけど。なぁ?』
シン
『ん～、まぁ…』
ハイネがそっけない返事をしてからシンに振り、シンもぎこちなく答える。
シド
『何かあるでしょ。こうヤ　バかったとか、大変だ　ったとか』
そりゃ、ヤバいとか大変なんて言葉で表すには2人は十分すぎるものに遭遇している。
ハイネは針蟲セルケト。
シンは死神クルーゼ。
ただそれはサクやイクから口止めされているので、ここで言うわけにはいかない。
ハイネ
『まぁ、いろいろあったけ　どな』
シン
『うん』

シド
『？』
時刻は１９：３０。
ストレイキャッツにもボチボチの客入りだ。
現在、当店オーナーはハイネたちと談笑中。
代わりに厨房で戦っているのは、ベテランアイルーたちだ。

厨房…
アイルーＡ
『ニャアマスターは何し　てるニャ』
アイルーＢ
『知らんニャさっきロン　が連れてったニャ』
アイルーＣ
『今、手離せないニャ。誰　か見て…呼び戻してくる　ニャ』
アイルーＤ
『自分で行ってこいニャ。　手が離せないのはみんな　いっしょニャ』
アイルーＥ
『カムバック・マスターニ　ャア』
アイルーＦ
『お前らニャアニャア言　っとらんで、仕事しろニ　ャ』
アイルーＡＢＣＤＥ
『ニャんだと』
アイルーたちは戦っていた。
明らかに注文の量より多くのものを作っている気がする。

シド
『アイルー雇う気になった　、ハイネちゃん?』
厨房の戦争のことを知ってか知らずか、シドはハイネたちとの談笑に花を咲かせ

ていた。
ハイネ
『そりゃ雇いたいかっつっ　たら、雇いたいけど、オ　レまだＨＲ１だしな』
シドはアイルーの貸し出しも行っている。
もちろん『雇う』ということなので、雇ったアイルーに給料を払わなくてはならない。そのため、低レベルハンターではアイルーを雇うことは難しい。
シド
『もしアイルーが欲しくな　ったら、いつでも言って　きてね。オマケとかしちゃうから。シンちゃんも　ね』
シン
『は、はぁ』
雇ったアイルーには主に、料理や、ハンターが留守にしている間の家事全般をしてくれる。
上位ハンターならば、ほぼ１００％の割合でアイルーを雇っている。
ハイネ
『でさ～、そろそろ本題に　入りたいんだけど～』
ハイネが切り出した。例の仲間の件だ。
ハイネ
『オレたちさ、これからも　もちろん２人でやっていい　くつもりなんだけど…』
シド
『新しい仲間でも欲しいの　？』
疑問形で返したシドだったが、自身では確証があったようだ。
ハイネとシンはゆっくりうなづく。
シド

『そうね～…』
頭をボリボリとかきながら、斜め上を見ながら考える。
シド
『私はあんまりギルドと関　わりがないからね。知り　合いのハンターっていえ
　ば、私の世代の同期か、　この店を利用してくれる　お客さんぐらいだから』
つまり、紹介できそうな人はいないと。
ハイネのアテは無念にもくずれさった。
シド
『そういうことなら、受付　のサクちゃんやイクちゃ　んに相談した方がいいわ
　よ』
ハイネ
『いや、それはちょっと』正直、そんなことサクやイクに相談するのは気がひけ
る。てゆーか、恥ずかしい。
なのでシドを頼ったのだ。シド
『私の持論を言わせてもら　うと、友達って自然にで　きてくるものだと思うの
　。だから焦らなくても、　きっといい子、見つかる　わよ』
ハイネ、シン
『…』
シドの言葉に顔を見合わすシンとハイネは、『そんなもんかな～』と呟いていた
りしていた。
ロンはさっきから難しい話についていけず、悶々している。
シド
『とりあえず、今日は2人　が無事にクエストを終え　て、我がストレイキャッ

ツに来てくれたお祝いと　して、何でもタダにしち　ゃうわ。どんどん注文し
て～』
軽薄な言葉は災いを招くということを、おっさんはこの後思い知る。
ハイネ
『じゃ、オレは翠水竜のム　ニエルと、角竜のしゃぶ　しゃぶ盛り合わせと、フ
ルカツと、蟹と水竜の刺　し身と、氷山草と厳選キ　ノコのサラダと…』
シン
『え～と、オレは…』
シド
『…』
ロン
『いっぱい食べるニャア』

ハイネ
『ふぅ～、食った食った』この日の入りが遅いティーズもようやく暗くなりかけ
ていたころ、シンとハイネは小高い丘に寝そべっていた。
シン
『シドさん泣いてたな。必　死で涙こらえてたな』
涙をこらえる男。正直、初めてシドのことをカッコいいと思えた。
ハイネ
『気にすんな。おっさんの　くせにカッコつけるから　悪いんだ』
おっさんのくせにって、おっさんは関係ないだろ。と、同情まで覚え始めるシン
だった。
ハイネ
『まぁ、シドの持論もわか　らなくはないよな』

さっきの『焦る必要はない』というやつだ。
シン
『うん』
まだ始まったばかりだ。
急ぐ必要も、焦る必要もないのだ。
ハイネ
『シド自身、その持論で成　功してるから、説得力も　あるし』
シン
『なぁ、シドさんって、レ　ベル的にはどの程度なん　だ?』
シドは美食ハンターだが、ＨＲなどハンターの根本は同じなのだ。
ハイネ
『聞いて驚くなよ。あのお　っさん、ああ見えてＨＲ　７なんだぜ』
シンが目を見開いて、寝そべっていた体を起こした。そうとう驚いたようだ。
シン
『マジで…?』
ＨＲ７、一流を通りこして天才と称されるレベルである。
このレベルに至るには、一生をかけても不可能なハンターがほとんどだ。
さっきまで目の前で、背筋が凍りつきそうな発言をしていたおっさんが、そんな
レベルだなんて。
信じがたいものだったし、信じたくないものだった。ハイネ
『美食ハンター・イエーガ　ー。同職の連中なら、知　らんやつはいないだろう
　な。なんたって、美食ハ　ンターで、ブラックリス　トハンターに近づいた男
　なんだから』
ブラックリストハンター、ＨＲ８以上のハンターがそう称される。
文字通り、ブラックリストに登録され、その実力からほぼ危険人物

扱いとなる。
すべてのハンターの夢の的である。
シン
『ブラックリストハンター　か。オレらの夢だよな』ブラックリストハンターに
なれるのは、ほんの一握りのハンターのみ。
例えシドのようにＨＲ７までいっても、そこからＨＲ８にあがるのはそうとう難
しいのだ。
ＨＲ７を《天才》と呼ぶのなら、ＨＲ８以上のブラックリストハンターは《異常
》と呼ぶべきか。
ハイネ
『じゃあ、とりあえず、仲　間の件は先延ばしってこ　とで』
シン
『うん、今はそれしか言え　ないだろ』
芝生に寝そべって、天空にまたたく星を見ながら、２人は夜が明けるのを待った
。

新たなクエスト（前書き）

ＡＣＡＣＡＣＡＣ、やめてーーーー！！！！
文章少し頑張ってみた。
ＡＣＡＣＡＣＡＣＡＣＡＣＡＣＡＣＡＣＡＣＡＣ。

新たなクエスト

ギルバート
『数名のハンターを捜索に向かわせたが、今のところ発見したとの連絡はう
けていない』
明朝、ギルドマスターであるギルバートの部屋にギルバートやイクやサク、その他数名のハンターたちが集まっていた。
ハンターA
『あのクルーゼが出たってマジかよ?』
ハンターB
『誰の情報よ?確証はあんの?』
雪山に向かう前に、シンとハイネから密林で死神クルーゼに遭遇したと話していた。
犯罪者であるクルーゼを、ギルドとしては逮捕しなければならない立場にある。
とはいってもHR10のクルーゼと対等に戦える者など数えるほどしかいない。
今、この場に集まっているハンターたちもすべてブラックリストハンターだ。
ハンターA
『こんな時にケンとヴァニラは駆り出されてるし正直オレたちがクルーゼ
と戦っても勝敗は目に見えてるだろ』
ケン、ケネスの通称だ。
ハンターC
『そういえば、ヴァニラたちがセルケト討伐に向かったのって密林

でしょ？
　で、クルーゼが出たんも密林でしょ？まさかばったりなんて…』
まぁ、可能性はあるわな。ギルバート
『やつらの心配なら無用だろう。殺しても死なぬやからだ』
イク
『特にケンはな…』

密林…
ケネス
『ハッックション』
くしゃみを一発。
ヴァニラ
『どうしたのよ？かぜ？』

セルケトを狩りにきたケネスとヴァニラは、安全地帯
にてただいま休息中。
ケネスは回復薬を2、3本飲んで座り込んでいる。ヴァニラはその
隣でボウガン
の弾を調合している。
ケネス
『どっかの女子がオレの噂でもしてんだろ』
ヴァニラ
『ああ～、バカって？』
どうでもよさそうな言い方で、顔も向けず呟く。
ケネス
『バカってさ～、オレそこまで頭悪く…』
『バァーン』
ヴァニラ
『ぎゃ』
ケネス

『？』
ケネスの隣で何かが爆発した。ヴァニラが、拡散弾の調合をミスったようだ。
ヴァニラ
『もー』
ケネス
『たから、タル爆弾持ってくるくらいなら、調合書持ってこいって…』
ヴァニラ
『何よ』
見事な八つ当たり。
ケネス
『ハハハ…』
昔の偉人は『触らぬ神に祟りなし』という格言を残したそうだ。おそらくその偉人も、今のケネスと同じような状況に陥っていたのだろう。

そんな切り詰めた早朝が送られていたころ、シンとハイネは小高い丘の芝生の上で寝ていた。
シン
『ん？』
そよ風がシンを目覚めさせた。
シン
「あ～、あのまま寝ちまったのか…」
時刻は９：３０。
隣ではハイネがピクピクしながら寝息をたてている。大方、昨日シドのストレイキャッツでバカみたいに食い荒らしたので、その反動みたいなもの

だろう。
それにしても、寝ながらピクピク（痙攣？）するなんて器用なやつだ。
シン
『お～い大丈夫か？ハイネ～』
ハイネ
『…うっ』
寝ながら吐くとかやめてくれよ。
シンも驚くだろうし、何よりハイネ自身が起きた時に見る自分の有り様にひどく
驚かれると思う。
数分後、やっと起きたハイネは二日酔いのごとき吐き気が襲ってきたらしく、小
川の水を飲んだり吐いたりしていた。
ハイネ
『うわ～、気分最悪～』このティーズ村は、他の４つの村より活気があるし規
模もデカい。
とはいっても現代の都会のようなゴタゴタしたところではない。
自然あふれるといったような感じで、村の中にも普通に飲めるような水の川が流
れていたりする。
気候も常夏ということで年中、草花がしげっている。シン
『で、今日はどうするよ？　昨日帰ってきたばっかっていっても、実質ほとん
　ど気球の中だったわけだし』
ハイネ
『へ？んなん、もちクエスト行くに決まってんじゃん。…うっ』
まずはその二日酔いのごとき吐き気とやらをなんとかしような。
まず、朝食をとることになった。

ハイネいわく…
『二日酔いには向かい酒という風に、一見とりすぎたものをさらにとるとい
う無茶な行為。否。これはとりすぎたものをさらにとることで、互いを相
殺し合う荒療治。ならば今、我が身のこの状態も、オレが何かを食すこ
とによって改善されるのだ』
ということらしい。
シン
『んな、無茶苦茶な…』
シンのぼやきが、ハイネの耳に入ることはなかった。しかも、あろうことか、来
た店がストレイキャッツ。昨日あれだけ食い散らかしたのだ。入りづらい…。
ハイネ
『おはよーさーん』
ハイネ、申し訳なさそうにしなければいけないのはアナタなんですが。
昨日、シンもタダ飯にありつけたのだが、あくまで適量だ。ハイネほどじゃない
。
シド
『あら、ハイネちゃん、シンちゃん。おはよう』
案外普通な対応で出迎えてくれたストレイキャッツオーナーのシド。
ハイネは店内に入るや、ついた席は昨日と同じ屋外のテーブル。どうやらハイネ
のお気に入りの席らしい。ハイネ
『コーヒーとサンドイッチ頼むわ。あ、ミックスサ　ンドな』
シン

『オレはヨーグルトお願いします』
シド
『はいは～い』
あくまでハイネたちの前では明るく振る舞う。
おそらく昨夜は涙で枕を濡らしたことだろう。
ロン
『ニ〝ャ～…』
先輩アイルー
『ちゃんと床拭くニャ』店内ではロンが先輩アイルーにしごかれている。
シンはさっさとヨーグルトをたいらげ、ハイネが食い終わるのを待っていた。
ロンがシンの足にしがみつき助けを求め、先輩アイルーがそれを引き剥がそうとしていたりと、なかなかにぎやかなアイルーたちだ。ハイネ
『お待っと～さん』
ハイネがコーヒーをすすって言った。
シン
『じゃ、行くか』
シンが足にしがみついていたロンを離す。
ロン
『ニャア～、そんな殺生ニャ～』
先輩アイルー
『次は窓ニャー』
今回は料金は払わなければいけないだろう。
ハイネはまたタダ飯を期待していたようだが、シンに気圧され、しぶしぶ財布を
開けた。
シド
『まいどあり～』

その時のシドの顔は本当の意味で笑っていた。
シン
『ハイネ、二日酔いのごとき吐き気は治ったか？』ハイネ
『おう、もうバッチリ』
あの無茶苦茶な理論の結果そう言えるのはスゴいぞ。シンは呆れる
内心、感心し
ていた。
シド
『2人とも、これからクエスト？』
店を出る間際、シドがハイネとシンに問いかけた。
ハイネ
『ん？そうだけど？』
シド
『だったらわたしのクエスト受けてくれない？』
ハイネ、シン
『へ？』
つまり、シドが直接シンとハイネにクエストを依頼するのだ。
こういう依頼は、本来ブラックリストハンターがクエストを受注する時にするや
り方だ。ブラックリストハンターは、ギルドを通したクエストではなく、依頼人
から直接クエストを受けることによって、その間で契約がかわされ、莫大な報酬
金や無理難題のクエストなどを取り引きする。こういう契約を直接契約という。
ま、今回はシドが2人を気に入ったためにクエストを頼んだわけだ。
ハイネ
『シドのクエスト？内容とかは？』
シド
『な～に、簡単よ。砂漠に行って、サボテンの花を　採ってきてほ

しいの』
［サボテンの花］砂漠に分布する植物。
シド
『報酬は2人に２０００ｚずつあげるわ。契約金はなし。制限日時は明日が終わるまで』
つまり、明日の２３：５９までということ。
シン
『これって、スッゴい好条件じゃん。いいんですか　？』
昨日、ハイネがあれだけタダ飯にありついたのに、と内心思っていた。
シド
『いいのいいの』
シドはおばさんくさく手を振る。
シド
『じゃ、受注してもらえるわね？』
シンとハイネはもちろん首を縦にふる。
シド
『砂漠までは気球で行かなきゃならないわ。一流の運び屋、わたしが紹介するわ』

新たなクエスト（後書き）

シン「なあ作者」

作「ん？」

シン「必殺技だｋ」

作「黙れ。今本文に手詰まりなんだＡＣ」

シン「それはお前が本編をちゃんと考えないからだＡＣ」

作「まあ、そうだけど・・・ＡＣ」

シン「で？　また必殺技は保留か？ぽぽぽぽーん」

作「いや候補はあるぽぽぽぽーん」

シン「ほう、ＡＣ」

作「火焔風刀とかどうだ？ぽぽぽぽーん」

シン「中二っぽいけど良いかぽぽぽぽーん　ＡＣ」

作「次回もよろしくＡＣ」

砂漠への出発

シド
『わたしが一流の運び屋を紹介してあげるわ』
そう言ってストレイキャッツを出たシン、ハイネ、シドの３人。

アイルーＡ
『ニャ～、またマスター消えたニャ…』
アイルーＢ
『もういいニャ…』
アイルーＣ
『この時間はお客さん、少ないからニャ…』
このようなことを言っている日に限って、繁盛しているというのが面白いところだ。

シドたちは、一流の運び屋という人物がいる場所まで歩いていた。
少し小高い丘の上。
シン
『なぁ、シドさん。運び屋ってギルドの運び屋じゃダメなんですか？』
ギルドの運び屋というのは、この前のソーマやフィンクスのことである。
彼らはギルドに公認され、ギルドのクエストによって各地へ派遣されるハンターを送り届けるのが仕事なのだ。
今回の場合、シド（依頼人）からの直接契約のクエストなので、ギルドの運び屋を

使うことはできないのだ。シドはこのことを説明するも、シンとハイネはいまいち直接契約について理解できていないようだ。

シド

『さぁ、ついたわよ』

住宅地から少しばかり離れたところに、お屋敷のような立派な家が建っていた。

ハイネ

『ここにいんの？その一流の運び屋ってやつ』

疑問に思うハイネを尻目に、シドはちょいちょいとシンとハイネを呼ぶ。

シド

『じ～さんいる～？』

近くに寄ってみるとその家は、一階は何かの作業場、二階は住居スペースとなっているのが確認できた。『何じゃ、騒々しい』

シドの呼び掛けに、一階の作業場らしき場所から1人の老人が現れた。

ゼノン

『お前か、シド。ワシはお前の店にツケなどないぞ 』

作業用の服装に身を包んだ老人には、油がべったりとついていた。

シド

『違うわよ。今日は運び屋としておじいちゃんを訪 ねたのよ』

シンとハイネはシドの後ろできょとんとしている。

ゼノン

『運び屋？お前のクエストか？』

シド

『違うわ。今回はこの2人よ』

シドがそう言って、シンとハイネを前に出す。

2人は少しあわてながらも、その老人に無言の礼をかました。

ゼノン『何じゃ？』
老人もよくわからんという表情をしている。
シド
『紹介するわね。あっちの　おじいちゃんはゼノン・ゾルディック。さっき言
った一流の運び屋よ』
まず、シンとハイネに老人を紹介する。
老人の名はゼノン・ゾルディック。ギルドに属さない運び屋。色黒でがたいがデ
カく、お決まりの目のキズが特徴。見た目からもかなりの威厳と品格だ。
シド
『こっちの2人はシン・アスカとハイネ・ヴェスティンフルス。今年度のルー
キーよ』
今だに話を飲み込めず、頭をかいているゼノン。
とりあえず、ゼノンは3人を作業場にいれた。
シン
『おお』
ハイネ
『スッゲー』
そこは気球の修理工場。工場といってもゴミゴミしたような近代的なところでは
ない。
鉄のサビの匂いがしそうなこの老人ゼノンに合いそうな雰囲気の作業場だ。
ゼノン
『さて、もう一度詳しく聞かせてもらおうか』
シド、シン、ハイネが一列に座り、向かい側にゼノンが座る。
周りを見回すと数匹のアイルーがせっせと働いている。

シド
『わたしがこの子たちにクエストを依頼したのよ。直接契約のクエストでは
ギルドの運び屋は動いてくれないでしょ。だからおじいちゃんに頼みに来
たの』
分かりやすく話した（つもりの）シド。
しかし、ゼノンはまだ頭をかいている。
ゼノン
『お前が依頼したって、こやつらまだ半人前じゃろうが。なぜそんなやつら
に直接契約のクエストなど』
直接契約のクエストは、基本的にブラックリストハンター以外は受けない。なぜ
なら、ギルドに申し出ても無理と突き返されるような無茶なクエストばかりだか
らだ。正規のクエストが無理である以上、依頼人とハンターとの間で特別な契約
が交わされる。無理難題のクエストを莫大な報酬金で請け負うというよな。
今回はシドが2人のレベルにあったクエストにしてくれたのだが。
シド
『気まぐれよ、気まぐれ。この子たち、わたしのお気に入りだから』
再び背筋に何かを感じたシン。ハイネはもう慣れてるという表情をしている。
シド
『それにおじいちゃんの子たちも、今クエスト行ってんでしょ？だったら暇
じゃない』
ゼノン『ワシの子供じゃないわい。ワケあって引き取ってるだけじ

ゃ』
ゼノンが作業中のアイルーを1匹呼んで、小声で何か話し始めた。
ゼノン
『まぁ、よかろう。で、どこへ行くんじゃ？』
アイルーとの話しを終え、再びシドに向き直る。
どうやら話しはまとまったようだ。
シドはシンとハイネに目を向ける。
シン
『あ、え～と、砂漠です』シンがあわてて答える。
ゼノン
『砂漠か。日数は？』
ハイネ
『明日の終わりまで…です』
ゼノンはふむふむとうなづく。
ゼノン
『いいじゃろう。引き受けてやる』
そう言って、ゼノンが立ち上がった。
ゼノン
『ヒメ、ワシが行ってる間に小僧どもが帰ってくやもしれん。その時は頼む
ぞ』
アイルー＝ヒメ
『承知いたしました』
先ほど、ゼノンと話していたヒメという名前のアイルーが応答する。
一向は場所を、この作業場から、屋敷の隣の小屋へ移す。
小屋に入ると、ゼノンの姿を見るやとんでくるアイルーが1匹。
アイルー＝ココ
『ゼノンさん、気球ニャ　』
ゼノン
『ああ、頼むぞココ』

その小屋には、7機もの気球が存在した。
そしてゼノンからあることを任せられたココという名のアイルーは、
その一つに
飛び乗る。
ハイネ、シン
『？』
するとココが火を吹いた。みるみる気球のバルーンが膨らんでいく。
ゼノン
『ほら、早く乗れ』
ゼノンに急かされシンとハイネは、その気球に搭乗する。
そしてゼノンは開閉式の屋根を開ける。
ゼノン
『ヒメ、これから2、3日家をあける。その間の管理頼むぞ』
ヒメ
『承知しています。お気をつけて』
このヒメというアイルー、この屋敷の執事長のような存在だと思っ
てもらえばよ
い。
シド
『頑張ってね～』
地上ではシドとヒメがずっと手を振って、見送ってくれていた。

その背に背負う過去？

ティーズから砂漠までは約半日。
砂漠の近くにはクロノスという村がある。ハイネの故郷だ。

※以前、ハイネの出身はジャンボって言ってたけど、訂正しておいてください。（＾人＾）

つまり、前回の雪山ではポッケ出身のシンが先導していたが、今回はその逆になりそうだ。
ゼノン
『小僧、もう一度名を聞かしてはくれんか？』
シンもハイネも気球の中では気まずい空気になりそうと思っていた。しかし、意外にも先んじて口を開いたのはゼノンだった。
シン
『あ、はい。ボクはシン・アスカといいます』
ハイネ
『オレはハイネ・ヴェスティンフルス』
これを機に打ち解けあえば、と思うシン。
ゼノン
『ワシはゼノン・ゾルディック。まぁ、運び屋と気　球の修理を生業にしとる
　老いぼれじゃ。よろしゅ　うな』
まさかゼノンの方から握手を求めてくるとは、想定外だった。
シン、ハイネという順でゼノンの手をとる。
ココ

『オイラ、ココっていうニャ。よろしくニャン』
バルーンの真下で、熱を送り込む作業をしている火吹きアイルーのココ。毛並みはオレンジと黒のしましま。火吹きアイルーのココにとっては、ベリーナイスな毛並みだ。
挨拶代わりにハイネの目前ギリギリに火炎放射。
大げさに転んだハイネに、その場が笑いに包まれた。ゼノン
『ハイネというたな、お主?』
ハイネ
『はい』
ゼノン
『確か、下の名はヴェスティンフルスと。ではまさか、“火の目の一族”の者か?』
ハイネの一族は、滅亡したヴェスティンフルス一族。別名“鳳凰の一族”とも呼ばれる。
その由来は、感情が高まり興奮状態になると、その眼球が紅く染まるという。
ゆえに、ヴェスティンフルス一族を“火の目の一族”という人もいる。
ハイネ
『知ってるんですか?まぁ、今は滅んじゃって、生き残りはオレだけなんですけどね』
ハイネは相変わらず、笑い話にしようとする。しんみりした話はキライなのであろう。
ゼノン

そうか…』
ゼノンは顔をうつむける。同情でもしているのだろうか。
ゼノン
『そういえば“火の目の一族”は砂漠の一族だったな』
ハイネ
『はい。だからもし、時間があれば、一族の居住区があったエリアに行って
、花でも添えようかと思ってます』
シドに砂漠のクエストを依頼されたのは突然だったので、墓参り用の花なんかは
用意できなかったが、とりあえずサボテンの花程度でも供えようかと思っている
。時間があればの話だが。ゼノン
『時間のことなら心配せんでもええ。お前さんらのクエストが終わってから
向かえばよかろう』
ハイネ
『いいんですか?そこまでやってもらって』
ゼノンは『かまわん』という表情をしている。
シン
『ちょっと質問してもいいかな?』
挙手したシンが、やや控えぎみに呟いた。
ハイネ
『何?』
シン
『ハイネの一族ってさ、なんで滅んだの?』
ハイネ、ゼノン
『…』
シンの問いかけに、ハイネばかりかゼノンまで口を閉ざしてしまった。

シンも『やっぱりこんな質問しなきゃよかった』と後悔する。
少し沈黙が流れ、最初に口を開いたのはハイネだった。
ハイネ
『“クモ”って、知ってる？』
しんみりした話はキライ。しかしさすがのハイネも話しづらそうだ。
以前、ハイネはシンに『隠し事はなし』と、普通は恋人間で交わされる約束をした。この約束に沿って、今ハイネは告白した。しかし、嫌々話してるわけでもない。ただ、思い出を掘り返すのがちょっとつらいだけだ。
シン
『クモ？盗賊団の？』
ハイネ
『そう』
クモ、盗賊団と言われているが、実際は強盗団と言った方が正しい。殺人、テロなど、標的を奪取するためには手段を選ばない。
以前に話した“死神衆”が成長した組織とも言われている。
ハイネ
『ヴェスティンフルス一族、また“火の目の一族”って言われているって、
さっき言ったよな』
シンはうなづく。
ゼノンは空を見上げている。
ハイネ
『この目は感情が高まると紅く染まる。そしてその状態で死ねば、紅く染ま
った目は、永久に紅く輝き続けるんだ』
ハイネは自分の目を指差す。その目はほんのり紅かった。
ハイネ

『そして、ヴェスティンフルス一族の紅い目は、世界七大宝玉の一つなんだよ』

シン

『…』

ハイネ

『ここまで言えば、察しがつくだろ？』

つまり、クモという盗賊団が世界七大宝玉の一つ、ヴェスティンフルス一族の紅い目を奪うために、一族を皆殺しにして、その目を奪いさったのだ。

ハイネ

『なんでオレだけ助かったのかはわからないけど、なんか生きてんだよ』

ハイネの顔に笑顔が戻る。ハイネ

『2年前の話だよ。それからはずっとシドが面倒みてくれた』

2年前というと、ハイネはちょうど今のシンの年齢だ。シンは17。ハイネは19。

シンも両親をなくしているので、ハイネの話も重々理解することできた。ただ同情はしていない。こういう過去を持つ人々にとって、同情は一番の暴力なのだ。

ゼノン

『それから、貴様はシンと言ったな』

シン

『は、はい？』

今までハイネの深刻な話をしていたのに、今度はシンに振られた。

ゼノンはなんでも知っている、今までのハイネとの会話でそれが理解できた。と

いうことは、もしかしたらオレの親のことも…、と思うシン。

ゼノン

『お前さんの父親キ…』シン
『あー』
やっぱり、ゼノンはシンの父親のことも知っていた。シンは全力でゼノンを妨げる。
ゼノン
『何じゃ？』
シン
『え～と、あの～…』
ハイネ
『もうすべてを吐いちまえよ。楽になるぜ～』
シンは父親のことを知られたくない。
でもハイネも自分のことを話してくれた。
ここで話さなければ、あの約束にも反することになるし。
しばらく考えた末、シンはようやく腹をくくった。
シン
『わかったよ…』
ゼノン
『じゃ、やはりお前さん、キラの息子か』
キラ・ヤマト。“白銀の竜王”と言われる歴代最強のハンター。で、シンの父。
ハイネ
『え？キラって何？、キラ・ヤマトのこと？え？え　？え？はい？え？ウソ、マジで？』
グッドなリアクションありがとう。
ハンターなら、その名前を知らぬわけがない。歴代最強のハンターとして名を馳せ、ＨＲ１０を初めて名乗り、流竜オルトロスからティーズを救った、あの伝説

であり英雄であり神とまで称されたハンター、キラ・マヤト。
今、目の前にいるダチがそのハンターの息子だなんて。
ハイネ
『マジかよ…』
まだ現在進行形で驚いているハイネ。
シン
『なんでオレがキラ・ヤマトの息子だってわかったんですか?』
ゼノン
『フン、わかるモンなんじゃよ。老いればな』
どういうことだ?
シン
『っていうか、ゼノンさん、父さんのこと知って… 』
ゼノン
『そろそろ着くぞ』
シンの質問はかきけされた。
ゼノンの言うとおり、突然空気が生暖かくなった。それがすぐに熱風に変わった
。砂漠って感じになってきた。
地表もいつのまにか、緑から黄土色に変わってるし。ゼノン
『あそこの岩山に着陸する 』
ゼノンがココに何やら指示をだして、着陸準備にはいる。
シンとハイネは邪魔にならないように、隅っこに待避する。
ゼノン
『シン。キラのことならまたいずれ、ゆっくり話をしよう』
隅っこに待避しようとしたシンの耳もとで、ゼノンが小さな声で呟いた。

星の下の砂（前書き）

俺の体はボドボドだぁ！

星の下の砂

シン、ハイネ
『いってきま～す』
岩山の一角にテントを広げ、拠点となるキャンプ地を築いた。
時刻は真夜中。
夜の砂漠ではホットドリンクが必要になる。
2人はまたしてもホットドリンク、クーラードリンクを持ってくるのを忘れた。
しかし、ゼノンがホット・クーラードリンクを持てるだけくれたのだ。なんでか
わからんけど。
後は、支給品を2人でわけ、準備完了。
ホットドリンクを飲み、夜の砂漠に繰り出す。
ハイネ
『さっぷーけーだな』
シン
『同じく』
拠点の岩山を降りたその場の風景は砂のみ。
黒い空と砂の海。なんだかやる気のなくなる風景だ。さて、これからどうしよう
？
ハイネ
『サボテンの花ってどこにあんの？』
シン
『いや、砂漠はハイネの担当だろ』
雪山のシンの時のような頼れる発言は一切なしのハイネ。
実際、ヴェスティンフルス一族は砂漠に住む一族だったが、ハイネは一族が滅亡

してからはティーズに住んでいるのだ。
ハイネ
『ハハ～。正直、砂漠のこと、あんま覚えてなかったりして～』
覚えてないんですね。
ため息をつくシンは、当然ですよね。
シン
『とりあえず歩き回ろう。突っ立ってもしょーがないし』
砂漠でもシンがリードしそうだ。実力はあるのになハイネって。
砂を踏み、歩き出すシンとハイネ。
星空の下、見回す限りの砂の地を歩いていく。ホントにモンスターの1匹も見当
たらない。
砂漠のモンスターとしてはゲネポス、ガレオスあたりがポピュラーなところだが
、今はその2種どころか、生き物の気配すらしない。みんな寝てんのかな？
シン
『あ、なんか生えてる』
シンが、砂から顔を出した植物をあさる。
［火薬草］［トウガラシ］を手に入れた。
シン
『ん～、ないな～。サボテンの花』
ハイネ
『よ～し、次行ってみよ～』
しばらく砂の野原をさ迷った。拠点の岩山を見失わないように気をつけながら。
そして、3時間歩いた。
ホットドリンクの持続時間がきれる前に、それが必要とならないエリアに待避し
た。

ハイネ
『後ホットドリンクは４本。余裕があると、なんだか気が楽だな』
前回の雪山では2本しかなかったので、大変な目にあった。
それに比べたら、ハイネの言うとおり今回は余裕がある。
それにサボテンの花もすでに４つゲット。そんなに珍しいアイテムでもなさそうだ。
ちなみにサボテンの花は１１個採る予定。
シドは個数を指定しなかったが、そういう時は１０個と相場は決まっている。暗黙のルールみたいなものだ。そしてハイネが墓参りする用に、もう１本。
シン
『ここら辺は岩場か』
ハイネ
『何か出てきそうな雰囲気。あ～、ヤダヤダ』
砂地と違って、あからさまに何かの気配がする。
『ア〝ア〝ー』
聞き覚えのある甲高い鳴き声。
砂漠の鳥竜種ゲネポスだ。シン
『黄色い鱗…。ゲネポス』ハイネ
『ああ、やっぱり出てきたか。やつら麻痺属性の持ってっから、牙には気
　ぃつけろよ』
数は5頭。しかも敵の数体は頭上の岩の上。あまりよろしくない状況だ。
ハイネ
『…』
ハイネは辺りの状態をチラ見で確認する。何か気になる点でもあるように。

ハイネ
『シン、今回は突破すんぞ。左前方を切り抜ける』シン
『え？』
理由は後回しだという感じにハイネが走り出す。よくわからないシンは、一応
それに合わせる。
まずハイネが前方の2頭のゲネポスに横なぎの斬撃。ゲネポスは双方ともバック
ステップで回避する。
そのハイネが開けた道をシンが駆け抜ける。
シン
『ふぅー・・・ファックアナル乳首ビンビンちんこビンビンチン毛ボーボープッシーフェラフェラ濡れ濡れマンコのコリコリお豆ーーー！！！！！！！！！』
頭上の岩の上から、3頭のゲネポスがシンに飛びかかる。
シン
『…』
シンはそれに気づきつつも、走り続ける。そしてギリギリまで引き寄せたところ
で緊急回避。
同じところに飛び込んできた3頭のゲネポスは、互いに激突しあった。
シン
『よし』
激突しあった3頭のゲネポスは、その3頭で仲間割れを始めた。
ハイネ
『ハァア』
ハイネが残る2頭のゲネポスの片方を斬り裂いた。
ゲネポスの鱗も、大剣の攻撃力にはかなわない。
そして、もう片方のゲネポスを放置プレーして、シンを追う。

もちろんそのゲネポスは追撃に入る。さっきの3頭のゲネポスは、
現在進行形で
仲間割れ中。
ハイネ
『シン』
シン
『おぉう』
シンが物陰から飛び出し、ハイネを追撃していたゲネポスに不意討
ちを食らわし
た。
2人はそのまま逃走。
しばらくハイネを先頭に走っていた。
シン
『で、ハイネ。どういうことだよ?』
ハイネは辺りを確認して止まる。
ハイネ
『あそこはドスゲネポスの　徘徊路だ』
ドスゲネポス、ゲネポスの群のリーダー。他のゲネポスよりも数段
高い戦闘力を
もつ。
中級以上のハンターなら問題なく討伐できるが、今のシンとハイネ
のレベルでは
不可能だ。
シン
『ドスギアノスみたいなモンか』
ポッケ出身のシンには、ギアノスで例えるとわかりやすい。
基本的にこの種の鳥竜種は能力や特性が違うだけで、その他の行動
パターンはほ
とんど同じなのである。
ハイネ

『一応、オレもクロノスの出身だからな。ドスゲネポスの徘徊路はなんとな
　くわかる』
シンも、雪山でのドスギアノスの徘徊路はわかる。
ハイネ
『オレたちの装備でドスゲネポスと戦闘なんてことになったらマズいからよ
』
2人は再び歩き出す。
空はまだ暗い。しかし、もう少しで夜が明け始める。ハイネたちにとっては、モ
ンスターが寝静まっている夜のうちに済ませたかったのだが。
シン
『ハイネ、ヴェスティンフルス一族の里ってどこにあんのさ?』
ハイネ
『砂漠奥地の一郭だよ。まぁオレらは入れないけどな』
“奥地”に入れるのは上位ハンター以上。モンスターのレベルが桁違いになるか
らだ。このことは以前にも言ったが、そんな危険地帯に居住区を構えていたヴェ
スティンフルス一族の凄さを理解してもらいたい。
シン
『おいおい、入れないんじゃ、どうやって行くんだよ?』
ハイネ
『まぁ、もともと規則破るつもりでいたんだけど、ゼノンさんが連れてって
くれるって言ってくれてるからさ』
下位ハンターの“奥地”への立ち入りはギルドによって禁止されている。
ハイネ

『そういう理由もあって一族が滅んでからの2年間、一度も墓参りに行っ
たことなくてよ』
シン
『…』
ハイネが前を歩いているため、その表情は確認できなかった。
シン
『オレが行ってもいいのか?』
背後からの質問に、ハイネが振り向く。少し不思議そうな顔をしていた。
こう言ったシンの心情もわからなくはないが。
ハイネ
『ふん、当たり前だろ』
笑いを込めて返した。
ハイネ
『いっしょに行ってくれや。オレのダチ、みんなにも紹介してぇからよ』
シンとしては気を使った発言だったのだが、ハイネにはそんなもの必要なかったようだ。
シン
『おう』
気がつけば、空の暗黒は取り払われ、辺りが色づき始めていた。

星の下の砂（後書き）

シン「なあ作者ＡＣ」

作「どうした？　つーかまだＡＣネタ続けてんのかよぽぽぽぽぽーん」

シン「必殺技の火焔風刀っていつ使うの？ＡＣ」

作「さあ？　まだわかんないぽぽぽぽーん」

シン「そういえばアウルだけどあいつはどうしたのＡＣ」

作「あー、死んだんじゃない？ぽぽぽぽーん」

シン「えー・・・。次回もよろしく」

ハイネ
『ホント余裕だな、このク　エスト。これで２０００ｚく　れるってんだから、シドも太っ腹だよな～』
シン
『まったくだ』
クエスト開始数時間で、すでに８つのサボテンの花を入手した。
日は完全に“朝日”と呼ばれるものになり、シンとハイネは気温の異常な上昇を
肌で感じていた。
現在２人はクーラードリンクの必要のないエリアを歩いている。
シン
『にしても暑い…』
照りつける太陽の光にダイレクトアタックされ、今にもライフポイントがゼロに
なりそうな勢いだ。
シンはポッケ出身なので、砂漠の極端な暑さに弱いということもあるのだが。それにしても夜と昼の寒暖の差が激しい。
ハイネ
『朝の気温でそんなこと言　ってたら、昼には干物に　なっちまうぞ？』
さすがはクロノス出身。やっとそれらしい一言がこぼれた。
ハイネ
『ちょっと休憩でもすっか　？』
シンの様子を見て、ハイネが提案した。
シンにとって慣れない土地で５時間以上も歩きっぱなしだったのだ

から、疲れが
たまっても仕方がない。雪山の時はハイネもへばっていたし。
シン
『おう。すまんな』
2人は岩の影になっている場所に腰を下ろし、携帯食料と水を頬張る。
その間にも、肌でわかるほど気温が上昇する。
シン
『ふぅ～』
額の汗をぬぐう。
日陰にいて、ただじっとしているだけなのに汗が止まらない。
空を見上げると黒い影がたくさん飛んでいる。
飛竜種や翼竜種だ。
ハイネ
『もう行けそうか？』
ハイネは元気に立ち上がる。
シン
『大丈夫、行ける行ける』シンはそう言って、ハイネが差し出した手をとって立
ち上がった。
サボテンの花はすでに8つ入手している。残りは3つだ。
2人は多少ながら暑さが比較的低い岩場をうろついていた。
しかし、砂地のエリアとは違い、見通しが悪い上、隠れられる場所もある。現に
昨夜、この辺りのエリアでゲネポスに襲われた。
ハイネ
『背後には気ぃつけとけよ　。突然ゲネポスに噛まれ　て麻痺って、チーンって
　なることも少なくないん　だからな』
シン

『マジで』
そんなことを話していると、２人の前に羽を持つヤツが天空より降臨した。
ハイネ
『ゲネポスじゃなかったな』
シン
『ホント、どこにでもいる　な』
その正体はランゴスタだ。すでに見慣れたその黄色いボディ。密林や雪山で何度も目撃した。
ランゴスタはハイネたちをロックオンしたらしく、腹の針をつきだし攻撃姿勢をとっている。
シン
『ランゴスタ１匹ぐらい、　オレで十分だろ』
シンが双剣に手をかける。まだランゴスタは双剣の攻撃範囲外にいる。
シンはカウンターで決めるつもりだ。
しばし動きを止めていたランゴスタは、熱風の風が吹くと同時に急降下する。
シン
『――――』
動きを見切り、斬り込む。毒針に気をつけ、２つの剣がランゴスタの腹を斬り裂く。
連撃によって、ランゴスタはバラバラに砕け散った。シン
『……』
しかし、その時シンも倒れた。
後ろで見ていたハイネがあわてて駆け寄る。
ハイネ

『シン、どした？』
抱き起こしたシンは、少し振るえていた。麻痺の症状だ。
ランゴスタを斬り裂いた時、砕けたランゴスタの毒針がうまく防具の関節に入り
込み、シンの左肩に突き刺さったようだ。
ハイネ
『運悪いな、シン。ちょっ　と我慢しろよ』
ハイネは笑って、シンの肩に刺さったランゴスタの毒針を抜く。
キズはそんなに深くないし、症状から見ても体内に入った麻痺毒は微量だろうと
推測できる。
しかし、倒したランゴスタの毒針が刺さるなんて運が悪い。
ハイネ
『ちょっと休んでろ。麻痺　は時間がたてば自然に回　復する』
ハイネがシンを抱えて岩の陰へ場所を移す。
とその時、何を察して来たのか、ゲネポスの一箇小隊が現れた。
ハイネ
『ちぃ…、空気読めよな。　こんな時に…』
ハイネは岩を背にシンを下ろし、大剣のつかを取る。ゲネポスの数は６頭。
シンを守りながらではちょっとキツい。それに背後は岩壁。逃げ道はない。
ハイネ
『ホント、シンってば運悪　すぎ』
ゲネポスが横に展開する。両者、少しの沈黙を挟んで、ゲネポスの１頭がハイネ
に踏み込んだ時……
ガードの体勢をとっていたハイネの前に、女が降ってきて、ゲネポスの首を切断
した。

ハイネ
『』
その女は静かに地に足をつけた。
女
『お～と、失礼』
太刀と思われる武器を肩にのせ、ハイネに向き直る。ハイネ
『…』
頭の中で情報整理中…。
シンが倒れて、ゲネポスに追い詰められて、絶体絶命の時に女が降
ってきて、『
お～と、失礼』。
情報整理終了。
以上をふまえて、一言。
ハイネ
『誰？』
女
『まぁまぁ、細かいことは　気にせずに、ね？』
頭防具はつけていないので、その顔はよく見ることができた。
赤毛のポニーテールで、肩にのせている武器は白銀の刀身と蒼白の
つかの太刀。
防具は赤色。
ハイネは、この女は頭防具をしていないと思ったようだが、実際は
“ピアス”と
いう形で防具は装着されています。
ハイネ
『え～と…』
ハイネは頭上を見上げる。背後に立ちはだかる岩壁の高さは目測で
４、５０ｍ。『ど
こから降ってきたんだよ、この女』と思うハイネ。
女は太刀をさやに戻して、シンを覗き込む。

女
『どうしたの、その子?ゲ　ネポスにやられちゃった　?』
背後でゲネポスが唸り声をあげているのに、この女は完全無視。
ハイネはとりあえず、正直に回答する。
ハイネ
『ゲネポスじゃなくて、ラ　ンゴスタに…』
その時、痺れをきらせたゲネポスが女の背後から襲いかかった。
女
『邪魔』
女はとっさにポーチの中に手を突っ込み、あるものを襲ってきたゲネポスに投げ
つけた。
“投げナイフ”だ。
一度の振りで2頭のゲネポスの頭に投げナイフが命中。その直後、そのゲネポス
の頭が爆発した。
ハイネ
『』
女が投げた投げナイフは、“起爆ナイフ”という命中直後に爆発する特殊なアイ
テムだった。
残り3頭のゲネポスは一歩さがる。
女は右手の指の間に起爆ナイフをはさんでゲネポスに向き直る。
女
『さぁ、帰った帰った』
ゲネポスは女の言葉に従うように、背を向け去っていく。
女
『よしよし、あの3匹は利　口だね』
何か満足したような口調で女は起爆ナイフをポーチにしまい、かわって別のもの

を取り出した。
ハイネ
『あの～』
女
『その子、ランゴスタに刺　されたんだよね。じゃ、　これ飲んで』
女が取り出したのは麻痺毒の解毒薬だ。
女は座り込んでいるシンにそれを飲ませてやる。
その時にハイネは気づいた。その女の腕についてる黒いバックル。
それは“黒曜金”といってブラックリストハンターの証である。
ハイネ
『あなた、ブラックリスト　ハンターですか?』
女
『まぁね』
女はシンに解毒薬を飲ませ、『もう大丈夫』と言って立ち上がった。
そしてなぜ
か“秘薬”を2人分くれたのだ。
ハイネ
『い、いいんですか?』
女
『いいのいいの、気にしな　いで。そこの坊やが目を　覚ましたら、飲ませてあ
　げてね。ハンターは助け　合いが大切なのよ』
女はウインクしてそう言った。
シンはまだ意識がボーっとしているようだ。
ハイネ
『あなた、一体…』
??
『お嬢おぉーー』
ハイネの言葉をかき消して、頭上から大きな声がした。女とハイネは上を見上げ

る。
すると、そこからアイルーが降ってきてハイネの顔面に激突。
ハイネ
『んがっ』
アイルー
『あ、すまんニャ』
アイルーはハイネの頭に乗っかったままで話を進める。
女
『シャルル、見つかった？』
アイルー＝シャルル
『ニャ、あっちニャ』
シャルルと呼ばれるアイルーは、ハイネの頭の上で持っていた棒（武器）を『あっち』という方角に向けた。その方角はまぎれもなく、“奥地”への向きだった。
女
『じゃ、もう行くね。気を　つけてね～』
シャルルがハイネの頭から飛び降り、女はそれを追うように去っていった。

最後の刺客

シン
『秘薬っスゲーな。体の痛いとこ、全部治ったよ』先ほどの女のハンターが立
ち去った直後、シンは意識を取り戻した。
そしてハイネがあずかっていた秘薬を飲み、体力を回復させていた。
ハイネ
『なんだったんだ、あの人？』
フィールド上でハンター同士がばったりなんてことは別に珍しくもなんともない
。ただブラックリストハンターにばったりってのは非常に珍しいが。
シン
『さぁな』
シンは、さっきの女ハンターのことは正直あまり記憶にない。しかし、まったく
覚えていないわけでもなかった。麻痺毒に犯されながらも、少しの意識があった
シンは、自分の手をとって解毒薬を飲ませてくれた時のことをほんのわずかだが
覚えている。それが女のブラックリストハンターで、ゲネポスを撃退してくれた
ということは、後でハイネから聞いたことだが。
シン
『それにしても秘薬を2本もくれるなんてな』
シンはもらった秘薬を飲み干しそう言った。
ハイネはまだ必要ないので、ポーチにしまった。
ハイネ
『礼ぐらい、言いたかったな』

追いかけようかとも思ったが、なにぶん、彼女が向かったのは砂漠奥地。
うかつに立ち入れるエリアではない。
ハイネ
『とりあえず、オレたちはサボテンの花を探すか』
麻痺によって倒れたシンも秘薬で完全回復したので、当初の目的に戻ることにした。
２人は相談の結果、拠点に戻る道中にサボテンの花があると推測し、キャンプ地
を築いた岩山に戻ることにした。
ただ岩山があるのは砂地エリアのど真ん中。つまり、灼熱の砂地エリアを横断し
なければいけない。
ハイネ
『かんぱ～い』
白いクーラードリンクのビンを空にかざして、そう叫ぶ。
シンもそれに合わせ、２人はクーラードリンクを一気に飲み干した。
シン
『おお、スゲー。全然暑くないや』
さっきまで止まることのなかった汗が急に止まった。クーラードリンクの持続時
間は２時間半。ホットドリンクよりも少し短い。
ハイネ
『よし、行くぞ』
岩と岩の間を抜ける。そこから灼熱の砂地エリアが広がっている。
シン
『あぢ～～』
一面砂。
数時間前に夜のこの風景を見たが、それとはまた別の世界が広がっている。

降り注ぐ太陽の光と熱、また地面からはそれを反射しているような熱を感じる。
ハイネ
『こっちだ』
ここはハイネに任せよう。この暑さでは考えるのもイヤになる。
しばらく無言のまま歩いた。
ハイネ
『おい、シン。ゲネポスいんぞ』
砂地エリアなので見通しがいい。少し離れていても、遠くを確認できる。
ハイネ
『オレたちって、まだゲネポスの素材入手してないだろ』
シン
『そう言やそうだな』
ここへ来てゲネポスは数頭倒したが、剥ぎ取ってはいない。
ということで話はまとまった。
標的のゲネポスは2頭。
シン
『ハイネ、いつもみたく頼むぜ』
ハイネ
『任しとけや』
ゲネポスもこちらに気づいたようだ。
まず、先陣きってのハイネが、手前のゲネポスに大剣を大地に垂線を描くように
縦斬り。
ゲネポスは左へ回避。
そこへシンがハイネの後方から、斬撃をかわしたゲネポスに斬りかかる。双剣の
二連撃がヒット。
シン

『ハイネ』
その時、もう一方のゲネポスがシンに飛びかかった。しかし、それをも見越していたのか、ハイネがさっきの斬撃の反動を利用して、大剣を斜め上へ斬り上げた。
見事、飛びかかってきたゲネポスを空中で一刀両断。ハイネ
『おっしゃあ』
歓喜の雄叫び。
シン
『ハァ』
さっきのゲネポスに止めの突き攻撃。
ゲネポスは『アア〝』という高い鳴き声とともに、大きく後ろへぶっ飛んだ。
この手の鳥竜種との戦闘はもう手慣れた感じだ。
ハイネ
『ふぅ〜、終わったあ』妙に語尾をつり上げて、満足な声をあげる。
その後、2人は2頭のゲネポスからもらうものをもらった。
シン
↓［ゲネポスの鱗］
［ゲネポスの麻痺牙］

ハイネ
↓［ゲネポスの鱗］
［ゲネポスの皮］
ハイネ
『あ、いいな、麻痺牙』
ハイネはシンの剥ぎ取ったゲネポスの素材を見て呟いた。
シンは『え?』と声に出し、剥ぎ取った牙の素材を手に取る。
ハイネ

『麻痺牙って、いろいろな用途で使えるんだよ。武器にはもちろん。罠の調
　合素材とか、ボウガンの弾とかな』
シン
『ふ～ん』
『そんなにすごいんだ～』とでも言いたげな口調でシンが呟いた。
ま、そうなら重宝させてもらおう。シンは大事そうにそれをポーチにしまった
。
シン
『ん？』
その時、近くの岩の根元からアレが生えてるのに気づいた。
サボテンだ。
シン
『おう、ハイネ。サボテン　サボテン』
シンがその岩に走っていく。
ハイネも一瞬遅れてシンを追う。
それは小さなサボテンであったが、サボテンの花は健在だ。それも数はちょうど
３つ。シンとハイネが探している個数と同じだ。
やはり、帰途の道中にあると推測したのは間違いではなかった。
シン
『よし、任務成功。クエストクリアだ』
入手したサボテンの花は１１本。１０本はシドに頼まれた分で、もう１本はハイネの
墓参り用だ。
墓に供えるのには、少しみすぼらしいが、この際仕方がない。
後は無事に拠点のキャンプ地にたどり着くだけだ。
ハイネ
『あれだ』

ハイネはその岩にのぼってキャンプ地の方角を指で示す。
見通しがよいため、ここからでも見えるのだ。
シン
『よし、じゃ行くか』
目的地が見えてると、歩くのもそう辛くない。
クーラードリンクの持続時間にも余裕だ。
さっきのサボテンの生えてた岩からはあれだけ遠く小さく見えていた岩山も、立
ちはだかる城のように迫ってきた。
もう少し、そう思い続け、本当にもう少しとなったその時、砂漠最後の試練が2
人の前に現れた。
『うぉおお』
突然、2人の目の前から、何かが砂の中から飛び出した。
魚竜ガレオスだ。
シン
『な、なんだ』
ハイネ
『ガレオス』
飛び出したガレオスは空中で弧を描き、シンとハイネ向けと落ちてくる。
シン
『うわっ』
シンは左に、ハイネは右に回避。
ガレオスは2人の真ん中を通過し、再び砂の中へ。
シン
『おい、ハイネ今の…』ハイネ
『ああ、魚竜ガレオス。まったく、めんどくさいやつに見つかっちまった』
ハイネはとっさに大剣を構える。

シンはそれを見て、双剣を手に。
再び、ガレオスが砂の中からその姿を見せた。今度は上半身（首から上）を砂から
出し、辺りをうかがっている。
ハイネ
「ちぃ、音爆弾がないと、ガレオスとはやりづらい…」
そう思っても仕方ない。
ガレオスはやる気満々のようだ。
砂漠最終戦スタート。

最後の刺客（後書き）

シン「遊ぼうって言うと遊ぼうっていう、さよならって言うとさよならっていう、馬鹿って言うと馬鹿っていう。そして寂しくなって・・ごめんなさいって言うとごめんなさいって言う。こだまでしょうか？　いいえ」

作「私だ」

シン「お前だったのか」

作「また騙されたな」

シン「全く気付かなかった」

作「暇を持て余した」

シン「ハンターの」

作「遊び」

チートアイルー（前書き）

私は神だ

チートアイルー

「ギャハハハハ！！！　死ねゴラァ！！」

砂から頭と背鰭を出して突っ込んで来るガレオスにハイネが大剣で斬りかかる。

ガレオスはハイネが斬りに来るのを見て砂中に逃げ込むが……、遅すぎる。

行きよいが乗った大剣が砂中に埋まり、ハイネの手には肉を斬り、骨を砕く感触が大剣を通じて感じていた。

「チッ……。何だぁ？　この手応えの無さは。これなら家でオナニーしてる方が、よっぽど時間を有効活用出来るじゃねぇか」

ハイネはガレオスの弱さと知能の低さにもどかしさを感じていた。ハイネは初めて見る敵に少しは楽しみを覚えていたのだが、手応えが無さすぎたのだ。

大剣を砂中から出して刃に付着した血を見て、ハイネは口の形を歪めて唇を舌で舐める。

そんなハイネの耳に雑音が聞こえる。

「糞が！！！」

シンはガレオスに苦戦をしていた。シンの双剣は手数で勝負する武器で扱いやすい為に刃が短い。
だから砂中に逃げられたら、ハイネの様に攻撃出来ないのだ。

「ちょこまかと鬱陶しい奴だな。早く出て来い。ミンチにしてやんよ」

シンはいつもと違い、攻撃が出来なくてイライラしていた。ハイネはそんなシンの様子を見て、鼻で笑っていた。

「ハッ！　こんなウジ虫以下――。いや、ウジ虫未満のカスも満足に殺せないとは、やっぱりアイツは糞未満だな」

シンが狩りに集中していて聞こえないとはいえ、言いたい放題である。

「ハイネ！ちょっと手伝ってくれ！！」

シンはハイネに声を掛けるが――

「スマン！今は血抜きと剥ぎ取りで忙しいから無理だ！」

――ハイネは砂中から死んだガレオスを掘り出して、血抜きと剥ぎ取りの途中に血が付着した顔で満面の笑みでシンの頼みを断った。鬼だ。血が付着している為、鬼らしさが倍増している。

シンは断られるとは思ってなかったのか、ハイネを見ながら鳩が

豆鉄砲を喰らった顔をしながら固まっている。

ハイネは血抜きと剥ぎ取りをしながら、シンの顔を横目で見て――アホみたいな顔しながら、こっち見んな――と思っている。本当にキャラ崩壊しまくりである。

次の瞬間、固まっているシンの近くの砂が盛り上がった。ガレオスが砂から飛び出して、シンに向かってブレスを吐いたのだ。

「ガハッ！！」

後ろからブレスが直撃したシンは、自分の肺から酸素が抜けきる程の衝撃を感じた。

それでもハイネは動じずに吹き飛ばされたシンを見て――プッ――と吹き出していた。本当に何なのこの人。

シンは立ち上がり、血の味を口の中から感じた為、唾と一緒に血を吐いた。そして、自分が攻撃されても助けないハイネを見て叫んだ。

「ハイネェ！ナズェミデルンディス！？」

シンはハイネに叫んだ後、双剣を構えながら地上に居るガレオス

に突っ込んだ
。

ガレオスは真っ正面から突っ込んで来るシンに、もう一度ブレスを吐いたがシンはそれを避けて、ガレオスに双剣で一太刀を入れる。

一太刀を入れられたら痛みからガレオスが――ガアアア！！――と叫び、シンを睨み付けて尻尾でシンを薙ぎ跳ばした。

しかし、シンは尻尾で薙ぎ飛ばされる瞬間にタイミングよくバックステップをして衝撃を殺し、受け身を取って立ち上がった。

シンは立ち上がった時にハイネの方をチラッと見たが、ハイネはこちらをボーと見てるだけだった。

「オンドゥルルラギッタンディスカー！？」

シンはハイネに向かって再度叫んだ。その間に今度はガレオスがシンに突っ込んで来たが、シンはそれを避けて、またガレオスに攻撃をした。

「アンダドーゥレハ！！　アカマジャナカッタンデェ……ウェ！」

シンがハイネに向かって叫んでいる間に、ガレオスに体当たりで吹き飛ばされる。さっきと違い、受け身を取れないで飛ばされたシンは痛みを抑えながら、両

手に力を入れながら立ち上がろうとする。

「ゾンナァハァヘェ……ソンナァハァウェェ！　ンナヅェダァ！　ンナヅェダァ！　ヅェダァ！」

シンが頭がおかしくなったみたいに叫んでいるのを見て、ハイネはそろそろ助けてやるかと思い、ガレオスに向かって走っている途中で何かがハイネとガレオスの間に飛び出して来た。

「ニャー！！」

ハイネとガレオスの間に飛び出して来たのは、オトモハンターのゼノンが連れているチートアイルーのココだ。

しかし、ハイネは折角シンを手伝ってやろうと思ったのを邪魔されてキレてしまった。

「邪魔だ糞猫が！！」

――ドゴォ！！

何を思ったのか、ハイネは自分のガレオスの間に立っているココに、走っている勢いと力の全てを右足に込めてココを蹴り飛ばした。

「ニ〝ャ！？」

ハイネに蹴り飛ばされたココは曲線を描きながら飛んでいる。
そして、ハイネはシンに向かってゆっくり歩いているガレオスの首に大剣を振り抜いた。

――メキメキッ！ボキッ！グチャ！！

砂中越しとは違う、直に感じる肉を斬る感触と骨を砕く感触にハイネはエクスタシーを感じそうになっていた。

「あはぁ！！！　最っ高！！！　快っ感！！！！　ヤバイはもう気持ち良すぎてパンツがビショビショだわ！」

シンはそんな事を言っているハイネを見てドン引きである。口を開けながら口の端がヒクヒク動いている。逆にハイネはそんなシンを見て、怖くてチビリそうにでもなったか？と思っている。

しかし、ハイネはシンに声を掛けずに首を切断されたガレオスの剥ぎ取りをしようとする。

――刹那！殺気を後ろから感じたハイネは大剣を盾にして振り返る。

――ドゴォ！！

大剣から伝わる尋常では無い衝撃にハイネは吹き飛ばした。

「何で俺を蹴ったんだ小僧？　俺が納得出来る理由で１０秒以内に答えろ……」

ハイネを吹き飛ばしたのは、さっきハイネに蹴り飛ばされたチートアイルーのココである。もう一度言おう『チート』アイルーのココである。つーか怒りのあまり、アイルーのアイデンティティである語尾を忘れている。

普通のアイルーならハイネの勢いの乗った蹴りで今頃なら気絶してるか、地面に逃げているが、チートアイルーであるココの打たれ強さは異常である。

「何すんだぁ！？　糞猫がぁ！！」

ハイネは自分を吹き飛ばしたココに向かって罵声を跳ばして、立ち上がり大剣を構えようとするが、違和感を覚えて大剣の方をチラリと見る。

「――なっ！？」

なんと、自分の武器の大剣がへし折れていたのだ。ハイネは折れた大剣を見て冷や汗を流す。

「（やべぇやべぇよ。調子乗ってたとはいえ、チートアイルーに喧嘩売っちまっ

たよ……）」

ハイネは今度は快感ではなく、恐怖でパンツがビショビショになりそうだった
。

「何か言えや……、マジで殺すぞ？」

ココはドスを利かした声で詰め寄る。ハイネは小便ではなく大便も漏らす勢い
で震えている。さながら産まれたての小鹿だ。

ハイネの相棒（仮）のシンは……。
（あっ、明後日はスーパーで卵の特売だ）
何て思っている。駄目だ此奴達。早くなんとかしないと……。

「うおおおおお！！！！」

ハイネは意を決して、折れた大剣を後ろに投げ捨ててココに向かって全力で走
る。それに対してココは武器のハンマーを構える。見た目は棒の先に小さな樽が
付いた、可愛らしい外見だが、チートアイルーであるココに掛かれば“鬼に金棒
”……いや、“ゴジラに原子力”と言った方がいいかもしれない。

ココとの距離がある程度近くなった時にハイネはジャンプをする。そして、空
中で一回転し身体を丸めるようにして膝から着地する。助走によって勢いが付い

ているためスライディングをしている感じだ。
ココとの距離が1メートルになった瞬間にハイネはデコと手の平を地面に擦り付けてこう叫んだ。
「すんまっせぇぇぇぇぇん!!!!!!!!」
そう最終奥義“ＤＯＧＥＺＡ!”である。
「マタタビでも金玉でも渡すんで、命だけは助けて下さい!!」
ココはハイネの“ＤＯＧＥＺＡ!”を見て、口を大きく歪めてこう言い張らった。
「俺が死ぬまで、お前は俺のパシりな」
ハイネはマジで殺されると思っていた為にその返答を聞いてキョトンとしていた。
「何やぁ？　返事が無いなぁ。じゃあ、金玉一つ貰おうか……」
ハイネはそれを耳にした瞬間に「宜しくお願いします!」と叫んだ。
それに対してシンは（明明後日は鶏肉の特売だから、明明後日の晩飯は親子丼だな）と考えていた。
今日も世界は平和である。
「ゼノンの兄貴、ただいま帰りやした」

ココがゼノンに一礼を近づく、それに習ってハイネは「ゼノンの大兄貴、ただいま帰りやした」と言う。まるで893である。

シンは相変わらずスーパーの特売と晩飯の事ばかり考えている。こっちは主婦である。

「ご苦労」とゼノンがシン達に向かって声をかける。

話を聞くと、ココを送り込んだのはゼノンだったようだ。必要無かったが。

シンとガレオスの戦いを見ていたゼノンが、ココに援護してやれと送り込んでくれたようだ。

結局は援護と言うより、ハイネに恐怖と、この世の厳しさを植え込んだだけである。マジで何がしたかったのこの人。

「それよりサボテンの花は、ちゃんと採ってきたんだろうな?」

そう言うゼノンの前にシンとハイネは、サボテンの花を並べて見せる。

「あん? 1本多くないか? お前達二人は数も数えられない位に痴呆でも進んでるのか? あぁん!?』

「すんません、大兄貴。それは自分の墓参り様の分です。」

それを聞いたゼノンは並べていた十一本目のサボテンの花を取り、ハイネの目の前に出した。
次の瞬間、ゼノンは花を握り潰した。

「勝手な事やってんじゃねぇよ。お前達はノルマの分だけ働いたらいいんだよ。そんなに自分の墓参り用の花が欲しいなら、墓に向かって自分の尻の菊の花でも供えてな」

ハイネは既に涙目である。つーか泣いている。

「つーか、墓参りの時間ってあんの？」

シンはこの空気を読まずにゼノンに質問する。しかも、タメ口だ。凄い根性だ。もしくは天性の馬鹿である。

「それは大丈夫ニャ。さっきロロに連絡して、ヒメ姐に伝えてもらったからニャ」

シンの質問はココが答える。ココはアイルーのアイデンティティである、語尾に“ニャ”を付けて返事をした。

“ヒメ姐”とはゼノンの雇っているアイルーの首領（ドン）だ。
“ロロ”は“ココ”の電波仲間である。
ココは電波で家に居る電波仲間の“ロロ”に伝えたのだ。

「へぇ～、そうなんすか」と、質問した本人であるシンは棒読みで、しかも鼻をホジリながら返事をする。コイツは根性があるのではなく、只の馬鹿であるのが分かった瞬間である。

涙目のハイネがココに質問する。

「兄貴。シドはなんて言ってたんですか？」

「“ＮＯ　Ｐｒｏｂｌｅｍ”だと言っていたニャ」

ココは質問をしてきたハイネの方を見ずにゼノンに向かって言った。

とりあえずはＯＫのようだ。

「そう言えば、ヒメ姐が鉄線が無くなりかけてるから、買ってきてほしいって言ってたニャ」

「そうか。じゃあ行くぞ野郎共！」

こうしてハイネの墓参りの後に買い物の予定が入ったので、さっさと墓参りに行くのだった。

だが、テントの片付けをしているのは涙目のハイネのみだ。

ゼノンとココは手伝う気が零だが、シンはハイネを置いて、立ちションに行ったのだ。

――こんなメンバーで大丈夫か？――

――大丈夫だ。問題ない――

クモと鳳凰

ヴェステンフルス一族、またの名を鳳凰の一族と呼ばれた彼らは、図抜けた身体
能力と灼眼を有し、あらゆる戦闘に長けた部族であった。

※灼眼というのは、以前に話した“火の目”のことである。鳳凰の一族と呼ばれ
た彼らは、感情が高まるとその瞳が火色に変化し、その瞬間、個々に独特の能力（
スキル）を得るのだ。

しかし、3年前、砂漠奥地に居住していた彼らの集落“クモ”という盗賊団
が攻め込んだ。そして女子供一人残らず皆殺しにした。もちろん一族の戦士も戦
った。
しかし“クモ”は全員がブラックリストハンターで構成されている超一流の猛
者集団。
いかにヴェステンフルス一族であっても太刀打ちすらできなかった。
地獄の夜が終わり、ある少年だけが再び朝日を見た。そして生き残りが自分だけ
だと知った。

ハイネ
『その少年ってのが、オレってわけよ』
ここは気球の中。
今は砂漠を飛び立ちハイネの一族が眠る一族の墓に向かっていると

ころである
。
その間にハイネが、ヴェステンフルス一族の滅亡について少し語ってくれた。
ハイネ
『夜が明けて気づいたことがもう一つあんだ』
シン
『…』
シンはじっと聞いている。ゼノンは空を見上げ、アイルーのココは鉄の棒にぶらさがりながら泣いている。ハイネ
『同志の瞳が一つ残らず奪　われてた』
シン
『…』
ハイネ
『その時、一瞬で悟ったよ　。連中の目的は“火の目　”だったってことにな』
紅く染まった“火の目”は世界七大宝玉の一つに数えられ、一対で３００万ｚはくだらない値打ちになる。
ハイネ
『その後、一族と親交のあった美食ハンターのシドと出会って、いろいろと
世話を焼いてくれたんだ』
当時、ヴェステンフルス一族はその実力もあって数多くある狩人一族の中でもか
なり名の通った一族であった。
ゆえに、盗賊団ごときに滅ぼされたということで、世に大きな衝撃を与えた。
この事件によって、当時発足したての“クモ”は、世に大きく名を

知らしめるこ
ととなった。
シン
『幻影旅団…通称“クモ”。一体何なんだ?』
“クモ”という名は通称で、正確には“幻影旅団”という。
あの事件は“鳳凰の一族”と呼ばれたヴェステンフルス一族が“クモ”と呼ば
れる幻影旅団に滅ぼされたということで――
“クモに喰われた鳳凰”と、後にそう呼ばれるようになった。
シン
『ちょっと聞きにくいんだけど…、やっぱりハイネも復讐とか考えてる?』
ハイネ
『さぁ、どうだろうな。今となっては、そんなこと考えてないって言えるけ
ど、やつらを目の前にし たらどうなるか…』
さっきも言ったとおり、クモはメンバー全員がブラックリストハンターだ。
彼らに復讐の念を抱く者は星の数ほどいるが、それがかなわないのが現状だ。
そのメンバーの中には、以前シンが密林で遭遇した死神ラウ・ル・クルーゼも含
まれていると言われている。
ゼノン
『火の目の小僧、もうそろそろだぞ』
ゼノンの一言で、ハイネは気球の下を見る。
そこは今までのようなだだっ広い砂地ではなく、岩が入り組んだ迷路のような場
所だった。
ここもれっきとした砂漠。砂漠奥地だ。

ゼノン
『確か、ヴェステンフルス　の墓は立ち入り禁止だったはずだが』
あの事件が起きて以来、ギルドクロノス支部によって立ち入りが禁止されている
のだ。
ハイネ
『今回だけは勘弁してもらいます』
気球は広場になっているところに着陸する。
この辺りもハイネの脳裏にはしっかりと記憶されている場所だ。
ハイネ
『あっちの小道を抜けたらすぐだ』
ハイネたちは気球から降りて、辺りを見回す。
ゼノン
『小僧、これを持っていけ』
そう言って歩きだそうとしていたハイネに、ゼノンがペットボトルのようなもの
にいけた青い花を渡した。ハイネ
『こ、これオアシス草じゃないですか。どうしたんですか、これ?』
ゼノン
『いいから、持っていけ』
オアシス草、砂漠全域に数えるほどしかないオアシスの限られた場所にしか生息しない貴重な植物だ。市場にもほとんど出回らない幻
のアイテム。
ハイネ
『あ、ありがとうございます』
ハイネが供えようと思っていたサボテンの花なんかとは比べ物にならない。
ハイネはその青い花を大切に受け取る。
シン

『じゃ、行きましょう』
ハイネが先んじて歩きだし、シンがそれに続く。
しかし、シンの呼び掛けにも応じず、ゼノンは気球のカゴから出ようとはしない
。
ハイネ
『どうしたんスか？』
ゼノン
『…』
ハイネとシンは振り返ってゼノンに問う。
ゼノンは2人から目を反らし、視線をココに向けた。ゼノン
『この辺りには狂暴なモン　スターが多く生息してい　る。なので気球を見てい
　ないといかん。ワシはこ　こで祈りをささげることにする』
ゼノンはそう呟いて、『ワシの代わりにコイツを連れていってくれ』と言ってコ
コを投げた。
ココ
『ニャ？』
ゼノン
『神聖な場所だ。無礼をはたらくなよ』
その後、シンとハイネはゼノンにも来てもらうよう説得してみたが、ゼノンは首
を縦には振らなかった。
結局、シン、ハイネ、ココで参拝することになった。シン
『この先？』
先ほど、ゼノンが言っていたとおり、ヴェステンフルス一族の元居住区は現在立
ち入りが禁止されている。シンたちはその柵と注意書の書かれた看板の前まで来

ていた。
ハイネ
『そうだ』
3人は金網をよじのぼって、それを乗り越えた。
シン
『ここが…』
なんとも、金網を越えてからは、岩石の迷宮から古代の遺跡へと景色が一変した
。
木造や石造りの家々が建ち並び、たくさんの石像もうかがい知れる。
ただ、目に
つく物はことごとく破壊されている。
そういった観点から、この集落は事件が起きた当時のままだということが推測で
きた。
ココ
『ここがオレンジのお兄ちゃんの村ニャ?』
ハイネ
『ああ…。ひでぇモンだろ?』
ハイネがこの風景を目にしたのは2度目。最初はハイネが生き残った事件後の
朝。2度目が今回だ。
何一つ変わってない。
当然と言えば当然なのだが、ハイネは妙に腹の辺りが熱くなった。
変わっていると言えば、一つだけ。
亡きヴェステンフルス一族を弔うため、ギルドによって集落の中心に慰霊碑が建
てられた。
亡くなった一族の人の骨は皆ここに納められている。シン
『ハイネ、あれ（慰霊碑）が…』

ハイネ
『そ。慰霊碑だけど、オレにとっちゃ墓も同然だ』
近くで見るとそれなりに大きい慰霊碑。
ハイネはゼノンからもらったオアシス草と、さっき採ったサボテンの花を供えた
。
あえて自分で手に入れたサボテンの花を供えたということは、『オレはハンター
になりました』ということを報告したかったのかもしれない。
そうして、ハイネ、シン、ついでにココは、慰霊碑の前で静かに黙祷をささげた
。
同じ頃、気球の上ではゼノンもヴェステンフルス一族に冥福を祈っていた。

クモと鳳凰（後書き）

作「俺さ寝てないんだよね」

シン「あー、大変だなでもちゃんと更新しないとさ」

作「俺さホント寝てないんだよ」

シン「そっか、でもちゃんと必殺技考えないとさ」

作「一週間で5時間くらいしか寝てないな」

シン「まあ、大変だよな」

作「今度いつ寝れるか不安だわ・・・」

登場人物　裏設定1

シン・アスカ　「頭で感じるんじゃない股間で感じるんだ」

武器：双剣

年齢：17歳

嫌いな物：白桃

備考　ポッケ村出身の少年、父は伝説のハンターで白銀の竜王と呼ばれていた。
休日は日曜大工とアルトサックスの演奏をしている。
鬼人化は使えるが1分しか持たない、実力はいまいちでハンターの知識も乏しい。
行動力と判断力に長け、並外れた常識の持ち主、性癖はバイ。
リンゴとはちみつが大好きなうお座生まれのハンター。

技一覧

真刃斬り（マッハ）：剣を2本クロスさせて突進する。

怒雷武斬り（ドライヴ）：少し飛び上がって敵の頭に剣を突き刺す。ハイネ直伝。

超斬り（スーパー）：衝撃波を出す攻撃、あたらない。

覇威羽亜斬り（ハイパー）：両手の剣から衝撃波をだす。難しいしさらにあたらない。

潤虎斬り（ウルトラ）：四方八方に真空刃を飛ばす。使用頻度は低い。

針剣斬（ハリケーン）：回転して斬るそれだけ。

砕苦論斬（サイクロン）：さらに回転して斬る。目が回ってよれよれになったりも……。

兎流音畏弩斬（トルネード）：メッチャ回る。回り過ぎて輪姦る。回る回るくるくるリン。

ハイネ・ヴェスティンフルフ　「カルピスを原液飲んでみたい」

武器：大剣

好きな物：こんにゃく

嫌いな物：黄桃

備考　戦闘に長けた一族、ヴェスティンフルフ一族の末裔。
ブラックリストハンターの兄を憎みそして敬愛している。
実力はシンに毛が生えた程度、ハンターの基本知識は得ている模様、
休日はトレーニングと歴史書の収集をしている。
家で猫を４匹飼っているがハンター試験の日に死亡。

実は男装した少女

再会

ここヴェステンフルス一族の聖地を“鳳凰の墓”と呼ぶ。

ゼノン
『小僧、もういいのか』
気球でハイネたちの帰りを待っていたゼノンは、予想より早く帰ってきたハイネに問いかけた。

ハイネ
『はい、もう十分です』
満面の笑み…とは言わないものの、満足したような笑顔でハイネが回答する。
その後にシンとシンの頭にくっついたココが続く。
現在ハイネたちは一族の墓参りからの帰ってきたところにある。

ゼノン
『では、行くぞ』
ハイネは多少心残りがありそうな表情をしていたが、それが何なのかも解決する方法もわからない。
もしかしてこれが“クモ”に対する怒りなのか。そう思うと自分が恐くなる。
一向は、再び気球に乗り込み、砂漠の村クロノスへと向かう。

シン
『へぇ～、ここがクロノス　村』

ココ
『久しぶりニャ～』
鳳凰の墓より気球で数分、砂漠の村クロノスへと到着した。

このクロノス村は5つの村の中でも比較的新しいもので、あらゆる技術が集まる
村として有名である。イメージとしては工場が集まる工業地帯という感じ。
ハイネ
『ハァ～』
いつもと違ってテンション低めのハイネ。
シンたちはクロノス出身であるハイネが『うわ～、久しぶりだな～』とか言うと
思っていたのだが、珍しく暗い感じだ。まだ墓参りのことを引きずっているのか
？
飛空場（※飛行場）に気球を預け、クロノス村の散策を始める。と言っても、ゼノ
ンもココももちろんハイネもこのクロノスには来た経験がある。初めてなのはシ
ンだけだ。
ゼノン
『ここからは自由行動だ。　3時間後に飛空場の前に　集まれ』
ゼノンは自由行動を宣言した。彼なりにハイネに気をつかった判断であった。
その後、ゼノンはココとともに頼まれていた部品を購入しに行った。
残ったシンとハイネ、ハイネに案内させることになったのは、この村の出身とし
て自然な流れであろう。なぜか気乗りしていないようだが。
シン
『とりあえず、案内してく　れよ。ハイネ』
ハイネ
『あ、うん…』
やっぱり何かおかしい。

シン
『昼飯まだだし、何か食べ　れるところへ…』
ハイネ
『え…』
そんな露骨そうにイヤな顔しなくても。何かまずいこと言ったっけ?
ハイネはイヤそうに、ホントイヤそうにシンをある一軒の食堂に案内した。
工業地帯からは離れ、民家の中にたたずむその食堂は、『なつかしさ』を漂わす
雰囲気のレトロなお店。のれんには『猫まんま』と書かれている。
店の名前らしい。
ハイネ
『シン、このドアを開けた　ら、自由時間がすべてつ　ぶれることになるぞ。そ
　れでもいいのか?』
なんだ?おどしのつもりか?
シン
『ん、別にいいけど』
ハイネ
『…』
そんな分かりやすい顔すんなよ。
どうやらハイネは、この食堂に行きたくはないのだが何らかの理由で行かなければならない、という立場にあるようだ。
ハイネも腹をくくったようで、食堂の戸を開いた。
『いらっしゃい』
食堂に入れば当然のセリフが飛んできた。
セリフを言ったのは女性。俗に“看板娘”と呼ばれる女の子である。
看板娘の女の子

『…ハイネ』
戸を開けた青年(ハイネ)を一瞬、目を疑うように体をストップさせ、小さな声で
問いかけた。
ハイネ
『た、ただいま…』
おもいっきり目を反らして、ハイネも小さな声で呟いた。
『はは～ん。面白いことになりそうな予感』とシンは心の中で悪魔の微笑みをし
ていた。
食堂のおばちゃん
『何やってんだい、サーシャ。早くお客さんを…って、ハイネェ』
これまた食堂のおばちゃんも分かりやすい反応を。
さて、ハイネ。どういうことかきっちりバッチリ説明願おうか。
食堂のおばちゃん
『ほれ、何固まってんだよ。愛しの彼だろ』
サーシャと呼ばれた看板娘の女の子を、おばちゃんはお盆でポンとたたく。
少し戸惑っているようだが、食堂の戸を開けたオレンジの髪の青年をハイネと確
認でき、不機嫌な目付きになった。
肝心のハイネは照れているのか、目を反らしたまま動こうとしない。
サーシャはハイネに近づいて、ハイネの頭の上に手を置いた。
サーシャ
『ちょっと来て。「おかえり」はそれからよ』
サーシャはハイネの頭（髪）わしづかみにして，店の奥へと引きずっていった。
ハイネ
『いたいいたい、サーシャ』

食堂のおばちゃん
『おやおや、こりゃ長くな　りそうだね』
シン
『…』
説明を願ってみたものの、なんの解釈もないまま、ハイネは拉致られてしまった
。
食堂のおばちゃん
『すまないねぇ。アンタ、　ハイネの連れだろ。わび　と言っちゃなんだけど、
　飯サービスさせてもらう　よ』
おばちゃんはシンをカウンター席に座らせ、メニュー表を提示する。
シンが頼んだものをおばちゃんは手早く仕上げ、シンの前に並べる。
食堂のおばちゃん
『アンタ、名前は何ていう　んだい？』
シン
『シンです。シン・アスカ　』
飯を食べるシンの前でおばちゃんがたずねる。
シン
『ハイネとはギルドで一緒　になって』
食堂のおばちゃん
『ほぉ、そうかい。アイツ　もとうとうハンターにな　っちまったか。サーシャ
　が怒るのも無理ないね』シン
『あの、サーシャさんとハ　イネって…？』
今まで思っていた疑問をぶつけた。
食堂のおばちゃん
『まぁ、いろいろとあって　ね。話すと長くなるよ』話はどれだけ長くなっても
かまわない。なんせ後3時間暇なんだし。シンは料理を食べながら

おばちゃんの
話を聞いた。
いくつか驚いた点はあったが、こういうことらしい。
おばちゃんの名前はエマというらしい。
そして驚いた点というのが、この食堂『猫まんま』はシドの実家だということ。
シドの経営するアイルーの巣窟ストレイキャッツ（これを読んでくださる読者の方々には、何から盗作かご存知のことと思います）は、この猫まんまの姉妹店なのだ。
シドとエマは姉弟という関係。
サーシャはシドやエマから見て姪という関係。サーシャの両親はハンターであったが１０年くらい前に殉職。そのサーシャを引き取ったのがエマだ。
そして３年前、あの忌まわしい事件が起きた。盗賊団“クモ”によるヴェステンフルス一族の殲滅だ。そして、その唯一の生き残りであるハイネをシドは救い、この猫まんまに連れてきたのだ。
それがハイネとサーシャの出会いだった。
同じ屋根の下で生活するようになった男と女がくっつくのは、リア充的に時間の問題だった。同じ境遇のハイネとサーシャは、誰よりも互いの気持ちをわかりたえた。
ただ２人にも気持ちのズレはあった。
サーシャは自分の両親を奪ったハンターというのが何よりも嫌いだった。
逆にハイネは、誇り高き鳳凰の一族の生き残りとして自分がハンターになるのは

宿命づけられたものだと思っていた。
それから2年後、つまり今から1年前。シドがティーズへ移住することになった
。ハンターを目指すハイネは、当然シドに着いていくつもりだった。ただそうし
た場合、サーシャとは別れることになる。
どちらかを取るなら、どちらかは捨てなければならない。ハイネは選択を迫られ
た。サーシャと別れることも、ハンターを諦めることも、当時のハイネにとって
はあり得ない選択だった。そんな中、ハイネは苦渋の結果、ハンターになること
を選んだ。サーシャのことを諦めたわけではない…つもりだった。
しかし、サーシャ自身はどう思ったか。その後、ハイネとシドはエマのみ別れを告げ、サーシ
ャには何も言わずにこのクロノスを去った。
あれから1年。現在ハイネはハンターとなり、このクロノスに帰ってきた。
シン
『おもいっきり自分勝手で　すね、ハイネ』
エマ
『そうだね。まぁ、アイツ　も考えた上でのことだっ　たんだろけどさ』
店の奥のある部屋に連れ込まれたハイネ。サーシャはつかんでいたハイネを突飛
ばし、ハイネと向き合う。ハイネ
『…サーシャ？』

思い出の場所

店の奥のある真っ暗な部屋に連れ込まれたハイネ。当然、ハイネはこの部屋に見
覚えがある。なんせここに2年間も暮らしていたんだから。
そうしてサーシャはわしづかみにしていたハイネを突飛ばし、壁まで迫ってハイ
ネと向き合う。顔がかなり接近した。部屋が暗いのでこのくらい近づかないと、
互いの顔が見えない。電気をつければいいじゃないか、と言われればそれまでな
のだが、空気的に明かりをつける雰囲気ではなかった。
ハイネ
『…サーシャ？』
ハイネがサーシャの顔を覗き込む。
向き合っているとはいえ、サーシャの顔は前髪で半分くらい隠れていた。
サーシャ
『なんのつもりよ…。今ごろ帰ってきて、「ただいま」なんて…』
覗き込もうとしたハイネが引っ込み、瞬間に言葉を失う。
ハイネ
『っ…』
背丈はハイネの方が高い。背筋を伸ばしたままのハイネからは、顔を落としたサ
ーシャの表情はうかがえない。
ハイネ
『ごめん…』
とりあえず謝る。それ以外に口にできる言葉はなかった。

ただ、何に対しての『ごめん』なのか、ハイネ自身もよくわかっていなかった。

サーシャ

『謝れって言ってるんじゃ　ない』

なんとか腹をしぼって出したような小さな声に、ハイネは謝罪以外の何を言えばいいのだろうか。

ハイネ

『…ハンターになった、何　も言わずに出ていった、　この1年一通の連絡もし　なかった…。謝んなきゃ　ならないことは、山ほど　ある…』

ハイネは言葉にならない言葉をつむいで言う。

ハイネ

『自分でも何してんだろう　って思ってた。でも、い　ざ一歩踏み出そうとする　と、以前の間違いが頭を　よぎって…』

サーシャ

『…』

ハイネも自分で何を言っているのかよくわからなくなっていた。これじゃまるで…

サーシャ

『…いいわけ』

まさに核心をついた一言。ハイネはまた言葉を失う。サーシャがあれだけ嫌っていたハンターを目指し、さらに一言の別れも告げずに村を去り、あげくのはてには1年間も音信不通。すでに弁解の余地はない。

サーシャ

『わかってた…』

ハイネ
『え?』
相変わらず小さい声だが、その呟きはしっかりと聞き取れた。
サーシャ
『私がどれだけハンターに　ならないでって言っても　、ハイネはハンターにな
るって』
ハイネは鳳凰の一族の生き残りとしてハンターを目指す、サーシャも事情はわか
っていた。そればかりはどうしようもないことだと。サーシャ
『でもなんで急にいなくな　るのよ』
声のボリュームが一気に上昇した。てか怒鳴り声。
気圧されて後退りしかけたハイネだが、後ろは壁だ。もう逃げられないというこ
となのだろうか。
ハイネ
『…』
どう伝えればいいのかわからなかった、というのが事実だ。
ハンターになりたかったハイネと、ハンターになってほしくなかったサーシャ。
そんなハイネが、当時の思いをどうやってサーシャに打ち明ければよいのかわか
らなかった。その結果が今の状況だ。
サーシャがお怒りになっているのもそれだ。
ハイネ
『サーシャに軽蔑されんの　が、怖かったんだよ』
これもハイネ自身の勝手な都合だ。
サーシャ
『軽蔑って…』
まぁ、ハンターが嫌いなサーシャにその思いを伝えれば、嫌われる。

そう思うと
伝えられなかった。
今となっては、サーシャはハイネがハンターになったことを認めてくれているが
、当時はハイネも悩んだことだろう。
サーシャ
『軽蔑なんて、しないわよ』
そう言われると、サーシャも怒れなくなる。そういう性格な子なのだ。
ハイネ
『ホント、ごめん』
サーシャ
『…』
さっき、謝るなと言われたのに、また謝った。
サーシャ
『ハイネは、これからもテ　ィーズのシドのとこでハ　ンター続けるのよね?』
今までの話から、ハイネはこのクロノスに本当の意味で帰ってきたのではない。
ハイネ
『…うん』
サーシャの気持ちを察してか、ハイネもビミョーな声だ。
サーシャは一歩ハイネに近づいて、自分の額をハイネの胸にかるくあてた。
サーシャ
『だったら…、私も連れて　って…』

2時間、シンはエマからハイネとサーシャの過去を聞き、ハイネはサーシャに怒

られていた。
シン
『お、ハイネ』
ハイネとサーシャの再会から2時間、ハイネたちは2人そろってサーシャに連れ
込まれた店の奥から戻ってきた。
ハイネは相変わらず作り笑い的な笑顔をうかべていたが、サーシャはうつむいて
いる。
エマ
『おや、サーシャ。もういいのかい?』
エマがいじわるく問いかける。
サーシャ
『言いたいことはいっぱいあるけど、言わなきゃいけないことは言ったから
…』
ハイネはシンにサーシャとのことを報告し、エマに向き直る。
ハイネ
『バアちゃんもごめん』
ハイネがエマに頭をさげる。
エマ
『あたしに謝ることはないだろ。あの日、アンタはシドと一緒にあたしのと
ころへ来たんだから』
そう、ハイネはエマにのみ別れを告げていた。
サーシャ
『さっきはごめんなさいね。ハイネ連れ出して』
サーシャがシンの前まで来て、丁寧にお辞儀した。
サーシャ
『私はサーシャ・シファ』シン

『あ、いえ、こちらこそ。　シン・アスカです』
椅子に座っていたシンは立ち上がってサーシャに向き直る。
至近距離で見ると案外小柄な子だ。黒に近い藍色の髪を頭巾の後ろで束ね、瞳は
澄んだグリーン。やけにエプロンが似合う。年齢は１８歳ということだ。
シン的には、どうみても自分より年上には見えなかった。
サーシャ
『ねぇ、いつまでここにい　られんのよ?』
ハイネ
『後１時間ぐらい』
ハイネたちがクロノスに滞在できるのは、ゼノンが遣いの品を買い終えるまで。
サーシャやエマは、今日１日ぐらいは泊まっていくのだと思っていた。
エマ
『そう…、そんなに早くに　行くのかい』
少々残念に思うエマ。
サーシャはそれ以上に残念に思っているだろう。言葉には出していないが。
エマ
『サーシャ。今日はもう店　はいいから、３人でぶら　ついてきな』
時刻は夕方過ぎ。
食堂としてはこの時間帯から忙しくなるはずだが、エマはサーシャに外出を許可
した。
サーシャ
『いいの?』
エマ
『久しぶりにハイネに会っ　たんだからね。こうでも　しないと、

後で泣かれて
　も困るしね』
サーシャ
『…』
今のエマの発言に対し言いたいことはいっぱいあるが、ここは気をつかってくれ
たエマに感謝。
サーシャはエプロンと頭巾を脱いで準備完了。
さてと、残り1時間弱。
3人は店を出た。
シン
『あの～、オレ明らかに邪　魔だよね？』
1年ぶりに再会した2人と、その連れ。
その連れという立場のシンは、立場的に構図的にシチュエーション的にあっては
ならない存在な気がする。ハイネ
『大丈夫大丈夫』
サーシャ
『うん、問題ない』
まぁ、2人がそう言ってくれるならいいか。
ハイネとサーシャは自然と歩き出し、シンはそれに続く。どうやら、2人とも行
くところは決まっているらしい。
シン
『えっと、どこ行くの？』ハイネ
『時間もそんなねぇからな　。オレとサーシャの思い　出の場所かな？』
サーシャ
『何、その恥ずかしい言い　方？』
否定はしないんですね。そう思って、シンは心の中で苦笑いする。

歩いて数分。
“工業”というイメージがあるこのクロノス村だが、この場所は公園の丘のようになっている。
丘の上には木が一本。
シン
『…』
ここが思い出の場所？ありきたり過ぎだろ。あくまで口には出さない。
丘の上に立つと、夕日が砂の海に沈む光景が。なんとも美しいが、やっぱりありきたり。
ハイネ
『懐かしいな。当分は見れ　ないと思ってたのに』
サーシャ
『ま、あの夕日に免じて、　今回の件は許してあげる　わ』
シン
『…』
やっぱり邪魔だよな、オレ。

『おやおや、少年少女諸君　。青春真っ只中だね』
突然、隣の木の上から声がした。
3人は驚いて木を見上げると、そこには、どこかで見たような赤毛のポニーテールが。
ハイネ
『あ、あなた…』
赤毛の女
『よっ、半日ぶりだね』
枝に座っているそのポニーテールは、半日前に砂漠で助けてもらっ

た、あの女の
ブラックリストハンターであった。

登場人物　裏設定２

アウル・ニーダ　「俺ってピュア？」

性：男

好きな物：金太郎飴

嫌いな物：ヴェルタ◯スオリジナル　友達を傷つける者（笑）

武器：弓矢

備考：アマチュア野球のホームラン王、料理の腕は相当で家事全般が可能、バスケも上手。
ハンターとしての技量はいまいちで一人で行動したがらない。
トランペットの演奏が趣味、プーギーを飼っていたがクリスマスを境に失踪。

スティング・オークレー　「花粉症は辛い・・・」

性：男

好きな物：寒天、山芋

嫌いな物：ヴェルタ◯スオリジナル　花粉

武器：ガンランス

備考：ハンターとして一人前の腕前、サッカーとラグビーが趣味。

昔はパティシエを目指して居たが才能の無さを痛感し断念する。
アイルーを3匹飼っていたが行方不明。

ステラ・ルーシェ　「幽霊はいる！絶対・・・きっと・・・たぶん・・・おそらく」

性別：女

武器：弓矢

好きな物：ヨーグルト、黒豆

嫌いな物：ヴェルタ〇スオリジナル　カマキリ　カマキラス　クモンガ　蜘蛛

備考　出生時の性別は雌。母親はステラを産んだ後に処分。当初は納棺師を目指して世界を旅するものの飽きたので止める。
双子座生まれ、ヨーグルトをひっくり返し自分の顔面にぶっかけた際、スティングは鼻血を吹きだした。
ハムスター5匹とフクロウを一羽飼っていたが3日後、ハムスターが全滅。

登場人物　裏設定２（後書き）

シン「なあ作者」

作「何？」

シン「必殺技名を考えたんだけど」

作「へぇー」

シン「魔装風ってどうだ？」

作「何て読むの？」

シン「考えてみな」

作「まそうふう・・・まそうぷう・・・まそっぷう・・・まそっぷ・・・マソップ？」

シン「正解！」

作「却下」

シン「何で？」

作「ダサいから。まあ、技名は追々ということで」

シン「えぇぇぇぇ・・・」

笑顔（前書き）

ＩＳ終わったな～・・・次はクェイサーでもみようかな
アリアの主人公のヒステリアモードが跡部にしか見えん・・・
俺様の美技に酔いな

笑顔

赤毛ポニーテールの女は、ハイネたちの前にゆっくりと飛び降りた。結われた髪
と、それを束ねるリボンがふわりと舞い、なんとも一挙一動が優雅に思える。
続いてアイルーも降ってきた。確か、シャルルとか言ったっけ、このアイルー。
ハイネ
『あなた、あの時の…』
シンがランゴスタに刺されてぶっ倒れて、その上ゲネポスに追い込まれガチのピンチの時、華麗に崖の上から参上されたあのお方だ。赤毛の女
『また会ったねぇ』
なぜか笑顔のその女は肩に太刀をのせて、ハイネたちの前に立つ。
あの時はバタバタしていてあまり意識していなかったが、なかなかべっぴんだ。
赤毛の女
『キミ、ランゴスタに麻痺らされてた子よね？大丈夫だった？』
シンのことだ。
シンもあの時、麻痺用の解毒薬を飲ませてもらっていろいろと世話をやいてもらった。
シン
『はい、大丈夫です。あの時はありがとうございました』
シンは麻痺毒に犯されていたので、正直この赤毛ポニーテールの女のことをあまり覚えていない。
ただ、ピントがズレたようなあいまいな記憶ならわずかにある。自

分の手をとって薬を飲ませてくれた。
ハイネ
『あの時はありがとうございました。おかげでまた、お会いすることもできました』
赤毛の女
『お礼なんかいらないって。言ったでしょ？ハンターは助け合いが大切なのよ』
左手の人差し指を立てて、ウインクする。
サーシャ
『ハイネ？』
サーシャはきょとんとしている。そりゃそうだわな。ハイネは砂漠で、彼女に助けられたことを手短に話してあげた。
サーシャ
『へぇ～』
赤毛の女
『そんな大層なことじゃないって』
この女の腕には黒いバックルがつけられている。“黒曜金”だ。
黒曜金とは、ブラックリストハンターにのみ使用が許されている防具の一種。
ということは、この女もブラックリストハンター。
見たところ、年齢もシンやハイネと大した差はないように思える。
ハイネ
『あの、名前、教えてもらってもいいですか？』
そういえば、まだ互いの名を明かしていなかった。
あの時はゴタゴタしていたので、聞きそびれた。
赤毛の女

『そうね、別にいいけど。でも、人に、特に女の子に名前を聞く時は、まず
　は自分から名乗るっての　がジェントルマンよ』
女は人差し指をハイネの額にあてる。相変わらずの笑顔で。
ハイネ『あ、えっと、ハイネ・ヴェステンフルスです』
シン『…え?あ、オレもか。シン・アスカです』
赤毛の女「ヴェステンフルス…。じゃ、この子、鳳凰の一族の…」
彼女も、ヴェステンフルス一族の悲劇を知っていたようだ。
赤毛の女『ハイネくんに、シンくんね。オッケー。私はカナリア・アルスター。よろしく』
この赤毛ポニーテールは、カナリア・アルスターというらしい。
身長も高く、足も長い。女性として申し分ない美貌。プロポーションも抜群だ。
おそらく１０人が１０人、彼女をかわいいと言うだろう。常に笑顔がチャームポイントの、大人の女性になりかけの女の子という感じ。
カナリア「こっちの子は?』
カナリアがサーシャを見る。
サーシャ『え～と、サーシャ・シファです』
カナリア『サーシャちゃんね…。で、どっちの彼女なのかな?』
それはつまり、サーシャはシンかハイネのどちらの彼女なのかという質問なのだろう。
サーシャ『ち、違いますよ。彼女なんて、そんな』
まぁまぁ、そんな分かりやすい反応示してくれて。
サーシャは耳たぶを赤くして縮こまる。
カナリア『ハハハ、サーシャちゃんってからかいがいがある　ね。ホント、ヴァニラみたい』
カナリアがサーシャの頭をポンポンとたたく。

ハイネ『ヴァニラ？』
今、知らない人の名前が出た。
カナリア『あ、ごめんごめん。こっちのこと』
なかなかというかかなりハイテンションのムードメーカー、カナリア・アルスター。
話を聞けば、彼女は齢２０にしてＨＲ９のブラックリストハンターだそうだ。ＨＲ９といえば、数万数十万いるとされるハンターの中で、たった２０人しかいないとされている。
カナリア『じゃ、ハイネくんとシンくんはティーズのハンターなんだ？』
ハイネ『はい。運び屋の方に無理を言って、クエストの帰りに俺の故郷のクロノスに寄ってもらったんです』
カナリアを含めた一向は、ゼノンとの待ち合わせである飛空場へと向かっていた。
カナリア『それじゃ、サーシャちゃんは切ないでしょ？ハイネくんと離ればなれになって』
サーシャ『いや、私とハイネは別にそんなんじゃ…』
ホント、分かりやすく耳たぶを赤くして。
カナリア『でも、シンくん立場ないね？』
シン『まったくっスよ。目の前　でイチャイチャされて。ホント気まずくて気まずくて』
なんの皮肉？
ハイネ『イチャイチャなんてしてねぇよ』

サーシャ『誤解よ。誤解だから』
なんでそんなに焦るのか？まったく2人とも分かりやすくて。
と、まぁ、このような雑談で、ハイネとサーシャのロマンチックな時間なるはず
だった1時間はあっという間になくなってしまった。なんだかカナリアが現れて
から、場の空気をことごとくカナリアが操っているように思える。
カナリア『サーシャちゃん、恋の相談ならいつだって聞いてあげるわよ。人の恋愛ほ
ど面白いものはないから　ね』
いや、その発言はどうなのか。シン、ハイネ、サーシャが同時に思った疑問であ
る。
そうこう話しているうちに待ち合わせ場所の飛空場についた。
その門の前に一人の老人と、荷物をどっさり持たされたアイルーが一匹。ゼノン
とココだ。
シン『すいません、ゼノンさん』
ハイネ「お待たせしました』
サーシャは無言で一礼。
ゼノンは、ハイネの隣のサーシャを見て、自由行動をさせた自分の選択が間違い
なかったことを確認する。ただ確認することはもう一つ。
ゼノン「ん？』
カナリア『アレ？ゼノンさん？』
まさかというか、やっぱりというかの知り合いパターン。
ゼノン『アルスターの娘？なぜここに？』
カナリア『私がここにいちゃ、おか　しいですか？』
カナリアは相変わらずの笑顔でゼノンに聞き返す。どういう関係なのだろうか？

カナリア『てゆーか、この子たちつれてきたのって、ゼノンさんだったんですか。珍しいですね“あの子たち”以外とクエストに来るなんて』

この子たち、というのはシンとハイネのことだろう。あの子たち、というのは？

ゼノン『ふん、お前さんには関係なかろう』

飛空場ではすでに、ゼノンの気球が発進スタンバイの状態になっていた。運び屋の気球は普通の気球よりも数段デカいので、飛空場の係員に頼めば気球を発進スタンバイの状態にしておいてくれるのだ。

ゼノン『さぁ、乗れ』

ゼノンが気球の中にシンとハイネとココを誘導する。ココは休む暇もなく、火炎放射で気球のバルーンに熱を送る作業に入る。

サーシャ『ハイネ…』

気球に乗り込もうとしたハイネに、サーシャが切ない声で呼び止める。

ハイネ『ごめんな、サーシャ。また来るよ』

また2人だけの世界に突入。さすがのゼノンも、自分の存在が不要なことを察する。

サーシャ『…』

行かないで、サーシャが一番伝えたい想いだろう。しかし、それは言えない。ハイネの気持ちを汲んでやるなら、それは言ってはいけない。

以前のハイネと似ている。ということは、ハイネは断ったのだ。あの時サーシャが言った

『私も連れてって』

という、初めてのわがままを。
サーシャ『約束よ』
ハイネ『ウソだけはつかねぇよ。オレは』
そのハイネの言葉に、サーシャは少し安心したような表情で、『おかえり』と言
った。
ハイネ『え？』
サーシャ『まだ、言ってなかったから』
ハイネも少し驚いた顔をしていたが、『遅ぇよ』と笑って返した。
サーシャ『そうよね』
そんな2人の世界に浸りきっているハイネとサーシャを、カナリアは初めて笑顔
以外の表情で見ていた。

帰還（前書き）

ＩＳの加速する内容のスカスカ。
ハイスピード学園スカスカラブコメディ……

帰還

ゼノン『カナリア、お前はどうする？なんなら、小僧どもとワシの気球に乗っていくか？』

カナリア『ん～ん、私はいいや。この後、ボアズに寄ってかなきゃならないから』

ハイネとサーシャが感動的な別れを惜しんでいるころ、ゼノンはカナリアの動向を聞いていた。

ゼノン

「ボアズか。あそこは治安が悪い。気をつけろよ』

カナリア『心配いらないって。これでも私、ブラックリストハンターですから』

カナリアが誇らしげに胸を張る。

そんなカナリアを見てゼノンは皮肉を口走った。

ゼノン

『２０そこそこでＨＲ９を名　乗るとは…。まったくふ　ざけた小娘じゃ』

その後、ティーズへの帰還組はゼノンの気球に乗り込む。

時刻は１８：００をまわったところだ。このまま順調に帰れば、明日の朝にはティーズに到着できる。

ただ、今夜は風が強い。道中何事もなければいいが。カナリア

『イルゥ～』

カナリアが突然大声をあげた。シン、ハイネ、サーシャは驚いてカナリアに目を向ける。

そしてカナリアの呼び掛けから数秒、吹き荒れる風と雲を突き破っ

て、空から何
かがこの飛空場に向け落下してきた。それは、まるで隕石のように。
ゼノン
『ほほぉ～。これまた一段と成長したのぉ～』
落下してきた生物は土煙の中から這い出してきて、カナリアの前で
頭をさげる。
ハイネ
『こ、これって…、翼竜種？』
銀の鱗と白の毛におおわれたそれは、ハイネのよみ通り、白翼竜グ
ラン・トリィ
だった。
シン
『何、これ？』
翼竜種、それは飛竜種と違って主に生活圏を空に持つモンスターだ。
特徴は大き
な翼と、立派なトサカ。
翼竜種はその一生をほとんど空で過ごし人畜無害なため、ハンター
のクエストに
翼竜種討伐という内容のものはほとんどない。
ただこのカナリアのように、自分のパートナーとして翼竜種を従え
るハンターも
いる（とはいっても翼竜種を従えるハンターは数えるほどしかいな
い）。
翼竜種は数種類確認されてる。それはすべて色によって判別される。
カナリアの翼竜は、白翼竜と言われる種類だ。名前はイルだそうだ。
ハイネ
『スゲー、初めてこんな近くで見た』
先ほども言ったとおり、翼竜種は一生のほとんどを空で過ごす。人
前に出てくる
ことほとんど皆無なのだ。カナリア

『シャルル、行くよ』
カナリアのアイルーシャルルが、カナリアの差し出した手をつたってカナリアの
肩にのぼる。
カナリアはそのまま翼竜のイルに飛び乗る。
ゼノン
『ワシらも行くぞ』
ゼノンの気球がゆっくり上昇し始める。
カナリア
『イル、ゴー』
カナリアの掛け声で、イルは『ア〝ア〟』と咆哮をかまして、勢いよく飛び立
つ。ものすごい風圧だ。イルが飛び立つと、地面に小さな竜巻のようなものが発
生していた。
ゼノンの気球も大きく揺れた。
シン、ハイネ
『おわわぁ』
ゼノン
『カナリア、気をつけろ』カナリア
『ごめ〜ん』
カナリアを乗せたイルは、ゼノンの気球の周りを旋回している。
カナリア
『じゃ、もう私たちはいくから〜。ケンくんとヴァニラによろしくねぇ〜』
カナリアはそう言い残して、イルとともに暴風吹き荒れる暗雲の彼方に飛び去っ
ていった。
ゼノン
『今夜は荒れるな』

時を同じくして、ティーズでも動きがあった。
ゼノンたちが予想したとおり、空模様は徐々に荒れ始め、ここティーズでは小さ
な嵐に見回れていた。
そんな中、多くのハンターがクエストに発つのを諦め、この集会所に留まってい
た。
予報によれば、低気圧がティーズを中心とした地域に停滞しているらしく、一晩
中嵐が続くらしい。
受付のサクとイクもその対応に追われていた。

『ひっでぇ雨』

『あ～、びちょびちょ…』
2人の男女のハンターが、この雨の中、クエストから帰還された。
ぼやきながら集会所に戻ってきたこの一組のハンターたちに、他のハンターたち
からの視線が注目した。
イク
『え、アンタたち、もう帰ってきたの?』
イクの前に現れた2人のハンター。
それはあの時、ギルドマスターであるギルバートから緊急セルケト討伐クエスト
を言い渡されたケネスとヴァニラであった。
ケネス
『よっ』
ヴァニラ

『ただいま』
銀髪テンパのケネスと、金髪サイドテールのヴァニラ。互いにライトボウガンを
扱うガンナーハンターだ。彼らは針蟲セルケトを討伐しに行っていた。セルケト
といえば討伐に平均的数字でおよそ2週間かかる。しかし今回、ケネスとヴァニ
ラがかけた所要時間はたった1週間たらず。
イク
『ホント、毎度のことながらアンタたちには驚かさせれるわ』
イクがあきれたような物言いで呟く。
ケネス
『だろ～』
ヴァニラ
『調子にのってんじゃないっての。あのセルケトまだ子供だったじゃない。
1週間かかったのが遅いくらいよ』
イク
『まぁまぁ、とりあえずクエストはクリアしたみたいだし。このクエストは
書類上、ギルドの直接契約ってことになってるからここ（受付）では報酬金
は渡せないのよ』
せわしく働いていたイクが手を休めて、話し込む。
周りのハンターたちはこの3人に視線を向けている。
一般ハンターA
『おい、あの金髪の女。レイアリスじゃねぇか？』
一般ハンターB
『レイアリス？あの【金猫のレイアリス】か？』
一般ハンターC

『つーことは、隣の銀髪の男は【銀猫のレウスウォール】？』
一般ハンターD
『【つがいの猫】、こんなとこ何してんだ？』
周囲のハンターたちはケネスとヴァニラの存在に、驚いたような、不思議なとい
うような反応を示している。
ヴァニラ
『とりあえず、セルケトは狩り終えたから。密林への立ち入りも再開しても
ってもオッケーよ』
ヴァニラのフルネームは、ヴァニラ・U・レイアリスという。通称【金猫のレイ
アリス】と呼ばれる。
ちなみにケネスのフルネームは、ケネス・L・レウスウォール。通称【銀猫のレ
ウスウォール】。
2人ともHR8のブラックリストハンターだ。
そして金猫銀髪のヴァニラとケネスを総称して、【つがいの猫】という。
ケネスとヴァニラは場所を変え、ギルドマスターのギルバートの部屋へ移動した
。
ギルバート
『早かったな。さすがはお　前らだ』
白に近い黄色の髪をオールバックにしたギルバートが、偉そうに席に座り、机を
挟んだ向こう側にいるケネスとヴァニラを称える。
ゼノンとはまた違った感じの『ジジィ』だ。
ケネス
『ハイハイ、お褒めいただき光栄にございます。報酬はきっちり用

意してあ
んだろうな？』
礼儀正しい対応の後に、本音がこぼれた。
これでもギルバートは、ハンターズギルドの総帥、ギルドマスターなのだ。その
ギルバートにこんな口を聞けるのは、ハンター多しといえどケネスを含め数人く
らいであろう。
ヴァニラ
『報酬金をもらう前に、クエストの内容にあった状況報告をさせてもらうわ
ね』
相方ヴァニラはとりあえず、クエストのクリア条件にあった状況報告を始める。
ヴァニラ
『証言通り、セルケトはいたわ。まだ子供だったから、討伐にはそう時間は
かからなかった』
ケネス
『狩ったセルケトの腹をひらいて胃袋の中を見たんだが、食われたハンター
どもの防具が見つかったよ。これでルーキーが行　方不明になっている原因
も明らかになったわけだ』
状況報告終了。
２人の話を聞いてギルバートは考え込む。
ケネスとしては、報酬金が気になるところだ。なぜなら、緊急クエストだったた
め具体的な金額が提示されていないからだ。
ギルバート

『わかった、ご苦労だったな。約束の報酬金３０万ｚだ』
ほぉ、３０万ｚか。悪くない。一般的に、セルケトを討伐するクエストの報酬金は２０
万ｚほど。
今回は“緊急クエスト”だったので、３０万ｚでいいところだ。
ケネス
『今回は奮発したんだな。ありがたく頂戴すんぜ』
ヴァニラ
『…』
ケネスが札束を受け取り、ヴァニラは無言で一礼し部屋を出ようとするケネスに
続く。
ギルバート
『待て』
ケネスが部屋を出ようとドアに手をかけた瞬間、たった二文字の『待て』という
言葉を、ゆっくり、重く、威厳あり気に言った。
ケネス
『なんだよ？』
ケネスの問いにギルバートが答えるまで１０秒の沈黙が流れた。
その間の空気の重さは絶大なものだった。
ギルバート
『単刀直入に言う。クルーゼが現れた』

登場人物　裏設定３（前書き）

ステラは２の方に移動しました。

登場人物　裏設定３

ハオ・レギンス　「あのぉ・・・付録千切れてたんですけど・・・」

性別：男

武器：太刀　ＡＫ－４７

好きな物：生理学　エロい物

嫌いな物：ムー大陸の住人

備考　「氷の竜騎士」と呼ばれる凄腕ハンター。ハンターランクは１０。
メガネをつけている。イクに惚れられているが眼中にない。クルーゼと交戦経験がある数少ない人物。
犬派か猫派か聞かれると猫派、メガネの代わりにネコミミをつけてクエストに出ることもしばしば。
太刀から氷の光波を出せる。

技名：氷の光波

氷の世界

ペットに最強のゴキブリ「チャバネカイザー」を飼育している。全高５００ｍ　全長２０００ｍで絶滅危惧種。
一緒にアイルーを連れていたがいつの間にか失踪。

チャバネカイザー

性：無し

好きな物：ラヴィエンテ　ラオシャンロン　リンゴ

嫌いな物：ファントム土蜘蛛

備考：最強のゴキブリ上記の大きさは子供に過ぎず、１万年前に居た物はハオのチャバネの２倍の大きさであった。ラヴィエンテですらミミズに見えるサイズ。
強靭な外骨格は撃龍槍を跳ね返した。外骨格には集光という効果があり、あらゆる光学兵器を無効化するがその時代に光学兵器など存在しないため出番はなかった。
生命力は異常に高く、毒や放射能ではまず殺せない。成長速度も速いが卵から孵るのは遅い。肌から栄養を吸収し心臓が７つ存在する。
頭脳は成長する度に衰えるという変わった仕様。
単体での出産も可能。

ファントム土蜘蛛

性：無し

好きな物：キングアゲハ蝶

嫌いな物：チャバネカイザー

備考：全高８００ｍ　全長１２００ｍ。常に３匹で行動し集団での狩りを得意とする。
１万年前ではチャバネカイザーと唯一互角に戦える生き物だった。

当時の個体数は６匹。毒は鋼をも溶かし、神経細胞を死滅させる。
尻から吐く糸は強い粘着性と強度があり、幼態のチャバネの動きを封じれるほど。
チャバネカイザーと違い生命力はそれほど高くなく代わりに極めて高い知能がある。
火にも耐性はあり１０００。までなら耐えられる。
ただし寒い所は苦手。

嵐の再会

ギルバート
『単刀直入に言う。クルーゼが現れた』
ケネス、ヴァニラ
『！！』
ギルバートの重く、ゆっくりとした言葉。
ヴァニラは振り向いて、ケネスは表情を変えずに驚いていた。
ラウ・ル・クルーゼ、以前の死神衆に属し、現在は盗賊団クモの一員であるとされる【黒の死神】と呼ばれる犯罪者ブラックリストハンターである。
ギルバート
『情報が入ったのは６日ほど前、お前たちにセルケトの討伐を依頼した直後だ』
察してもらえてると思うが、セルケトと遭遇したのはハイネであり、クルーゼと
遭遇したのはシンだ。
ギルバート
『カナリアを含めたお前たちの仲間にはすでに話してある』
ケネスたちの仲間とは、以前、ギルバートがブラックリストハンターを召集して
いたのを覚えているだろうか？※ＰＨＡＳＥ―２３参照
ギルバート
『正直、お前たちに話すのはどうかと思ったんだがな。しかし、お前たちに
は知る権利と義務、そして覚悟がある。だろ？』ケネス
『…』
ヴァニラ

『…』
ケネスとヴァニラは横目で互いを見る。
ケネス
『…具体的なこと、教えよ』
ギルバートはフンと笑い、彼が知る限りのことを話し始める。

その頃、ゼノンたち一向は嵐の中を突き進んでいた。嵐の原因である低気圧は、
ティーズを中心とした地域を巻き込んでいる。
現在、そのティーズに戻ろうとしている彼らは、嵐に突っ込んで行くようなものなのだ。
シン
『うぅ～、揺れるぅ～』
ハイネ
『うぇ…、気持ち悪ぃ…』
シンとハイネはこんな感じだ。シンは快適（？）な空の旅（スリル）を満喫している。ハイネの顔が紫色になっているのは気にしない。
ゼノン
『吐くなら、外に頼むぞ』
ココ
『ゼノンさん、これはキツいニャ。一回、地上に降りた方がいいニャ』
ゼノンはデカい気球の中を行ったり来たりして、気球の操作を行っている。ココはバルーンの真下、気球の一番高いところに座り、周囲の監視をしながらバルーンに熱を送る作業を行っている。
巨大な気球は大きく揺れ、風の強さを物語る。

ゼノンの気球は、乗る部分であるバスケットが三階層になっていて、想像される
とおりものすごくデカい。
ゼノン『くっ、確かにマズいな』
ゼノンは選択を迫られていた。

ケネスとヴァニラは、廊下をやや早足で歩いていた。どうやらギルバートからク
ルーゼに関する情報は聞き終えたようだ。
ヴァニラ
『ケイ、どうするのよ?』
ヴァニラはケネスのことを『ケイ』と呼ぶ。なぜかわからんが。
基本的には、ケネスは『ケン』と呼ばれている。これは親しい者間で呼び合う愛
称みたいなものだ。
しかし、ただ1人、ヴァニラだけはケネスを『ケイ』と呼ぶ。発音は『ケー』。
ケネス
『…ヴァニラ、これ持って先帰っててくれ。オレの取り分はいらねぇからさ
』
2人は立ち止まり、ケネスはそう言ってヴァニラにギルバートから受け取った30
万zの札束を差し出す。
ヴァニラ
『やっぱり行くの?』
ヴァニラはケネスの差し出す札束を受け取ってくれない。
ケネス

『ジジィ（ギルバート）が言ってた通り、“覚悟”は決めたからな』
再度、ケネスはヴァニラに札束を差し出すが、やはりヴァニラは受け取ろうとはしない。
ヴァニラ
『じゃ、人数は多いに越したことはないわよね？』ヴァニラはケネスを追い越して、先を行く。
ケネス
『おい、ヴァニラ』
ヴァニラ
『あの時、“覚悟”を決めたのはケイだけじゃないのよ』
ケネスは札束を手にしたまま、突っ立っている。えらく情けない構図だ。
ケネス
『…サンキューな、ヴァニラ』
ヴァニラ
『な、何よ、今さら』
ヴァニラはそっぽを向いて先を行く。
この３０万ｚどうしようかな？ケネスはそんなことを思いながら、先をいくヴァニラを追うように歩き出す。
ギルバート
『やはり行くか…。ケネス、ヴァニラ』
ケネスとヴァニラが去った後、ギルバートは自室にて考え込んでいた。
クルーゼの件、やはりケネスたちには話さなければよかったのか、そのことについて悩んでいた。
サク

『話して正解だったと思います。あの子たちはすべてを知るべきです』
イク
『そうだよ。それに話さなかったら話さなかったで後々うるさいぜ、アイツ』
サクとイクが、ギルバートは間違っていないということを保証してくれる。
ギルバート自身は胸の奥にややつっかえるものがある気はするが、これでよかったのだと安堵する。

シン
『ここどこ？』
ハイネ
『さぁ？』
猛烈な雨と風の影響で、ゼノンは緊急着陸を余儀なくされていた。
着陸したこの場所は、黒い茨が折り重なる明らかに『危険』を警告している谷だった。
実際、ここは密林奥地。下位ハンターがクエストを行う通常の密林のさらに奥に広がる危険地帯だ。上位ハンター以上でなければ立ち入ることはできないとギルドの掟で定められているほどにヤバいところ。密林奥地は通常の密林の１００倍以上の広域を誇る。これは、すべての地域に一致する。“奥地”と呼ばれるエリアは通常のエリアの１００倍以上の面積があり、そこでの食物連鎖は普

通とは異なってい
る。
と、長々と説明してもアレなんで、とりあえず『ヤバいところ』とご理解くださ
い。
シン
『ゼノンさん、ここって危険なんじゃ…』
ここが“密林奥地”ということを知ってか知らずか、シンは核心をついた質問を
。
ゼノン
『空にいる方がよっぽど危険だ』
まぁ、確かに荒れ狂う空を飛行し続けるのは危険だろうけど。でも、ここもそう
とう危険ですよ。ほら、あっちからもこっちからも何かの遠吠えが聞こえるもん
。心なしか、だんだん近づいているような気がせんでもない…。
ハイネ
『にしても、気持ち悪いっスねぇ～』
トゲトゲの茨が、負のイメージを増長させている。
ゼノン
『ココ、新しいジョイントを持ってきてくれ』
ココ
『はいはいニャ～』
シン
『いや、違うって。ここはこうだろ』
ハイネ
『あ、そうか』
とりあえず、シンとハイネはゼノンとココを手伝って、気球の調整に協力してい

た。
崖を背にして、暴風から身を守る。ここならある程度は防げる。
ココ
『』
ココがピクンと反応し、高い場所によじ登って辺りを見回す。
ゼノン
『…』
ゼノンも何かの気配を感じとったようだ。
ハイネ
『ココ、どうかしたのか?』
ココ
『何か来るニャ』
ココの呟きから数秒、暗雲立ち込める黒の空が一瞬明るくなる。同時に今まで吹
いていた風とは、逆向きの風が吹く。
ココ
『ニャ～、ゲリョスニャ』閃光と逆風とともに飛来したのは、毒怪鳥ゲリョスだ
った。
ハイネ
『毒怪鳥』
ゲリョスは気球の前に降り立つ。
ココが、ゲリョスと皆の間に立って戦闘体勢をとる。その後ろに武器を構えたシ
ンとハイネが配備される。ココ
『無理に戦うことはないニ　ャ。こいつは“奥地”の　ゲリョスニャ。強さは桁
違いニャ』
だいたい普通のゲリョスと戦っても、2人は勝てないだろう。奥地のゲリョスな

んて論外だ。
ハイネ
『なんとかなるさ、多分』シン
『ま、１ＶＳ１より、１ＶＳ３　の方がいいでしょ。足手　まといにはならないから
』
ゲリョスは辺りを見回しながら、しっかりこっちにも気を配っている。やはり戦
闘慣れしている。
ココ
『先手必勝で行くニャ』
ココの合図と同時に、後ろの２人も踏み込む。
それを見たゲリョスも戦闘モードへ。
まずは咆哮を一発。
シン、ハイネ
『くっ』
その咆哮に気圧されてしまったシンとハイネは、一瞬動きが止まる。
ココが突っ込み、そのハンマーがゲリョスにヒットしようとした時…
ココ、ゲリョス
『』
２人匹の間に矢が一本、頭上より飛んできた。
これにはココばかりか、ゲリョスもひるんだ。

『よくやった、アウル』

続く一言。
同時に、ゲリョスの左右から人影が。
ガンランスと双剣の２人は左右からゲリョスを斬りかかる。
ゲリョスはとっさの判断でその攻撃を回避。逃げるようにこの場を飛び去る。

アウル
『逃がすかよ』
崖の上に立つ弓使いのハンターが、飛び去るゲリョスに追撃を加える。
ゲリョスは空中で、その矢を毒ブレスで相殺し、そのまま夜の闇に消えた。
スティング
『アウル、もういい』
シンたちの前に現れた2人のハンターと、崖の上のハンター。どっかで見たような…。
ハイネ
『スティングさん』
そう。以前、シンとハイネが初めてのクエストに発つ際、いっしょになった3人
組のハンター、スティング、ステラ、アウルだ。

登場人物　裏設定４

ギルバート　「家に帰りたくない……」

性：男

武器：ハンマー

好きな物：プロテインかけご飯

嫌いな物：脂肪

備考　巨神兵という異名を持つ。ゴルフとぬいぐるみを集める事が趣味、妻のイツキさんと息子のシグルス、娘のメイの４人家族。年収は６００万。妻の尻に敷かれている。娘のメイは自他共に認めるドＳで息子のシグルスは腐れ外道。家に帰るのが少し苦痛らしくギルドに住み着いている。

サク　「無限のパワァァァァァァ！　って言ってみたい」

性：女

好きな物：同人誌　シイタケ

嫌いな物：白滝

備考　受付嬢の１人、実はプロゴルファーでソフトテニスも得意。整体師の免許や大型特使の免許もある。パラグライダーが趣味。

笑顔が眩しい凄艶な美女、最近はプチトマトの栽培をしている。

イク　「白米サイコー！」

性：女

好きな物：白米　たくわん　ナメタケ　ハオ・レギンス

嫌いな物：シメジ　白滝　特産キノコのスープ

備考　受付嬢の2人目、実はプロの水泳選手、ゴルフカートで爆走するのが趣味、ショベルカーの免許をもっている。爆弾処理班に所属していた過去もあり、無邪気な笑顔が眩しい清楚な美女。
最近はキュウリの栽培をしている。

緑と黄と青

ハイネ『スティングさん』
突如として襲来した毒怪鳥ゲリョスを追い払ってくれた3人のハンターたち。それはシンとハイネが初めてのクエストに発つ時にいっしょになったスティング、
ステラ、アウルだった。
スティング
『お前たち…、なぜここに?』
スティングはシンとハイネの顔を見て、すぐにあの時のガキどもと思い出した。
確かスティングたちは、セルケトを討伐する上位クエストを受けていたはず。
※ケネスとヴァニラが討伐したセルケトとは当然、別物。
アウル
『お〜い、スティング〜』
崖の上から矢を放っていた青い髪の青年が、崖を滑って降りてくる。
この状況から推察するに、スティングたちはセルケトを狩り終えたようだ。
アウル
『アレ、キミら、あん時のルーキーくん?なんでここに?』
その質問はさっきスティングがしてくれたからもういいです。
シン
『オレたち、クロノスの帰りなんですよ』
ステラ
『クロノス?砂漠?』
スティング
『…』

さっきのスティングとアウルの『お前たち、なぜここにいる?』という質問の真
意は二つある。
一つは、この“密林奥地”になぜルーキーのシンとハイネがいるのかということ
。以前も言った通り、密林奥地は上位ハンター以上しか入れないエリアなのだ。
二つ目は、なぜシンとハイネがこの気球に乗っているのかということだ。
ゼノン
『おう、誰かと思えば、ロアノークのパシリどもか』
ゼノンがシンとハイネの後ろから現れる。
ロアノークって誰?また今度出てくるので。
スティング
『ゼノンさんじゃ、やはりこの気球はゼノンさんの…』
シンたちに合流する前のスティングたちは、セルケトを狩り終えてティーズへの
帰還下にあった。その時、目の前で見覚えのある気球が不時着しようとしていた
。それがゼノンの気球だったわけだ。そして、『嵐の中帰るのもめんどいし、ゼ
ノンさんの気球に乗せてもらおう♪』
というアウルのクソみたいな提案で、気球
に近づいてみたらなんとゲリョスに襲われているではないか。なんて恩を売りや
すいシチュエーション、と思ったのはアウルだけ。3人は、ピンチをむかえてい
たゼノンたちをカッコよく助け、そして今に至るわけだ。
と、スティングは解説してみせた。
アウル

『今のスティングの説明に、ちょっと納得いかない点があったのはオレだけか?』
ステラ
『ん、アウルだけ』
金髪の少女はアウルの質問をさらっと受け流す。
無表情にそんなこと言われたら、ちょっと本気で効くな…。
ハイネ
『ゼノンさんとスティング　さんたちって、お知り合いなんですか?』
さっきの話聞いてたのかよ?明らかに知り合い前提の話だっただろうが。ってこ
とは誰も言わない。みんな優しいから。
スティング
『まぁな。どっちかっていうと、オレたちが一方的に知ってるぐらいだ』
アウル
『ゼノンさん、有名だからな。オレたちも一回だけゼノンさんの気球に乗せ
てもらっただけだから。ゼノンさんがオレたちを覚えてるかどうか』
ゼノン
『何を言う。ワシの気球に乗せた者は、アイルー顔すら覚えているわ』
ゼノンは運び屋の代名詞に言われるぐらい有名な運び屋なのだ。スティングたち
ですら一度しか乗せてもらったことがないらしい。
そのゼノンの気球に、なんでルーキーのシンとハイネが乗ってんだよ?というの
がさっきのスティングとアウルの質問の真意だ。
ゼノン

『何はともあれ、さっきはおかげで助かったわい。ロアノークにお前たちの
　評価をあげるように言っておいてやる』
スティング
『師匠も、ゼノンさんには頭があがらないですからね』
ここで字数かせぎのためにスティングたちの簡単なステータスでも紹介させてもらいます
スティング・オークレー
↓緑の髪を角刈りにしたやや目付きの悪い青年。見た目はこんなんだが、面倒見がよく、アウル、ステラの中でもリーダー格の頼れるアニキ。
年齢は２１。
ＨＲは６。
武器はガンランス、ヒデゥンガンランス。

ステラ・ルーシェ
↓ヴァニラとは少し感じの違う金髪をショートカットにした少女。会話の中では
文ではなく単語で話すので、初対面ではなかなかに理解しづらい不思議ちゃん。
年齢は２０（スティングいわく）。
ＨＲは６。
武器は双剣、ドス・ディオサス（ケンくんオリジナル）。

アウル・ニーダ
↓チビ

だけって言ったら、このキャラのモデルになってくれた『つ○え』

が怒りそうな
ので、もう少し説明を。

青い髪を無造作ヘアーにしたチビ。そのくせに変に運動神経がいい。
チームの後
方支援を担う。
年齢は１９。
ＨＲは６。
武器は弓矢、ツララ（ケンくんオリジナル）。
そうして一同は、嵐の夜を共にゼノンの気球で過ごした。
シンとハイネはすぐに眠りに落ちた。思えば、今日一日は大変だっ
た。夜が明け
る前から砂漠に飛び出しクエストに勤しみ、今は亡きハイネの一族
ヴェステンフ
ルス一族の墓に参って、クロノス村に立ち寄ってハイネのドロドロ
した過去にけ
じめをつけ、最後は嵐で立ち往生。疲れていても無理はない。
嵐は一晩中弱まることなく荒れ狂った。夜が明けても風雨はやや弱
まったものの
以前として、空には分厚い雲が太陽の光をさえぎるように停滞して
いる。
ハイネ
『夜が明けたのか、あんまりわかんねぇな』
空には灰色の雲。雨はジト～と降り、空も気分も晴れない一日が始
まった。
シン
『湿度高っ』
雨が降っているので湿度はやたらに高い。おまけにこの地域は常夏
という環境。
蒸し暑いのだ。

ゼノン
『さっさと帰るぞ。準備しろ』
ゼノンもこの環境に嫌気がさしたらしい。
昨日のアウルの策略もあって、スティングたちもゼノンの気球に乗って帰ることになった。
今からみんなで気球の整備と、発進の準備にかかる。
ステラ
『早く、お風呂入りたい』
アウル
『オレも』
ステラ
『いっしょに入る？』
アウル
『入るか』
そういえば、この人たちもシンやハイネと大した年齢差はないのだ。
優秀なハンターは若い頃からその実力を開花させるというが、それは本当のようだ。
ゼノン
『では行くぞ』
ゼノンの一声でココがバルーンに熱を送り込む。ゆっくりと気球が上昇し始める。
ハイネ
『なんか、かなりティーズを離れてたみたいだな』
シン
『ホントに。なんか久しぶりって感じ』
ティーズはもう目と鼻の先だ。この天気だったらなんとかなるだろう。

ま、この後どうにもならなくなる展開があるのが小説である。

『ウォォオーー』

耳を裂くような遠吠え。
ゼノン、スティングたち
『ウオオオおおお

『ヴェルガンデ。つーことは…、もう1匹いるぞ』
さっきの遠吠えの方向から
、もう一体のヴェルガンデが下方向から迫る。
スティング
『チィッ』
スティングが気球から飛び降りた。そしてガンランスの盾を構えて、
飛び上がっ
てくるヴェルガンデに激突した。
ハイネ
『スティングさん』
すぐさまアウルとステラも飛び降りる。3人ともスキル“着地術”
があるので、
高い場所からの着地も一応は大丈夫である。
スティング
『ゼノンさん、コイツらはオレたちがおさえます。早く行ってくだ
さい』
一方のヴェルガンデにスティングが、もう一方のヴェルガンデには
ステラとアウ
ルがつく。
シン
『ゼノンさん』
ゼノン
『ヴェルガンデは響狼と呼ばれていてな、オスとメスが対になって
獲物を襲う牙獣種だ。ヤツの異常なまでの脚力はこの高度くらいな
ら余裕で届く。今はアイツらの足止めが必要だ。ココ』
ココ
『はいニャ』
ココは火を吹いて、バルーンに熱を送る。
シンとハイネは残ったスティングたちを見送ることしかできなかっ
た。

登場人物　裏設定５

ラウ・ル・クルーゼ　「カギ閉めたっけなー」

性：男

武器：大鎌（太刀）

好きな物：越後の鏡餅　干し柿

嫌いな物：ウニ　伊勢えび　カニ

備考：生後４２３ヶ月。黒い死神と呼ばれる男、犯罪集団「死神衆」の一員。家事全般はてんでダメで掃除も全く出来ず団員から白い目で見られている。非常に高い戦闘力を持っているが出番がない、趣味はスカイダイビングとサーフィン、ゲートボール。３匹のプーギーとランポスを飼育している。

シド　「このデータ、ロックでライムにジャムっとけやー！」

性：男

好きな物：娘のユキ

嫌いな物：妻のサツキ

備考：陶器作りが趣味、ＦＢＩに所属していた。娘に異常なまでの愛情を注いでいる。

ちなみに×1。家は八百屋で妻とは野菜で喧嘩をすることも……

朝霧の帰還

ハイネ『ゼノンさん、オレたちも』
シン『いくらスティングさんたちでも、２匹同時はキツいですよ』
飛び立った気球はヴェルガンデをふりきり雲の下辺りを飛行していた。
いくらヴェルガンデといっても、ここまでの跳躍力はないだろう。
ゼノン『今さら戻れっていうのか。それにお前たちはヴェルガンデについて何も知らんだろ。昨夜のゲリョスとはわけが違う』
ヴェルガンデ、響狼と呼ばれる牙獣種。特徴は白く美しい毛並みと、赤い目。常
にオスとメスが一対となって行動しておりその長けた連携攻撃は人のそれも比
ではない。また肺活量がすさまじく、繰り出される空気砲は弾丸の如き破壊力を
持つ。さらに脚力も異常なほど発達しており、それをいかした跳躍や足蹴も主要
技の一つ。“火竜の牙獣種版”とも例えられたりする。額に角があるのがオスで
、尾の先端が二股に別れているのがメス。主に密林奥地、樹海奥地などに生息す
る。
ゼノン『アイツらもだてにＨＲ６　を名乗っているわけでは　ない。ここはアイツらに任せる』
確かに、一瞬とはいえシンやハイネもヴェルガンデと直接対峙したのだ。その時に悟ったはずだ。このモンスターはオレたちの手におえるレベルではないと。
しかしだからといって、そこで諦めてしまうようでは主人公として失格である。

ゼノン『お前たちのやるせなさも　わからんではないが、お　前たちにできることは何もない』
シン、ハイネ『…』
ゼノン『強いて言うなら、今は生き延びて次に活かせ』

アウル『スティング、どうするよ？回復薬とかもう全然残ってないぜ』
スティング『コイツらを討伐する気は　毛頭ないさ。オレたちはゼノンさんたちが逃げ切るまでの時間を稼げばそれでいい』
ステラ『もう、大丈夫』
残った3人は、現在ヴェルガンデと交戦中だった。
とは言っても、3人はセルケトを討伐した直後だ。所持しているアイテムだけで
倒せる相手ではない。
アウル『でも、これじゃオレたちが逃げ切れるか？』
先ほどの説明の通り、ヴェルガンデは脚力が異常に発達している。
そのため、ハンパない速力を有する。さらにヴェルガンデは2匹いる。いくらスティングたち
であっても、このヴェルガンデの追跡を振り切るのは不可能だ。
考える間もなくヴェルガンデが襲いかかる。
強靭な前足でのクロー。
スティングはガンランスを地面に突き刺し、その状態で砲撃する。
その衝撃で左
に大きく跳び、ヴェルガンデのクローを回避した。
スティング『くそ、埒が明かねぇ。アウル、ステラ、お前ら閃光玉とか余ってねぇか？』
アウル「あったらとっくに使ってるよ』
ステラ『持ってる』

おお、ダメ元で聞いてみたスティングであったが、なんとステラが持っていたとは。やはり言うだけ言ってみるべきだな。

てゆーか、あるんならもっと早くに言ってもらいたいな、ステラ。

スティング『何個？』

ステラ『一つ』

閃光玉と言っても、モンスターの目を眩ませられる時間はほんの数秒。ましてやヴェルガンデは2匹いる。つまり逃げるなら、一つの閃光玉で2匹のヴェルガンデをひるませなければならない。

アウル『うわっと』

アウルは後方からのヴェルガンデの攻撃を、回転を加えた跳躍でかわした。

続いてもう一方のヴェルガンデがスティングに空気のブレス。ヴェルガンデの空気ブレスは無属性であるが、威力が凄まじい。

スティング『っ…』

スティングは砲撃で空気ブレスを相殺する。

爆煙で一瞬視界が閉ざされたが、ヴェルガンデはそれを突き破って、スティングにクロー。

スティングは槍で受け止める。そしてそれをうまく受け流し、ヴェルガンデの腹下に回り込んだ。

スティング『オウラッ』

盾を捨て、両手で槍を持ち、ヴェルガンデの腹に槍でフルスイング。

ヴェルガンデ『ウガァ』

軽く吹っ飛んだ。今の一撃は大きいダメージとなったのは一目瞭然だ。

スティングはすぐさま盾を拾い上げ、次の攻撃に備える。。
もう一方のヴェルガンデはスティングに吹っ飛ばされた方のヴェルガンデに駆け
寄っていく。
スティングに吹っ飛ばされたヴェルガンデはオス、駆け寄ったヴェルガンデはメ
スだ。
アウル『ステラ』
ステラ『うん』
うまくヴェルガンデが2匹並んでくれた。
ステラは手にしていた双剣を背に納刀し、閃光玉を取り出す。
倒れていたヴェルガンデも体勢を立て直し、再び攻撃姿勢をとる。
スティング『今だ、ステラ』
2匹がこちらを向いた。
スティングの合図を待たずして、ステラは閃光玉を投げた。
瞬間に強烈な閃光が辺りを満たした。
見事、2匹のヴェルガンデの目を眩ませた。
スティング『さっさとずらかるぞ』
スティングが、ヴェルガンデがピヨッたことを確認し叫んだ。
3人は木々に紛れてその場から退散する。

アウル『ゼノンさんの気球に乗せ　もらうつもりだったのに、とんだ災難だよ…』
というアウルの呟きがあったことは、アウル本人しか知らない。

時刻は午前9時くらい。
シンとハイネを乗せたゼノンの気球は、無事ティーズに到着した。
無事、という
わけでもない気はするが。

シン『…』
ハイネ『…』
スティングたちに協力できなかったことがやや心残りではあったが、久しぶりのティーズだ。
気球はゼノンの屋敷の裏側にある離発着場に着陸する。屋敷の裏にこんなものがあるなんて、とシンとハイネが驚く。さすがは何の通った運び屋。ティーズに到着する直前にココがスキル“以心伝心”を使って連絡を入れていたので、その離発着場では多数のアイルーが出迎えてくれた。
ヒメ『おかえりなさい』
まずはこのアイルー。
純白の毛並みに、首に水色のスカーフ。尻尾によくわからんアクセをつけたこの屋敷最高位のアイルー、ヒメが恭しく一礼した。
ゼノン『ああ、ただいま』
ゼノン、ココ、シン、ハイネの順で気球を降りる。
そこにいたアイルーたちにハイネは驚かさせされる。ハイネも、アイルー養成所であるシドの店で育ったのだ。だから少しくらいアイルーを見る目はある。ここにいるアイルーたちは、皆レベルが高い。
ゼノン『気球の整備と点検をしておいてくれ。ワシもすぐに行く』
ヒメ『承知しました』
ゼノンからの指令を受けたヒメはアゴで他のアイルーたちに指示を出す。
それを機に待機していたアイルーが一斉に気球に群がる。
ココ『ニャ～、ヒメ姐。さっきヴェルガンデに襲われたんニャ。その前はゲリョスに襲われたニャ。久しぶりにクロノスに行ったけど

ニャ、あの店の店主は相変わらずだったニャ～』
ヒメ「はいはい、後でゆっくり聞かしてもらうから』
ゼノンの後にアイルーのヒメとココ、その後にシンとハイネが続く。
ゼノン『ヒメ、小僧どもは帰ったか？』
ヒメ『いえ、クエストからは戻られたみたいなんですが、屋敷には帰られませんでした』
ゼノンの屋敷には、ゼノン本人とアイルーたちの他にまだ誰かが住んでいるらしい。クエストに行く前のヒメも、クロノスで出会ったカナリアもそれを促すようなことを言っていた。
ゼノン『お前たちはこれからシドのところに行くのだろ』
ハイネ『はい。クエストの予定日時がだいぶ過ぎてるから報酬金はもらえないと思いますけど。一応、このサボテンの花だけでも届けようと思います』
その後、シンとハイネは世話になったゼノンとココたちアイルーに別れを告げ、
ゼノン邸を後にした。別れ際にゼノンも『クエストに行きたければ、また送ってやる』と言ってくれた。その時の2人は、ただ純水に嬉しかった。ハンターだと認めてもらえたような気がしたのだ。
ハイネ『お～い、シド～。いるか～？』
シドの店ストレイキャッツの扉を蹴り開ける。
時間としては、まだ開店前である。
シド『ハイネ～、それにシンちゃ～ん。おかえりなさ～い』
語尾を伸ばす口調はやめてほしい。吐き気が…。シンは相変わらずシドの口調には慣れない。
開店前なので店内に人はいない。シドを加えた3人はハイネのお気

に入りの席で
あるテラスの席に腰をおろす。
シン『遅くなってすいません』
ハイネ「まぁ、いろいろとあってな。報酬金はいらねぇから、サボテンの花だけは渡しとくよ』
そう言って2人は、10個のサボテンの花を出す。
シドはそれを見て目を瞑った。それから数秒。
シド『サーシャには会った?』
思いがけない質問に、ハイネは脳ミソを揺すぶられたような感覚に見舞われた。

選択と必然

シド『サーシャには会った？』
突然のシドの思いがけない質問に、ハイネは驚きをこえて、脳ミソを直接揺すぶられたような感覚に見舞われた。
その時のシドの口調もマジだったことに、この質問の真意が込められている。
ハイネ『どういう意味だよ？』
漠然としたようなシドの質問に、ハイネも一瞬戸惑いを見せる。
シド『言葉の通りよ。あの子に　会ったの？』
ため息と同時にいつもの口調に戻った。
ハイネ『じゃあまさか、オレを砂　漠のクエストに行かせた　のは、オレとサーシャを会わせるためか？』
シド『それは考え過ぎよ。まぁ　、そうなったらいいなと　は思ってたけど。それよりどうなのよ？』
なかなかシドの言葉に核心が見えない。
シンに関しては、『またオレ、邪魔なんじゃね？』という状況である。
ハイネ『会ったよ。ゼノンさんが　急用でクロノスに立ち寄　ったからな。クロノス行ったら、帰らないわけにいかないし』
ハイネは、クロノスのあの食堂“猫まんま”に行くことを『帰る』と言った。
やはり、ハイネにとって猫まんまは帰るべき場所なんだろう、とシンは感じた。
シド『そう。で、何言われたの？』
ハイネ『そこまで聞くか？』
シド
『もちろん。私とアネキはアンタたちの保護者だからね』
アネキというのは、シドの姉にあたるエマのことである。現在はサ

ーシャの義理
母であり、クロノスで“猫まんま”という食堂を切り盛りしている。
もちろんエ
マは、ハイネにとっても義理母である。
ハイネ『…』
ハイネがクロノスの猫まんまでサーシャと交わした会話は、シンすらも知らない。
シドなんかに話すべきか。ハイネは考えあぐねる。
ハイネ「…連れていけって、言わ　れた』
思いきって打ち明けた。
サーシャとはいろいろ話したけど、まとめた肝要な趣旨はこれであろう。
シド『ふ～ん、で、アンタはな　んて言ったの？』
思いの外薄い反応だ。
安心したような、少しイラッとするような。
ハイネは言葉を続ける。
ハイネ『断ったさ。シドだって知ってんだろ、サーシャがハンター嫌ってんの。それに例えこのティズに連れてきたとしても、オレはシンとクエストに出っきりだ。ずっとサーシ　ャを待たすことにる。うせ待つなら、クロノスの猫まんまでエマといっ　しょに店をやってる方が　ずっとマシだ』
長々とハイネが言い訳に似た理由を語る。
ハイネも、一応はサーシャのことを考えた上での結論だ。現在の過程がどうであ
れ、今はこれがベストな考えと思っている。
シド『あっそ』
シドがエプロンのポケットをごそごそして、２つの封筒を取り出す。
シド『私もアンタたちの保護者って名乗ってる身だけど、アンタたちの関係にまで首を突っ込むつもりはないわ。でも、もう少しサーシャのこと考えてあげてもいいんじゃない』

ハイネ『…どういう意味だよ』
シドが取り出した封筒、それは今回のクエストの報酬金２０００ｚだった。
シンは、クエストの制限期間が過ぎていたので報酬金はもらえないものだと思っていたので、少し驚いている様子だが、ハイネは仏の表情でうつむいている。シドの言葉の真意を必死で理解しようとしているのであろう。
その後、報酬金を受け取った2人はストレイキャッツを後にし、これまた久しぶりとなる自室に戻った。
シン『あのまま帰ってきたけど、よかったのかよ』
ハイネ『問題ねぇよ。シドの説教なんざ聞く義理もないしな』
場所はハイネの部屋に変わり、2人で駄弁っていた。考えてみれば、2人が互いの部屋を訪れるのは初めてである。
シン『でも、サーシャさんのことだろ?もっと真剣に考えてあげた方がいいんじゃないのか?』
ハイネ『シドみたいなこと言わないでくれよ』
意外にすっきり片付いているハイネの部屋に、シンは感心する。机の端には写真たてが一つ。飾られている写真は、クロノスの食堂“猫まんま”の前で撮られたものだ。写っているのはエマ、シド、サーシャ、ハイネと、数名の知らない人たち。
ハイネ『いつかクロノスに帰る』写真に目がいっていたシンを見て、ハイネが言った。
やはりハイネは、クロノスに『帰る』と言った。
シン『いつかって、いつになる　んだよ』
ハイネ『目的を達してからだな』目的、ふらふらしているように見

えるハイネにも、ちゃんとそれがあったのだ。
シン『ふ～ん、目的か。何なんだよ、目的って？』
目的と言われて、その内容が気になるのは当然である。
それを質問したシンに、ハイネは待ってましたと言わんばかりに胸を張って答えた。
ハイネ『“刀衆”になることだ』
シン『刀衆って、またスゲー目　標だな。ヘタすりゃ犯罪　者だぞ』
刀衆とは、正式名称“砂の狩人刀七人衆”のことである。
砂の狩人刀七人衆とは、砂の村クロノスを創立した七人の賢者が持っていた七本
の大剣を受け継ぐハンターのことである。
受け継がれし賢者の大剣は、クロノスの出身のハンターに委ねられ、その誇りと
品格を守る。
もちろん、大剣そのものは最高レベルの武器であり、現在の砂の狩人刀七人衆も
全員がブラックリストハンターである。
※砂の狩人刀七人衆という名ではあるが、その七人が組織的な関係を持つことは
ない。
例えをあげるならば、現在のギルドクロノス支部ギルドマスターである、アーノ
ルド・イルミシェフがその一人である。
シン『刀衆になるのはいいけど、誰から刀を奪うつもりだよ？』
賢者の大剣を受け継ぐ砂の狩人刀七人衆のシステム。一見、『受け継ぐ』と言え
ば穏やかに聞こえるかもしれないが、実際は違う。
賢者の大剣の継承の方法、それは、『殺し合い』である。砂の狩人

刀七人衆に入
るには、現在の砂の狩人刀七人衆のメンバーをタイマンで殺し刀を
奪う。これが
砂の狩人刀七人衆になれる唯一の方法だ。
理由は簡単だ。より強いハンターの手にそれを渡らせるためだ。
ゆえに、先ほどシンが『犯罪者になるかもしれない』と言ったのだ。
ハイネ
『そうだな。正直言うと、もう誰から刀を奪うか決めてんだ』
現在の砂の狩人刀七人衆のメンバーは、先ほどのアーノルド・イル
ミシェフを含
め5人まで判明している。その5人のうち、ハイネが狙う人物はす
でに決まって
いると言う。
シン『誰だよ?』
ハイネ『またいずれ教えるよ』
砂の狩人刀七人衆の数名は、あの盗賊団“クモ”と関わりがあると
噂されていた
りもする。
ハンターは階級が上がるにつれ、裏社会との関わりも増えていくの
だ。
ゆえに、ブラックリストハンターと呼ばれるのだ。
ハイネ『オレたちヴェステンフル　ス一族も、その目標は刀　衆だ
ったからな。オレが刀衆を目指すのは必然な　んだよ』
シン『でもな、ハンター嫌いの　サーシャさんがそれ聞い　たら怒
ると思うぞ』
ハイネは言葉をつまらした。今、シンが言ったことがもっともだと
思ったのだ。
しかし、ハイネの決意も中途半端なものではない。何せ、一年前、
ハンターをと
るかサーシャをとるかの選択で、ハンターを選んだのだから。

シン『刀衆になるほどの力を手に入れたら、復讐の誘惑　にかられると思う。ハイネは一族を失っているから』
ハイネのヴェステンフルス一族は盗賊団“クモ”によって滅ぼされた。
砂の狩人刀七人衆になれば必然的にブラックリストハンター以上の実力が必要になる。
そうなれば、“クモ”とも対等の実力を持てるのだ。そうなった場合、人の心理
とはどう働くものなのか。
ハイネ『確かにそうかもな。できるだけ復讐の念は抱かないようにしてるけど』
とはいっても、ハンターである以上、実力向上をはかるのは当然なわけで。難しい話だ。
ハイネ『ああぁ、もう、重い話終了。集会所行こうぜ、集会所』
黒ずんでいた空気を取っ払って、ハイネが立ち上がる。

専門用語集（前書き）

これからちょくちょく増やしていきます。

専門用語集

ギルド：ハンターを統括するところ、黒い噂が絶えない。ハンター同士のぶつかり合いがあっても干渉しない。ギルバートが家に帰りたいくない為、住み着いている。

いろんなジャンルに手を出し、猫探しから生物兵器撃退などとほとんど何でも屋と化している。

最近では食品系にも手をだしている。

ギルドの社長はＳＭクラブに通っている噂もある。上層部はだいぶ腐敗しておりスク水ニーソのメイドを囲ってウハウハしているヤバイ奴。

頑張るハンターには武器の提供もするが碌なものがない。

惑星ｐｅｗ：銀河の果てにありシン達が住む星、太陽の3倍の面積がある広大な地。

かつて地球を追われて宇宙に散って行った人間達の一部が到着したのがここ。

気候や酸素濃度などは地球に酷似しているが凶暴なモンスターが徘徊する。

人間達が来た時には一度文明が崩壊したあ後がありチャバネカイザーの死骸が発見された。

キングアゲハ蝶：全長３００ｍの世界で2番目に大きい蝶、モスラではない。

天敵はファントム土蜘蛛、鱗粉には猛毒が含まれている。亜種として水中にいける物や全身を金属で覆った物もいる。触手を使ってジ

ャーマンスープレックスをする。好物はドスランポスとリオレイア。繁殖力は高い方で年間で1万匹生まれて9千匹はファントム土蜘蛛に食べられる。

ブリーフ・フェニックス：惑星ｐｅｗが誕生した頃からいるブリーフを履いた伝説の不死鳥。ブリーフが脱げたり破れると死ぬ。全長は２０ｍとバケモノ昆虫モンスターに比べれば小さい方。知能は非常に高くこの星で一番賢く話すことも出来る。人類は４番目。亜種としてＴバックフェニックスやトランクス・フェニックスも居る。好物は伊勢えび、酢昆布。
実は鳥目。あと臭い、濡れた犬のような匂いがする。

登場人物　裏設定６（前書き）

ゼノン追加したよん

登場人物　裏設定6

ケネス・レウスウォール　「待ってろ俺のヴァニラ！　今日は骨の髄までシャブシャブしてやるぜ！」

性：男

武器：ボウガン

好きな物：コッペパン　自分自身　ヴァニラ

嫌いな物：フランスパン　食パン　アンパン　カレーパン　豆パン　ベーコンパン　黒糖パン　白桃

備考：パン食至上主義のコッペパン派、ヴァニラが好きな子。人生のギリギリのラインを生きる青年だが既にアウトなラインにいる。銀髪の天然パーマでブラックリストハンターで実力は相当。しかしタル爆弾で自爆する事もある。
チャバネカイザーの子供チャバネベイビーを飼育中。
趣味はパン作りと猫集め、時々チャバネベイビーに食べられる。
炎と影を扱う。
座右銘は「朝食はコッペパン」
兜の代わりにコッペパンを乗せて狩りに行く時もある。

技：燃えよ肛門（パイロキネシス・ゲート）

全身を炎上させ、尻を敵に向けて熱線を撃つ、破壊力は城を潰せるほどで一回使うとしばらく動けんくなる。

ヴァニラ・レイアリス　「ケン……アンタ……あざとい」

性：女

武器：ボウガン

好きな物：バニラアイス　バニラオーレ

嫌いな物：チョコアイス　アイスバーガー

備考：アイス至上主義のバニラ派、ケネスをケンと呼ぶのはケネスがそう呼んで欲しいオーラを察したからである。どこか抜けているケネスを一生懸命にサポートする健気な子。
趣味はアイス作り、近親相姦で生まれた少女、触手に強姦されていた所をケネスに助けられる。
バスケで4番をやっていた。休日はボクシングとネットサーフィンをしている。

技　V字開脚電磁砲（ヴィクトリー・レールガン）

尻を地面に着けて足をV字に開き放つ、空中では逆さまになり足をV字に開き電磁砲を放つ。

ゼノン

性：男

好きな物：食パン　チョコアイス　わらびもち

嫌いな物：コッペパン　バニラアイス

備考　じじぃ。ややホモだが昔は女性にモテモテだったらしい。無類の美少年好きである。全長２ｍのおたまじゃくし「御タマタマじゃくし」を飼育している。珍しく生存。趣味は歌舞伎を見ることとストリートダンス、プロのバイオリニスト。被虐嗜好があるらしく孫のリーシャにすごく嫌われている。息子とはここ数十年、連絡を取っていない。

キラ・ヤマト　「俺はギリギリのラインを生きるんだおー！」

好きな物：白桃　ファンタ　コッペパン

嫌いな物；グミ　マトリョーシカ

備考：最強のハンターで白銀の竜王という異名をもつ。チャバネカイザーと単身で交戦した。敗北かつて人体改造を受けており、細胞にはブリーフを履いた伝説の不死鳥「ブリーフ・フェニックス」の細胞を組み込まれかなりの長命となった。出生は３０００年前、２人目の妻のラクスは最近死亡した、現在行方知れずである。古代の村、ジャンボ村出身でその村長が残した日記がある。

――――第一人者の死と、盗まれた技術。

彼女が救ったあの男、伝説的なハンターと技術研究用のフェニックス、唯一の商品であった技術の専門性を失い深刻な経済危機にあったジャンボ村にとって生活の糧としてのハンターは、必然的な結論だった。私は、あの男を利用し、その為に彼女を利用した。是非もない。

あの男にしか、できなかったのだから。

帰還するハンターたち

ハイネ『密林、解放されてんじゃん』
集会所でのハイネの第一声がこれであった。
イク『アレ、ハイネくんシンくん。帰ってたの？』
たいくつそうにテーブルに突っ伏していたイクが、２人を発見して歩み寄る。
シン『イクさん』
掲示板の前にいた２人のもとに、青いメイド服がトレードマークのイクがくる。
今は集会所はがらがらだ。食堂と一体になっているこの集会所であるが、人の姿
はほとんどない。
もう一人の受付嬢であるサクは、数少ない利用者のハンターと何か話している。
ハイネ『帰ってたって、オレたちがゼノンさんたちとクエストに行ってたの知ってたのかよ？』
イク『当たり前よ。だいぶ騒ぎになったんだから』
騒ぎとは何のことか、シンとハイネは顔を見合わせる。
３人はテーブルについた。その６人掛けのテーブルの片側の端にイクが座り、その隣にハイネ、その隣にシンが座った。
集会所の内装は、ゲーム中の集会所を思いっきり広くした感じで、ゲーム中にあ
るあのテーブルがいっぱい並んだような風景である。
イク『アンタたち、本当にあのゾルディックのじいさんの気球に乗ったの？』
ゾルディックのじいさん、つまりゼノンのことだ。
シン『はい、砂漠やクロノスまで乗せてもらいました』それがどうした、という感じのシンとハイネだが、イクはアゴに手をあてて何

かを考え込んでいる。
ハイネ『どういうこと?』
イク『いやね、ゾルディックじいさんって、運び屋としてはそれなりに有名でしょ。でも、見た目通り堅物でね。実力のあるハンターでも、そういう意味では気球に乗せないことがあるのよ』
シン、ハイネ「確かにゼノンって見た目　怖そうだけど、別に堅物ってことはないと思うけどなぁ」
2人はイクの言葉に違和感を覚えた。実際に会った2人だからこそ、感じる違和
感だった。
しかし、今はイクの話を聞くことにした。
イク『そんなじいさんの気球に　誰かが乗った、って噂が広まってね。じいさんの気球に乗る＝じいさんに認められる＝凄腕ハンター、みたいなのがあるから、みんな気にするのよ。しかも、それがなんルーキーって判明するやいなや、ちょっとした騒ぎになっちゃったってわけ』
なるほど、話の筋はわかった。
とりあえず、ゼノンの気球に乗せてもらったシンとハイネはすごいってことだ。
イク『そこで、私が個人的に調　べてみたら、そのルーキーってのがキミたち問題児2人組ってわかって、ちょっとマジで驚いてんのよね～』
確かに、ゼノンの気球に乗せてもらうことはハンターとして名誉なことである。
それはクロノスで出会ったカナリアや、帰還途中の密林奥地で出会ったスティン
グたちも同じようなことを言っていた。
さらに、2人はゼノンとの別れ際に『またいつでも来い』と言われたのだ。
シンとハイネはそれを思い出し、少し胸を張れる気分になった。

その時、集会所の船着き場のある出入口から2人のハンターが帰ってきた。
イク『ヴァニラ、ケン。今帰り?』
イクがその2人のハンターを発見し、手を振る。
同時にシンとハイネの視線も向けられる。
ケネス『おう』
ヴァニラ『ただいま』
2人の男女のハンターは手をあげて応答する。
イク『何か収穫あった?』
ケネス『まったく、だ』
ヴァニラ『全然…』
ケンと呼ばれるハンターは両手を肩の位置まであげ手のひらを上に向けたポーズ
をとり、ヴァニラと呼ばれるハンターは首を横に振る。2人組のハンターは、そ
のままイクたちを横切り、集会所を出ていった。
気のせいかもしれないが、一瞬、ほんの一瞬、ケネスがシンを見て驚いたような
表情を見せた…気がした。
ハイネ『なぁ、イク、今のハンターたちは?』
ハイネは妙に今の2人のハンターが気になった。何かが、心底で渦巻いているよ
うな感覚。それはシンも同じだった。
イク『そうね…、のら猫ってか、迷い猫ってか…』
イクが妙な言い回しを考えている。
サク『もう、イクってば、ちゃんと教えてあげればいいじゃない』
そう言ってピンクのメイド服のサクが現れた。
さっきまでサクと話していたハンターたちもいなくなり、この集会所にはシンた
ちと、別のテーブルで飯を食っているもう一組のハンターたちしか

いなくなった
。
サク『彼らは、【つがいの猫】って呼ばれてるブラックリストハンターよ。聞いたことない？』
サクが丁寧に教えてくれる。
【つがいの猫】、もちろんシンやハイネも知っている。基本的にブラックリスト
ハンターは通り名で知られ、すべてのハンターの頂点を行く者として、その全員
が有名である。
【つがいの猫】とは、ケネスとヴァニラを合わせた総称であり、個人名ではない
。
シン『【つがいの猫】って、ライトボウガンの使い手ですよね？』
サク『うん。【金猫のレイアリス】、【銀猫のレウスウォール】っていう2人のブラックリストハンターの総称よ』
レウスウォール、これケンくんのことです。よろしくイク『この前、ハイネくんが密林でセルケトに襲われただろ。あの後、密林にセルケトを討伐しに行ったのがコイツらよ』
すると、ケネスたちと入れ違いに、今度は村に通ずる出入口から別のハンターが
集会所に入ってきた。
集会所の門をくぐる前から何か叫んでいる。
何事かと、4人は顔を向ける。
イク『ちょっとロアノーク、アンタ何の用よ』
入ってきたハンターは、ロアノークというらしい。
『うるさい奴』という第一印象を与えるこのハンター、見た目で言えば、がたい
はいい。顔や腕に目立つキズもなかなかにいかす。
ただ、うるさい。

ロアノーク
『用も何も、うちの馬鹿弟子3人はまだ帰ってないのか?』
ああ、ホントうるさい。
常人の声帯ではないだろうというぐらい、声のボリュームがデカい。
イク『ああ、もう、うっさい。何?弟子?スティングた　ちのこと?ならまだ帰ってないわよ』
大げさに耳をふさいで、イクが言い返す。
耳をふさいでいるのは、イクだけじゃない。サクを含め、シンやハイネ、そして
もう一組いるハンターたちも耳をふさいでいる。
ここで言わせてもらう。この男、ロアノーク。中前です。
ロアノーク『ったく、もうすぐ時間だ　ってのに何してんだ』
って、今、スティングって聞こえたような。
ハイネ『スティングって、あのス　ティングさん?』
サク『そうそう。2人が初クエストに発つ時にいた3人組の…』
やはり、イクやロアノークが言うスティングというのは、ハイネやシンが思い浮
かべたスティングと同一人物のようだ。
そういえば、遭難しかけた密林奥地でスティングたちが、師匠がいると言ってい
た。
ということは、スティングたちの師匠というのは、このロアノーク?
ロアノーク『何だ、少年たち。オレの　馬鹿弟子どもを知っているのか』
イク『声デカいってば』
やはりこのロアノークという男、スティングたちの師匠らしい。師匠という柄で
はなように見えるいが。
T・M・ロアノーク、通称“ティー”で呼ばれる、これでもブラッククリストハン

ターで、スティングたちの師匠。ＨＲ８という階級を持ち、現在は新人育成を心
がけている。年齢は不明。
シン『はい、実は…』
シンとハイネは、密林奥地でスティングに助けられたことをロアノークに簡潔に
聞かせてやった。
ゼノンといっしょに助けられたこと。一夜をともに過ごしたこと。
響狼ヴェルガンデから守ってもらったこと。
これにはロアノークだけでなく、イクやサクまで驚いていた。
サク『え、ヴェルガンデに襲われたんですか』
イク『しつこいぞ～、アイツら。ヴェルガンデって頭いいから、顔とか匂いとか覚えられたら、どこまでもストーキングしてくるからな』
などとイクが、嘘か本当かわからないリアルな脅しをかけてきた。
ロアノーク『アイツら、ヴェルガンデ　なんかと？まったく…』
ロアノークが頭をかく。
イク『アイツらバカだからね』
と、ロアノークも加わり、スティングたちのネタで盛り上る。

『誰がバカだって？』

と、背後からの声。
皆、一斉に振り向く。
ハイネ『スティングさん』
スティング『よぉ』
ロアノーク『よぉ、じゃないわ。バカ　たれが』
まぁ、とりあえず、スティング、ステラ、アウル無事帰還。

ヴァニラ『ただいま～』
ケネス『今帰ったぞ～』
集会所を出たケネスとヴァニラが、自宅と思われる家に帰った。
ヒメ『おかえりなさい。お2人　とも、予定より遅かったので心配していました』
純白のアイルーが2人を迎えてくれた。
ちょっと待てよ、ヒメってアイルー、確か…。
ゼノン『遅かったな』
そこに現れたのは、あのゼノンだ。
ということは…。
ケネス『いろいろあってな』
ゼノンの屋敷には、ゼノン本人とアイルーたち以外に、まだ誰か住人がいるという話だった。
つまり、それはケネスとヴァニラだったということだ。

一番星

ゼノン『長かったな、どこ行ってた?』
ゼノンの屋敷で、ゼノンとアイルーたちとともに暮らしている人物、それはケネスとヴァニラであった。
ケネスとヴァニラ、はてはゼノンと、これらの人物の関係にいたっては、今ここで話すには場違いなところがあるので、それはいずれ時がくれば語らせてもらうことにしよう。
ケネス『話はあとあと。あ~、しんど~』
ヴァニラ『だらしないわね』
ゼノンの屋敷は集会所から南にいった丘の上に建つ。洋風の館で、人3人とアイルーたちで住むなら、申し分ない大きさだ。
一階部分は気球の整備場、二階部分は住居スペースになっている。またこの丘を含む辺り一帯はすべてゼノンの所有する敷地であり、この館の住人たちはこの辺りでは結構有名だ。
家に入り、2人はすぐさま腕、銅防具をとった。
ヒメ『何か食べます?』
ケネス『そうだな。何かサラッといけるもの』
ヴァニラ『ケイ。あたし、先にお風　呂入るわよ』
ケネスはヒメとリビングへ直行し、ヴァニラは自室に戻って風呂のしたくを始めた。
以前にも言ったが、ヴァニラはケネスのことを『ケイ』と呼ぶ。理由は不明。

ケネス『あ～、マズったな～。先に風呂とられた…』
リビングの椅子に座り込み、風呂への後悔をあらわにする。
ヴァニラ『ケイ、覗くなよ』
ケネス『覗かねぇよ』
ぐったりと椅子にもたれかかるケネスの後ろをヴァニラが横切っていく。
そこへゼノンがくる。同時に数匹のアイルーも入ってくる。
ココ『アニキ、おかえりニャ』このアイルー、ココ。この前、シンやハイネと砂漠まで動向したアイルーだ。
アニキとは、もちろんケネスのことである。ケネスはアイルーたちからは『兄』と呼ばれているのだ。
ココはテーブルにのぼって、ケネスの前にくる。
ケネス『コラココラ、机の上にのぼったら、またヴァニラに怒られんぜ？』
ココはハッとしてテーブルから飛び降りる。
アイルーたちにとってケネスが『兄』ならば、当然ヴァニラは『姉』にあたる。
また、この家で頂点を座するアイルーヒメも、その他のアイルーからは『姐』と呼ばれている。
力関係が難しいのだ。
ロロ『アニキはどこに行ってたんニャ？』
ケネスの隣の椅子にのぼったアイルーがケネスに問いかける。
ケネス『密林』
一言だけ答える。本当に疲れているのだ。このまま目をつぶれば、夢のワールドへ昇天できそう。
しかし、ヒメが何か作ってくれてるようなので、それを食べないま

ま昇天するこ
とはできない。
ゼノン『さて、少し話でもいいか？』
ゼノンがケネスの向かい側の席に座る。
ケネス『はぁ？止めてくれよ。こっちは3日寝てないんだぜ』
マジで、ガチで疲れているのだ。3日も寝てないんだから。
そんな時に、ゼノンの重々しい口調の子守唄なんか聞かされたら、
眠気ぶっ飛ん
で疲れ倍増だ。
ココ『ニャ～アニキ～。オイラ　たち、クロノス行ってきたんだニャ～』
ココがロロの乗っている椅子によじ登って、ケネスに無邪気な眠り
の妨害を働く
。
ケネス『お前たちも～』
ケネスは左手をココの頭にのせて押さえ込む。
ココはかわいくもがく。
ヒメ『お待たせしました』
ヒメはカップを盆にのせて運んでくる。
カップの中身は春雨スープだ。
ケネスは体を起こして『いただきます』と両手を合わせる。
スープをすするケネスの頭に、また別のアイルーがのしかかる。
キール『あ～、いいな～アニキ　～』
ケネス『やんねぇぞ』
ヒメ『そう言うと思って、いっぱい作りましたよ』
ケネスとゼノンの周りで群れているアイルーは、ヒメを除いて5匹。
そのすべて
が、ケネスのカップを強奪しに襲いかかる。
そんなやんちゃなアイルーたちを、手慣れた手つきでヒメが制する。
ゼノン『“クモ”が出たようだな』

ゼノンが切り出す。
ケネスは無反応のままスープをすする。
周りでは、ヒメの持ってきたスープを5匹のアイルーたちが奪いあっている。
ゼノン『ギルドから仕入れた情報だ。どうせ何か探りを入れていたんだろう?』
ゼノンは立ち上がる。
ケネスはゼノンが立ち上がったのを見越して、口を開いた。
ケネス『止まらねぇぜ、オレ。…時間ねぇんだから』
ケネスの言葉にゼノンは、先ほどのケネスのように無反応のまま部屋を去っていった。
ケネスは空になったカップを置いて、ゼノンの背を横目で見送る。
ヒメ『でも、焦っちゃダメですよ?兄様』
ヒメがケネスの前にコーヒーを差し出す。
ケネスは『おう』と返事をして、そのコーヒーを口へ運んだ。
時は夕暮れ、時計はちょうど2つの針が真ん中で直線となり、文字盤を真っ二つに割っていたころ。
空をおおっていた分厚い雲も次第に過ぎ去り、この時間になってようやく空に青が戻ってきた。台風一過とでも言うのか。空はいつも以上に澄みわたり、天空の彼方には雲の海を飛び交う翼竜種の姿も確認できたほどだ。
そんな空の下、シンとハイネの姿はあった。
シン『晴れてきたな』
ハイネ『ああ、明日にはまたクエストだ』
生暖かい風が2人を包む。それは後々考えてみれば、2人をここまで導いていたのかもしれない。

ハイネ『なんか来ちまったな、ゼノンさん家』
2人はゼノン邸の近辺に来ていた。
この区域はすべてゼノン所有の敷地で、ティーズの住人からは『猫のたまり場』
と呼ばれている。
呼び名通りこの辺りにはアイルーたちを引き寄せる何かがあるらしく、まれに野
生のアイルーやメラルーが紛れ込んでくる。
普段この『猫のたまり場』は、公園として解放されている。
シン『なんだか、気になって』
シンがボソッと呟く。
主語と目的語がない言葉だったが、ハイネにはその真意がわかった。
ハイネ『さっきのハンターのことか？実はオレも』
2人が抱いた違和感とも違う何か心の底で渦巻くモヤモヤ。その正体はわからな
いが、原因はわかる。
先ほど、2人の前に現れたハンター、【つがいの猫】の片割れ、レウスウォール
、つまりケネスのことである。
しかし、2人がケネスの住むゼノンの屋敷に来たのはただの偶然だ。
何せ2人は
ゼノンの屋敷にケネスが住んでいるということをまだ知らないのだから。
2人がこのゼノンの屋敷近辺に紛れ込んだのは、風の導き、ただそれだけのはず
だった。

ティーズ、イースト地区、エストハイム教会…
ティーズ随一を誇るこのエストハイム教会。高い塔の上に設置され

た鐘が一際目
を向けさせる立派な教会だ。大聖堂もきれいで広々とし、毎日多く
の礼拝者を迎
える。
そして今、その大聖堂の正面に向かって左側に設置されている巨大
なパイプオル
ガンを弾く少女の姿があった。
誰もいない大聖堂に、そのパイプオルガンの音が発せられ反響する。
少女『…』
突然、少女はオルガンから手を離した。そして何かを感じとったか
のように辺り
を見回した。
神父『どうしました?』
少女『…』
そんな少女に神父が声をかけたが、少女は顔を落とした。
少女『…出会うはずのない…出会ってはいけない魂たちが、出会っ
てしまった…』
そう呟くと再びオルガンに向き直る。しかし、鍵盤に触れようとは
しなかった。
少女の呟きに神父は一拍の間をおいて、その返答をした。
神父『神とは、いたずらが好きなお方だ』
栗色の髪をなびかせ少女は教会を出た。
空を見上げれば、そこには一つだけ、しかしはっきり確認できる光
が輝いていた
。

シン『あ、一番星だ。ホラ』
ハイネ『おお、やけに光ってんな 』
2人はまだ猫のたまり場にいた。
シンの指差す延長線上に光輝く星が。

2人は芝生に寝そべり、たった一つの星が支配する空をあおぐ。

ケネス『ん、星？こんな時間に珍しいな。ホラ、あそこ』
ヴァニラ『ホント、ずいぶん光ってるわね』
ケネスとヴァニラは屋敷の屋根に上って、空を見上げていた。
風呂上がりなのか、ケネスは頭からバスタオルをかぶっている。

サーシャ『…』
砂の村クロノスでは、サーシャが空を、一番星を見上げていた。
ここは例の夕日の丘だ。ここから見えるのは夕日だけではないということだ。

神父『出会うはずのない魂、出　会ってはいけない魂。それはキミもなんだよ、アリシア』
神父はオルガンを弾いていた少女アリシアが出ていき、無人となった大聖堂で、
神に祈りをささげていた。

黒い記憶

サク『お気をつけて』
翌朝、シンとハイネの姿は集会所にあった。
たった今、受付にて契約を済ませ、クエストにたつ直前だ。
ハイネ『おう』
シン『いってきます』
サクに背を向けシンとハイネは船着き場に向かう。
サクはその後ろ姿にやはり何か感じるものあるようだった。
イク『やっぱり似てるな、あの２人』
サク『うん。本当に』
イクもそれに共感し、記憶に残る過去の映像と現在のシンとハイネの後ろ姿を重
ねる。背を向け立ち去っていく姿が記憶の人物と重なるのだ。

２人は船着き場に出て、いざ湖へ繰り出す。
しばらく気球での移動が続いていたので、船（いかだ）に揺られる感覚は懐かしく
思える。
シン『え～と、今回のクエストは…』
ハイネがいかだを漕ぎ、シンはそこに腰を落としてクエストの詳細を記した用紙
を取り出す。

【肉食竜討伐“密林編”】指定地：密林
報酬金：２５００ｚ
契約金：５００ｚ
成功条件：ランポス２０頭の討伐
制限日時：２４時間

これが今回、シンとハイネが受けたクエストの詳細だ。無論、討伐クエストである。

多分お気づきではないと思うが、このクエストは2人が初めて受けた討伐クエストでもあるのだ。

今まで密林、雪山、砂漠と下位ハンターの基本になるこの3つの指定地をめぐり採取クエストを行うことで、少なからず経験をつんできた。

そして今回、それらの経験をいかすべく討伐クエストに踏みきったのだ。

ハイネ『とうちゃ～く』

いかだは波の勢いで浜に打ち上げられる。シンとハイネは白い砂浜に降り立ち、

いかだを波の届かないところまで引っ張りあげる。それが2人ではなかなかに重労働だ。前回はスティングたちがいっしょだったので、そう思うこともなかったのだが。

シン『ふぅ～、とりあえず、ランポス探すか』

シンが額の汗を裾でぬぐいハイネに同意を求める。

『そうだな』とハイネも一息ついて答える。

数種類あった討伐クエストの中でこのクエストを選んだのには、ちょっとした理由があった。2人とも、そろそろ武具の強化を考えているのだ。

少し早いのでは、と思うかもしれないが、2人とも両親が優秀なハンターであったため幼少のころよりそれなりの訓練は受けてきた。なので、ハンターとして最

低限以上の実力はある。
それに本編には書いていないが、練習やトレーニングという形で2人とも日々鍛
錬を怠っていない。
ハイネ『この手の鳥竜種は群れる　習性があっからな。群れ見つけんのが近道だろ』
シン『けど、ドスランポスに遭　遇したら終わりだぜ?』
ランポスを主とするこの手の鳥竜種は、ドスと呼ばれるリーダー格に率いられ群れをなす。もちろん、ドスは通常のものよりも高い戦闘ステータスを持っており、あらゆる意味で群れの配
下のものを統括することができる。今の2人の武具では少々厳しいのが現実だ。
ゆえに、武具の強化を考えているのだ。
2人は支給品をポーチにつめ、ランポスを目指して歩き始める。

イク『アンタたち、もう行くのか?』
シンとハイネがクエストに発って数時間後、集会所にてイクが声を張り上げていた。
ケネス『おはよーさん』
そこに現れたのは紛れもなく、あの【つがいの猫】だった。
銀髪のテンパがイクに午前のご挨拶をかます。
イク『昨日帰ってきたばっかなのに、元気だね~』
通常、ハンターは大きなクエストを終えると長期休暇をとる。と言うかハンター
には、クエストに出てかかった日程分、帰ってからはそれと同じ日数休養をとる
、というセオリーがあるのだ。
ケネスたちはセルケトの討伐に6日かけたので、それと同じ6日の

休養をとるの
が普通なのだ。
ヴァニラ『ホントよ。振り回されるこっちの身にもなってほしいわ』
銀髪の隣には、少々ご立腹の金髪の女の子が。
腕を組んで顔をしかめて、いかにも『機嫌悪いです』を表現したよ
うなそのたた
ずまい。
ケネス『だから、無理についてこ　なくてもいいって』
ヴァニラ『誰も無理なんかしてない　』
ケネスは『はぁ』と息をつき、イクとサクはクスクスと笑っている。
イク『そういえばさ、ちょっと気になってたんだけど、ゾルディッ
クのじいさんから話聞いた?』
突然の話題変換。
ヴァニラ『話?』
サク『ゼノン様、昨日まで砂漠　のクロノスに行かれてたんです。
それに同行されたのがあの…』
ケネス『あ～、その話なら聞いた　』
ケネスがサクの言葉に割り込んだ。気のせいか、サクにその先を口
にさせたくな
いかのように。
ケネス『イザークの弟と、キラの息子だろ』
ケネスがヴァニラの顔を見る。
ケネスと目が合ったヴァニラは表情を暗くしてうつむく。
ケネス『よもやこんなところで再会を果たすとは思いもしなかった。
運命ってのには、ホント驚かされる』
ケネスの作り笑いに、イクとサクはこのような質問は
するべきでなかったと、後悔に似た念にかられる。
ケネス『彼らには何も言わんでくれよ。すべてオレがケリつけるか
ら』
この話題はケネスの決意をもって終了した。終了させたかったとい

うのが本音か
もしれない。
ヴァニラ『カッコつけてんじゃないっての』
ヴァニラがケネスの背中をバシッとはたいた。
ケネス『やっぱガラじゃねぇな』
その後、ケネスとヴァニラはクエストを受注し指定地
までの移動のため、屋敷にゼノンの気球の整備を手伝いに戻った。
イク『やっぱり、あの2人とケンを引き合わせるのは、どうかと思
うんだけどねぇ』
サク『こういうのを、運命の歯車が回りだしたって言うのかしらね』

ヴァニラ『ケイ、どうするのよ?』
集会所からゼノンの屋敷まで帰途、ケネスとヴァニラ
の影は前後に並んで歩いていた。
ケネス『…』
先を行くケネスに問いかけたヴァニラであったが、ケネスの応答は
なかった。無視したわけではない。
ヴァニラの漠然とした問いには、様々な意味や思いが込められてい
た。
ケネス『…キラのガキ…』
ヴァニラ『ケイ』
かすかなケネスのつぶやきをヴァニラは聞き逃さなかった。
ヴァニラはとっさにケネスの肩をつかむ。
ケネス
『』
ヴァニラに触れられたケネスはピクッと反応し、その背後を振り返
る。
その時、眼に映った少女の姿に少年は妙な安堵感を感じた。
ケネス『いや、何でもない』
ケネスは前に向き直り左手で左側頭部を押さえて、再び歩きはじめ

る。やや早足
で。
少し距離がひらきはじめたところでヴァニラもケネスを追って駆け
出す。
ちょうどその瞬間、ケネスはそのタイミングを見計らっていたかの
ように、再度
振り返る。
ヴァニラ『？』
ケネス『ヴァニラ、オレ、どうすりゃいいんだ？』

ハイネ『ハァア』
ハイネの変幻自在の斬撃。それは重量武器である大剣を振るってい
るとはとても
思えない華麗な動きだった。
シン『えぇい』
またシンは小回りのきく双剣で、それに準じた戦闘を繰り広げてい
た。
一撃必殺のハイネと、小回りを活かしたシンの連続攻撃。２人は真
逆の戦闘スタ
イルであるが、それがまた互いの欠点を補いあい、なかなかのコン
ビネーション
をかなでていた。
シン『ハイネ』
シンは最後に残ったランポスに、側面から軽い斬撃を与える。
ランポスは、どのような攻撃にも怯むという、一種の弱点がある。
一瞬怯んだランポス、それを見逃すハイネではない。
ハイネ『任せぃ』
天を裂くような縦斬りが炸裂。ランポスは真っ二つとなった。
ハイネ『これで何体目だ？』

シン『１０匹。ちょうど半分だ』
シンは刃に付着したランポスの血を専用の用紙で拭き取りながら、ハイネの適当
な問いに答える。
クエスト開始数時間で、早くも１０匹討伐。順調な滑り出しだ。

灼熱下の死闘？

さんさんと降り注ぐ日光。雲一つない青空の中心には、太陽と呼ばれる球体が、
惜し気もなく熱を地上へ送り続けている。
物影が存在しない砂浜には、その太陽から送り込まれる熱によって一面陽炎が立
ち上る始末だ。いや、影がないと言えば嘘になる。
陽炎のモヤモヤの中、２つの人影がだらしなく立ちすくしていた。
シン
『ハイネ、暑い』
片方の人影が、もう片方の人影に現状を報告する。
ハイネ
『ああ、暑い』
もう片方の人影が、片方の人影の現状報告に対し、返事と復唱をかます。
現在２人がいるのは、密林の砂浜のエリア。湖と隣接するこのエリアは、白い砂
浜が広がり木々がほとんど存在しない。そのため太陽の日光が砂地に直撃、反射
し、まるで小さい砂漠のような環境になるのだ。
シン
『なんでこんなに天気いい　んだよ？』
シンのこの嘆きは誰に向けられたものなのか？
シンたちの言う通り、今日はものすごく暑いのだ。クーラードリンクはいらない
までも、身体の限界ギリギリの猛暑だ。身体的にはなんとかなっても、精神的に
はかなりツラい。

ハイネ
『知らんよ。嵐の後だから　だろ?』
なんかやけくそになったハイネが、やけくそに答える。異常な暑さが体力とやる気を削り取る。
砂浜がそんなに暑いなら別の場所に行けばいいじゃないか、と言われるかもしれないが、それがそうもいかないのだ。
先ほどまで、2人は林の中をさ迷っていた。しかし、林の中はこの砂浜より過酷な状況だったのだ。照りつける日光はもちろんのこと、先日までの嵐のせいで恐ろしく湿度が高いのだ。つまり、蒸し暑い。
それに比べれば、まだ風通しのいい砂浜の方がマシ…かもしれない。
ハイネ
『さっきからランポスも一　匹もいねぇじゃんか』
シン
『この暑さだから、ランポ　スもぶっ倒れてんじゃな　いのか?』
ブツブツと文句をたれながら、湖の沿岸をのそのそと歩を進める。
すると、その時、
シン
『な』
突然シンが、砂の下から伸びたハサミに足首をとらえられ、その場に倒れ込んだ
。
そのハサミの正体は、砂の中から姿を現した。
ハイネ
『ヤオザミ』
ハイネがとっさにシンの方へ振り向く。すると、その瞬間、ハイネの目の前から

別のヤオザミが砂の中から両のハサミを突き立て、ハイネに飛びかかってきた。
ハイネ
『っ』
ハイネはかがんで、紙一重でそれをかわした。
シン
『くぅっ…』
ヤオザミのハサミはジリジリとシンの足首を締め付けていく。シンも防具がなければ、足首など簡単に切断されているところだ。
倒れた状態であるため、反撃もままならない。
ハイネ
『シン』
飛び込んできたハイネが、シンの足首をはさんだヤオザミの腕を大きく振り上げた大剣で叩き斬る。
シンはとっさに足首のハサミを振り払い、立ち上がって体勢を立て直す。
ヤオザミも2匹そろって敵意むき出しだ。
シン
『くそっ、ヒヤッとさせや　がって』
ハイネ
『ま、暑かったところだし　、ちょうどいいんじゃね　？』
ヤオザミ、小型の甲殻種で強固な甲殻と強力なハサミが特徴。そのハサミは、人体も余裕で切断できるほどに強力。
ハンター2人は、ヤオザミ2匹とにらみ合う。
ハイネ
『まったく、ヤオザミ相手　にしてる場合じゃないっ　ての。さっさとやんぜ』

シン
『そのつもりだ』
ハイネが大剣を肩に担ぎ上げ、シンは片方の双剣をペン回しのように手首で一回転させる。
と、余裕をこいてたのもつかの間。
シンとハイネの周りの砂がごそごそとうずき始めた。シン、ハイネ『？』
何かの気配を感じとった2人は、周りを見回す。
するとそこから無数のヤオザミが砂の中から這い出てきた。
『な…』と冷や汗とともに、無意識のうちに絶望の声をあげいた。
それにしても、みるみる出てくる出てくる。あっという間に取り囲まれた。
どうやらこの砂浜一帯に住んでいらっしゃるヤオザミ様一同がお集まりなってくださったようだ。
ハイネ
『どーする？逃げるか？』シン
『逃げれるモンなら逃げた　いけど、そうもいかない　んじゃないか？』
はかってかヤオザミ軍団は隙間まくシンとハイネを取り囲んでいる。
無理に突破しようとすれば、返り討ちに合うのは目に見えていた。選択肢は用意されていなかったのだ。
2人は互いの背を預けあった。
ハイネ
『死ぬんじゃねぇぞ。お前　が死んだら、またダチ探　さなきゃいけねぇからよ
』

シン
『なんでお前は生き残る前　提なんだよ?』
ハイネ
『オレには刀衆になるって“目標”があっからな。そいつを持ってるやつは
、なかなかにしぶといん　だよ』
シン
『ならオレも大丈夫だ。オ　レにも“目的”があるか　らな』
目測で２０匹ほどであろうか。どんどん増えている気もするが。
とても心地よい殺気を放っている。
ハイネ
『んじゃ、ここを切り抜け　た後で、ソイツを聞かし　てもらうとするか』
シン
『断る』
いざ、戦闘開始。火蓋は2人のハンターの一歩から切っておとされた。
ヤオザミ軍団も散開して、各個に応戦する。
シンの右の剣の一撃。ヤオザミの左のハサミの一撃。激突した両者の一撃は、ハ
サミの又に剣が交わっている構図だ。
ハイネは大剣で右下から左上への斬り上げ。下方向からの攻撃で、ヤオザミは片
方のハサミを失い胴体にも少々のダメージ。そしてそのまま振り上げた大剣を同
じヤオザミに振り下ろす。ヤオザミは数で迫る。
タイマンならシンたちも負けはしないだろうが、今は何せ数が多すぎる。
複数のモンスターを単独で狩る場合の対処法も、一応は2人とも熟知している。

シン
『ハァ』
ヤオザミのハサミを切り落とし、胴体に一突き。ヤオザミはうめき声とともにア
ワを吹いて生き絶える。
ハイネ
『４匹目ェー』
大きく大剣を振り下ろし、ヤオザミのハサミを斬り砕く。
藍色の返り血が2人の防具を染めあげる。
シン、ハイネ
『ハァハァ…』
2人は息をきらした状態で再び背中合わせになる。
ヤオザミの数は確実に減っている。それでも『たくさん』という言葉を使うには
充分な数が健在だ。
それに、そろそろ武器の切れ味が心もとなくなってきた。
シン
『チィ…、どうよるよ?こ　のままじゃ、武器が使い　物にならなくなるぜ?』
ハイネ
『さぁ、ヤオザミの殻で磨　げばいいんじゃないか?』
無駄口をたたく間もなく、ヤオザミは迫ってくる。
シンはジャンプでかわし、ハイネは大剣でガードする。そのままシンはヤオザミ
の甲殻の上に着地した。
ハイネは大剣に取りついていたヤオザミを振り払い、そのヤオザミの甲殻に縦斬
り。
『バキンッ』という鈍い音。無残にも大剣は弾かれてしまった。やはりヤオザミ

と言えど甲殻は堅かった。と、そんな余裕もかましてられない。
ハイネの大剣を防ぎきったヤオザミは、体勢を崩したハイネの間合いに回り込み
、ハイネの左手首をハサミで挟み込む。
ハサミ
『っ』
そしてもう片方のハサミで、アッパーの要領でハイネの腹を突いた。
シン
『ハイネ』
シンがすかさず駆け寄り、回転斬りで、ハイネの手首と腹をとらえているヤオザ
ミのハサミを斬り裂く。
シン
『大丈夫か？』
ハイネ
『ちょっと痛かった…』
ハイネが腹を押さえて片膝をつく。
先ほどのヤオザミの一撃、大きな傷にはなっていないものの、ダメージ的には大
きかったようだ。
ヤオザミどもはアワを吹き、ハサミを高らかに振り上げて、威嚇のポーズをとっ
ている。
シン
『…』
まだヤオザミは当初の半分以上が残っている。それに対しシンとハイネの体力、
スタミナ、武器の切れ味は持ちそうにない。
状況は最悪に向かって一直線だった。
その時、

『バキッ、グチャッ』
と、2人の背後から奇怪な物音が聞こえた。何かが割れた後、何かがつぶれたよ
うな、そんな音だ。
2人はゆっくり首を回す。『ア゛ア゛ア゛ァーー』、聞き慣れた甲高い鳴き声
。2人の眼に飛び込んできたのは、見慣れたランポスよりも一回り大きな体格、
頭部に目立つ赤いトサカの鳥竜種。ドスランポスだ。
シン
『…』
ハイネ
『あっちゃ～』
あっけにとられるシンとハイネ。
ドスランポスは、ヤオザミをその強靭な脚で踏み潰していたのだ。

灼熱下の死闘？

ヤオザミの強固な甲殻を踏み潰し、『ドス』の名に恥じぬその登場の仕方。
幾多のランポスを束ねるドスが、今、弱肉強食の摂理を指南するべく、その姿を現した。
シン『ドスランポス…』
ハイネ『切羽詰まって、ドスランポスの接近にも気がつかなかったみたいだな…』
ドスランポスは目玉を乱回転させながら、辺りの様子をうかがっている。
ヤオザミは微妙な後退りをしている。おかげで、ドスランポスからシンとハイネまで道が開けた。
『グァア〝ア〝ア〝』と、ドスランポスが顔を空に向け耳を裂くような咆哮を放った。
すると、数秒の間をおいてドスランポスの配下の者たちが一斉に駆けつけた。お分かりであろう、ランポスである。
そして同時に、ランポスによるヤオザミの殲滅が発動された。
シン『うわっ』
ランポスとヤオザミの乱戦が始まった。それにシンとハイネも巻き込まれたのは、場の流れから自然なことであろう。
ランポスの飛びかかり。標的はシンだ。爪と牙を突き立て前方斜め上上空から迫るランポスに、シンは受けの構えをとる。激突、双剣をクロスさせていたシンの

ど真ん中にランポスが飛び込んできた。直後、シンは体をそらせ、うまくランポスの攻撃を受け流した。そしてそのままランポスの勢いを利用して、ランポスの片腕をはねた。

『ア〝ア〝ア〝』と叫び声をあげ、ランポスは急停止する。シンもまた片方の剣を持ち変え、独特のステップで１８０。方向転換し、ランポスに迫る。

回転斬りでとどめ。

シン『ふぅ～』

一息つく。

シンの背後では、ハイネが２頭のランポスを一刀両断していた。

周りを見回せば、ランポスとヤオザミの戦闘が見受けられる。どちらかといえば、戦闘というより、戦争に見える。ランポス軍とヤオザミ軍みたいな感じで。

ランポスは、ヤオザミの強固な甲殻に攻撃を阻まれ、なかなか致命傷を与えられないでいる。

一方ヤオザミは、頑丈な甲殻のおかげで守りは万全だが、リーチの短いハサミでは素早いランポスになかなか攻撃をあてれない。

やはりそんな中、圧倒的な力で戦場を制圧しているのはドスランポスであった。

ドスランポスは１匹のヤオザミに目をつけた。次の瞬間、その鋭利な爪でヤオザミの甲殻を貫いた。ハイネの大剣でもヒビ一つ入らなかったヤオザミの甲殻を、

一撃で貫いたのだ。

ハイネ『』
これにはハイネもただただ目を見開くしかない。
ドスランポスはそのまま貫いたヤオザミを引き裂いた。
シン『ハイネ、逃げっぞ』
シンが叫ぶ。
ランポスたちがヤオザミを襲っている今しか、逃げるチャンスはないと推察したのだ。
ハイネ『お、おう』
ドスランポスはさっき引き裂いたヤオザミを、殻ごと召し上がっておられる最中だ。
2人はドスランポスに気づかれない程度の全力疾走で、戦闘区域を離脱する。数匹のランポスに追撃されたものの、それらは返り討ちにすることができた。

しばらくの後、2人は洞窟へと逃げ込んでいた。
額からしたたれ落ちる汗が洞窟の冷たい空気にさらされて、体を冷やす。
ていうか、今思えば、外が暑いんなら最初から洞窟へ来ればよかったのではないか？ま、気にしないでおこう。
シン『ハァハァ…』
ハイネ『ゼェゼェ…』
2人とも両手を両膝につけ、肩で息をしている。
どうやらドスランポスの追撃はないようだ。ひとまず安心。まぁ、アレのおかげでランポスの討伐数を6頭増やすことができたのが、不幸中の幸いだった。

現在、ランポスの討伐数は計１６頭。残り時間はまだまだ余裕。この調子でいけば、今日中にクエストを終えることも可能だろう。

ハイネ『何だかんだで、何とかなったな』

シン『ランポスも何匹か狩ったしな。…アレ？今で何匹目だっけ？』

冗談をとばけながら体を休める。２人はしばらくそこに居座って、体力とスタミナの回復にいそしんだ。

その頃、さっきのドスランポス一行は、あの場のヤオザミをすべて狩りとり、お食事の真っ最中であった。ドスランポスは一個体につき、１００～２００頭のランポスを従え群れを形成する。それらの中から数十匹を自らに同行させ、残りをそのドスランポスの縄張りに散らせて配置さている。シンたちが狙っているのは当然、縄張り内に配置されているランポスだ。

そのためにドスランポスの徘徊ルートを記録、確認することはとても大切なことである。

また、そういった情報は、後に他のハンターとの情報交換や情報の売買にも使えるので、ハンターとしてモンスターの情報を獲得するのは極めて重要なことである。

今回シンたちは、ドスランポスの徘徊ルートだけでなく、その餌場まで発見した。これは希少価値の高い情報だ。

休憩がてら、ハイネはそのことを自前の手帳にメモしていく。何だかんだ言って

、しっかりしているのだ、ハイネは。シンもそのことについて関心している。
シン『さてと、ここからどっち　行く？』
休憩終わり、と言わんばかりにシンが立ち上がった。
ハイネ『んん～、外は暑いしとりあえず“大空洞”の方へ行くか』
大空洞、それはこの密林の洞窟の中心にして最深部のことをいう。
密林の洞窟の
抜け道は多々あるが、すべてはこの大空洞と呼ばれる巨大な空間に繋がっている
のだ。※これはこの密林に言えることであって“奥地”の場合はまた異なる。
シン『そうだな』
２人は大空洞、つまり洞窟の奥へと進んでいった。

ハンターA『依然、“クモ”の発見はならず、捜索は難航しています』
場所は変わって、ティーズのギルド本部のギルバートの部屋となる。
そこには偉そうに椅子に座ったギルドマスターであるギルバートと、机をはさん
だ向こう側にハンターが３人、休めの状態で直立不動していた。
ギルバート『そうか…。引き続き捜索を続けてくれ』
３人のハンターは軽く頭をさげ、部屋を去っていった。話の内容はすでにお分か
りであろう、“幻影旅団”つまりクモのことだ。
残ったギルバートは新たに浮上した問題に頭悩ませることとなった。
ギルバート『いやいや、面倒なことになった。まさか、クルーゼの情報提供者があのシン・アスカだったとは』
シンは以前にクルーゼと遭遇している。ギルバートが

言う情報提供者とは、そのことであろう。
ギルバート『クルーゼがシン・アスカのこと認識した上で、彼を襲ったとしたら、状況は最悪だ』
ギルバートの机の上には、シン・アスカの個人データのファイルが開かれていた
。
その傍らに、彼の父キラ・ヤマトが写された写真が数枚重ねられていた。

登場人物　裏設定7

サーシャ・シファ　「山芋で叩かれたい／／／」

性：女

好きな物：南部せんべい　昆布

嫌いな物：トロロ

備考　エプロンが似合う給食当番のおばちゃんオーラを醸し出している。年齢は１８で家では裸エプロンで過ごしている。１８歳だが童顔で小柄の合法ロリ、足コキのスペシャリスト、側転が得意。おばあちゃんが居たがランポスに捕食され死亡、それ以降ランポスを憎んでいる。サッカーの天才スコアラー。

エマ　「朝食食べたっけ？」

性：女

好きな物：バトミントン、ウスターソース

嫌いな物：絆創膏をはがした時の匂い

備考　シドと姉弟のばばあ。ジャーマンスープレックスが得意、バ

トミントンは目も当てられない程下手。キングジョーが大好き。
元悪役女レスラーでリング名は「バーサーク・エマ」武器は脚立。
最近までウスターソースを飲み過ぎて入院していた。

灼熱下の死闘？（前書き）

祝：レビュー！

灼熱下の死闘？

密林の洞窟にはたくさんの抜け道が存在し、それらはすべて“大空洞”と呼ばれる最深部の巨大な空間に繋がっている。
その大空洞までの抜け道は、今でも完全には把握されておらず、新ルートが続々と発見されている。その中には、飛竜種等が休息時に使う休息ポイントもいくつか存在する。
ハイネ『…』
以前、そのポイントで針蟲セルケトに遭遇したハイネは、異常に警戒心が強くなっている。
シン『…』
ハイネの警戒心は隣を歩いているシンをもその対象としてとらえているようで、
シンとしてはちょっと…、って感じだ。
シン『そんなに気になんの？』
ハイネ『いや、こうでもしてない　と、もし「後ろから！」　とか、「上から！」とかなった時にこう…』
これは少し焦っているだけだ。決してビビっているわけではない。
ハイネの思いは確かにシンに伝わった。シンは少しにやけながら横目で『ふ～ん』とか言ってあげたりした。それに対して、あわてたリアクションをとってくれるハイネは『
ノリがいい』と言うのだろうが、やはり男同士なら何か華がない。
シン『でも、そんなに神経張り詰めてると、すぐにバテちまうぞ？』

ハイネ『ん…うん…』
洞窟というものに対し、軽いトラウマができてしまったのかもしれない。ハイネ
自身も薄々それに気づき、早期の打開策が必要だと考える。ハンターにとって洞
窟がダメというのは、破滅的な弱点になるからだ。
ハイネ『【つがいの猫】だっけ？　オレの見たセルケトを討伐したのって？』
シン『みたいだな』
ハイネ『レベルの差を痛感させられるね。あんなバケモノ狩るなんてさ』
何だかハイネのテンションが低い。それは洞窟の中だからというわけだけではない。
シン『そりゃまぁ、あの人たちブラックリストハンターなんだろ。当然なんじゃないのか？』
ハイネ『お前だって見ただろ。アイツら、オレたちとほとんど年変わらねぇよ』
一度だけ、両者は顔を合わせたことがあった。
【つがいの猫】は2人のハンターの総称だが、その2人ともがどう見ても２０前後
の若者だった。
つまり、１７のシンはともかく１９のハイネは本当に同年代かもしれないのだ。
シン
『オレたちだって、いつかはブラックリストハンターにまで登り詰めてやるさ』
ハイネ『ああ、一族の誇りを守るためにも、絶対“刀衆”になってやる』
改めての決意表明とともにガッツポーズ。

ハイネの出身である、今は亡きヴェステンフルス一族。かつては狩人の五大部族
の一つとしてその名を連ねた名門中の名門。
ハイネはその最後の誇りとして、この運命を生き抜く所存だ。
ハイネ『そう言や、お前も何か“　目的”があるとかなんと　か言ってたよな?ちょうどいい機会だし、教えろよ』
シン『あの時、断るって言ったろう』
唐突に、ハイネが数分前の会話を思い出す。
ハイネ『なんでだよ。前に隠し事はなしだって言ったじゃんか』
そんな約束もした。
忘れていたわけでもないし、破るつもりもない。
ただ…。
シン『オヤジのことなんだよ。今はこれぐらいしか言えない…』
シンの父親は、キラ・ヤマト。伝説に語られるハンターで、幾多の武勇伝を残している英雄だ。ハイネもそれは以前聞いたし、キラ・ヤマトのことはもちろん知
っている。
ただ、キラ・ヤマトには、英雄と呼ばれる傍ら、何かと黒い噂もささやかれる人
物であったのも事実だ。それもハイネは知っている。お互いに家族、一族の問題
を抱える者同士として、ハイネはそれ以上の追及はしなかった。

数十分、モンスターに襲われることもなく、道に迷うこともなく歩き続け、よう
やくたどり着いた。
2人の前には、陥没した天井から差し込んだ光によってなされた、幻想的な空間
が広がっていた。ここが密林の洞窟の中心にして最深部“大空洞”

である。
シン『ヒュ〜、ひろっ』
ハイネ『まるでホールだな』
大空洞、その言葉に偽りなし。クソデカい空間だ。こちらから向こう側が見えない。
段差入り乱れ、洞窟なのに崖が存在し、その下からは水の流れる音が聞こえる。
また岩の割れ目や抜け穴がそこら中に見られ、すべての洞窟は大空洞に繋がっている、ということもうなづける。
シン『スゲーな』
ハイネ『天井たけぇ〜』
陥没した天井は、地底の底からでも空を拝むことができる。これは大自然のハンターに対する配慮か何かだろうか。
周りを見回せば、キノコや採掘ポイント、虫の茂み、果ては釣りなんかもできる。残念ながら、今回はそれらの特殊なアイテムを持ってきていないので、採取ぐらいしかできない。
それと発見がもう一つ。
シン『あれって人？』
ハイネ『ハンターだ』
シンの指差す先には、同業者の姿が二つ。
崖の割れ目の前で、ピッケルを振り回している男の子と女の子。どうやら採掘をしているようだ。
ツバメ『ふぅ〜、2個か〜。チドリ〜、そっち何個採れた〜？』
ピッケルを杖代わりにして地面につけ、額の汗をぬぐいながら、少

女が少し離れ
た場所にいる少年に問い掛けた。
チドリ『４つ採れたよ』
ピッケルで作業中だった少年が手を止めて答える。
ハイネ『や～や～、どうもどうも』
ハイネが２人に接触。何のお構いも無しに行動に出たハイネは、度胸が据わって
いると言うのだろうか。
そう言えば、初めてシンとハイネが出会った時も、ハイネは見ず知らずのシンに
声をかけていた。
ハイネって何気にスゲー、シンはハイネの後ろでそう思っていた。
ツバメ『ん？誰アンタたち？』赤毛のストレートの少女が振り返る。
ハイネ『ハイネ・ヴェステンフルスっていいます』
シン『オレはシン・アスカといいます。オレたち、今年からの新人で、えっと、何なさってたんですか？』
ハイネの後ろからシンが駆け寄ってきて、一応の自己紹介。
その後の質問は、ピッケルを持っている相手にするには限りなく愚問なように思
えるが。
ツバメ『見てわかんない？採掘よ。さ・い・く・つ』
やはり愚問だった。まぁ、ピッケル片手に虫取する人はいないだろうな。
ハイネ『何採ってたんですか？』
ハイネが続けざまに問い掛けた。
チドリ『マカライト鉱だよ』
すると、その返答はシンやハイネの頭上から聞こえてきた。と、思った瞬間、２人の前に、少年が飛び降りてきた。
ハッと驚いてしりもちを付きそうになる。
その少年の手には、野球ボールほどの青い石が４つ、両手の手のひ

らいっぱいに
乗っていた。
シン『マカライト鉱石?』
チドリ『うん。キミたちルーキーなんだね。ボクはチドリ・アルスター。よろしくね。彼女はツバメ・アルスター』
ツバメ『オッス』
ツバメという少女が笑顔で返事する。
赤毛のストレートに鳥の羽の髪飾りが施されたこの少女はツバメ・アルスター。
ツバメと同じく赤い髪の、まだその面影に幼さが残る物静かなこの少年はチドリ
・アルスター。
ハイネ『アルスター?』
ふと、彼らのファミリーネームに疑問を抱く。
それは2人とも同じ名字、というのではなく、ハイネが感じたものはもっと別の
ものだった。
ツバメ『やっぱ気づいた?』
ハイネ『じゃやっぱり、2人とも　アルスター一族?』
チドリ『はい』
アルスター一族。
この一族について、あることを思い出してもらいたい。それを踏まえた上で、次
回を読んでいただきたい。

灼熱下の死闘？

アルスター一族。

前話にて説明させていただいた“五大部族”。アルスター一族はこれの一つに数えられ、ハイネのヴェステンフルス一族とともにその名を連ねている名門。

そもそも五大部族とは、かつての戦国時代の折、天下統一に最も近いとされた当時“五強”と言われた部族の後の総称なのである。

アルスター一族はその特徴として、典型的な女系一族であると言える。完全な女性優先の風習で、それにより“アマゾネス”や“ヴァルキュリア”などの代名詞で呼ばれる。

また、五大部族の中でも最大を誇っており、終戦後のその繁栄には著しいものがある。だからというのはおかしいかもしれないが、政治・経済的な権力を持つ唯一の部族でもある。

ハイネ『セキレイ様はお元気です　かね？』

そして、今回出会うこととなったチドリとツバメ。この2人はアルスターの若き担い手である。

確認しておくが、ツバメとチドリは兄弟ではない。よく言うところの幼馴染みというやつだ。

また、2人の赤い髪は、アルスター一族の特徴で、その血統が純血に近いほど、濃く鮮やかな赤になる。

ツバメ『セキレイ姉様を知ってんの？』

セキレイ・アルスター。アルスター一族の現族長である。

先ほども言った通り、アルスター一族は典型的な女系一族である。なので、族長も女性が務めるのは当然のことなのだ。

ハイネ『あの事件の後は、いろいろとお世話になりましたから』

チドリ『え？』

何のこと？チドリもツバメもそんな顔をしている。ただハイネは、少し固い表情だった。

ハイネ『オレ、ヴェステンフルスなんスよ』

チドリ、ツバメ『！？』

とたんに2人は目を大きく見開く。

先ほどもハイネは名乗っていたが、その時はスルーされていた。

ヴェステンフルスという名と、それに関する事件という言葉から考察するに、おそらく…

ツバメ『ウソ…。ヴェステンフル　スって、何年か前、旅団に滅ぼされたんじゃなかったっけ？』

チドリ『あの事件の生き残りはいないって聞いてましたけど』

2人がこう思っていたのも無理はないのだ。

3年前の“幻影旅団”によるヴェステンフルス一族の殲滅。これによる一族の生き残りはいないと、当時のクロノス政府は公表したのだ。つまり、ハイネという存在は当時確認されていなかったのだ。なぜなら、クロノス政府の調査が入る前に、シドがハイネを保護し連れ出していたからだ。

事件一年後、ようやくハイネの存在が確認されることとなった。

しかし、当時のハイネの身元引受人となっていたシドとエマのはか

らいにより、その事実は極秘事項として処理され、ギルド上層部・五大部族の上役・政府機関のトップ等の限られた者にだけその事実が伝えられた。

ツバメ『ヴェステンフルスに生き残りがいたなんてね』

チドリ『でも、よく無事でしたね。クモって証拠隠滅のために、対象は絶対に皆殺しにするって聞いてましたから』

そう、チドリの言う通り、“幻影旅団”はその後の証拠隠滅のために、事件の当事者はすべて皆殺しにしている。そのため、ハイネのような幻影旅団が関与した事件の生存者は極めて少ないのだ。ハイネもそのことは知っている。しかし、改めて考えてみると、自分が今こうして生きているということが、奇跡の上に成り立っているということを再認識させられる。

まぁ、それは奇跡でも何でもなく、ある人物の故意であったということは、まだこの時は誰も思うまい。

ツバメ『よかったらこの後、ウチ来る？多分、セキレイ姉様もアンタに言いたいことはいっぱいあるだろうし』

ツバメはチドリの顔を見ながらこんなことを提案する。

チドリ『そうだね。今ならセキレイ様も屋敷にいるし』

チドリも、それにうなづきながらそれに賛成する。

ハイネ『いいんスか？』

確かに、一度セキレイ本人に会って直接話をしたいとは思ってい

た。しかし立場的に、五大部族の族長の一人であるセキレイに謁見することはとてつもなく難しい。
　思ってもみない申し出に、ハイネは少々とまどう。

ツバメ『絶対って約束はできないけど、セキレイ姉様ならきっと取り合ってくれるよ』

ツバメのありがたい提案にハイネは甘えることにした。

ハイネ『じゃ、お願いします』

　ハイネもセキレイとの面識はない。ハイネが一方的に知っているだけだ。
　しかし、今回の件で、セキレイもハイネの名前だけは知っているはずだ。
　アルスターは生前のヴェステンフルスとも深い親交があり、ヴェステンフルスが滅ぼされた時も何かと支援してくれていた。
　その意味でも、ハイネはセキレイと会いたいと思っているのであろう。

ツバメ『じゃ、パッパとクエスト終わらせっか』

ツバメは元気よく立ち上がる。

チドリ『でもツバメちゃん、マカライト鉱はいいの？』

ツバメ『そんな場合じゃないでしょうが。ね？』

　と、いきなりシンとハイネにふる。
　ハイネも『そうっスね』と立ち上がる。

ツバメとチドリは、互いに17歳でHR3。片手剣の使い手だ。

シン『オレたちの目的はランポスなんです』

ツバメ『ホントに？ならちょうどいいや』

チドリ『ボクたちはドスランポスなんですよ』

聞くところによれば、ツバメとチドリの標的はドスランポスらしい。

ランポスを標的としているシンとハイネにとっては、ちょうど標的が重なった。つまり、4人でランポスの群を探し、ドスランポスをツバメとチドリが、残りのランポスをシンとハイネが狩れば、両者クエスト成功となる。実に効率的。

そうと決まれば、早速行動開始。4人はランポスの群の捜索をはじめた。

時刻は昼をまわったころ。灼熱と化した外気は、本日最高を記録している。灼熱下の死闘の始まりだ。

登場人物　裏設定8

カナリア・アルスター　「私の真の膣力……じゃなくて真の実力を見せてやる」

性：女

好きな物：大人の玩具

嫌いな物：ビッチ　変態

備考：抜群プロポーション、年齢は２０でハンターランクは９。その美貌に引かれるハンターも少なくない、孤児院で育ったが途中で追い出され１０歳で身売りをしていた。脳にはかつて自分を犯した男に植え付けつけられた快楽は今でも残っている。トドを一頭飼育していが缶詰にされた。バター犬を飼育中。趣味は新体操とタワーブリッジ。

T・M・ロアノーク（タシロ・マサシ・ロアノーク）　「俺の性癖に常識は通用しねー」

性：男

好きな物：メロン　化学式　周期表プレイ

嫌いな物：正乗位

備考：実はインポテンツ。科学の問題を解いていると性的興奮を覚

える。好きな元素記号Ｒｇ。
周期表の形を卑猥な目でしかみれず理科の時は常に息を切らしていた。
彼女にドン引きされて別れた。三角フラスコやビーカーは彼のオカズになることもしばしば。
趣味はドッジボールと読書。
彼が現れると「片翼の天使」が流れるという。
ティッシュの代わりにリトマス紙を持ち歩いている。

灼熱下の死闘？（前書き）

レビューがいつの間にか１０件……パネェ！

バーミアン！

灼熱下の死闘？

ツバメ『うへ～、なんて暑さよ～』

一行は大空洞を出て、洞窟を抜け、灼熱と化した林の中を散策していた。

もちろん、気温は嫌になるぐらい高い。

チドリ『じゃ、ドスランポスは東の海岸線にいたんだ？』

シン『はい。危うく死にかけるところでしたよ』

先ほど、ヤオザミの軍団に襲われた例の湖の沿岸のことだ。

運悪く、シンとハイネはあの時にドスランポスに襲われていたため、今回ツバメとチドリに少なからず情報を提供することができた。

これに関しては、運が良ったと言えるかもしれない。

チドリ『あの海岸線を徘徊するドスランポスってことは、さっきボクたちと戦ってたヤツと同じドスランポスだね』

ツバメ『傷を負ってどこへ逃げたのかと思ってたら、ヤオザミ喰いに行ってたとはね』

あの時、シンとハイネの前に現れたドスランポスは、その前にツバメとチドリが目標としていたモノと同一のドスランポスであったようだ。

話をまとめると、ツバメとチドリの攻撃によって傷ついたドスランポスは逃走をはかった。その後、逃走したドスランポスを見失ったツバメとチドリは、採掘をするために大空洞へと向かった。時を

同じくして、逃走をはかったドスランポスは体力回復のためにヤオザミを補食しようと、湖の沿岸へと逃げ込んだ。そこでシンとハイネに鉢合わせすることとなった。あわてて逃げ出したシンとハイネは、洞窟の奥、大空洞へ逃げ込み、そこで採掘をしていたツバメとチドリに出会ったのだ。

シン『ということは、あのドスランポス、ダメージを負っていたのか』

ハイネ『だからオレたちを襲わなかったのかもしれないな』

チドリはシンとハイネの証言をもとに、現在のドスランポスの位置を推測する。チドリの計算によれば、おそらく洞窟内を通過中とのこと。

チドリ『多分、今頃ドスランポスは、大空洞内を通過しているころだと思うんです。だから、洞窟の出口で待ち伏せて、出てきたところを叩きたいと思います』

どの洞窟からドスランポスが出てくるのかはわかっているらしい。そうと決まれば、早速その洞窟の出口とやらに行ってみよう。――ということでやってきました洞窟の出口。

この洞窟の出入口は結構有名で、一般のハンターたちもよく目印として利用している。穴の幅や高さも大きく、大空洞まで直結しているので、ドスランポスの徘徊ルートにもなっているのだ。

チドリ『とりあえず、地雷を設置しておきますね』

チドリが洞窟の少し手前に地雷を埋める。

地雷とは、トラップツールと爆薬で調合される罠の一種。大型モ

ンスターが設置された地雷の上を歩くと、ドカンという仕組みだ。威力は大タル爆弾Ｇに匹敵する。地雷を仕掛け終え、４人は物陰に身をひそめる。

現れたドスランポスがうまく地雷を踏んでくれればいいのだが、そうでない場合は地雷まで誘導しなくてはならない。それでは待ち伏せの意味がなくなる。

灼熱の太陽の下、待つこと数分。チドリの読みは見事に的中した。洞窟の奥に、ランポスを引き連れたドスランポスの姿を確認。

ハイネ『来た』

ツバメ『さっすがチドリ。読み通りね』

チドリ『ドスランポスはボクたちに任せてください』

シン『その他はすべて引き受けます』

洞窟の向かって左側にシンとチドリ、右側にハイネとツバメがひそんでいる。

ちなみに、ツバメとチドリの片手剣はレッドサーベル（攻撃力１５４火属性１５０）。

洞窟の中から聞こえる『アア〜』という鳴き声と多数の足音が、だんだん大きくなっているのがわかる。４人は息を殺し、気配を消してそれを待ち受ける。

汗が額から頬を伝い、顎へ到達して、滴となり滴りおちる。

シン『…』

地響きとともに、ドスランポスが洞窟から現れた。

十数頭のランポスを引き連れたそのドスランポスは、シンとハイ

ネが砂浜で遭遇したヤツにおそらく間違いないだろう。
ドスランポスは洞窟を抜け、そのまま直進。
そして――――

――ドォーン

見事、地雷の餌食に。
凄まじい爆発ともに発生した爆風は、離れた場所にいたシンたち汗を吹き飛ばすほどの威力だった。
しかし、そんな爆風に見舞われていたにも関わらず、ツバメとチドリは爆発を確認するととたんに駆け出していった。

シン・ハイネ『いつから爆発したと錯覚していた？』

手で顔をかばっていたシンとハイネは、その2人の行為に驚く。
すかさず、2人も武器に手をかける。

ツバメ「いた」

爆煙の中、ドスランポスはまだ健在であった。
とは言っても、かなりのダメージを受けている。もともと、それなりのダメージは負っていたので、今回の地雷は致命傷にはならなかったものの、敵の体力もそう残っていないはずだ。
ツバメは腰から短剣を抜いて、ドスランポスに斬りかかる。
ドスランポスもそれに気付き、傷を負った脚で攻撃をかわす。

ツバメ『チドリ』

チドリ『了解』

そこへ、チドリが回り込む。傷を負ったドスランポスの左足に炎の斬撃。弱点、効果抜群だ。
ドスランポスはそのまま崩れ落ちる。

ツバメ『とーどーめーだぁ』

行動不能のドスランポスの首を斬りつける。
宣言通り、その一撃でドスランポスは完全にダウンした。爆発の衝撃で首筋の鱗もハゲていたので、致命的な一撃となったのだ。

ツバメ『よっしゃー』

チドリに無理やりハイタッチ。
一方、シンとハイネもランポスを狩り終えていた。

ハイネ『ったく、手間掛けさせやがって』

大剣を地面に突き刺し、額の汗をぬぐう。
地雷の爆発によって、ドスランポスだけでなくランポスまで吹っ飛とんでいたので、他のランポスが逃げ回っていたのだ。

シン『追撃成功』

少し離れた場所でシンが手を振っている。
これで、シンとハイネ、ツバメとチドリ、両者ともにクエスト成功だ。
その後、各々自分たちの狩ったモンスターから剥ぎ取りを行う。

ハイネ『スッゲー。これがドスランポス』

改めて見ると、怖い。
今、目の前に横たわっている巨体は息絶えているが、それでも恐怖を植え付けられる。シンも似たような心境だ。

チドリ『大丈夫ですよ。ドスランポスぐらい、すぐに狩れるようになりますよ』

ツバメ『そうそう。あたしらも、１０才の頃には狩れてたしね』

ハイネ『へぇ～、１０才の時に』

ツバメがサラッと何か大変なことを口走って、ハイネはそれを右から左へ受け流した。

シン『え、１０才』

そうそう、これが普通の反応。
日が少し傾き始めた頃、クエストを終えた４人は陽炎の絨毯を踏みしめ、ティーズへの帰途についた。

登場人物　裏設定９（前書き）

キャラ設定６にキラ・ヤマト追加したよー

登場人物　裏設定９

セキレイ・アルスター　「Ｉｔ'ｓ　ｎｏ　ｍｏｎｅｙ!（いつの間に！）」

性：女

好きな物：五穀米　干し芋　童貞　チェリーボーイ

嫌いな物；堅実な男　ゼリー　パイの実

備考：副村長と肉体的関係を持っている。アルスター一族の村長、肺活量は８４００とちょっと高め☆。
握力は７７、Ｆカップと割と大きく同性からもよく見られる。
異常なミニスカート着用と胸の部分がやけに開いた服装で副村長をイチコロ、ビッチではない。
ボウリングの現世界王者、１００走は９，２２秒と部族の中では遅い方。
特技は頭突き、ボウリングの玉を割れるほど。

ハゲタカ・アルスター　「平日からスケボーして遊んでますがちゃんと働いてるんでご心配なくー！」

性：男

好きな物：パイのみ（乳）　裸エプロン　処女

嫌いな物：熟女　エマ

備考：アルスター一族の副村長。女性メインのアルスター一族の数少ない男性、超ハーレムで三毛猫状態、ダーツゲームが得意で野球券の天才。
肺活量は１２００でだいぶ低い。ブーメランを投げるのが上手いが実戦では生かされた事はないだいたいの武器は使える。
円形脱毛症が悩みの３０代。

アルスター

アルスター一族は、五大部族に数えられる名門一族。そして、その名において、ハンターズギルドとある契約が結ばれている。アルスターとして生を受けた者には、その時点をもってハンターの資格を授けるという契約が。つまり、アルスターとして産まれたら、その運命は決まってしまうのだ。アルスターにハンター以外の道はない。これを良いととるか、悪いととるかは当人次第だ。ただ、悪いととったとしても、反論は許されない。そして、男女例外なく、幼い頃よりハンターとしての行を施される。これが、ツバメとチドリが１０才でドスランポスを倒せたという事実の真相だ。

ハイネは、アルスターと同じ五大部族の一つのヴェステンフルスということで、アルスターとギルド間で結ばれているこの契約のことは知っていた。だから驚かなかったのだ。

シンは驚いていたが、契約の件は公表されているし、正直驚くようなことではない。シンが世間知らずなだけだ。

ツバメ

『ん～、疲れた～』

船着き場でツバメが背伸びする。

いかだを漕いでいたのはチドリなのに、なんでツバメが『疲れた～』なんだよ?と、言いたくなるのだが、それは愚問だ。

なぜなら『アルスターだから』。これで筋が通ってしまうのだ。

以前に説明した通り、アルスター一族は完全無欠の女系一族。いかだを漕ぐのも、男がやるのは当然。地球が太陽の周りを回っているのと同じくらい当たり前なことなのだ。

ツバメが『早く早く』と急かすから、頑張って漕いで疲れているはずなのに、ツバメに笑顔で対応しているチドリが健気で仕方ない。

シンはそんなチドリに同情してしまう。

ツバメ

『じゃ、行こっか』
ツバメがシンとハイネに笑顔を振り撒く。
シンとしては、チドリを休ませてあげたかったのだが、ツバメはそんなつもりはないようだ。もちろん、チドリにもそんなつもりはない。
ハイネ
『はい』
ツバメのご厚意で、アルスター一族を尋ねることになったシンとハイネ。まぁ、用があるのはハイネで、シンはおまけなのだが。
一行はティーズの一角にある、アルスター一族の居住区に向かう。
アルスター一族の居住区は、ティーズ全域の約5%をしめている。
村を“国”として認識してもらいたい。

アルスター一族居住区、屋敷本邸…
アルスター一族の居住区はティーズの西側に位置しており、一族以外の者は立ち入ることができない。四角形型の居住区に独自の文化を築いており、居住区の中心部に一族の長の住居である屋敷がある。
ハゲタカ
『これから、ダイスリー大　臣との面会だ。早く準備　しろ』
スポーツ刈りにグラサン、右頬に大きな傷痕のパッと見さん風の男がスケジュール張を見ながら言う。セキレイ
『え～、めんどくせぇよ。　また今度にしといて』
何かの資料を机の上にばらまいて、そこに突っ伏した女が手をパタパタする。
ハゲタカ
『アホなこと言うな。大臣　との面会をそんな簡単に　先延ばしにできるわけな　いだろ』
正論を振りかざすグラサン男に対し、机に突っ伏した女は『うぅ～』と唸り声をあげる。

察しの通り、このだらしない女こそ、アルスター一族現族長、セキレイ・アルスターである。また、このグラサン男は一族の副長を務めるハゲタカ・アルスターだ。

セキレイ

『な～、ハゲ～、なんとか　しといてよ～』

ハゲタカ

『なっ…、セキレイ、そ　の呼び方、2人の時なら　構わないが、人前では絶　対やめろよ』

アルスター一族は、族長を女性が、副長を男性が務める風習になっている。しかしどちらかというと、セキレイはハゲタカを使用人のように扱っている。

また、ハゲタカは唯一、セキレイにタメ口を聞ける男として、一族内では一目おかれている。

クエストクリアの手続きを済ませ、報酬金を受けとった4人は、アルスター一族の居住区の方へ向かって歩いていた。ちょうどシンやハイネやゼノンの家からは逆方向になる。ティーズのこちら側は、シンはあまり来たことがなかった。アルスター一族の影響を受けてか、やたらに女性ゾーンのイメージがあるのだ。男にとっては近寄りがたい、しかし憧れでもある地区だ。ツバメ

『着いたよ』

ツバメが一言。

城のように、居住区の周りを掘りが囲んでいる。まるで、外世界から隔離しているかのように。

そして、正門と思われるところには掘りに石橋が架けられている。

もちろん、門番付きで。

ウズラ

『おう、今帰りか?ツバメ　、チドリ』

スズメ

『あれ？お客さん？』
石橋を渡ると、そこには巨大な門が。そしてその両わきには門番と思われる少年少女が２人。
ツバメ
『まぁね。セキレイ姉様に　伝えてくれる？』
ウズラ
『え、セキレイ様に？それ　は無理じゃねぇか？』
門番少年は顔をしかめる。セキレイは五大部族であるアルスターの頭主だ。先ほど話していたように、大臣と面会するような身分である。
そんなセキレイを突然訪ねてきても、門前払いされるのは至極当たり前のことだろう。
ツバメ
『そこを何とかなんないの　？』
チドリ
『セキレイ様、これから何　か予定あるの？』
スズメ
『元老院のダイスリー議員　と会談だって』
門番少女の一言で、場の空気がドンドンマイナスの方向へ向かっている。
ハイネとしても残念だが、いきなり来て無理を言うわけにもいかない。
今回は諦めて、次回また出直そうと思い、それを告げようとした時

カナリア
『あたしが取り合ったげる　よ』
頭上から救いの声がした。一同はその声の出所を見上げる。
ツバメ
『カナリア姉さん』
ハイネ、シン

『カナリアさん』
一同の目線の先には、いつしかのポニーテールが。
覚えているだろうか。以前、砂漠で助けられ、その後クロノスで再会を果たした赤毛のポニーテールの女ハンター、カナリア・アルスターだ。
カナリア
『やっぽー。てか、何かよ　く会うね、あたしたち　』
門の柱の上に座っているカナリアが笑顔でピースサイン（）を送っている。
そう、このカナリアもれっきとしたアルスター一族のハンターなのだ。
カナリア
『いつかは来ると思ってた　けど、こんなに早くたど　り着くとはね。ささ、入　って』
カナリアがシンとハイネの前に飛び降りてきて、２人を門の内に招く。
そんな光景をアルスター一族の４人は、ただ愕然と見ていた。
ウズラ
『いいのか？』
ツバメ
『カナリア姉さんが言って　んだから、いいんでしょ　？』
チドリ
『というか、シンさんとハ　イネさんって、カナリア　姉さんと知り合いなんだ　？』
スズメ
『その前に、あの２人って　誰なの？』
カナリアに案内され、セキレイの住居である屋敷に向かう。
アルスター一族の居住区は、ティーズの町並みとは明らかに異質だった。

中心に大通り、それと平行または垂直に交わるように細い道が交差している。まるで碁盤のように。
ティーズという大きな村の中にあるにも関わらず、ここは頑なにその文化を守っているのだ。
中央の大通りを通っているだけで、そのことがわかるような気がする。
カナリア
『ちょっと待っててね。今　呼んでくるから』
屋敷に通された2人は、その玄関で待たされた。
そこは凄まじく、純の和であった。美しい日本庭園には、錦鯉はねる池と鹿威し。松の木や石畳はもちろんのこと、灯籠に灯るロウソクはそれだけで雰囲気をかもちだしている。
通された屋敷の玄関も、桧の造りだと一瞬でわかるほどの木の香り。高級感あるれるそれには、腰をかけるのもためらわれる。
そんなところに放置プレイされた2人は、ガチガチに緊張している。
カナリア
『2人とも〜、入って〜』奥からカナリアが顔を出して、2人に手招きをする。2人は恐る恐るあがらせてもらう。『この桧の床は、オレの足で踏んでもよいのだろうか?』などと思ったりもした。
カナリアに屋敷の中を案内される。
そして、庭の縁側に差し掛かった時だった。その縁側に腰かけて、左手の人差し指に小鳥を留まらせている女がいた。
シン
「お〜、美人〜」
思わず見とれてしまったシン。
美人に小鳥というのは、反則である。
カナリア
『ほい、セキレイちゃん。　連れて来たよ』
と、カナリアがその小鳥の女に投げ掛ける。
その女は手に小鳥を留まらせたまま、ゆっくり振り向く。

そう、こいつがさっきのセキレイだ。

アルスター？

ウズラ『えさっきのやつ、ヴェステンフルスなのかよ』

ツバメ『そうなのよ。あたしも初めて聞いた時は驚いたわ』

クエストの途中で出会ったツバメとチドリ、門番をしていたスズメとウズラの４人は、まだ門のところで立ち話をしていた。話題はもちろんハイネの、つまりヴェステンフルスことだ。

？？『ちょっとアンタたち、しゃべってばかりいないで、ちゃんと仕事しなさい』

と、突然一人の女性が石橋を渡って、４人の前に現れた。

この女性もアルスター特有の赤い髪をしている。おそらくアルスターの人間だろう。

スズメ、ウズラ『すっすいません』

４人は左右に２人ずつ別れて、頭をさげる。

４人ともまだ若いとはいえ、これほど頭をさげさせるとは、この女もただ者ではなさそうだ。

？？『ところでアンタたち、今ヴェステンフルスって言ってたわよね？イザークでも来てんの？』

女性は頭をさげる４人に尋ねる。

ウズラ『いえ、そういうわけじゃ…』

きょとんとするその女性に、ツバメとチドリは事の要旨だけを簡

単に説明する。

小鳥を指に留まらせたその着物姿の女は、そのままゆっくりとこっちを振り向いた。

ハイネ『お初にお目にかかります。ハイネ…ヴェステンフルスです』

ハイネがその女に深々と頭をさげる。

そう、この女こそ、アルスター一族の現族長、セキレイ・アルスターである。

セキレイは、小鳥が留まっていた人差し指をピッとハイネの方へ向ける。すると、セキレイの指から飛び立った小鳥は頭をさげたハイネの頭の上に乗っかった。

ハイネ『？』

セキレイ『そんなにかしこまらなくたっていいって』

セキレイはニカッと笑う。セキレイ・アルスター。アルスター一族特有の赤い髪を床につくほどまで伸ばし、あしらった着物の胸や足などを大胆にはだけさした、いうまでもない美人。少々、目のやり場に困る。

セキレイ『まぁ、座りなよ』

セキレイは自分の隣にハイネとシンを座らせるようにうながす。

しかし、それには正直抵抗がある。

なかなかフレンドリーに接してくれているセキレイだが、これでもアルスターの族長だ。例えるなら、総理大臣に、隣に座れと言わ

れてるようなもの。
　しかし、断るわけにもいないだろう。セキレイのせっかくのご厚意だし、このままの体勢ではセキレイを見下ろす形になってしまう。ハイネはぎこちない動きで、セキレイの隣に腰をおろす。シンもそれに続く。
　そして、カナリアはその逆サイドに座る。
　確認しておくが、セキレイとカナリア、また先ほどの４人ツバメ、チドリ、スズメ、ウズラたちに、直接の兄弟（血縁）関係はない。アルスターでは、位の高い女性を“姉”と呼ぶ習慣があるのだ。主にその位の基準となるのが、ＨＲである。ツバメ、チドリはＨＲ３。スズメ、ウズラはＨＲ４。カナリアはＨＲ９のブラックリストハンター。
　同じくセキレイも、元ＨＲ９のブラックリストハンター。現在は引退したことになっているのだが、セキレイ自身は現役を名乗り続けている。
セキレイ『私がセキレイ・アルスターね。って、今さら自己紹介するまでもないか。でそっちは？』
セキレイがハイネの向こう側のシンに視線を送る。
シン『えっと、シン・アスカといいます』
シンも事の重大さがなんとなく察知できたようだ。
セキレイ『シン…アスカ？どっかで聞いた名前ね』
　と、セキレイが小声で口走り、その直後、浮かび上がったその答えに身体を一瞬ストップさせる。何か衝撃の事実でも思い出したかのように。

セキレイ『そう。ハイネにシンね』

セキレイはそのまま立ち上がって、そのまま数歩前に出る。

セキレイ『アーノルドの野郎からいろいろ聞いてるわ。ずっと会いたいと思ってたんだけど、こんな仕事柄なかなかそうもいかなくて。ごめんね』

セキレイは前を向いたまま、ハイネにそれを述べた。夕日越しに見えるセキレイのその後ろ姿のシルエットは、本当にきれいであった。

セキレイが口にしたアーノルドという人物は、現在のギルドクロノス支部ギルドマスターのアーノルド・イルミシェフことである。ハイネの存在が明るみになった時、何かと弁解してくれた恩師。また、ハイネの目指す【砂の狩人刀七人衆】の一人でもある。

ハイネ『いえ、そんな。自分こそこんなに遅くなってしまって、すみませんでした』

ハイネも立ち上がって、セキレイの背中に頭をさげる。

カナリアも優しげな表情でハイネを眺めている。

セキレイ『そういえば、カナリア、アンタこの子たちと知り合いなの？』

夕日をバックに振り返ったセキレイが、縁側の隅の方に座っているカナリアに問い掛ける。

カナリアは『ちょっとね』と微笑んで、シンとハイネにアイコンタクトを送る。

ハゲタカ『すまない。遅くなった』

ちょうどその時だった。

屋敷の庭の向かって左手から、グラサンのおっさんが小走りで走ってきた。

右頬に大きな傷のあるそのおっさんは、歴戦の勇士の名をくれてやるには申し分ない厳格だった。

セキレイ『も～ハゲ、遅ぇよ』

ハゲタカ『なっオレはハゲじゃない』

カナリア『プッ』

ハゲタカ『笑うな』

さて、遅れて来て、セキレイにいじられてるこのおっさんは誰でしょう。

シンはこの難問に頭を悩ませる。わかっているキーワードは『ハゲ』のみ。

ハイネ『ハゲタカ様。お久しぶりです』

セキレイの隣に立つそのグラサンのおっさんに、ハイネは先ほどの小鳥を頭に乗せたまま、再度頭を下げて挨拶をかます。

セキレイとハゲタカが2人並んで立つと、何か物言えぬ存在感を感じる。

ハゲタカ『確かハイネ・ヴェステンフルスだったな。5、6年ぶり

か。クロノスのアーノルドからキミの生存を知らされた時は、本当に驚かされたものだ』

ハゲタカは左手でグラサンをとり、ハイネの前に右手を出す。少々驚いた様子ではあったが、ハイネはゆっくりとハゲタカのその手をとった。この様子から、ハイネは、セキレイと違って、このハゲタカという男とは面識があると思われる。

ハゲタカ『あちらの少年は？』

グラサンをとっても、まったく衰えない厳つさで、シンを睨む。本人に睨んでいるつもりはないのだが。

シン『シ、シン・アスカですっ』

思わず立ち上がって直立不動。蛇に睨まれた蛙。ハゲタカに睨まれたシン。

ハゲタカ『そうか。私はアルスターの副長ならびに族長補佐を任されているハゲタカ・アルスターだ。よろしくな』

ハゲタカがシンに歩み寄り、ハイネ同様右手を差し出す。その目付きは、『怪しげな動きを見せたら蜂の巣だ』と言わんばかりの威圧感。

セキレイ『んで、あだ名が“ハゲ”。良かったらそう呼んであげてね』

なんか色っぽい声と満面の笑顔でそう言っているセキレイに、ハゲタカはものすごく言いたいことがあるって顔をしている。

ハゲタカ・アルスター。アルスター一族特有の赤い髪をスポーツ刈り風に刈り上げ、かなりの長身とグラサンで厳つさを際立たせている。セキレイと並んで立つと、近づき難いオーラを放つ。

シンは震える手で、ハゲタカの右手をとる。

ハゲタカ『…』

ハゲタカは眼下のそんなシンを見て、頭の中に稲妻が轟いたかのように何かがほとばしる。

ハゲタカ『！！！

もう一つの影の主

『オレに…関わるな』

この男が、ハゲタカの首に太刀を突き付けている。
倒れた状態のハゲタカの手に、武器らしきものは握られていない。
髑髏の面からわずかに見えたその男の顔と眼。赤く炯々とした眼光は、脳裏に焼き付いて離れない。

ハゲタカ『…』

そして、なぜだ。
今、目の前で握手を交わしているこの少年に、なぜあの時の、あの男の面影を見る？

アルスター？（前書き）

エキゾチックジャパ～ン

アルスター？

シンと握手を交わしたハゲタカ。その一瞬で、あの過去が一気に頭を通り抜けた。まるで雷が頭の中を貫通したかのように。

シン『？』

ハゲタカ『シン…アスカ。まさか、トキ様の研究所の…っんが』

ガチな顔をしてマジなことを言おうとしたハゲタカを、セキレイが見事な旋風脚で一蹴する。

セキレイ『つまんないこと言ってんじゃないわよ』

セキレイは長い髪を宙に舞わせ、スタッと静かに着地した。はだけた胸元の揺れは実にエクセレント。

一方旋風脚をまともに食らったハゲタカは、激突した壁にめり込んでいた。

カナリア『アハハタカさんにはホント容赦ないね、セキレイちゃん。今回ばかりは同情するよ』

カナリアは壁にめり込んでいるハゲタカに両手を合わせて『南無阿弥陀仏』という摩訶不思議な呪文を唱えている。

シン『あの…研究所って、何ですか？』

セキレイ『ん～ん、気にしないで。バカハゲの戯言だから』

少し焦りの見える笑顔でセキレイが答える。

そういえば、先ほどハゲタカが来る前にも、セキレイがシンの名前を聞いた時、妙な反応をしていた。
それと、ハゲタカが研究所と呟いた時、『トキ様』と言っていた。
調べてみる価値はありそうだ。

ハゲタカ『ててて、やり過ぎだ、セキレイ』

セキレイ『うっさいわね。アンタがバカなこと言うからでしょ』

壁から頭をさすりながら這い出してきたハゲタカに、追い討ちをかけようとしているセキレイを、カナリアがなだめている。
ハイネはそんな光景を見て、ふと同じような風景を思い出してしまった。
数年前までは自分も同じような光景の中に混じっていたのだから。

セキレイ『ったく、こんなことで時間潰してる暇はないのよ』

セキレイはハゲタカを踏み潰して、ツンと呟く。いつデレるのかはわからんが。

セキレイ『あ、そだ。よかったら、今日泊まってく?』

ハイネ『え?』

突然セキレイが『いいこと思い付いた』と言わんばかりの表情でこんなことを提案する。
突然のそれに、戸惑うハイネは無理もない。

ハゲタカ『泊めるったって、部屋は　どうするんだ?』

ハゲタカがセキレイの足の下から問い掛ける。見ててかなり面白い構図だ。

セキレイ『アンタの部屋があるしょ』

セキレイが足でグリグリする。

ハゲタカ『あ、いや、それは困る』

セキレイ『あ～？なんでよ？エロ本でも隠してんの？ガキじゃあるまいし。女の裸なら、いつもあたしの見てんでしょ』

ハゲタカ『ｈａｈａｈ』

セキレイの爆弾発言に、ハゲタカは飛び上がる。これの事実は明らかではないが、カナリアは『マジドン引き』的な目付きでハゲタカを見ている。もちろん、ハゲタカは必死で冤罪を訴えている。

シン『…クス』

思わず、笑いがこぼれる。正直、五大部族の族長ともなれば、堅物で近寄り難い存在、そんなイメージがあった。

しかし、アルスターはそんなイメージをいとも簡単に崩してくれた。何せ、族長と副長と一族の中心であるべきブラックリストハンターでコントをかますような連中だ。族長は客であるシンたちの前でこんなふしだらな格好してるし、副長はよく蹴られたり踏まれたりしてるし。

ハイネ『いいんですか？』

セキレイ『いいのいいの。んじゃ、そういうことでハゲ、よろしく』

ハゲタカ『オレの部屋はやめてほしいが、それでいいなら』

顔はいかついのに、なぜかセキレイには下手のハゲタカ。

この場はセキレイが無理やり押しきる形でおさまった。シンとハイネも、一晩泊めてもらうことになった。

ハゲタカ『カナリア、たしか小鳥箱の客室が空いてあろ。2人をそこに案内してやれ』

セキレイ『後であたしらも行くわ。ハイネとは、いろいろと話さなきゃならないことがあるからな』

そう言い残して、セキレイとハゲタカは去っていった。2人とも、仮にも族長と副長という身の上だ。何かと忙しいのであろう。

ハイネは頭を下げて、それを見送る。

カナリア『ハイネくん、そんなにかしこまんないでよ。別にセキレイちゃんは礼儀を気にするタイプじゃないし、どっちかと言えば、もっと礼儀を知らないといけなのはセキレイちゃんの方なんだから』

そうは言っても、ハイネにとってセキレイは雲の上の存在の人間だ。まぁ、確かにセキレイには礼儀を、特に服装をなんとかしてもらいたいのは事実だが。

その後、2人はカナリアに連れられ今夜の宿に案内された。

ハゲタカ『まったく、お前はいつも思いつきで行動しすぎだ。せめてオレには、先んじて伝えてくれ』

シンとハイネと別れたセキレイとハゲタカは、屋敷の廊下を歩いていた。

後ろでハゲタカが正論な説教をくどくどとほざいている。セキレイはジト目になって、『面白くない』というような顔をしている。

セキレイ『ねぇ、タカ』

ハゲタカ『ん、なんだ？今回はハゲじゃないのか？』

ハゲタカの呼び方がいつもとは違う。口調も、やはりいつもとは違う。

セキレイ『あの2人には…、やっぱり本当のこと、話すべきかな？』

先を行くセキレイがそんなことを口にした。ハゲタカの前を歩いているため、その表情は確認できなかったが、何かその口調にははがゆさを感じた。

ハゲタカ『いや、オレたちに、そんな資格はない。彼らに、真実を伝えるには…』

ハゲタカも語尾を濁らす。ただ、言葉をなくしたハゲタカであったが、セキレイが言う『本当のこと』をシンやハイネに話すということについては、己の意見を述べた。自分たちにはその資格がないと。

セキレイ『…だよね』

シン『お～、広～』

ハゲタカが言っていた小鳥箱という客室に連れられたシンとハイネ。
広くてきれいで明るくて。まるで旅館の客室のような部屋だ。
宿泊料金とかとられないよな…。
ハイネ『ホント広いな。オレらの個室より広いんじゃないか？』
もちろん広い。
シンとハイネの個室は、ギルドから与えられたものなので、例えるなら寮である。まぁ、ＨＲがあがり、収入がそこそこになってきたら、それなりのところに引っ越しすることはできる。
カナリア『ちょっと待っててね～。浴衣とってくるよ。くつろいでて』
カナリアがそう言い残して部屋から出ていった。
アルスターの居住区、その町並みを歩いてみて、シンとハイネが共通して思ったことが一つある。
それは“純の和”。
建物の造りから、一族の皆さんが着用している衣服まで。
セキレイも着物姿だったし、カナリアは浴衣姿だった。ハゲタカも袴みたいなのを履いていた。
これは明らかに、ティーズの文化とは異質だ。もちろん、シンやハイネにとっても。でも、嫌ということでもない。なぜか、心が落ち着かされる、そんな感じだった。
？？Ａ『目標確認。エリア５３。さっさと来てくれ』

即席スキル“以心伝心”を使って、仲間への支援要請を求める。
ここは火山…ではない。確かに、ドロドロの溶岩がそこら中に流れ、大気の異常な温度。火山は火山なのだが、ここは普通の火山でも、火山奥地でもない。もっとヤバいところ。

『53ね。わかったわ』

『了解。すぐ向かいます』

『53?めっちゃ遠いって』

『オレ、もうそろそろ着くわ』

頭に直接響く声。
即席スキル“以心伝心”は、複数のハンターでクエストに挑むとき、各個の位置情報を知るため、一定　区間内で通信しあえる即席のスキルのことである。即席のため、クエストが終了するとその効果はなくなる。また、このスキルを使えるのは、上位ハンター以上。

ケネス『よぅ』

支援要請を求めたハンターの前に、銀猫が現れた。

??A『早かったな』

ケネス『もうちょいで着くって言ったろ?』

岩影に隠れて、合流した2人。

ケネス『あれか、デカいな。軽く見積もっても２５００は越えてるだろ』

２人の目線の先には、溶岩の流れの中にできた中州の中央に黒い飛竜種が。まだこちらには気づいていないようだ。

ケネス『女ども来るの待ってたら逃げられるぞ』

??A『オレらで先制するってことか。上等だ』

２人は互いに自分の武器に手をかけ、岩影から飛び出す。飛竜もその気配に気づく。

??A『ヴァニラちゃんたち来る前に倒せたら、格好つくよな』

ケネス『無理言うなよ』

飛竜はこちらを向いて、その巨大な口から破壊的な咆哮を放つ。咆哮の後、黒轟竜ティガレックス亜種は２人に迫る。

アルスター？（前書き）

「僕と契約して魔法少女になってよ」

「あのー僕、男です」

「はい……」

アルスター？

カナリア『ちょっと大きいかな？』

カナリアの持ってきた少々おっさんくさい浴衣を着せられて、シンとハイネは横に並ぶ。

ハイネ『いや、大丈夫ですよ』

シン『オレもちょうどです』

シンは紺色、ハイネはシンのより一回り大きいサイズの灰色の浴衣。

カナリア『ウンウン、２人とも似合ってる似合ってる』

カナリアは水色っぽい生地に波模様があしらわれた浴衣を着ている。３人並ぶと、カナリアがやたら際立って見える。まぁ、浴衣なんだから、男は地味なものでちょうどいいぐらいか。
しかし、こうやって見ると、カナリアも結構かわいいと改めて思う。

カナリア『よ～し、んじゃ行ってみよー』

カナリアが両手で２人と腕を組み、強引に連れ出す。ハイテンションなムードメーカーに腕を引っ張られ、抵抗する余地もないシンとハイネは、カナリアに従属するしかなかった。

シン『どこ行くんですか？』

カナリア『2人とも、クエスト終わってすぐにこっちへ来たんでしょ。だから、まずは腹ごしらえ』

まずは、ってこれから引っ張り回すつもりなのか、このポニーテールは。こんなテンションであちこち連れ回されたら、気力がもちそうにない。

しかし、カナリアのこのテンションに2人は抗うことができなかった。

トキ『そうかい。とうとう来たのか』

慰霊碑の前に立つ年配の女性が悲しげに呟いた。その後ろにはセキレイとハゲタカが並んで立っている。

トキ『アイツが現れて2年。運命の歯車は、確実に噛み合い動き出してるね』

トキは静かに慰霊碑に手をのせる。

墓石のような形の水晶の慰霊碑には、数百名程の名前がびっしり記されている。これは何の慰霊碑なのか？

ハゲタカ『彼に、会われますか？』

セキレイの隣にいるハゲタカが、慰霊碑をなでるトキの背中に問い掛ける。

振り向きもせずに、トキは首をゆっくり横に振った。そして、トキはその場にしゃがみこみ、慰霊碑に記された名前を順に指でおっ

ていく。

トキ『知らぬ方がいい。この子は…』

慰霊碑の名前を指でおっていたトキが、指を止めた。普通、慰霊碑というものは、死者の鎮魂や霊魂を慰めそれを後の世に伝えるためにある。

しかし、トキが指を止めたところ、その指が指し示す名前は紛れもなく、『シン・アスカ』だった。

セキレイ『知らぬが仏ってこと?』

険しい表情のセキレイが、少し怒り混じりの質問を放つ。

そんなセキレイをハゲタカは横目で見下ろす。

セキレイ『あの子…ううん、あの子たちには、何の罪もないのよ。それを、知らない方がいいって…。それって結局、アンタが逃げてるだけってことなんじゃないの?』

吐き捨てたセキレイ。

普段から口の悪いセキレイを見てきているハゲタカであったが、この瞬間はただ純粋に驚いていた。

ハゲタカ『私も左に同意です。彼、シン・アスカにはすべてを知る義務があります。その慰霊碑に名を刻まれた者たちや亡きヴェステンフルスをはじめとする、犠牲となった数多の人々のためにも』

慰霊碑には、確かにシンの名前が刻まれている。

先ほども言った通り、慰霊碑というものは、死者の鎮魂を慰めるためにある。ここではハゲタカの言っていた『犠牲になった人々』

というのがそれにあたるのであろう。

それならばなぜ、シンの名前が慰霊碑に刻まれているのか。

もしや、『犠牲になった人々』の『犠牲』とは、単純に“死”を表したものではないのかもしれない。

もっと別の、もっととてつもない何かなのだろうか。

トキ『一度背負った罪は、償うことはできても、決して消し去ることはできないのだよ。お前たちはこの子に、そんな罪を背負わせるつもりかい？』

トキが優しく慰霊碑に刻まれたシンの名をなでる。

そして、ゆっくりと立ち上がり、セキレイとハゲタカに向き直って、その眼で語りかけてくる。

トキ『アイツを見てればわかるだろう。犯した罪と、自らの原罪に苦悩するアイツを』

セキレイ『そんな言い方するな。罪とか原罪とか、そんなもの、今のアイツには何も関係ない』

難しい論理を説くトキに、セキレイが食らいつく。

トキ『言ったろ。罪は、決して消し去るができないのよ』

トキが語る罪の在り処。

未だ知らされることのないシンの罪と、アイツと呼ばれる者の原罪。

罪という呪縛によって絡み合う運命の糸は、確実に少年たちを巻き込んでいく。

そんな頃、己の議題で論争を繰り広げられていたシンは、当然ながらそんなこと知るはずもく、相変わらずハイテンションなカナリアに手を引かれていた。

現在は、公園のような広場で一休み中。

シン『もう食えねぇ…』

イスの代用に置かれていると思われる岩に腰かけたシンが、青ざめた表情で空を見上げる。

事の発端は三時間程前にさかのぼる。

カナリアに腹ごしらえと言われて連れ出されたシンとハイネは、連れてこられた店の主人にやたら気に入られ、とんでもない量の飯をサービスしてもらった。もちろん、料金はタダ。

サービスしてくれて料金がタダになったというのはいいのだが、そうなると出された料理を残せないのだ。結局、そのとんでもない量の飯を処理するのに二時間オーバー。ハイネは『これぐらい食わないと男じゃない』とか言って、さらに店の主人と意気投合していたし。

カナリアも女性にしてはなかなか食べる方で、ハイネとカナリアと店の主人でめちゃくちゃ盛り上がっていた。

シンだけは、嫌いなおかずがあるから残したいのにそれを先生が許さず、周りの友達はみんな食べ終えて遊びにいって、自分だけ教室で泣きながらそれを食べてる小学生のようになっていた。

ハイネ『今の店長さん、いい人っスね〜』

カナリア『でしょ〜。テキトーなこと言っておいたら、いろいろサービスしてくれるしね』

なんかハイネとカナリアは、胃袋破裂寸前のシンをほったらかして、いい感じに盛り上がってるし。

カナリア『そうだ。腹ごなしに一手手合わせ願えない？』

いきなりカナリアが妙な提案をした。

手合わせ、つまり何かしらの勝負をしようということだ。

当然、２人は『え？』って感じだ。

いつも通り、カナリアはニコニコと笑っていた。

スコール『ハァア』

灼熱の大気に響くスコールの声。

青い髪の青年スコールの大剣【滅慄叉】と、黒轟竜ティガレックス亜種の剛爪が激突する。

一進一退の攻防。黒轟竜の破壊的な威力のクローを真っ正面から受け止めたスコールも力負けはしていない。

ケネス『オゥラ』

スコールの背後から飛び出したケネスが、ライトボウガン【慟哭スル魂】でティガレックス亜種を銃撃する。放たれた４発のＬＶ３徹甲榴弾はすべて命中、着弾直後大きな音と閃光とともに爆発した。

爆発によって怯んだティガレックス亜種から、スコールはその腕をはね除け後方にさがって間合いをとる。

スコール『フゥ～、なかなかいい感じじゃん。ケン』

ツンツンした青い髪が特徴のスコールと呼ばれる青年が、大剣【滅慄叉】を肩に担ぎ上げて、視界の左の方にいるケネスを称賛する。

ケネス『まぁな』

ライトボウガン【慟哭スル魂】に弾を装填しながら、ケネスは親指を立ててかえす。

ティガレックス亜種は、徹甲榴弾によって生じた爆煙に包まれている。

ケネス『』

と、その時、その爆煙の中から、溶岩の塊がケネス目掛けて飛ばされてきた。

ケネスはとっさに装填したばかりのＬＶ３徹甲榴弾を放って、その溶岩の塊を爆砕する。

しかし、それはフェイクだった。

爆砕した溶岩の塊の後方から、ティガレックス亜種が迫っていた。

ケネス『…マジ？』

砕けた岩をさらに砕く勢いでティガレックス亜種が怒涛のドラゴンクロー。

回避不可能と察したケネスは受け身の体勢をとる。

そこへ、【滅慄叉】の刀身を盾にスコールが両者の間に割って入った。

スコール『ったく、もっと動体視力鍛えとけ』

ここでもスコールはティガレックス亜種の攻撃を防ぎきった。

ケネス『スコールがいるから大丈夫だよ』

ケネスは跳び上がって、ティガレックス亜種の真上を弧を描くように飛び抜ける。

ケネスを目で追って顔を上げたティガレックス亜種。

スコール『よそ見してんじゃねぇ』

それを見計らっていたように、スコールはティガレックス亜種の腕をはじき、顔面を斬り上げる。

ティガレックス亜種の黒い厚鱗がえぐれ、大きく後ろへ後退する。

そして、ケネスはその後退したティガレックス亜種の背に着地した。

ケネス『はっ、喰らえ。徹甲榴弾ＬＶ５だ』

ケネスはそのティガレックス亜種の背中に、【慟哭スル魂】の銃口を密着させ、ゼロ距離で引き金をひく。反動でぶっ飛んだケネスは、それをうまく利用してスコールの隣に着地する。

直後、ティガレックス亜種の全身を閃光が包む大爆発。

ハンパじゃない爆煙がその場を覆い尽くす。

スコール『これは効いたな』

しかし、その爆煙はすぐに消し飛ばされた。ティガレックス亜種の強烈な咆哮によって。

それには、ケネスとスコールも思わず手を顔の前に出してしまう。

爆煙が一気に消し飛び、そこには眼を赤く染め上げたティガレックス亜種が。

ケネス『あ～あ、キレちゃった』

スコール『あれだけ斬ったり、撃ったりしてたんだから、無理もない』

怒り状態になった黒轟竜ティガレックス亜種。

2人は武器を持ち直し、ティガレックス亜種に向け、再度戦闘体勢をとって見せる。

スコール『ここからが本番だぜ』

ケネス『がってん』

アルスター？

カナリア
『もっとガンガン攻めない　と、あたしから一本とる　なんてできないよ』
ハイネの正拳をたくみに受け流し、なおかつ足元にはまったくの乱れもないカナリア。
ハイネは少々むちゃくちゃながら、目の前で受け身の姿勢をとるカナリアに連続パンチ。
時刻は、日の入りが遅いこの地方で、すでにその姿の半分が沈んだころ。
寺の境内の広場で、拳を交えるハイネとカナリアの姿があった。
ハイネ
『このォっ』
拳を交えると言えば、お互い同等の力をもって手合いに臨んでいるように思うかもしれないが、全然そんなことはない。
確かにハイネが一方的に正拳を繰り出しているのだが、カナリアはそれを片手でさばいている。
もうお分かりであろう。2人が行っている手合いは、俗に言う『組手』である。アルスター一族では、基本体力と状況判断能力を養うため、組手等の古式武術を用いているのだ。
カナリア
『だんだん動きが雑になっ　てきてるよ』
次第に苛立ちはじめたハイネは、正拳に乱れが生じてきた。
それを見切ったカナリアは、ついに攻撃に踏みきった。
カナリア
『行くよ。うまく受け身と　ってね』
今まで左手でハイネの正拳を受け流していたカナリアが、封印していた右手を発動した。

ハイネ
『なっ』
繰り出されたハイネの左の正拳を、カナリアは右の手刀で打ち落とす。
中央がが空きになったハイネに、カナリアは左の手刀でさらに追撃を加える。ハイネ
『う…』
カナリアの手刀はハイネの首筋をとらえていた。もちろん、そのまま技を決めてはいない。
正拳をかわされ首筋を手刀でとられたハイネと、正拳を見事に回避し低い姿勢から手刀を放ったカナリア。交わる2人の体勢を客観的に見ると、ハイネの格好の悪さが際立って面白い。シンはハイネのみっともない姿を見て、若干吹き出してしまいそうになる。
ハイネ
『■■■■■』
ハイネが頭を抱えながらシンのもとに戻ってくる。
おそらく最初はなめていたのであろう。ブラックリストハンターと言ってもカナリアは女の子だし、正直そんなに力があるとは思えなかった。
しかし、正拳を手刀で打ち落とされた時のあの威力は想像以上のものだった。打ち所が悪ければ、手首骨折というのもあり得たかもしれない。まだ左手の手首はジンジンしびれてるし。首の方なんか、あのまま技を決められていたら、確実に首の骨イッていただろう。
ハイネ
『気を付けろよ、シン。ナ　メてかかると、マジにや　られんぞ』
待機していたシンの肩にハイネが手を乗せて、その耳元で呟いた。
シンはこくりと頷いて、いざ出撃。
カナリアに向かい合って立ち、先ほどのカナリアとハイネの手合いの見よう見まねで構えをつくる。
カナリア

『シンくんは初めてだっけ　、組手？』
シン
『はい。手加減よろしくお　願いしますよ』
先ほどのハイネと違って、シンは組手というのもに初めて触れたのだ。予防線を張ってあるから、負けたとしても問題はないが、経験者のハイネですら歯が立たない相手だ。
自分たちが組手初心者であることを知っていながら、カナリアは何のためにこんなことを提案したのか、いまだにわからない。
カナリア
『オッケー。ど～んと来な　さい』
カナリアもいつもの笑顔のまま構えをとる。
生暖かい風が、両者の間を吹き抜けた瞬間、シンが先制して飛び出す。とっさにカナリアから笑顔が消え、手元は防御の体勢をとる。
ハイネ
『シン…』
左へステップを踏み、カナリアの右側へ踏み込む。カナリアも身体をシンへ向き直る。
左手で拳を放とうとした瞬間、シンは右に身体をよじって右手で遠心力をまとった横殴りを繰り出した。
カナリア
『』
思わぬ方向転換でとっさに左手で防御したカナリアはそれを何とか受け止めた。しかし、シンはそれを見越してか、さらに右手でカナリアの胸部目掛けて渾身の正拳を放つ。
カナリア
『っ…』
残る右手でなんとかガードしたが、大きく後退させられた。まさかの開始１０秒で、あのカナリアが両手を使わされた。
踏み留まったカナリアは、体勢を崩して方膝をつく。そこを狙って、シンが右手の正拳で追撃にかかる。

シン
『ク…』
カナリアはシンの正拳を左手でつかみ取り、そのまま手を引いてシンの身体を引き寄せる。
シン
『なっ』
そのまま右のひじを突き立て、シンのみぞに肘鉄を直撃。
カナリアのカウンターが発動。
シンは後ろに山なりにぶっ飛んで、地面に落下する。カナリア
『ハァハァ』
気づけば、カナリアの目付きが変わっていた。いつもの笑顔まじりの愛くるしい目付きではない。獲物をとらえた時のハンターの目だった。
ハイネ
『おい、シン』
ベンチから駆け出すハイネ。
それを見て、カナリアも我に返る。
カナリア
『…シンくん』
いつもの目に戻ったカナリアは、ハイネに続いてシンに駆け寄る。
カナリア
『ごめん、シンくん。あん　まりシンくんの動きが速　かったから、あの…とっ　さにカウンターかけちゃ　って…』
少々取り乱しているカナリア。
あの時繰り出した肘鉄のカウンターは、カナリアとしては意識的に使っていたようだ。
シン
『いっつ…』
ハイネに抱き起こされて、半身を起き上がらさせる。カナリアはシンの目の前に来て再度頭をさげる。

カナリア
『ホント、ごめん…』
肩と視線を落とすカナリア。シンは肘鉄を喰らったみぞ付近を手で押さえて、目の前のカナリアを見る。
シン
『じゃ、もう一回、お願い　できますか?』
カナリア、ハイネ
『え?』
シンはフラッと立ち上がる。
腰をおろしていたハイネとカナリアは、きょとんとした表情で立ち上がったシンを見上げる。
シン
『すいません。やられっぱ　なしって、なんか気分悪　くて。それに、やられた　ら、3倍にしてやり返せ　とオヤジから教わったモンで』
シンがニコッと笑う。
っていうか、シンってこんな負けず嫌いな性格だったっけ?ハイネは初めて見たシンの新たな姿にちょっと驚いていた。
それに一番気になるのが、さっきのシンの動き。組手初心者であるはずのシンが、たった一度の手合いを見ただけで、あんな動きができるとは到底思えない。
ならば、あの動きは一体なんだったのだろうか。

ケネス
『いてっ』
ヴァニラ
『もう、動かないで』
岩に腰をおろしたケネスの頭に、ヴァニラが包帯を巻いている。

ここはこの火山地帯の洞窟。風の抜け道となっており、洞窟の幅はそんなに大きくないので、大型モンスター等は入り込めない。また、溶岩の熱気も風が払ってくれるのでクーラードリンクも必要ない。なのでこの風の抜け道は、ハンターたちの休息場となっている。まぁ、この地方にクエストとしてハンターが訪れることはほとんどないのだが。スコール
『ちょい、ミキリ。もっと　優しく』
ミキリ
『こう？』
スコールの左腕に包帯を巻いていた女の子が、満面の笑みで力いっぱい包帯を締める。
スコール
『あ〝あ〝あ〝ーー』
唇を噛み締めて、その痛みをこらえる。
さて、今のこの状況を説明すると、今回の標的である黒轟竜ティガレックス亜種を発見したスコールは、以心伝心で仲間に救援を呼び掛けた。一番に到着したケネスは、ティガレックス亜種を逃がさないために、２人で先制攻撃を仕掛けることを提案する。そして、他の仲間の到着を待たずしてティガレックス亜種と乱闘開始。その後、怒り状態となったティガレックス亜種にボッコボコにされたケネスとスコールは、後から来た仲間たちに助けられ、今に至るというわけだ。
スコール
『すまんな。さっきはマジ　助かったよ』
ヴァニラ
『ホント、無茶しすぎなの　よ、アンタたち。死んじ　ゃったらどうするわけ？』
ケネスの頭に包帯を巻いていたヴァニラが、呆れた顔でスコールに顔を向ける。ミキリ
『私には何かないの？』

そんなスコールに、ミキリはスコールの腕に巻いていた包帯をさらにキツく締め上げる。
スコール
『ウギャアアア』
今度はその痛みに耐えきれなかったようで、スコールは神の国へと昇天なされた。
それにはヴァニラも苦笑いする他ない。
カノン
『それにしても、ケンが追　い付かれるなんて珍しい　ね。スコールはしょっち　ゅうだけど』
ケネスの隣の岩にちょこんと座っているまた別の女の子が、ケネスとスコールに問いかける。
ミキリ
『そうね。逃げ足自慢のケ　ンが追い付かれるなんてね』
ケネス
『“神足”だ、じ・ん・そ　・く。誰が逃げ足だよ』ケネスは全ブラックリストハンターの中で唯一、“神足”という特殊なスキルを持っており、ノーダメージでクエストをクリアするなどの快挙を達成したハンターとして有名だ。
しかし、そんなケネスが今回、攻撃をもらったということで、仲間たちが少々驚いているようだ。
スコール
『あのティガレックスなら　、神足に追い付いても、　全然不思議じゃないと思　うよ』
女たちが驚いている中、ケネスとともにティガレックス亜種と相対したスコールが、それを肯定する。
ケネス
『ああ、そうだな。あんな　バケモンに報酬が６００万ｚ　なんて、割に合わねぇよ　』
スコール

『なら、どうする？リタイ　アするか？』
弱音をぼやいたケネスに、スコールが意地悪く問いかける。
ケネス
『冗談。リタイアなんざ誰　がするかよ。それに、や　られたら３倍でやり返す　。オレは師からこう教わ　ったモンでな』

アルスター？

シン
『ハアァ』
シンの連続正拳突き。
型にはまったその正拳突きと足捌きは、先ほどのハイネのものとは比較にならないものになっていた。
カナリア
『うん。シンくん、いい感　じ』
それに対しマジな表情のカナリアも、乱れ一つない足遣いと受け身で、シンの正拳をギリギリかつ確実にさばいていく。
ハイネ
『…』
それを眼前で繰り広げられているハイネは呆然とする他ない。
数分前まで組手なんか、その言葉も知らなかったシンが、初心者の目でもわかるほどに上達しているのだ。ハイネにはわかっている。
少なくとも、今の自分では絶対に勝つことはできないだろう、ということが。
シン
『ハァハァ…』
次第に息をきらし始めたシン。
やはり基礎体力という問題は大きいようだ。
その点、カナリアは息の乱れ一つない。
何せカナリアは受け身をとっていただけなのだから。シンは一方的に正拳を繰り出していたので、一方的にスタミナを使い果たしたのだ。連続の正拳突きは、以外に体力を消費するもので、経験者ならそのようなことはしないだろう。
やはり、シンが初心者だということは間違いないようだ。
その後は、もちろんカナリアに一蹴されて負かされた。

3倍返しと息巻いていたシンも、あれ以来まともな一撃を決められないまま完膚無きまでに叩きのめされた。

シン

『あ～。カナリアさん、速　すぎですよ』

地面にぶっ倒れたシンが、星の見えかけた夜空に向かって叫ぶ。

カナリア

『ちょっと無駄な動きが目　立つかな。正拳出すとき　、そのまま肩を持ってい　かれちゃダメだよ』

地面に寝転がるシンに、カナリアとハイネが駆け寄る。

汗だくになって息をきらしている爽やかなシンを見て、ハイネはなぜだか己を責めたくなる。

カナリア

『あと歩法の練習なんかも　すれば、あたしなんかよ　りもずっと強くなれるよ　』

その表情に笑顔が戻ったカナリアが、ぶっ倒れたシンに手をのばす。

シンもかるく笑んで、その手をとって起き上がる。

太陽は完全に沈んだが、まだかすかに明るい空には、2、3のひときわ輝く星で装飾されていた。

生暖かい風が、シンの汗を冷たく冷やす。

ハゲタカ

『お前たち、こんなところ　にいたのか』

藍色の空に響く野太い声。直後にグラサンの大男が空から降ってくる。

ハイネ

『ハゲタカ様』

シン

『ハゲタカさん』

カナリア

『ハゲ』

ハゲタカ

『誰がハゲだ』
カナリアたちの帰りが遅いので、探しに来てくれたようだ。今夜はセキレイからハイネのヴェステンフルス等の話をしてもらうことになっている。
カナリア
『ゴメン、タカさん。遊ん　でて、忘れてた』
一向は急いで、セキレイの屋敷に向かう。
先ほども一度来たセキレイの住居兼一族の集会所である屋敷本邸。城とまではいかないまでも、相当でかく、またその造りも純度１００％の和。
さっきはそのまま縁側に招かれたが、今回は階段を二つほどあがった部屋に通された。
セキレイ
『遅ーい何してた』
待つことが嫌いという短気きわまりない性格の持ち主であるセキレイが、遅れてきた一同を罵倒してお出迎え。
ハゲタカ
『まぁ、待て。そんなに怒　鳴るな』
顔に似合わずものわかりのいいハゲタカが、長い髪を逆立ててお怒りになるセキレイをなんとかなだめる。『ふん』と腕を組んで畳の上に腰を落とす。
余談ではあるが、シンはこの畳といういぐさのカーペットに妙な違和感を感じていた。
セキレイ
『え～と、さっきはバタバ　タしてたから、こんな遅　くなってすまんね～』
ハゲタカに怒りを向けていたセキレイが、シンとハイネにちょいちょいと手招きする。
シンとハイネは並んでセキレイの前に座る。
セキレイ

『いろいろ話す前に、渡す　モンは渡しとこーと思っ　てね』
先ほどまで着ていた着物ではなく、カナリアと似たような浴衣を着ているセキレイが、そのたもとから何かを取り出す。
ハイネ
『』
セキレイのその手に握られていたものは、赤い石の首飾りだった。
それを見てただ驚きのあまりに目を見開くハイネの様子は普通じゃなかった。
ハイネ
『…イザーク、ここへ来た　ことがあるんですか?』ハイネが目線をさげて、目に前髪をたらす。その首飾りを見て、ハイネは瞬時に『イザーク』という名に結びつけた。
その声はかすかに震えており、負の感情がはらまれているように思えた。
セキレイ
『一度きりだったけどな。　４年前、ヴェステンフル　スが滅んですぐのことさ　』
ハイネはゆっくり手を伸ばして、セキレイからその首飾りを受けとる。
４年前、ヴェステンフルス一族が幻影旅団によって滅ぼされた時のことだ。

今回、ティガレックス亜種討伐クエストに参加したケネスたち５人は、再度の挑戦のため、またティガレックス亜種を探すところから始めていた。
現在は溶岩流によってできた洞窟の中を捜索しているところだ。
ケネス
『…』

ケネスは包帯で巻かれた頭の右側頭部を右手で押さえている。
先ほどの戦闘で怒り状態となったティガレックス亜種に、スコールとケネスはボッコボコにやれたのだ。
ヴァニラ
『痛む、ケイ?』
ケネス
『ちょっとな』
その隣で何気ない気遣いをしてくれる相棒に、ケネスは一言だけ返す。
ミキリ
『あっついね~』
スコール
『いや、まったく』
確かに暑いな。ここは火山地帯だし。
でも、ミキリとスコールがいう『あつい』とは、そっちの意味ではないだろう。『?』という顔をして振り向くケネスとヴァニラに、ミキリとスコールは目をそらす。
カノン
『にしても、ケンとスコー　ルはペイントボールもつ　けてきてないの?ボロボ　ロになって帰ってきてそ　れじゃ、無駄死にみたいなものじゃない』
ケネス、スコール
『ぬっ…』
カノンの言葉に貫かれる2人。
今の一撃は、さっきティガレックス亜種にやられたキズより、深く大きくえぐられた。
ミキリ
『さすがカノン。無意識の　うちに急所をつくなんて　』
カノン
『え?』

気がつけばケネスとスコールが白くなってる。
カノンのおかげで、今回の男連中は役立たずだということが証明された。
ヴァニラ、ミキリ、カノン『』
冗談を抜かしてられるのもこれまで。今までの空気を一気に掻き消すような、威圧感に襲われる。
ミキリ
『こら、男ども。燃え尽き　てる場合じゃないぞ』
生気を取り戻したケネスとスコールは、威圧感の源と思われる岩山の上を見上げる。
ケネス
『出た』
スコール
『まぁ、探す手間が省けて　よかったじゃん』
そこには眼を赤く充血させた黒轟竜が、今にも飛びかかってきそうな勢いで、こちらをにらみつけていた。スコールは手にペイントボールを、ケネスはライトボウガン【働哭スル魂】にペイント弾を装填する。もうカノンにあんなこと言われるのはゴメンだ。
ケネス
『汚名返上だぜ、スコール　？』
スコール
『今度こそペイントボール　当ててやる』
なんか焦点がズレているような気もするが、この際細かいことは気にしないでおこう。
やる気満々のケネスとスコールが、ヴァニラたち女の前に出る。

アルスター？

イザーク・ヴェステンフルス。
“砂の狩人刀七人衆”の一角であり、鳳凰神の裏切り者と呼ばれるブラックリストハンター。
その名の通り、元はヴェステンフルス一族の者で、一族にいた頃は『神童』と言われ、次期族長も約束される程の逸材であった。しかし今より１０年余り前、イザークは突如として一族を抜けた。さらにその直後、イザークは“砂の狩人刀七人衆”の一人としてその名をとどろかせた。
そして時は流れ、イザークが一族を抜けて６年後、つまり今から４年前。
盗賊団“幻影旅団”がヴェステンフルス一族を虐殺、俗に言う『鳳凰狩り』が起こったのだ。
この事件の真犯人は“幻影旅団”であるが、五大部族に数えられるヴェステンフルス一族が、盗賊団ごときに滅ぼされるとは考えにくい。そう思った当時の人々は、一族抹殺のために“幻影旅団”を手引きをした内通者のような存在を疑った。そして、その容疑は自然にイザークへと向けられた。イザークは当時すでにブラックリストハンターとなっており、ブラックリストハンターのみで構成されている“幻影旅団”のメンバーのである可能性も疑われたわけだ。
それ以来、イザークはクロノス政府の下、反逆者として全国に指名手配されると同時に、鳳凰神の裏切り者とささやかれるようになったのだ。

ハイネ『そのイザーク・ヴェステンフルスってのが、オレの実の兄貴なんだ』

ハイネが重々しい口調で、その事実を告げる。

その時のハイネの眼が、鮮やかな赤色に変色していることにシンは気づいた。
以前にも説明した通り、ヴェステンフルス一族は“緋の眼”と呼ばれる特殊な眼を持っている。
“緋の眼”は、感情が高まるとその眼を鮮やかな緋色に変化させ、そしてそれに特殊な眼力を宿す。
今まさに、ハイネの“緋の眼”が赤く輝いている。
シン『でもそれだけじゃ、そのイザークって人がクモに　内通してたとは言えなくない？』

クモとは、“幻影旅団”の通称である。
確かにシンの言う通りだ。イザークを内通者とする確たる証拠は一切ない。状況証拠だけだ。
ハイネ『あの時（４年前）、一族の集落には、大事な集会があったから各方面へ散っていた仲間たちが皆帰っていたんだ。そんな時にたった数人だけで、オレ以外の同胞を皆殺しにできるなんて、内通者でもいない限り無理だ』

確かに、当時ヴェステンフルス一族の者たちは、一族の集落に帰っていた。
一族のブラックリストハンターたちもいた中、たった数人で攻めてきた“幻影旅団”になす術もなく滅ぼされたのだ。
ハイネが内通者の存在を疑うのは無理もない。
セキレイ『シンの言う通りよ。証拠もないのに疑うのは、よくないわ』

両者に割って入るセキレイ。
ハイネ『でも…』

食らいつくハイネ。

いくらそれが正論といっても、今のハイネにそれを受け入れることはできない。セキレイ『結論から言っちゃえば、イザークは内通者なんか　じゃないし、ましてやクモのメンバーでもないわ』
ハイネが今まで抱いてきた疑いと怒りを、セキレイは一言で否定した。

ハイネ『そんな、何を根拠に…』

セキレイ『じゃあ聞くけど、アンタは何を根拠にイザークを疑ってたのよ？』

質問に質問で返されるハイネ。
答えることができない。
あえていうなら、世間の目と自らの憎しみと言うべきか。それは、“幻影旅団”という曖昧なものでなく、“イザーク”という断定的な対象を欲していたのかもしれない。
セキレイ『そのペンダントの意味をちゃんと考えな。なんでイザークがそれをアンタに残したのか』

セキレイがハイネの握り締める首飾りを指差す。
この首飾りは、ヴェステンフルス一族の者がハンターになった時に贈られるもので、ヴェステンフルス一族に代々伝わる風習だ。
つまり、ハンターとして認められた者のみが身に付けられる首飾りなのだ。

セキレイ『イザークは、ハイネがここに来た時にこれを渡してくれって言って、この首飾りをあたしに預けていった』

ハイネはその首飾りをもう一度見る。

セキレイ『アンタがここへ来る時、つまりアンタがハンターになった時ってことよ』

首飾りには、赤い宝石がつけられている。そして、その石といっしょに、小さな金属のプレートも結わえ付けられている。そこには、その首飾りの所持者の名前が刻まれているのだ。ハイネの手の中の首飾り、そのプレートには、ＹＺＡＫ（イザーク）と刻まれていた。つまり、これはイザークのもの。

そして、ＹＺＡＫ（イザーク）と刻まれたプレートの裏には、手彫りでＨＥＩＮ（ハイ）Ｅ（ネ）と刻まれている。

ハイネ『』

ＹＺＡＫ（イザーク）という文字はきっちりとした職人の手で刻まれたものだろう。文字のサイズやズレに、一寸の狂いもない。

しかし、その裏に書かれたＨＥＩＮＥ（ハイネ）という文字は、明らかに初心者が書いただろうと思わせるものだった。文字のサイズは一定でないし、文字自体が歪んでるし。

おそらく、それはイザークが後から自分の手で書き足したものだろう。

セキレイ『腐っても、イザークはアンタの兄貴ってわけよ。ハイネ』

この首飾りは、ハンターになった者に贈られる。

しかし、ハイネはそれを贈られなかった。理由は語るまでもない。

自分はハンターになったのに、一族の皆はもういない。そんな悔しさを心のどこかで隠してきたハイネ。

しかし、今まで憎しみ続けてきた兄が、このような形ではあるが、それを祝福してくれていた。

ハイネ『…』

赤く輝くその瞳をさらに鮮やかに輝かせる。その眼からこぼれた雫

が見えたのは、一瞬だけだった。

ヴァニラ『ケイ』

ケネス『おう』

ライトボウガン使いのヴァニラとケネスが横並びになり、ティガレックス亜種にその銃口を向ける。
ヴァニラの【シリウス】、ケネスの【慟哭スル魂】から、それぞれ速射の貫通弾が発射される。
しかし、ティガレックス亜種はそれを尻尾のなぎ払いですべて跳ね返す。

スコール『もらったあ』

その直後に大剣【滅慄叉】を構えたスコールが、ティガレックス亜種に斬りかかる。
スコールの【滅慄叉】と、ティガレックス亜種の剛爪が激突する。

スコール『ぐっ』

怒り状態のティガレックス亜種に、スコールも力負けはしていない。

ミキリ『スコール』

双剣【キリキザミ】を左手と口にしたミキリが、右手にけむり玉を持って、スコールの加勢に向かう。

ケネス『受け取れ』

ケネスが【慟哭スル魂】から鬼人弾をスコールとミキリに撃ち込む。
鬼人弾によって攻撃力が上昇したスコールは、一気に力でティガレックス亜種を押し返す。
そこへ、ミキリが右手のけむり玉を地面に叩きつけ、白いけむりを発生させる。

スコール、ミキリ「〈眼光〉発動」

眼光、暗い洞窟の中や視界の悪い濃霧の中など視覚が使えない時に使用されるスキルで、発動中は普段と同じように視覚が開ける。
けむり玉を使っての戦闘はミキリの基本戦術なので、スコールも合わせて〈眼光〉を発動させているのだ。突然視覚が遮られたので、さすがのティガレックス亜種も混乱している。

スコール『食らえ』

ミキリ『鬼人化』

けむりの中では、スコールは溜め斬り、ミキリは鬼人化して乱舞という、リンチをかましていた。
ケネスとヴァニラ、それからカノンは、ミキリが発生させたけむりから離れたところで待機していた。

カノン『いくわよ』

カノンは手に持つ巨大な狩猟笛【レクイエム】を高らかに持ち上げる。
そして、何やら重々しい低い音の演奏が流れた。

ヴァニラ『これは攻撃力強化【大】ね？』

カノン『ん』

この演奏を聞いた４人は、さらに攻撃力を増す。

ケネス『ヴァニラ』

ヴァニラ『わかってるわ』

ケネスとヴァニラを互いに自分のライトボウガンを互いに向け、その引き金を引いた。
２人が放ったのは鬼人弾。これで、ケネスとヴァニラはさらに攻撃力を底上げした。
スコール『マズい。ミキリ、下がれ』

ミキリ『』
けむりの中でティガレックス亜種をフルボッコにしていたスコールが、ティガレックス亜種のある小さな動きに気づいた。
スコールとミキリが、けむりの中から抜け出る。
次の瞬間、
『ガアアァァァ』
ティガレックス亜種の咆哮が炸裂。スコールとミキリは間一髪で、それを回避した。
ミキリ『あっぶな～。耳栓のスキルつけてても、こんなにくらうなんてね』

咆哮を回避したと言っても、ノーダメージというわけではない。
ティガレックス亜種の咆哮は、耳栓をしていても、それで完全に防

げるものではないのだ。
5人がティガレックスを囲む陣形となる。
ケネス『さぁ、行くぜ。今のオレたちの攻撃力はハンパじゃねぇからな。すぐに蜂の巣にして…』
スコール『ぶった斬って…』
ミキリ『切り刻んで…』
カノン『ぐちゃぐちゃにしてあげる』

登場人物　裏設定１０

チドリ　「そろそろ最終回か……」

性：女

好きな物：色鉛筆（赤）

嫌いな物：色ペン（緑）

備考：アルスター一族の１人、幼い頃から稀有な才能（笑）に恵まれた少女で十歳にしてドスランポスを討伐しておりそれなりに強さはある。
必殺技は命と引き換えに放つ“スターブレイカー”。ちなみに過去に“５回”使用している。命と引き換えなんて話しはいずこへ……。
オカルト好き、ＵＦＯを信じている。

ツバメ　「木っ端微塵このミトコンドリアだぁ！」

性：女

好きな物：レモンの皮

嫌いな物：ゴキブリ

備考：アルスター一族の１人、幼い頃から類い希な才能（笑）を持つ少女でチドリと共に十歳の頃にドスランポスを討伐している。料

理は下手。
テニスという名の闘いを得意としている。
必殺技は自分の命と引き換えにして放つ“スーパーウルトラ超々々絶破壊光線明太子アダルトアサルト破壊光線”
因みに、過去に3回使用している。

寒中水泳で死にかけたことがある。

兄弟の首飾り

――4年前――――――――4年前のこの当時、五大部族の一つであるヴェステンフルス一族が滅亡したということで、世に大きな衝撃を与えていた。

ツバメ『セキレイ姉様～』

チドリ『セキレイ様、大変です。今ヴェステンフルスを名乗る男が、セキレイ様に話があると言って尋ねて　きています』

満月の夜、その静寂を潰すような声を張り上げて、ツバメという少女とチドリという少年が駆け寄ってくる。

ハゲタカ『ヴェステンフルスだと?』

屋敷の縁側に座って子供たちといっしょにシャボン玉を吹いているセキレイの隣で、ハゲタカが驚きの声をあげる。

ハゲタカ『どういうことだ?ヴェステンフルスは全滅したと、クロノス政府が発表したはずだ。セキレイ…』

セキレイ『んなこと、あたしが知ってるわけないでしょ』

相変わらずセキレイは興味もなさそうにシャボン玉を吹いている。

セキレイ『まぁ、いいわ。連れといで』

シャボン玉を吹くスティックを口から離して、セキレイがそう告げ

た。
ツバメとチドリははすかさず頭を下げて、また走り去っていく。

ハゲタカ『おい、セキレイ、いいの　か？もしそのヴェステンフルスを名乗っている男　がクモのメンバーなら、オレたちもヴェステンフルスの二の舞だぞ』

セキレイの判断を軽薄だと思ったハゲタカが、その真意をうかがう。

セキレイ『クモじゃないよ、多分。クモなら奇襲を仕掛けてくるはずだし。正面から堂々と来るはずないだろ？もしクモなら、あたしがそいつを殺すよ』

セキレイは、周りを囲んでいた子供たちに帰るように促した。念のためというやつであろう。
その後、セキレイとハゲタカはそれぞれ己の武器を身につける。
数分後、ツバメやチドリに拘束されたオレンジ色の髪の男がセキレイとハゲタカの前に現れた。一人ではない。もう一人、黒髪の女性もいっしょだ。

イザーク『お初にお目にかかります。セキレイ・アルスター殿』

首の左右から刃を突きつけられたそのオレンジの髪の男が、頭を下げる。もう一人の女性も、拘束された状態で男に続き頭を下げる。

セキレイ『そうね。あいさつなんかよりも、アンタらが誰なのか教えてくんない？』
縁側に腰掛けるセキレイが、目の前の拘束される2人に問う。
ハゲタカはすでに臨戦体勢だ。

イザーク『私はイザーク・ヴェステンフルス。彼女は私の連れ…』

キルヒメア『キルヒメア・アティナと申します』

女性はもう一度、深々と頭をさげる。

見たところ、イザークという男の方は２０代半ばぐらいといったところか。長身で体つきもいい。オレンジ色の髪はヴェステンフルス一族の特徴であるため、ヴェステンフルスを名乗っていることに関しては嘘ではないだろう。キルヒメアと名乗った女性は２０代前半ぐらいだろうか。男よりも若干年下ぐらい。背丈も女性としてはそこそこ高い方だろう。手入れの行き届いた紺色に近い黒髪はなんとも美しい。また、その女性のファミリーネームである『アティナ』という名は、聞き慣れないものだった。

付け加えると、２人の背に背負われている大剣は、パッと見でも、並の武器でないことがわかる。

ハゲタカ『待て。イザークと言ったな、貴様』

セキレイの隣で直立不動しているハゲタカが、イザークに問いかける。

その時のハゲタカの厳つさはハンパじゃなかった。

イザーク『はい』

表情一つ変えず、ただ口だけを開くイザーク。

セキレイ『どうかしたの、タカ？』

ハゲタカ『覚えてないか？確か６、７年ほど前に、ヴェステンフル

スで次期族長と言われていた小僧が一族抜けをはたらいた』
イザークはひたすらに微動だにしない。
しかし、その横のキルヒメアは少し動揺したかのようにつばを飲む。

ハゲタカ『その時の小僧の名、それが…』
イザーク『イザーク。このオレだ』

突然、ハゲタカの話しに割り込んだイザーク。
その口調は、先ほどまでと違って、何か重みがある。そんな感じだった。

イザーク『6年前、オレは一族を抜けた。そして6年後の今、幻影旅団によって一族は滅ぼされた。クロノス政府はその容疑をオレにかけるつもりらしい。その前に、アンタらに頼み　たいことがあって来た』

キルヒメア『イザーク…』

イザーク『下らない前置きや、オレの経歴なんざどうでもいい。オレの話を聞いてくれるのか、くれないのか?』

言い放つイザーク。
その隣ではキルヒメアが心配そうな顔をして、イザークを見つめていた。
ハゲタカとセキレイは少々驚いた表情で、互いに顔を見合わせている。

ツバメ『こら、お前。口を慎め』

イザークの首に刃を突きつけているツバメが叫ぶ。

しかし、イザークが横目で睨み付けただけで、ツバメは完全にビビりまくっている。
セキレイ『頼みってのはともかく、話ぐらいなら聞いてあげてもいいんだけど』
イザーク『…』
セキレイ『何せ、アンタの身元がはっきりしないからね』
イザークは自らをヴェステンフルスと名乗っている。髪の色等から、イザークがヴェステンフルスであることは間違いないだろう。しかし、だからと言って、イザークが幻影旅団のメンバーでないとは言えない。
ヴェステンフルスでありながら、ヴェステンフルス一族を滅ぼしたということも考えられなくはないのだ。
イザーク『…』
セキレイ『まぁ、いいわ。話すだけ　話してみなさいよ』
イザークはそこでしばし考える。
イザークとしても、今回の幻影旅団の件については自らが疑われても仕方がないと思っている。別に無実を信じてもらおうとも思ってはいないし。
しかし、モタモタしていれば、クロノス政府がイザークを反逆者として全国に指名手配してしまう。そうなる前に、信用のおける者にあることを託したかったのだ。
イザーク『…手、いいか？』
イザークが縄で縛られた手をさす。

ツバメ『いいわけないだろ』

セキレイ『いいよ。ツバメ、外してやんな』

怒鳴り付けたツバメに、セキレイが告げる。
ツバメは『え?』と声をあげるが、しぶしぶイザークの手を縛った縄をといてやる。セキレイの隣にいるハゲタカは、さらに警戒を強める。

イザーク『クモによる一族の抹殺。オレはそれに関わってはいない。信じてくれとは言わないが、これだけは頼まれてもらいたい』

縄を解かれたイザークは、まとっていた衣のホックを半分くらいまで開け、その中に手を入れる。
ツバメは常にイザークの首に刃を突き付け、その行動を警戒している。

イザーク『これを、あるヤツに渡してほしいんだ』

胸元から取り出したのは、赤い石の首飾り。
セキレイ『それ、ハウメアの護り石?』

セキレイがその首飾りに指を差して尋ねると、イザークは黙ってうなづいた。
ハウメアの護り石、ヴェステンフルス一族の者がハンターになった時に贈られる首飾り。ヴェステンフルス一族が信仰する神“ハウメア”の加護を望んで、それを身に付ける。ヴェステンフルス一族でそれを持つことは、ハンターとして認められたことを意味する。

イザーク『渡してほしいと言っても、別にアンタらが渡しに行く必要はない。ソイツがここに来た時に渡してくれればいい』

セキレイ『ソイツって、誰？』

セキレイが立ち上がって、イザークと向き合う。

イザーク『オレの…弟だ』

セキレイがキッとイザークをにらむ。

さらに、イザークの言葉に反応を示したハゲタカがまた大声を張り上げた。

ハゲタカ『何を言っている。ヴェステンフルス一族はすべて滅んだはずだ。生き残りはいない、クロノス政府もそう公表している』

確かにそうだ。

クロノス政府の調査では、生存者なしということになっており、そう公表されている。

イザーク『ああ、その通り。だから、クロノス政府もオレの弟の生存には気づいていない』

イザークがその首飾りを強く握り締め、目線をセキレイに向ける。

セキレイ『なんでアンタは、そんなこと知ってんの？』

今回のヴェステンフルス一族の虐殺に関与していないと主張するイザークだが、それならばなぜ、クロノス政府ですら把握していない生存者の存在を知っているのか。これを疑問に思うのは当然であろう。

イザーク『弟を保護してくれたある知り合いの男が、オレに連絡をくれた』

話ができすぎているようにも思えた。少なくともハゲタカはそう思っていた。

しかし、真顔でそう話すイザークにそんな気配は感じられなかった。

セキレイはどう思っているのだろうか。

イザーク『オレは一族を抜けた身だ。一族のハンターの証であるこれを、オレが持っているわけにはいかない。でも弟には、これを持つ資格がある』

セキレイがイザークのもとにゆっくりと歩み寄り、手のひらを差し出す。

イザーク『？』

セキレイ『預かってあげるって言ってんのよ』

セキレイはイザークのすべてを信じたようだ。これはその結果だろう。

ハゲタカ『おい。そんな安請け合いしていいのか？』

セキレイ『安請け合いも何も、ただ渡すだけでしょ』

引っ込むハゲタカ。

イザークは頭を下げて、セキレイの手にその首飾りを預けた。

イザーク『よろしく頼む』

セキレイも少し微笑んで、うなづく。
用を終えたイザークとキルヒメアは、その後すぐに立ち去ろうとした。

セキレイ『弟の名前は、なんていうの？』
セキレイの最後の質問。
他に聞きたいことはいっぱいあった、なぜかこんなどうでもいい質問が口から出た。
イザーク『…ハイネ』

振り返りそう呟いた時のイザークは、一瞬だが笑ったように見えた。

――――――――――――――――現在に戻って…

セキレイ『…』

目の前で、渡したばかりの首飾りを握り締める少年を見て、セキレイはその首飾りをイザークから預かったのが、つい先日にように思えた。

アルスター？

４年前、イザークが首飾りを預けに来た時と同じ満月の夜。一同が集まっている屋敷の部屋の障子の窓から見えている金色の丸い月は、４年前そのものだった。４年間という長いようで短い時を経て、その首飾りは兄から弟の手へと受け継がれた。ヴェステンフルスという、誇り高き鳳凰の名とともに。

セキレイ

『イザークに会いたい、ハ　イネ？』

セキレイの透き通るような紺碧の瞳が、何もかもを見透かしたような不敵な笑みとともに問い掛けてくる。ハイネ

『』

セキレイの問い掛けに、うつむいていたハイネは驚いたように潤んだ瞳をセキレイに向ける。

セキレイ

『って言っても、それはで　きないんだけどね』

今まで背筋を伸ばしていたセキレイが体勢を崩してそう言った。

当初のハイネは驚きというより、その意味がわからないというような顔をしていた。

ハゲタカ

『そもそも、イザークはお　前に会いたいとは思って　ないようだしな』

シンとハイネの後ろに立つハゲタカが、セキレイのそれに付け加えるように言った。

その隣のカナリアは、少し悲しげな表情をしていた。ハイネ

『どういうことですか？』その真意が全く見えない。そう思ったハイネは、おそるおそる目の前のセキレイをそれを問う。

セキレイ

『イザーク、今クモに復讐　しようとしてるみたいな　のよね』

衝撃を受けたように目を見開き、そのまま黙りこくるハイネ。
想定外…というわけではないだろう。自分の一族を滅亡に追い込んだ張本人である幻影旅団。兄が一族の敵討ちをしようと思い立っても何ら不思議ではない。ハイネ自身も、復讐の念を抱いたことがないといえば嘘になるし。
またイザークは、ヴェステンフルス一族抹殺に荷担したとして、クロノス政府より指名手配されている。つまり、イザークにとって幻影旅団を討つことは一族の敵討ちと同時に、自らの無実を証明することにもなるのだ。
セキレイ
『もともと一族を抜けた身　だからね、イザークは。「今さらどの面さげて会　いにいけばいい？」って　かっこつけながら言ってたよ（苦笑）』
セキレイがあきれたように笑う。
しかし、ハイネにとっては笑える話ではないだろう。何せ、実の兄が一族の悲劇の始末をすべて一人で背負おうとしているのだ。そして、その兄が自分に残したたった一つの首飾り。それが何を意味するのか、考えるのは難しくないし、またそれとともに託された一族の名。今のハイネには、そのすべてが大きすぎる。
セキレイ
『アンタの気持ちはわかる　わよ、ハイネ。でも、ど　う言われてもイザークに　会わせるわけにはいかな　いわ』
ロウソクのユラユラとした炎の光がセキレイの瞳に映り、寂しげな表情を際立たせる。
ハイネもこれの追及はしようとはしなかった。理由はわかっているから。その真実を言葉にして言われるのがイヤだったのだ。
セキレイ
『「一族最後のハンターと　して、誇り高く生きてほ　しい」。イザークが、そ　のペンダントを渡す時に　いっしょに伝えてほしいって言ってた言伝てよ』セキレイがハイネの目を見て言った。

イザークが弟に送った遺言にも似たその言葉。付け加え首飾り。
この時のハイネの心情がどのようなものだったか、それは想像を絶する。
突き付けられる事実と、記憶に残るあの日の兄の姿が重なりあい、
ハイネは困惑を決心へと変える。
ハイネ
『最後、じゃないですよ。　オレが一族を、ヴェステ　ンフルスを復興させてみ　せます』
ハイネはセキレイの目をまっすぐに見て言った。
我ながら本当にそんなことができるのか。確かにそういう疑問はあった。しかし迷いはない。
ハイネの瞳がまたよりいっそう鮮やかな緋色に輝いていく。
ハイネ
『それにイザークもいます　。オレは「最後」じゃあ　りませんよ』
淡い緋色の瞳がセキレイを見つめる。さっきとは逆に、今度はセキレイが意表をつかれた感じだ。
これにはハゲタカやカナリアもあっけにとられる。
セキレイ
『…その顔、イザークそっ　くりね』
セキレイがいじわるく笑いながら、ハイネの頭を無理やり撫でる。
髪をぐしゃぐしゃにされながら、ハイネは今のセキレイの言葉に疑問を抱くのだった。

同時刻、セキレイたちが集まっている屋敷の屋根の上に、両手を頭の後ろで組み足を交差させ瓦の上に寝そべる女の姿があった。
女が寝そべっている屋根の下からは、先ほどまでのセキレイやハイネたちの会話が丸々筒抜けだった。
女
「…イザークの弟が来てる　って、マジだったんだ」それらをすべて盗み聞いていたこの女が、ボケ～と月を眺めかならこのようなこ

とを思っていた。
その女もやはりセキレイやカナリアと似たような浴衣をまとい、髪はアルスター特有の赤色。アルスターの人間に間違いないだろう。女
『ま、わたしには関係ない　か』
女は誰に言うでもなくそうつぶやいて、伸びをした後そのまま目を閉じる。
時刻はただいま午前0時を過ぎたところ。
嵐の翌日ということもあってか今夜の夜空は、尋常じゃない数の星で満ち溢れている。流れ星を見つけるのもそう難しくはない。
こんな夜に、屋根に寝転がって天体観測というのもなかなかいいモンだ。

セキレイたち一同は屋敷の玄関前にいた。どうやら、話すべき事実はすべて話し終わったようだ。
セキレイ
『だいぶ遅くなっちゃった　わね』
セキレイが一面星の夜空を見上げて、そう言った。
ハイネ
『今日はありがとうございま　した』
そんなセキレイに、ハイネは例の首飾りを握り締めながら頭をさげる。
セキレイ
『アンタなら、いつかイザ　ークに届くわ。あたしの　手なんか借りなくても。　今日、ここへ来たみたい　にね』
セキレイはそう微笑んで、ハイネの前に右手を差し出した。
ハイネは『はい』と嬉し涙をこらえて呟き、セキレイのその手をとった。
続いてセキレイはシンとも握手をかわす。
セキレイ
『また何かあったら、いつ　でも来な。待ってるから　』

カナリア
『おやすみ』
セキレイはそう言い残して、ハゲタカやカナリアとともに屋敷の中に戻っていった。
今晩はここに泊めてもらうことになっている。
セキレイたちを見送ったシンとハイネは、先ほど案内された客室に戻った。
シン
『大丈夫か、ハイネ？』
明らかに大丈夫そうでないハイネに、シンはそんな質問を投げ掛けてみる。
ハイネ
『ん、んん…』
やはり大丈夫そうでない。心ここに在らず、って感じだ。
まぁ、今まで抱いてきた恨みの念が根底から覆されたのだから、無理もない。
シン
『ハイネの兄さんって、ど　んな人だったんだよ』
カナリアに借りた浴衣を着たまま、２人は各々の布団の上にあぐらをかいて腰をおろす。
ハイネ
『一言で言うなら、「最高　の兄貴」って感じかな』正直言って驚きの発言だった。
一族を抜けて、滅亡をもたらした疑いのある兄を「最高の兄貴」と称したのだ。ハイネ
『ホントはオレたち、６人　兄弟なんだよ。イザーク　が長男で、長女の姉貴が　いて、オレが次男。下に　弟が１人と、妹が２人』
ハイネが体勢を崩して、しかれた布団に倒れ込む。そして、仰向きになり、目の前に例の首飾りを持ってくる。
ハイネ

『イザークはオレたち兄弟　の中でも、結構歳が離れ　てて な。オレとは9歳、　姉貴とも7歳離れてたん　だ。だからって言うのは　おかしいかもしれないけ　ど、イザークは大層オレ　たちを可愛がってくれた　んだよ』

首飾りのネームプレートに刻まれたＹＺＡＫ（イザーク）の名と、その裏に手彫りで刻まれたＨＥＩＮＥ（ハイネ）の文字。

それを見るだけで、幼き日の記憶に残るイザークの顔が思い出される。

ハイネ

『頭が良くて、運動もでき　て、ハンターとしての才　能もあって…。弟として　は自慢だったさ』

ハイネが言っていることも、決して言い過ぎなんかではない。

頭が良くて、運動もできて、ハンターとしての才能もあって、おまけに兄弟想いで優しいときたのだから。当時、一族内でイザークは神童と呼ばれ、次期族長も約束される程の逸材であったのだ。

シン

『そりゃ、スゲーな』

シンも関心の極みだ。

ハイネ

『オレが9歳の頃だ。イザ　ークが一族を抜けたのは　。当時の一族の族長はオ　レたちのオヤジだったん　だ。オヤジも八方手をつくしてイザークを探した　けど、結局は見つからず　仕舞い』

ハイネが首飾りを持った手をおろして、ため息を一つ。

ハイネ

『今ごろ、どこで何やって　んだろうなぁ』

開きっぱなしの窓からは、夜空の支配者である金色の満月が確認できる。

イザークもこの月を見上げているかもしれない、そんなかすかな願いを抱いて、ハイネも夜空を見上げる。

カナリア
『さっき、シンくんと拳交　えてみたんだけど、やっ　ぱり凄かったよ』
シンやハイネと別れた後、セキレイの隣を歩いていたカナリアがセキレイに語りかける。
セキレイ
『試したの？』
少々驚いた様子のセキレイがカナリアに問いかける。カナリアは遠い目をして、黙ってうなづいた。
カナリア
『あの動き、そっくりだっ　た』
シンとハイネは先ほどのセキレイたちとの会談の前に、空き地でカナリアと組手を交わした。その時のシンの動きは、初心者というにはいささかの誤りがある実力だった。
カナリアが指摘しているのはそれだ。
カナリア
『やっぱりシンくんは、キ　ラの子だね』

タブレット

ケネス
『…』
月が満ちる夜、岩が形作る小部屋の上に座り夜空をあおぐケネスの姿があった。別地方の火山へ黒轟竜ティガレックス亜種を討伐しにやって来たケネスたち一行は、現在その岩宿にて就寝中。
火山の溶岩の熱気が届かない崖の上に、岩が折り重なってできた岩の小部屋を発見し、今回の寝床に選んだのだ。
基本、ハンターがフィールド内で野宿することになった場合は、寝込みを襲われないように誰か1人を見張り役として常に辺りを警戒させておく必要がある。そういうわけで、晴れて今回の見張り役になったのがケネスというわけだ。
ケネス
『こんな時に見張りって…　、ついてねぇ…』
岩宿の屋根の部分の岩に座っているケネスが、月と数える程度しかない星で装飾された空を眺めて、ブツブツと呟く。
スコール
『な～に、たそがれてんだ　よ』
青い髪ツンツン頭のスコールが、同じくこのさみしい夜空を見上げながらケネスの後ろに立つ。
ケネスは別に驚いた様子もなく、横目で振り向く。
ケネス
『冷やかしに来たんなら、　代われよ』
大きな口であくびしながら、どうでも良さそうに口走る。
ニシシといたずらっぽい笑みを浮かべたスコールは、手にしていたタブレットのケースを差し出しながらケネスの隣に腰をおろす。
スコール
『この狭い空間で女の子3　人と寝ろって言われても　、男として

はうれしいん　だけど、そのいろいろと　な…』
ケネス
『要するに、興奮して眠れ　ねぇと?』
ケラケラと笑いながらケネスはそのタブレットのケースを受け取り必要以上に上下させて、手のひらにこぼれた3粒のそれをまとめて頬張る。
ケネス
『ん?レモン?新作か?』スコール
『ん~ん、試作』
ケネスからタブレットのケースを受け取ったスコールが、それを指の上でくるくると回しながらケネスの問いに答える。
下の岩の小部屋では、例の女3人が寄り添って寝息をたてていた。
スコールが言うように、確かに男としては居づらい…（けど、夢と希望と○○がつまった）空間である。
スコール
『キラ・ヤマトの子供が現　れたんだってな』
しけた空を見上げスコールもそのタブレットを口に入れる。
その瞬間、ケネスは驚きのあまり口の中のタブレットを勢いよく飲み込んでしまった。
『ゲホゲホ』とむせながら、涙目になってスコールに顔を向ける。
ケネス
『なんで知ってんだよ?』スコール
『ヴァニラから聞いた』
別に難なく答えるスコールに、ケネス『はぁ?』って声を出し、そういう顔をする。
ケネス
『アイツ、余計なことを…』
スコール
『余計なことかどうかは、　ケンの気持ち次第だけど　な』
頭を抱えて呟くケネスに、スコールはすべてを見透かしたような口

調で言う。
ケネス
『お前には関係ねぇだろ、　とまでは言わないけどさ　、こればっかりはスコー　ルも首を突っ込むモンじ　ゃねぇよ』
スコール
『そうだな。確かにオレは　関係ないさ』
すかした顔でケネスが目を空に移す。しかし、その内心は、ケネスの心の隙間にスコールが放った楔が打ち込まれたようなそんな状態だった。
スコール
『でもヴァニラは?』
打ち込んだ楔によって、ケネスの心の隙間はヒビとなってさらに大きくなった。スコール
『ケンの様子がいつもと違　うから、ヴァニラに聞い　てみたんだよ。それで、　全部話してくれたんだ。「自分じゃケイは話してくれない。だからお願い　」ってな』
ケネス
『…』
言葉を濁らせる。
親友から説教されるほど悔しいことはないが、残念ながらスコールの言うことは全部正しいし、言い訳すら浮かばないような状態になっていた。
スコール
『他人には言えないことで　も話し合える仲だろ、ケ　ンとヴァニラは』
ケネスは完全にスコールから目を反らす。
スコール
『キラ・ヤマトの子供…。　ケンたちがずっと探して　たヤツだろ。オレには詳　しいことはわからないか　ら何も言えないけど、あの研究所の…』

スコールが何かの気配を感じとり、言葉をつまらせる。それはケネスも同様だ。2人は背中合わせに立ち上がり、岩宿の上から夜の暗黒が支配する地上を見回す。

ケネス

『…イーオスだな?』

スコール

『…同感』

辺りの暗黒の中から放たれる殺気の正体を詮索する。おそらくイーオスだ。確証はないが、2人とも確信している。ハンターのカンというやつだ。

ケネスは腰にぶら下げているライトボウガン【慟哭スル魂】に手をかける。

こんな時のためにケネスが見張りをやっていたというわけだ。

スコール

『ヤベ…、【滅慄叉】下だ　よ。まぁいいか。イーオ　スぐらいなら素手で何と　かなるし』

もともとスコールはケネスと駄弁るために上に来たので、愛用の大剣【滅慄叉】は下の岩の小部屋に置いてきたようだ。

ケネス

『相変わらず、オメーの馬　鹿力には頭が下がるわ』スコールが両手の拳を胸の前で激突させる。凄まじい金属音と火花が飛び散る。

それを背後で聞いたケネスが、皮肉をボソボソと呟く。

そうしている間に、イーオスがその姿を視認できるほどにまで接近してきた。

スコール

『総数はわからないな。ま　だ闇の中にも何体かいそ　うだし』

ケネス

『それだけじゃなさそうだ　ぜ…』

ケネスが視認できるイーオスの群れの中をアゴで示す。

スコール

『』
確認できたのはドスイーオスの姿だ。しかし、何か違うような…。
ケネス
『アレはオレがやるから、　他頼むわ』
スコール
『了解。それと女の子たち　寝てるから、サイレンサ　ーに付け替えといてよ』スコールが横目でケネスの【働哭スル魂】に目をやってみると、すでにロングバレルからサイレンサーに付け替えられていた。
ケネスは『おう』と返事を返して岩のから飛び降り、イーオスたちの前に立つ。ケン
『…』
――――――――――――――――スコール
『ケンの様子がいつもと違　うから、ヴァニラに聞い　てみたんだよ。それで、　全部話してくれたんだ。「自分じゃケイは話してくれない。だからお願い　」ってな』
――――――――――――――――先ほどのスコールの言葉が頭の中で繰り返される。特に、ヴァニラがスコールに言ったという「自分じゃケイは話してくれない。だからお願い」という言葉。
目の前ではイーオスが威嚇の咆哮をあげている。
ケネス
「フン…。帰ったら、話し　てみるか…」
内心そう決心すると、何かが立ち込めてモヤモヤしていた気分が、一気にさえ渡った。
スコール
「ケン、吹っ切れたみたい　だな。うん」
そんなケネスの様子を見て、スコールが優しく微笑む。
さぁ、そろそろイーオス様御一行も我慢の限界が近づいてきたようだ。今にも、イーオスの波がなだれ込んできそうな、そんな雰囲気だ。

考え事を吹っ切った2人の目付きが変わる。
同時に両者が駆け出す。
ケネスに向かって3頭のイーオスが襲いかかってくる。ケネスは【働哭スル魂】を向かってくるイーオスに向け、引き金を引く。『ドドド！』という衝撃と共に、ＬＶ3貫通弾が3発連続で発射される。頭、肩、胴、3頭のイーオスはそれぞれの部位を貫通弾で撃ち抜かれた。
ケネスのライトボウガン【働哭スル魂】は、大蛇竜の素材を用いて製造されたケネスのオリジナル。ＬＶ3貫通弾・ＬＶ3散弾の速射が可能。オリジナル武器ということで、攻撃力は従来のものよりも格段に高い。そして、この【働哭スル魂】を含め、ケネスの持つライトボウガンには少し秘密がある。
イーオス
『あ〝あ〝』
スコールが素手でイーオスを次々に殴り倒していく。さながら、ドラゴンボールの孫悟空が敵ザコキャラを一掃していくような勢いで。スコールの拳打を受けたイーオスたちは、俗にいう『ピヨる』という状態になっている。
スコール
『ライトボウガンの片手撃　ち。さすがだね』
このスコールの呟きの通り、ケネスはライトボウガンの片手撃ちという本来ではあり得ない能力を持っている。これはライトボウガンを扱う全ガンナーハンターの中でも、ケネスだけがなしえる妙技なのだ。
そして以前にも言ったように、ケネスはブラックリストハンターの中で唯一“神足”のスキルを扱える。
ライトボウガンの片手撃ちとスキル“神足”。これが【銀猫のレウスウォール】だ。

刃蟲駆逐作戦

長き夜が終わりを告げる。爽快な空気に包まれた朝が眩しすぎる太陽の光と、小鳥のさえずりと、それから少女の鼻唄と共に到来してきた。

シン

『…ん？』

それら朝の兆しが、夢からシンを引きずり出す。

何かに導かれるように眼を覚ますと、早朝の涼しさが布団から出していた顔と右足にしみた。

身震いをして一度は顔も右足も布団の中に埋めたが、直後に再度眼が覚め、今度はしっかり意識を保ち、身体を起こす。

カナリア

『おはよ。よく眠れたみたいだね』

前日、満月を見上げるために開けっ放しにしていた窓の枠に、赤いポニーテールがいつもの笑顔で座っていた。

昨夜とは異なる浴衣を着たカナリアは窓の外側に足を出した状態で窓枠に腰かけ身体をひねってシンに呼び掛けた。

シン

『カナリアさん…？』

頭に2匹、両肩に1匹ずつ、膝に2匹、窓枠に3匹とカナリアは色どり豊かな小鳥に囲まれていた。

小鳥たちはカナリアに向かって『チュンチュン』とよくわからない鳥語で語りかけている。もちろんシンにはそんな言葉理解できるはずもない。ただ、耳障りだとも思っていない。

そしてシンの隣には、浴衣の胸の部分を大きく露出させたハイネがすごい寝相でグースカ寝てやがる。

カナリア

『一応、2人を起こしに来たんだけど…。2人とも気持ち良さそう

に眠ってたから』
左手の人差し指で雀ぐらいの小鳥を撫でながら、カナリアが笑ってそう呟いた。シンも『あ、スミマセン』と自分でもよくわからないが、なぜか謝ってしまう。とりあえず、隣で幸せそうな夢を見てるであろうハイネを、空手チョップで夢の世界からリアルへ強制送還してもらう。
最悪の目覚めを味わったハイネは、当然のことながらチョー不機嫌。普段から結構真面目でシンよりも数段大人びているハイネが、寝起きの顔で『う〜』なんて言っている姿は、シンとしてはなかなか新鮮で面白いものだった。
ハイネ
『今何時？』
寝癖とジト目の半ギレのハイネが、視線を壁に向けて誰にともなく問う。
状況から察してもらった通り、ハイネは朝に弱い。自室でも、毎朝は目覚まし時計と壮絶な格闘を繰り広げている。ティーズに来る前、クロノスにいた時も、同居していたサーシャに蹴り起こされてマジギレなんて日常茶飯事だった。
シン
『7時回ったところ。早く支度しよ』
シンがぱっぱと立ち上がって布団を三つ折りにする。見ての通り、シンは朝に強い。目覚まし時計なしでも毎朝決まった時間に起きて、朝の身支度を始める。
ハイネもしぶしぶ布団から出る。それはもう、クロノスでサーシャと別れる時と同じような顔だった。
カナリアは用意ができるまで外で待ってる、と言ってこの二階の窓から飛び降りて言った。
カナリア
『2人はこれからどーするの？』
身支度を済ませアルスターの居住区の門前でカナリアと合流したシ

ンとハイネ。この先の予定を問われたが、これと言ってする事は決まっていない。
ただ、ここに一日泊まって体調は万全だ。
シン
『まだ決めてないですけど、とりあえず集会所に行こうかと』
ハイネ
『カナリアさんは？』
ハイネも復活。オレンジの髪もいつものように融かして目もつり上げて。そして首には、例の首飾りがかけられている。
カナリア
『今、仲間がクエスト行っててね。みんなが帰って来んの待たないといけないんだよ』
防具に身を包んでいるシンやハイネとは違って、カナリアは浴衣のままだ。どうやらクエストには出ないようだ。
シン
『そうですか。じゃ、オレたちはこれで』
ハイネ
『いろいろ、ありがとうございました』
シンとハイネが横に並んで、一礼する。
カナリア
『うん。また何かあったいつでも来てね』
そう言って、去っていくシンとハイネにカナリアはいつまでも手を振っていてくれた。
２人は集会所までの道中、先ほどカナリアに朝ごはんと言ってもらったサンドイッチを頬張る。薄紙で包まれたそれは手作り感が溢れていて、正直テンションがあがった。味は見た目通りめちゃくちゃうまかった。まず使っている食材が普通ではなかった。美食ハンターであるシドのもとで育ったハイネは、それに使われている食材が何なのか、なんとなくだがわかる。上級ガノトトス亜種の魚肉ハムに厳選キノコのスライス、天狗草、飛竜種の卵等、さすがはブラッ

クリストハンターだと思い知らされる。それに、見た目以上にボリュームがあり、育ち盛りの男子であるシンとハイネの朝食を補って余りぐらいだった。

ハイネ

『ぉはょぅさ～ん』

アルスターの居住区から徒歩１５分、集会所に到着。一日ぶりにその門をくぐる。しかし、いつもなら聞こえるはずの例の声が、なぜか今日は聞こえない。

ハイネ

『あれ、サク？』

そう、いつものサクの『おはようございます』だ。

不思議に思って受付の方に目を向けてみると、受付の机の上に座ってハンターたちと駄弁っているイクに、サクが怒鳴りつけている最中だった。

サク

『イクー何やってんのよ、アンタはー』

イク

『そ、そんな怒んなよ。ホラ、アメやるから』

案外これで仲がいいのが、ギルドティーズ本部受付の名物だ。

シンとハイネは『ハハハ』と苦笑いしながら、クエストボードに向かう。

クエストの受注方法は、このクエストボードにレベル別に張り付けてあるクエストの札を見てやりたいものを選ぶ。決まり次第、受付でクエストの受注手続きを終えて完了だ。

レベルは☆１～１２まで。☆１～３までのクエストはＨＲ１のハンターが受注することができ、ＨＲが一つずつ上がるごとに、☆も一つずつ上がる。

ＨＲ１～４までを『下位』ＨＲ５～７までを『上位』ＨＲ８以上を『Ｇ級』つまりブラックリストハンターと言う。

つまるところ、現在ＨＲ１のシンとハイネが受けられるクエストは

☆1～3までということだ。
シン
『そろそろ武器も強化したいしな～』
ハイネ
『それに防具も新しいの作らないとな』
今一度確認しておく。
シン・アスカ
武器：ボーンシックル
　攻撃力９８
防具：チェーンシリーズ
　防御力３１
ハイネ・ヴェステンフルス武器：バスターソード
　攻撃力２８８
防具：チェーンシリーズ
　防御力３１
シン
『オレは［とがった爪］が欲しい』
ハイネ
『オレは鉱物系統だな』
お互いに武器防具の強化のために必要な素材はわかっている。
これまで一通りの経験値は積んできた。これからは本格的に武器防具の強化を主軸にクエストを行っていくつもりだ。
シンとハイネの求める素材が一括で入手できる指定地を探しその上でクエストを選択する。
シン
『これだ』
シンが☆1のボードの札を指差す。

【刃蟲駆逐作戦】
指定地：密林

報酬金：２５００ｚ
契約金：５００ｚ
成功条件：レクンガ１０匹の討伐
制限日時：２４時間

シンが求める素材［とがった爪］は刃蟲レクンガから剥ぎ取れる。
また、指定地が密林なのでハイネが求める鉱物系統の素材を採掘できる鉱脈もある。
ハイネも異存なしということで、このクエストに決定。
ハイネ
『サク～。クエスト～』
サク
『は、はい』
いつもの営業スマイルで対応してくれるサク。
２人のギルドカードを受け取り、手慣れた手つきでクエスト受注の手続きを済ませていく。契約金の５００ｚを差し出して、受注完了。
サク
『受注手続き完了しました　。お気をつけて』
ギルドカードを胸にしまいクエストボードの２人が受けるクエストの札を裏返す。これで準備完了だ。
いざ密林へ出発。

登場人物　裏設定１１

スコール　「犯る」

性：男

好きな物：ちゃんこ鍋

嫌いな物：ポニーテールの女

備考：戦闘能力は５３万。特技タワーブリッジで決まれば死ぬ。幼馴染という名の奴隷がいる。自称天才の露出狂、だが天才。ダースベイダーのコスプレが趣味。

必殺技は「ぽよんぽよんビーム」

ウズラ　「セクシィ！」

性：雌

好きな物；ニワトリ

嫌いな物：ウズラ卵

備考：アルスター一族の欲求回収係り、給食費大泥棒の異名を持つ。趣味は好きな子をいじめること。
コーラはお湯割りで飲む。コーラでラーメンを煮込んだりご飯にかけたりソーメンにつけるも良し、大根にぶっかけて酒のつまみにす

るも良し。

必殺技は「９１式　アサルト対空突撃砲塔」

スズメ　「エクスタシー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

性：姦

好きな物：ＢＬ本　シンナーのにおい

嫌いな物：マッキーの匂い

備考：ベルマークを集めるのが趣味、水を操り、スライム責めを得意とする。
牛乳は水割りにする派、コーンフレークにはお茶を掛けて食す。
男の娘が大好物、中学は黒魔術部に所属していた

必殺技「１７連ゴムゴムの釘アンパンチキック霊丸月牙天翔螺旋デスノート」

カナリア
『お姉ちゃん、ハイネくん　に会わなくてよかったの　？』
居住区の門前でシンとハイネを見送ったカナリアは、居住区の中央にある屋敷本邸の屋根の上、その一番高い場所に座っていた。
その隣には、昨夜のセキレイたちとの会話を盗み聞きしていた女が、目を閉じて寝転がっていた。
ヒバリ
『いいのよ。別にあの兄弟　にそこまで興味もないし　ね』
あの兄弟とは、いうまでもなくイザークとハイネのことだろう。
女は口の前を手で押さえあくびをしながら、そう答える。
カナリア
『でも、アルスターの中で　まだイザークとつながり　があるのってお姉ちゃん　だけじゃん。少しぐらい　話してあげてもよかったんじゃない？』
ヒバリ
『あのね、つながりがある　っていっても、ただハン　ターとしてギルドカード　に名前を登録してるって　だけよ。それにイザーク　はあの弟ってのに会いた　がってはいないんだから　、私らが余計なことする　ところじゃないの』
女はあくまで客観的立場にこだわる。
確かに、一族滅亡を経験した兄弟の関係に踏み込むのはあまりよいものではない。そうは思うのだが、なんだか放っておけないのだ。
それは、ハイネの思いを知り、またイザークの思いを知り、その上でそれらを見てきたカナリアだからこそ、抱いた想いなのかもしれない。
カナリア
『お姉ちゃん、冷たすぎだ　よ。イザークがハイネく　んな会いた

くないなんて　、そんなの嘘に決まって　るじゃない』
ヒバリ
『素直になれない兄が、弟　に何してやれんのよ？』この屋敷本邸の最上部の屋根のからは、一族の居住区が一望に見回せる。そこへ吹きすさぶ早朝の冷たい風が、カナリアの優しさと虚しさを、空の彼方の空虚に吹き飛ばしていく。

クエストボード、ギルドに寄せられる様々な依頼をクエストとしてレベル別に張り出した掲示板。それぞれクエストの書かれた札がかけられており、ハンターたちはその中から希望するものを選ぶ。なお、選んだクエストの札は、クエストに出発する際に裏返すのが鉄則。
シンとハイネも、クエストボードの【刃蟲駆逐作戦】の札を裏返しにして、いざクエストに出発する。
今日も昨日に引き続いての猛暑。
真っ青に染まった大空には、白い雲の破片一つ見当たらない。憎たらしくも、太陽はギラギラに健在だ。
そんな後々の苦労を考えながらも、シンとハイネはいかだで密林の浜辺を目指す。
今回の標的はレクンガ。刃蟲と呼ばれる甲虫種。特徴を言うならば、今回シンはこのレクンガから［とがった爪］の採取を狙っているので、それでイメージしてもらいたい。甲虫種としては、ランゴスタ・カンタロスに並ぶポピュラーなモンスターだ。
シン
『着岸成功ー』
テンションー→→なシンが、そう叫んでいかだから浜辺へ跳び移る。
さっきカナリアからもらったサンドイッチが相当美味しかったらしい。
着岸ではないだろ、と思いながらもサンドイッチの美味しさには同

意したハイネが、シンに続いて浜辺へジャンプ。
２人がかりでいかだを波の届かないところまで引っ張りあげる。
ハイネ
『んと、今回はレクンガだ　っけ？』
支給品箱の前でクエストの詳細を記した用紙を取り出したハイネが、最終チェック。シンもハイネの左からそれを除き込む。
制限時間はいつも通り２４時間。☆１のクエストはだいたいがそうなのだが。前回のランポスの時は２０匹で報酬２５００ｚだったのだが、今回はレクンガ１０匹の討伐で同額の２５００ｚだ。
ハイネ
『レクンガは攻撃力が高い　から気ぃつけねぇとな』シン
『オレ、レクンガって初め　てだよ。どんなやつ？』ハイネの出身であるクロノスつまり砂漠には、レクンガがうようよ生息している。しかし、シンの出身であるポッケつまり雪山には、レクンガはまったく生息していない。
こういったところに、２人の経験の差がある。
ハイネ
『百聞は一見に如かず、口　で説明するより見た方が　早い』
ハイネは支給品箱を足で蹴り開け、中にある必要なものを一通りすべて手にとり、その半分をシンに渡す。［地図］×１
［応急薬］×６
［携帯食料］×４
［携帯砥石］×２
刃蟲レクンガ、シンも資料等でなら見たことはあるが、実際己の目で見たことはない。
シンの知るレクンガの姿は、全長２ｍ前後でムカデの胴体にカマキリの鎌の腕、というものだ。
そうして言われるままハイネに連れてこられのは、洞窟の入り口。
そこは飛竜種の休息場ではなく、もっと湿度が高いじめじめしたところだった。

シン
『洞窟ん中にいんの？』
ハイネ
『こっから気を引き締めて　おけよ』
洞窟の道幅は狭くもなく広くもない。しかし、天井は高い。見えないぐらい高い天井からしたたり落ちてくるしずくの量は、この洞窟内の湿度に比例している。以前も言った通り、それぞれの洞窟の抜け道をたどっていくと、最終的に“大空洞”と呼ばれる洞窟の終結地点にたどり着く。現在、洞窟に入ってその奥へと進んでいるシンとハイネも、当然ながら大空洞へ向かっていることになる。つまり大空洞にレクンガがいるということなのだろうか？
その時、シンは自分の周囲のどこかで『ゴソッ』という何か気配を感じとった。シン
『』
驚いて背後を振り替える。しかしそこには何もない。それにその気配がどこからしたのか、その見当がつかなかった。
ハイネも同様に何かの気配を感じとった様子で辺りを見回している。
ハイネ
『シン上だ』
ハイネの叫び。
その言葉を頭で理解するより速くに、眼が頭上を向いていた。
高い天井、その暗闇の先から黒い巨体が降ってきた。シン
『うわっ』
間一髪。
前方への緊急回避でなんとか避けきることができた。体勢を建て直してすぐにその黒い巨体に向き直る。
シン
『レクンガ？』
以前、資料の写真で見たその姿と同じ。
ムカデのような長細い体、カマキリのような鋭利な腕。

ハイネ
『次来るぞ』
再びハイネの叫び。
今度は、頭上を見上げるのと同時に回避する。
ハイネのところにも同じく奇襲があったようだ。
2人は各々の武器を手にとり、肩を寄せ合う。
シン
『これがレクンガ?』
ハイネ
『ああ』
2mを越える大物が3匹。
2度目に降ってきたレクンガの鎌は、あり得ないぐらい地面に突き刺さっていた。あれが命中していれば、シンたちのチェーンシリーズの防具ぐらいなら、簡単に貫かれていただろう。
ハイネ
『見てもらった通り、レク　ンガの基本戦術は奇襲。　突然頭上から降ってきて　、鋭利な鎌で獲物を一撃　で仕留める』
地面に突き刺さっている鎌を見れば、その攻撃力は嫌でもわかる。
それを地面から引き抜き、レクンガは『シャー』と声を荒げてシンとハイネに詰め寄る。
ハイネ
『この奇襲の習性のため、　毎年新人ハンターの殉職　の一番の原因になってい　る』

VS　レクンガ

刃蟲レクンガ、鋭利な折り畳み式の鎌と２ｍを越す細長い身体が特徴の甲虫種。甲虫種としてはずば抜けて頭脳が発達しており、集団による奇襲戦法を用いる。その外見からもわかるように、非常に攻撃力が高くまた動きも素早いが、肉質は意外と柔らかい。雪山以外のすべての地域に分布し、主に暗い洞窟に身を潜めている。弱点は火と氷。

シン
『くぅっ』
真正面から両の鎌で斬り裂いてくるレクンガを、シンは連続のバックステップで回避する。
シンの双剣【ボーンシックル】とレクンガの鎌とでは、リーチの長さが違いすぎる。それにレクンガの鎌は折り畳み式、鎌を完全に開くとその長さは倍以上になる。かわす際に目測を誤れば、真っ二つは必至だ。
ハイネ
『っ』
レクンガの斬り裂きを大剣【バスターソード】の刀身でガードし、スキをついて攻撃体勢へ移る。
つかを下手から上手へ持ち変え、一歩踏み出し右へ一回転して、遠心力を加えて斬り上げる。
レクンガの向かって左の鎌の付け根にヒット。そのままはね飛ばす。
レクンガは『シャー』と叫び、後ろへ後退する。
ハイネ
「…もう一体はどこだ？」当初、シンとハイネの前に現れたレクンガは計三匹。シンが一匹、ハイネが一匹相手をしている。なら、残りの一匹は？

レクンガ
『シャー』
ハイネ
『』
頭上からの奇声。
そこには両の鎌を振り上げ、ハイネに斬りかかる三匹目のレクンガが。
ガードは間に合わないとふんだハイネは、後方へ緊急回避する。
レクンガも逃がすまいと、折り畳み式の鎌を広げ確実にハイネを仕留めにかかる。
シン
『えーい』
シンもレクンガの右の鎌を付け根から斬り落とす。
レクンガの鎌は、刃の部分は硬質で並みの武器では歯が立たないが、付け根または折り畳みの間接部はシンの【ボーンシックル】でも切断は可能だ。
レクンガは鎌にさえ気を配っていれば、何ら問題はない。両の鎌を失ったレクンガなど、まだ噛み付きがあるとはいえ、すでに恐れる必要はない。
シン
『オラぁ』
残った左の鎌の間接部を斬り裂く。
斬り落したレクンガの鎌は垂直に地面に突き刺さっている。
シン
『止めだ』
シンがほとんどの鎌を失ったレクンガに詰め寄る。
その時、左後方から『ドンッ』という何かが落下したような音が聞こえた。シンはとたんに振り替える。
シン
『ハイネ』

シンの目に映ったのは、落下音の原因であろうレクンガと、片膝をつき顔から血を流すハイネの姿であった。

ハイネ

『ふぅ～、危ねぇ～』

右のこめかみから右目の下を通って、鼻の頭まで切り傷が走っている。

ハイネのトレードマークである長いオレンジの髪も、右の耳にかかっていたところはすっぱり斬られていた。

どうやらあのレクンガはハイネの目を盗んで、洞窟の天井に登り、再度の奇襲を仕掛けてきたようだ。

ハイネ

『くっそ、髪斬りやがって　。もう許さねぇ』

【バスターソード】を地面に突き刺し、右手で顔の出血をぬぐう。

シンがハイネのところへ駆け寄ろうとした時、その背後からさっきのレクンガが唯一残った右の鎌で斬りかかってくる。

シン

『』

素早くそれを察知したシンはかがんでそれ交わし、足のバネを使って跳び上がり、その勢いのままレクンガの頭部を貫く。

鱗のないレクンガの甲殻は簡単に貫けた。『カカ…カ…』と鳴いた後、仰け反ってその場に倒れ、動かなくなる。

ハイネ

『ハァ』

ハイネの前にはレクンガが二体。ハイネの顔にキズを負わせたレクンガと、その後ろに片方の鎌を失ったレクンガがいる。

真正面から突っ込んでくるハイネに、レクンガは両の鎌でカウンター。しかし、ハイネは寸前で跳び上がり、そのレクンガを飛び越える。そして、その後方にいる片方の鎌を失ったレクンガに、【バスターソード】を真下に突き立て、そのまま落下する。

のし掛かるかたちで、そのレクンガが頭上から貫く。シンの時と同

じく頭部を貫かれたレクンガは、即死状態だった。
ハイネ
『残り一体』
レクンガの頭部を貫き、そのまま地面にまで食い込んでいた【バスターソード】を引き抜き、ハイネの顔にキズを負わせた最後のレクンガに向き直る。
【バスターソード】を肩に担ぎ上げ、再度にレクンガ突っ込む。
振り下ろしたハイネの【バスターソード】と、レクンガの鎌が接触する。しかし、『バキン』という高い金属音と共に【バスターソード】ははじかれた。やはりまだレクンガの鎌を切断することはできないようだ。ハイネ
『くそっ』
反動で後方へと体勢を崩したハイネに、レクンガは両の鎌を高らかに振り上げる。
ハイネ
「しまっ…」
この体勢からではガードも回避もままならない。
絶望をさとったハイネに、レクンガは容赦なく両の鎌をクロスに振り下ろす。
一瞬の刹那。
確実な斬撃音の後、空を舞ったのは、レクンガの鎌であった。
ハイネ
『!?』
ハイネの目の前には、双剣【ボーンシックル】を振りきったシンが立っていた。レクンガは両の鎌とも、間接部から先を斬り裂かれていた。
シン
『いけ、ハイネ』
一瞬何が起こったか理解できず意識が薄れかかっていたハイネは、シンの呼び掛けによって正気を取り戻した。

即座に体勢を立て直し、【バスターソード】を持ち直す。
ハイネ
『シン、かがめ』
ハイネの叫び声に従い、シンは体勢を低くする。
そして、シンの背後からハイネは【バスターソード】で横斬り。
シンの頭上を【バスターソード】が平行に通過し、目の前のレクンガの頭部を斬りはらう。
頭を撥ねられたレクンガは斬られた勢いのまま、ぶっ飛んで動かなくなる。
ハイネ
『ふぅ～』
【バスターソード】を地面に突き刺し、そこにもたれかかって、顔の汗と血をぬぐう。
シン
『やったな』
ハイネ
『おう』
拳を合わせる二人。
ハイネの顔のキズも、見た目ほど大したことはなく、常備薬の塗り薬をちょちょいと塗っておくだけで何とかなった。包帯を巻くのが一番望ましいが、今包帯を巻いてしまうと右目もふさがってしまうので、本格的な治療は村に帰ってからということになった。
ハイネの応急措置の後、二人は目の前に転がっている三匹のレクンガから剥ぎ取りを行う。
シン
↓［とがった爪］×1
［刃蟲の鎌］×2
ハイネ
↓［刃蟲の鎌］×1

［刃蟲の体液］×２
刃蟲の素材は主に武器に用いられる。切れ味はいいし攻撃力は高いしで、かなり人気の高いシリーズだ。
剥ぎ取りを終えたシンとハイネは、ハイネの目的である鉱物系統の入手のため、洞窟の最終地点である“大空洞”に向かうことにした。
※大空洞、ＰＨＡＳＥ―４４参照

場面は変わり、火山地帯のケネスたち一行。
昨夜、ケネスとスコールは見張り役として女の子たちの快適な眠りを守るために一晩中、イーオス・ドスイーオスと戦っていた。
見張り役という面目で一晩中、無償の労働を課せられたケネスとスコールは、現在とてつもなくまぶたがヘビーなのだ。
ミキリ
『もう、一晩くらい見張り　しただけでなんでそこま　で疲れんのよ？』
男二人の前を歩く女三人。一晩中、お前らのために働いてやったのに、なんでそんなこと言われにゃいかんのだ？
『ありがとう』を言ってくれたのは、ヴァニラだけだった。ミキリとカノンからは『ご苦労様』の一言もない。
ケネス
『だいたいよぉ、オメェら　の前であれだけドンパチ　してたのに、なんで目ぇ　覚まさねぇんだよ？』
岩の小部屋の中で幸せそうな顔で夢を見ているコイツらの前で、オレたちはドスイーオス・イーオスと激しい火花を散らしていたのだ。
それなのに、コイツらは一切目を覚まさずに爆睡してやがった。仮にもブラックリストハンターだ。寝ている時でも、常に気を張りつめておくのは当たり前だろ。
ミキリ
『寝てたんだから、仕方な　いじゃん』

カノン
『うん』
コイツらぁ
感謝の言葉とはいかないまでも、せめてツンデレ的言動または行為を示せよ。本気で腹立ってくる。
と、こんな感じで2日目を迎えていたケネスたちの一行。標的はもちろんティガレックス亜種。
早朝の今は、火山の岩山の洞窟内で採取・採掘をしようとしているところだ。
ヴァニラ
『うん、感謝してる感謝し　てる』
ケネス
『…』
ガキをあやすように笑われる。それはそれで気に入らねぇ。
カノン
『みんな、上』
そんなやり取りの中、カノンは頭上の天井に何かの気配を感じとった。
続くように皆の目線が上に向けられる。
スコール
『レクンガ！』
ミキリ
『げっ、なんて数』
長細い身体に、折り畳み式の鎌。無数の足で天井にへばりついたそれは、まぎれもなく刃蟲レクンガ。
しかし、その数は半端じゃなかい。
ケネス
『こんだけいると壮観だな　ぁ』
ヴァニラ
『うわっ、気持ち悪っ』レクンガは奇襲の習性を持つ。

つまり、この大量のレクンガが一斉に頭上から降ってくるというわけだ。
レクンガ
『シャー』
全員各個に散開する。
ケネスに狙いを定めたレクンガ。自慢の鎌を大きく開いての斬り裂き。しかし、ケネスはそれを片手の籠手防具で受け止めた。
ケネス
『くだらねぇ』
ケネスはもう片方の手でライトボウガン【慟哭スル魂】を持ち、その銃口をレクンガの身体に密着させる。そして零距離で引き金を引く。装填されている弾はＬＶ３散弾。速射によって散弾が三連続で発射された。零距離でそれをくらったレクンガは、文字通りの『蜂の巣』となって醜い屍となる。
スコール
『ホラよ』
スコールは飛び上がって、頭上からの縦斬り。レクンガは両の鎌で反撃するが、スコールの大剣【滅慄叉】はその鎌ごとレクンガを叩き斬った。
ハイネですらレクンガの鎌にはキズ一つつけられなかったのに、スコールはいとも簡単にそれをやってのけた。
他の仲間たちも、うじゃうじゃと群れるレクンガを瞬殺していく。
確かにレクンガは攻撃力も高し動きも早い。ランポスなどとは比べ物にならないぐらい強い。しかし、それなりのレベルを持ったハンターにしてみれば、やはりレクンガも『ザコ』に分類されるのだ。

レクンガ掃討戦

カン――――カン――――。
大空洞の巨大な空間に浸透する鈍い金属音。
岩の裂け目を特殊な鉄の道具で掘り返す音だ。
ハイネ
『よっしゃ～、きた～』
特殊な鉄の道具、すなわちピッケルを手にしたハイネが、岩の裂け目から顔を出した青い光沢のある石を掴み取る。
シン
『ハイネもお目当ての素材　ゲットだな』
ハイネの手に握られているのは［マカライト鉱石］。武器の強化には欠かすことのできない鉱石だ。
シンも両手いっぱいに鉱石を抱えて現れる。
ハイネ
『お、おいシン…。それ…』
マカライト鉱石の発掘によって喜びに満ちていたハイネの顔から、シンの腕の中にある鉱石類を見て、その笑顔が消えた。
シンの腕の中には、
［マカライト鉱石］
［黄金石のかけら］
［水光原珠］
［レウスアイ］
などの、この大空洞で採掘できる鉱石類の中でも、チョーレアなものばかりだった。それに引き換えハイネは、今手にあるマカライト鉱石が初めての希少素材。その足元には、
［石ころ］
［砥石］
［円盤石］

が無残に散乱している。
さて、今シンとハイネがいるのは、もはや言うまでもない密林の洞窟の最終最深部、“大空洞”。現ポイントは、地下約２００ｍ。
大空洞は天井が陥没しており、地表と繋がっている。そのため、太陽の光がこの地下の空間にまで到達し、地下とは思えない環境になっている。
先ほど、この大空洞を最深部と言ったが、それは正確な表現ではない。
今シンとハイネがいる地点は、先ほども言ったとおり地上から２００ｍ地下にさがったところだ。しかし、大空洞はそれよりさらに地下へ伸びている。今シンたちがいる地下２００ｍ地点よりさらに下のエリアは“地底”と呼ばれ、これまた下位ハンターは立ち入ることのできない場所だ。つまりこの２００ｍ地点までが、下位ハンターが立ち入れるギリギリのラインなのだ。
現在はこの地下２００ｍ地点で採掘中。この大空洞には、多くの鉱脈が集中しており、鉱石類の採掘にはめちゃくちゃ適している。
現にシンは希少素材をザクザクゲットしている。ハイネは例外として…。
ハイネ
『なんでそんなレア素材い　っぱい持ってんだよ?オ　レなんか、ピッケル３つ　壊してやっとコレ採れた　のに』
持ってきたピッケルの数は各４つずつ。３つ壊してということは、最後の１つでなんとかマカライト鉱石を採掘できたというわけだ。
だからさっき、あんなに喜んでいたのだ。
シン
『そーなのか。オレは、コ　レ全部１つのピッケルで　採掘したけど』
シンは腕の中の希少鉱石類を指し示す。
ハイネ
『なにぃー』

ハイネは残り１つのピッケルを手に、先ほどまでシンが採掘していた岩の割れ目にダッシュする。
シンは仕方なく、ハイネが採掘していたこの鉱脈でピッケルを振るう。
ハイネ
『石ころしか出ねぇ～』
シン
『あ、黄金石のかけら』
ハイネ
『なにぃ～』
数時間、休息を含めてこの大空洞で採掘をしていた。幸いなことに、大空洞にはあまり大型のモンスターは寄り付かないので、気兼ねなく採掘できた。
理由は簡単。先ほども言った通り大空洞は地底と繋がる数少ないの経路の内の一つだ。つまり、地底に生息するモンスターが、まれにこの大空洞を迂回して、こちら側のエリアに侵入してくるからだ。
以前、ハイネの前に現れたセルケトなんかがいい例だ。
シン
↓［マカライト鉱石］×６　［黄金石のかけら］×７　［水光原珠］×６
［レウスアイ］×１
［大地の結晶］×８
［銅鉱石］×６
［鉄鉱石］×１０
［円盤石］×９
［石ころ］×１４
ハイネ
↓［マカライト鉱石］×２　［黄金石のかけら］×１　［大地の結晶］×７

［水光原珠］×１
［鉄鉱石］×１０
［円盤石］×１５
［砥石］×８
［石ころ］×２６

明らかに神様や仏様が何か差別しているようにも思えるが、ここは気にしないでおこう。

ハイネがプルプル震える手で拳を握り締めながら、じっと何かをこらえている。昼飯は、さっきカナリアからもらったサンドイッチの残りだ。半分ほど食べきれずにとっておいたのだ。飽きることのないその淡白な味は、いくらでも食べれそうなくらいさっぱりしていた。再度、カナリアのサンドイッチを堪能して、そのうまさに感動する。

シン

『さて、そろそろ行くか』ハイネ

『おぉ』

勢いよく立ち上がる2人。ハイネもシンに比べれば、採掘結果はよくなかったが、それでも目当ての素材はすべて入手した。

あとは残り7匹のレクンガをぶっ殺して、クエストクリアを目指すだけだ。

レクンガがよく好んで身をひそめるのは、暗くて広すぎず湿度の高いじめじめした洞窟の内部だ。

その意味では大空洞は、選択の対象からは除外されるだろう。陥没した天井からこぼれる太陽の光、その名が示す通りの広大な空間、風通しのよい地形。レクンガが身をひそめるには最悪の環境だ。

ということで、大空洞を出た2人は、それらの条件が重なっている洞窟を進んでいた。

レクンガも生息個体数はかなり多いモンスターだ。見つけるのは造作もない。

『カサッ…』

シン、ハイネ

『』

次の瞬間、両の鎌を振り上げたレクンガが、頭上から襲いかかる。

ハイネ

『もう見切ってんだよ』

【バスターソード】を持ち上げ、レクンガの斬り裂きをガードする。

さらに直後、タイミングを見計らってシンが【ボーンシックル】で、

そのレクンガに回転斬り。

先ほどのレクンガとの戦いで、その動きはすべて熟知している。

まずは厄介な鎌から斬り落とし、その後胴体に斬りつける。地面に

打ち臥したそのレクンガに、シンは【ボーンシックル】を両手とも

下手に持ち変え突き刺す。レクンガは、集団の奇襲を主な戦法とし

ている。つまり一個体が単体でいるはずがないのだ。

シン

『ハイネ、下』

ハイネ

『シン、上』

重なる2人の叫び声。

ハイネには足元から、シンには頭上からレクンガの奇襲。

シンは前転で緊急回避し、ハイネは【バスターソード】を地面に突

き刺しつかの先で倒立する。

シン

『ハァ』

シンが地面からハイネに襲いかかったレクンガに迫る。レクンガは

空振った方とは逆の鎌で、迫り来るシンに突き攻撃。しかし、シン

はそれを左の剣で受け流す。さらに、“コ”の字型になっているボ

ーンシックルの刀身を活かして、突き出したレクンガの鎌をその間

に挟み、刀ごと壁面に突き刺す。

レクンガの鎌は、ボーンシックルの刀身に引っ掛かって抜けない。

『シャー』と声をあげ、もう片方の鎌を振り上げる。シンはそれを右の剣で受け流し、空いた左の手で腰から剥ぎ取り用のナイフを抜く。
両の鎌とも封じられたレクンガに、剥ぎ取り用のナイフで一突き。胴体貫通、そのまま左に引き裂く。緑の体液を吹き出し、地面に横たわる。
ハイネ
『あ〜ん』
ハイネは3匹のレクンガに囲まれていた。
まずは振り下ろしで1匹のレクンガの鎌を斬り落とす。直後に背後から斬りつけるレクンガの攻撃をかがんでかわし、ポーチから［炸裂玉］を取り出して、そのレクンガの口へ投げ込む。2秒後、そのレクンガの頭がふっ飛んだ。
前方から迫る2匹のレクンガの斬り裂きを持ち直したバスターソードでガードし、スキをついて炸裂玉を二つほど地面に転がし飛び上がる。
レクンガの足元で炸裂玉が爆発。2匹ともダメージは負ったものの、まだ死んではいない。爆煙の中でキョロキョロと辺りを見回している。
しかし、両手に双剣を突き立てたシンが、その立ち込める爆煙に飛び込み、中にいる2匹のレクンガの頭部に両手のボーンシックルで突き刺す。
ハイネ
『おいおい、いいとこ取り　かよ』
着地したハイネがバスターソードを肩に担ぎ上げて、シンの方へ振り返る。
シンは両手のボーンシックルをレクンガから引き抜き、刃についた緑の液体を払う。
シン
『っ』

振り向き様、シンは右手の剣をハイネの頭上、高すぎて見えない洞窟の天井に投げつけた。
ハイネ
『っ』
ハイネもシンが投げた剣の軌道を目で追う。
闇の先の天井からは『ザクッ』という奇妙な音が聞こえてきた。天井に剣が突き刺さった音ではない。
数秒後、頭上の闇の中から剣が突き刺さり息絶えたレクンガが落ちてきた。
ハイネ
『おわっ』
ハイネが落ちてくるレクンガの死体をかわす。
すると、それに続いて別のレクンガが鎌を振り上げ、レクンガの死体に目をとられていたハイネに襲いかかる。
ハイネ
『フン』
瞬時にそれを察知し、バスターソードのつかを両手で握り締める。
レクンガが頭上より迫る。そして、バスターソードの攻撃範囲内に侵入すると、ハイネは腕のバネをフルに使って、バスターソードを突き上げる。
頭から腹まで、その巨大なバスターソードがレクンガの細長い身体を引き裂き、貫く。
垂直に突き上げられたバスターソードに、レクンガは見事なまでに突き刺さった。もちろん、真下にいるハイネは、レクンガから吹き出した緑色の液体を滝のように浴びることになったのだが。
ハイネ
『ちょうど１０匹目。レク　ンガ討伐完了』
シン
『クエストクリア』
ハイネがバスターソードに突き刺さったレクンガを取り払い、シン

がさっき投げた剣をレクンガから引き抜く。
今の戦いで、ハイネは先ほどレクンガに斬られた顔のキズが開いてしまった。さっきもそうだったが、切り傷なので出血の量が凄まじい。
とりあえず、残り時間での採取・採掘等の素材集めはやめにして、すぐにティーズへの帰途につくことにした

登場人物　裏設定１２

キルヒメア・アティナ　「その顔を剥いでやる！　私の手で地に堕ちろ！」

性：女

好きな物：電車

嫌いな物：瞬間接着剤

備考：あたし

フリーの

ハンター

超強い

みたいな

実は人体強化

されてる

みたいな

武器？

ランスだけど
まあ使うなんて
余裕
みたいな

カノン　「方位磁針ってあてになんない」

性：女

好きな物：サンショウオの踊り食い

嫌いな物：から揚げ

備考：かなりの方向音痴、相当な野性児で生肉はそのまま食べる。
武器はもたず全身を鎧でおおい拳を使って攻撃する。リオレイアですら昏倒させることが可能。
うどん、そうめん、ひやむぎは彼女にしてみれば鎖なようなもの。
性格は結構旦那に尽くすタイプ。

強化

サク
『お帰りなさい』
イク
『おお、デッケーキズだな　。ハイネ』
ティーズ村の集会所に帰還したシンとハイネをいつもの2人が迎えてくれる。
受付に立つサクとイクの声を聞けば『帰って来た』という実感をわかし、何か言い知れぬ安堵感を覚える。ハイネ
『オレとしたことが、不覚　だったぜ』
シン
『カッコつけてんじゃねぇ　よ』
めんどくさいのだが一応ツッコミをいれておいたシンに、サクとイクは気さくに笑ってくれる。
相変わらず、うるさすぎるくらいにぎやかなティーズ村の集会所。
食堂と一体になっているこの集会所には、さまざまな目的でハンターたちが集まってくる。特にこの時間は食堂を利用しているハンターの割合の方が多い。
ハンターA
『おい、ハク。ビール3つ　だ』
ハンターB
『こっちにもいつもアレ頼　むよ、ハク』
ハク
『はいよ』
それぞれのテーブルから矢のように注文が投げ掛けられる。
それを、均等に並べられたテーブルの間を縦横無尽に走り回っているハクと呼ばれる少女が、的確かつ迅速にこなしている。
ハクは、ギルドのクエスト受付に立つサクやイクと並び称されるテ

ィーズの集会所の名物娘。
このサクとイクとハクは、ティーズでは結構な有名人だ。

現時刻は6時と半分。
クエストから帰還したハンターやこれからクエストに出発するハンターが、この食堂で腹を満たす。また、単に夕食を目的としたハンターも少なくない。
サク
『では、こちらが報酬金の　２５００ｚと契約金の１０００ｚです。またのご利用をお待　ちしています』
サクがシンとハイネに預かっていたギルドカードと、報酬金と契約金である合計３５００ｚの金を手渡す。
そうして恭しく頭を下げるサクの隣では、イクが『まったな～』と満面の笑みで手を振っている。毎度のことながら、この２人の対象性は不思議でたまらない。報酬金は仲良く2人で半分こ。そして、２人が集めた精算アイテムを含めると、シン
↓１３５５０ｚ

ハイネ
↓２７５０ｚ
２人の金額の差は、もはや文字通りの桁違い。
今回シンは［黄金石のかけら］や［銅鉱石］などの精算アイテムを多数入手したので、それが大きく響いたようだ。
ハイネ
『…』
シンが高額な精算アイテムを採掘していた隣で、ハイネが採掘していたのは［石ころ］。
ハイネのポーチに無残に詰まった［石ころ］は、なぜか金を受け取る前より重く感じる。

とりあえず、集会所を後にした2人は受け取ったその金を持って武具屋に急ぐ。ようやく武器強化のための金と素材を手元に揃えることができたのだ。逸る気持ちを抑えられないのは無理もないのかもしれない。

ハイネ

『…』

武具屋は集会所から少し離れたところにある。シンやハイネの自室の近くだ。

ティーズの中でもこの地区はハンターズギルドの本部があるということで、ハンターのための施設や行商人等が集中している。現にこの地区に住む8割りがハンター、もしくはハンターの関係者だ。

つまり、ここはハンターの巣窟と言っても過言ではない。他の村でも、この地区ほどハンターのための地区として栄えているところはない。いわば都会である。そして、この地区はティーズ村のウイグル地区と呼ばれる。

シン

『まだ止まらないのか?』ハイネ

『ああ…』

ハイネの右頬の上部から流れる血は、一向に止まらない。

シンは先に手当てした方がいいのではないか、と言ったのだが、ハイネは武器の強化が優先と聞かないので、今武具屋に向かっているわけだ。

ハイネ

『おやっさん、いるか〜?』

ヴェルド

『いねぇわけねぇだろうが』

この辺りはシンやハイネのような他の村から来た新人ハンターのための寮（自室）が建ち並んでいる。住宅地といったような場所だ。

しかし、そんな中に明らかに周りの景色とは同化していない異形の建造物が堂々と建っている。これこそが武具屋だ。

そこに威勢よく駆け込んだハイネを出迎えたのは、柄の長い鎚を肩に担いだ色黒のオヤジだった。
すすで黒く汚れた白いノースリーブのシャツに肩からタオル、さらに安全第一のヘルメット、完全な工事現場のおっちゃんスタイル。
ハイネ
『おやっさん、オレたちの　武器の強化頼むよ』
ヴェルド
『あん？』
ハイネとシンは、各々の武器を棚の上に並べる。
ヴェルド
『なんだ、バスターソード　とボーンシックルかよ。　ショボい武器だな。お前　ら新人か？』
武具屋のオヤジは、担いだ鎚で肩をポンポンと叩きながら目の前のガキに問う。この男は、通称『おやっさん』で親しまれている鍛冶職人。見た目通り口は悪いが、鍛冶職人としてはおそらくティーズ1を誇っている。
ヴェルド
『まぁ、そんなことはどう　でもいいか。バスターソ　ードは鉄鉱石と円盤石。　ボーンシックルはとがっ　た爪と竜骨【小】だ』
シンとハイネは、鍛冶屋のヴェルドから要求された素材と強化にかかる金を棚の上に並べる。
バスターソード
＋１２００ｚ
［鉄鉱石］×３
［円盤石］×２

ボーンシックル
＋１０００ｚ
［とがった爪］×２
［竜骨【小】］×２

ヴェルド
『これくらいの武器なら、　すぐに仕上げてやるさ。　ちょいと待ってな』
ヴェルドが後ろの加工場のような場所から数匹のアイルーをよんで、バスターソードとボーンシックル、それから素材一式を運ばす。ヴェルドから『ちょいと待て』と言われたシンとハイネは、その時間をどう潰そうか迷っているうちに、ヴェルドは武器の強化を終えてしまった。
ヴェルド
『おらよ』
ハイネ、シン
『はやっ』
ヴェルドが仕上げたハイネの大剣とシンの双剣を棚の上にのせる。見た目は正直、両方とも何も変わっていないように見えた。それを見た2人は、一瞬首をひねる。
しかし、手にとってみると、その違いは明確なものだった。手触り、重量、硬度など見た目では識別できないものも、実際に触れてみると、先ほどまで自分が手にしていた武器とは明らかに違う。
バスターソード
↓バスターソード改
（攻撃力２８８→３８４）

ボーンシックル
↓ボーンシックル改
（攻撃力９８→１２６）
ハイネ
『おぉ、見た目そんな変わ　ってねぇのに、結構ずっ　しりくるな～』
シン
『ホントに。重くなったの　か軽くなったのかわから　ないけど、

扱いやすくな　ってる』
ヴェルド
『当然のことよ。なにせ、　このオレが打ったんだか　らな』
ハイネやシンと棚を挟んだ向こう側にいるヴェルドが、長い柄の鎚を肩にのせて得意気に鼻を高くする。
カナリア
『それじゃ、コレもお願い　ね。おやっさん』
ハイネとシンが強化された己の武器を鑑賞していると、その背後から聞き慣れた声が飛んできた。
ハイネ、シン
『カナリアさん』
ヴェルド
『げぇっ』
ぴょんと園児のように振り返るシンとハイネ。しかし棚の向こうでは、ヴェルドがあからさまに嫌そうな顔をして、一歩後退している。
もちろん、そこに立っていたのは、いつもの赤毛のポニーテール。
そんないつも通りの満面の笑みの彼女の手には、白い鞘に納められた太刀が握られていた。
カナリア
『げぇって何よ、げぇって　。これでもお客様よ、あ　たし』
ヴェルド
『またとんでもねぇ注目で　もしにきたんだろ?』
ひきつったヴェルドの表情をよそに、カナリアは『ピンポ～ン』と言いたげに笑う。
カナリアはブラックリストハンターだ。この階級になってくると、通常の強化メニューにはない、そのハンターだけのオリジナル武器を持つようになる。例えば、ケネスの【慟哭スル魂】やスコールの【滅慄叉】。メニューにある武器の強化なら、職人もその強化の方法を知っているし、もし知らなかったとしても調べることができる。
しかし、メニューにないオリジナル武器の場合は、職人が己の経験

と勘だけでその方法を見つけなくてはならない。
ヴェルド
『この太刀をまだ強化する　つもりか？』
カナリア
『当たり前よ。どんどん強　くするんだから』
ハイネやシンから見ても、ヴェルドが言う通り、カナリアの差し出した太刀は、それだけでも十分すぎるくらいの能力を秘めていた。具体的な数字はわからないが、『強い武器』それだけはびしびし伝わってくる。カナリア
『よろしく～』
棚の上にのせたその太刀の横に、おそらく強化用の素材が入れてある袋を置く。棚の向こうでは、『また徹夜続きか…』とヴェルドが沈んだ声で呟いている。
カナリア
『っていうか、よく会うね　、あたしたち。ひょっと　して、デスティニーの糸　とかで結ばれてたりする　のかな？』
シン
『デス…、何の糸？』
カナリアは相変わらず笑顔を振り撒いている。またしても浴衣姿で現れたカナリア。
今さらだが、カナリアはハイネやシンより年齢は上だけど、背丈は2人より小さい。女の子だから当たり前と言っちゃ当たり前なのだが、構図としてはバッチリなわけだ。
そんなカナリアが、何の躊躇もなく腕を組んでくる。男としては、ちょっと心臓が高まったりするわけだ。悲しいかな男の性。
カナリア
『アレ、ハイネくん、顔ど　うしたの？』
今までハイネの左側にいたカナリアは、ハイネの右頬のキズに気づいていなかったようだ。
ハイネとシンは、先ほどのクエストで刃蟲レクンガに斬られたこと

などを一通り簡潔に話した。
カナリア
『そりゃ、マズいよ。レク　ンガの血てか甲虫種の血　って、細菌や毒素なんか　も含んでるからね。血が　止まんないのもそのせいだよ』
ハイネは一度目のレクンガとの戦闘で顔を斬られた。この時はすぐに出血はおさまった。しかし、二度目の戦闘でレクンガの返り血を浴びてから、顔のキズの出血が止まらなくなった。
出血が止まらないのは、その返り血のせいだとカナリアは言う。
カナリア
『ここじゃ何もできないし　…。とりあえず、ウチ来　てよ。薬ならいっぱいあ　るし』

写真

ハイネ
『いや～、なんかスイマセ　ンね～。こう何度も世話　になっちゃって』
ハイネの右頬のキズの治療のために、再びカナリアによってアルスターの居住区に招かれたシンとハイネ。カナリアが言うには、レクンガの体液を浴びたことによって、キズ口から細菌等が身体の中に入り込んだかもしれないらしい。キズ口が塞がらないのも、レクンガの体液を浴びたことが原因だそうだ。
カナリア
『今さらそんなこと気にし　ないでよ』
ハイネの右頬にガーゼと包帯を巻き付けながら、いつもの笑顔でカナリアが答える。シンも顔や腕の切り傷に絆創膏（ばんそーこー）を張られまくった。どうやらここはカナリアの家のようだ。族長であるセキレイの屋敷の右方にある木造建築の仏閣のような建物がそれだ。
シン
『カナリアさんって、医療　士の資格とか持ってたり　するんですか？』
ハイネに包帯を巻くカナリアに、シンと問いかける。先ほどはレクンガの体液についての人体への悪影響を説明していたし、今のハイネへの治療も手際が良かった。
カナリア
『ん～ん、持ってないよ。　ただブラックリストハン　ターとしての最低限の知　識だけ。それと、あたし　の周りには無茶なことをする連中が多いから、そ　れで手つきが慣れちゃっ　てるのかな』
確かにシンが言う通り、ハイネを手当てするカナリアの手つきは要領がよい。
カナリアはシンの方へ振り向かずに答え、ハイネの包帯を結び終え

る。
カナリア
『はい、おしまい』
カナリアに包帯を巻いてもらったハイネは、右目や右耳もその包帯でおおわれ、眼帯をつけているようだった。
カナリア
『2、3日は絶対安静ね。　レクンガの血でキズ口が　ふさがりにくくなってる　から』
レクンガに斬られたキズ自体はさほど問題はないのだが、やはりそこに浴びたレクンガの血がマズかったようだ。
カナリアが塗ってくれた薬のおかげで、今は出血は止まっている。
後は完全にキズ口がふさがるのを待つだけだ。
ヒバリ
『カナ～、アルビノエキス　余ってる？』
部屋の襖を開ける音に重なって、女性の声が飛び込んできた。
3人は一斉にそちらに振り向く。
カナリア
『お姉ちゃん』
ヒバリ
『アレ、お客さん？』
襖の向こうから登場したこの女性、やはり髪はアルスターの特徴の赤色。その髪を後ろで束ねて折り返したのを留めてある。言うまでもなく、スッゲー美人。カナリアより一回り年上っぽい。
この女は、昨日ハイネとセキレイたちの会話を屋根の上で盗み聞きしていたあの女と同一人物だ。
ハイネ
『カナリアさんのお姉さん　ってことは、もしかして　…』
カナリアがこの女のことを『お姉ちゃん』と呼んだことをハイネは聞き逃さなかった。それに思い当たる人物は一人しかいない。
ヒバリ

『ヒバリ・アルスターよ。　よろしく、ハイネくん。　シンくん』
ヒバリがニコッと微笑む。まだ幼さが残るカナリアとは裏腹に、ヒバリは大人の女の雰囲気を漂わせる。カナリアをかわいいと言うなら、ヒバリは美しいと言うべきか。
シン
『ヒバリ・アルスターって　…』
有名人の名前に疎いシンでも、その名には思い当たる点があったようだ。
ヒバリ・アルスター。現在全ハンターの内４人しか存在しないＨＲ１０の最高ランクのブラックリストハンターだ。さらにヒバリは、女性ハンターで初めてＨＲ１０を名乗ったことでも有名である。また、その妹であるカナリアもＨＲ９のブラックリストハンターだ。
ヒバリとカナリアの姉妹は、女性ハンターの間ではカリスマ中のカリスマとして崇められている。
ハイネ
『ヒバリさん、オレたちの　名前を…』
ヒバリ
『もちろん知ってるわよ。　イザークの弟くんでしょ』
ヒバリは微笑んだまま、襖を閉めずに部屋に入ってくる。
カナリアはヒバリから要求されたアルビノエキスを取り出すために、アイテムボックスをあさる。
ヒバリ
『まぁ、ただの腐れ縁なん　だけどね。イザークって　昔は“神童”とか呼ばれ　てたでしょ。私も似たよ　うな境遇だったから…。
　一時期は話が飛躍して政　略結婚なんて噂もあった　ぐらいだから』
ヒバリは２人の前に立って苦笑いを浮かべながら、ちょっとした昔話をしている。
ヒバリはそれを笑い話として話しているが、ハイネにとってはそんなものではない。イザークとヒバリの政略結婚の噂があったなんて、

寝耳に水もいいところだ。
ハイネ
『そんな話が…』
ヒバリ
『ごめんね。急にこんな話　して』
ヒバリはカナリアが差し出した瓶詰めのアルビノエキスを受け取って、開けっぱにしておいた襖から出ていく。
ハイネはまた考え込む。イザークとヒバリの政略結婚の話。イザークが一族を抜けた理由なのか。
それも気になるところだが、なぜそれを昨日、セキレイがしてくれなかったのか。その辺りも気になるところだ。
カナリア
『あくまで噂の範疇だった　の、お姉ちゃんとイザー　クの話』
考え込むハイネに、カナリアは添えるように呟く。
ハイネ
『当然、イザークも知って　ましたよね。その噂』
カナリア
『まぁ、だろうね。昔は仲　良かったから、お姉ちゃ　んとイザーク』
ハイネ
「昔は？」
カナリアが部屋の隅に置かれていた棚に目を向ける。シンとハイネもつられるようにカナリアを視線を追う。
棚の上には、少し大きめの写真立てが置かれていた。写真には、左方にアルスター、右方にヴェステンフルス、中央にはアルスター前族長クイナ・アルスターとヴェステンフルス最期の族長でありイザークやハイネの父親でもあるアトラス・ヴェステンフルス、そして3人肩を寄せ会ってカメラにピースを向けている幼き日のヒバリ、カナリア、イザークの姿があった。

場面は変わって、例の火山地帯。
別地方の火山へ黒轟竜ティガレックス亜種を討伐しに来たケネスたち一行は、現在ラストスパートを迎えていた。
溶岩が絶えず吹き出る火山の火口にその姿はあった。足を一歩踏み違えればマグマの中にダイブしてしまうような極限の空気の中、標的であるティガレックス亜種は足を引きずり逃走を図ろうとしていた。
スコール
『逃がすか』
スキル〈力の解放〉の発動によって左腕を青い光で輝かせたスコールが、手にした大剣【滅慄叉】を振り上げ、背を向ける黒い巨体に飛びかかる。
それを察したティガレックス亜種は、体を回転させ後方から迫り来るスコールを迎撃する。
跳ね返されたスコールは地面に大きく叩きつけられたが、大きなダメージもなく、すぐに体勢を立て直す。ミキリ
『スコール』
スコール
『大丈夫、問題ないよ』
駆け寄ろうとするミキリにスコールが答える。
しかし、その目の前でティガレックス亜種は両の翼を拡げ、空中へ飛び上がる。スコール
『くそぉ』
ミキリ
『カノン』
カノン
『わかってる』
飛び上がったティガレックス亜種に、スコールたちからの攻撃オプ

ションはない。悔しいが見送ることしかできない。
そんな中、狩猟笛使いのカノンが、目を瞑りながら精神統一をしている。
カノン
『この方向は…、多分エリア４８だと思う』
飛び去ったティガレックス亜種が見えなくなって数十秒、カノンがティガレックス亜種の移動先を予想する。
ミキリ
『オッケー。ヴァニラたち　伝えるわ』
それを聞き届けたミキリが、即席スキル〈以心伝心〉を使って、現在別行動をとっているヴァニラとケネスにそのことを伝達する。

スコールたちのいる火山の火口部から東に７ｋｍほど行ったエリアにケネスとヴァニラはいた。
ティガレックス亜種は現在相当弱っていたので、スコールたちと別行動をとり、ティガレックス亜種が体力回復を図るために向かうと思われる休息エリアに先回りしていたのだ。
しかし…
ヴァニラ
『…ごめん、ケイ』
ミキリからの連絡を受けたヴァニラが、暗い面持ちでケネスに話しかける。
ケネスは『ん？』と声をあげて、ヴァニラの方へ振り向く。
ヴァニラ
『ミキリたちからの連絡な　んだけど、あたし、読み　違えたみたい。ティガレ　ックス、エリア４８の方へ　行ったって』
ケネス
『マジ。か～、真逆だな～』
現在、ケネスとヴァニラがいるこのエリアは、エリア１６。カノンが言ったエリア４８とは真逆に位置する。

この火山にモンスターが体力回復のために利用する休息エリアは複数あるため、ヴァニラがティガレックス亜種の特徴をもとにそれを予測していたのだが、残念ながら外れてしまったようだ。

ヴァニラ

『ケイ、先に行って。神足　ならすぐだし』

確かにケネスの特殊スキル〈神足〉を使えば、真逆の位置にあるエリアにも、あっという間である。

ヴァニラとしては、予測を外してしまったことが申し訳ないのだろう。

ケネス

『ん～、お姫様だっこなら　ヴァニラを抱えても行け　るぜ？』

ヴァニラ

『な、何言ってんのよ』ケネスの〈神足〉に、重さは関係ない。バランスのとれた体勢とスタミナさえあれば、発動することは可能だ。

それなのに、なぜかヴァニラは嫌がる。

ケネス

『冗談だよ』

ケラケラと笑うケネスに、ヴァニラは不機嫌そうな表情とジト目を向ける。

ケネス

『さぁ、走んぜ』

ケネスは促すように笑って走り出す。もちろん、〈神足〉ではなく、本当にただの『走る』だ。

ヴァニラ

『うん』

その顔に笑顔が戻ったヴァニラは、先に走り出したケネスを追うように駆け出す。

二つ並んだ影が、溶岩の大地を駆ける。

なき相棒

シン

『とりあえず、林の中から　探すか』

湖を渡ってきたいかだを密林の砂浜に打ち上げ、朝のまだ涼しい太陽の下で一つ伸びをする。

当然、今は一人だ。いつも隣にいる相棒は、現在絶対安静中。

昨日から一夜明けての場面だ。

昨日、シンとハイネは共にカナリアから手当てを受けた後、自室に戻ってそのまま休んだ。カナリアは『もう1日ぐらい泊まってけ』とか言っていたが、2日連続はさすがに気が引けたので、遠慮させてもらった。一夜明けた今日、ハイネはカナリアから絶対安静を命じられているために、クエストには出られない。シンもハイネの回復を待つつもりだったのが、なぜかハイネは『オレのことはいいから、さっさと行ってこい』とうるさいので、久しぶりに1人でクエストに来ているというわけだ。

【鳥竜種戦争への介入】

指定地：密林

報酬金：２５００ｚ

契約金：５００ｚ

成功条件：ランポス１０頭　　ジャギィ１０頭
　　の討伐

制限日時：２４時間

ランポスはすでにお馴染みの鳥竜種だ。以前にもクエストで討伐の経験がある。ジャギィも討伐の経験はないが、ランポスを討伐できるのなら問題はないと考えてよいだろう。

両者は密林の支配権をめぐって、日々戦争や紛争に明け暮れている

関係だ。ちょうど水と油のような関係というべきか。
シン
『強化した武器の力も試し　たいしな』
シンの背には、昨日強化したばかりの【ボーンシックル改】が背負われている。とりあえず、まずはランポスを狩りに行こう。以前のクエストでランポスの縄張りはわかっている。

一方、クロノスに残ったハイネは…
ハイネ
『シド、おかわり』
シド
『アンタ、お金あるんでし　ょうね』
ハイネの姿はシドの店にあった。そこで何をして、どんな状況になっているのか、それはハイネの前に積み上げられた皿のタワーを見てもらえば一目瞭然だろう。
ハイネのもとへ料理を運んでくる満面の笑顔のアイルーたちとは裏腹に、厨房のカウンターの内側にいるシドは顔面蒼白でハイネのことを見ていた。

シン
『ハァア』
木々が生い茂る林の中に、シンの掛け声が響く。
両手に【ボーンシックル改】を構えたシンが、数頭のランポスを群れの中で、まるで舞いを舞うようにランポスと戦っていた。
ランポス
『ア〝ア〝』
数日前までは1頭のランポスを狩るだけで苦戦していたシンが、今やこの状態だ。

襲いかかるランポスを凌ぎ交わしつつ反撃する。
シン
『これで最後だ』
最後に残ったランポスも難なく斬り倒す。
今回倒したランポスは計7頭。そのほとんどを、シンは一撃で倒している。それは、武器を強化したこともあるのだろうが、一番の理由は“慣れ”だろう。
意識してのことなのか、斬撃の瞬間シンはランポスの喉元を狙っている。
リーチの短い双剣で、ランポスの攻撃を防ぎ交わし受け流し、そしてランポスがその間合いを侵した瞬間、シンは特定のポイントを狙い剣を振っている。それが喉元を含めた“急所”だ。シン
『あらかた片付いたな…』辺りを見回してそう呟き、両手に構えたボーンシックル改を背に戻す。
そうして周りに横たわるランポスから剥ぎ取りを行おうとしていたシンを、頭上から見下ろしている影があった。
シン
『』
頭上からシンを狙っていたそれは、剥ぎ取りを行うために納刀したシンに、両の鎌を振り上げ襲いかかる。瞬時にそれを察知したシンは、軽いステップで身体を反らし頭上からの急襲をかわす。
レクンガ
『シャー』
同時に右手で背からボーンシックル改を引き抜き、襲いかかってきたレクンガにカウンターを決める。
鎌の間接もろともレクンガの頭をはねる。
シン
『フン』
ランポス7頭、レクンガ1匹を討伐。
剥ぎ取りの結果は…

↓［ランポスの皮］×４
［ランポスの牙］×２
［竜骨【小】］×１
［刃蟲の鎌］×１
上記の通りだ。
もはや何の苦戦もない。ランポスもレクンガも、初めての戦いでその動きや習性を理解し、次の戦闘に活かしている。ハンターとしてまずまずの、いや素晴らしい上達と言ってよいだろう。入手した素材をポーチにねじ込んで、次へ向かう。今回のクエストはハイネのキズの回復を待つ時間潰しなので、時間は気にせずに制限時間である２４時間をフルに使うつもりだ。当然、ピッケル、虫あみ、釣りミミズ等は持てるだけ持ってきた。
滑り出しから上々の成果をあげたシンは、昼まで素材の採取に勤めた。湖に接しているため釣りのポイントはたくさんあるし、密林という名の通りたくさ木々が生育しているため虫の茂みも多い。また採掘なら大空洞にたくさんの鉱脈が密集している。
その途中、遭遇した草食種アプトノスを倒して生肉を剥ぎ取り、持参した肉焼きセットで遅めの昼食をとる。
シン
『採取に夢中になりすぎた　な』
手頃な岩に腰かけ、焼きたての生焼け肉を頬張る。肉の焼き方は以前ハイネから教わったのだが、まだうまく焼くことがない。
２個ほどの生焼け肉で満腹となった。スタミナもバッチリ回復。
その後、肉焼きセットを片して後始末をしていると、肉の匂いにつられて彼らが姿を現した。
ランポス
『アゞアゞ』
シン
『ったく、どこからわいて　出やがった?まぁ、探す　手間が省けたけど』

よっこいしょ、とでも言いたげに膝に手をついて立ち上がり、両手にボーンシックル改を構えてランポスに向き直る。

シンが本日2度目となるランポスとの戦闘を繰り広げていた頃、1度目の戦闘の時の林の中に不穏な影がうごめいていた。辺りに散らばるランポスの死体を確認した後、その影は空に向かって砲口を放つ。

翻弄

ケネス
『予想以上に早く終わった　な』
ケネスがすでに屍と化した黒轟竜ティガレックス亜種の上であぐらをかきながら誰にともなくそう呟く。
時刻は夕暮れ時。日はかすかに傾きかけているが、この火山からは、もくもくと吹き出る噴煙の影響で、それを見ることはできなかった。
火山の一角の、モンスターの休息エリアとなっているこのエリアに、今回のクエストの参加者であるケネスたち一行の姿があった。
ミキリ
『まぁ、私たちなんだから　当然の結果よね』
スコール
『でも、ティガレックス亜　種を3日で討伐するなん　て、やっぱりスゴいこと　だよ』
カノン
『何自分の手柄みたいに言　ってんのよ。アンタたち　ただボコボコにされて、　ギタギタにやられて、ヘ　ロヘロになってただけじゃない？』
ヴァニラ
『カノン、言い過ぎ』
ヴァニラが指差すその延長線上には、ティガレックス亜種の屍の影で体育座りをするケネスとスコールが。スコール
『なぁ、ケン。オレたち、　そんなにボコボコとかギ　タギタとかになってたっ　け？』
ケネス
『さぁ。でも、カノンに言　われると、なんかそんな　気がしてきた』
カノンから擬態語の嵐をぶつけられたケネスとスコールは、辺り一

面にブルーな空間を広げていた。
そんな状態の２人を見ても、カノンはまったく動じない。これでもカノンに悪気や悪意はまったくない。ただ、本音を素直に口にしているだけで。
スコール
『そうだな。オレたちギタ　ギタとかズタズタとかぐ　ちゃぐちゃとかになって　たかもな』
どうやらカノンの言葉には、ネガティブ属性が含まれているらしい。
ケネスとスコールは見事にその術中にはまったようだ。
ネガティブ属性、実際にあれば強そうだ。
ミキリ
『依頼人が要求したモノも　入手したし、この後どう　する？指定された時間ま　でもう少しあるけど』
ミキリが真っ黒いソレを手にして皆に尋ねる。
内臓のように生々しいその黒い物体は、黒轟竜の声帯と呼ばれる希少素材。通常のハンターにとってはまったく利用価値がないのであまり知られてはいないが、美食ハンターやその他のグルメ家にとっては目ん玉が飛び出るほどの高級食材なのだ。レア度は１０（ＭＡＸ１２）。
ミキリ
『こんなのがおいしーなん　て、とてもじゃないけど　思えないよね～』
確かにヘドロの塊のようなソレは、おいしそうどころか食材にすら見えない。
ヴァニラを覗くこの４人はあまりそっち方面には詳しくない。
ケネス
『とりあえず、今回は帰ろ　うぜ。カナリアも待って　るだろうし』
満場一致で全員が首を縦に振る。ケネスの意見に皆異存はないようだ。
準備をぱっぱと仕上げ、一行はティーズへの帰途についた。

スコール・ジーヴァス
カノン・ハリュース
ヴァニラ・U・レイアリスフドウ・オウ・ミキリ
ケネス・L・レウスウォール
以上5名、クエストクリア。
今回のクエストは直接契約のクエストである。
直接契約とは、以前にも話した通り、依頼人がハンターに直接依頼を持ち掛ける契約方法である。普段は依頼を仲介するギルドによって依頼人とハンターの関係が結ばれるが、直接契約にギルドは関与しない。
その大きな特徴として、普通はハンターがクエストを選ぶというシステムに対し、直接契約は依頼人がハンターを選ぶ。
これによって重点的に問題視されるのが、ハンターの知名度。すなわち通り名である。有名なハンター＝強いハンター＝成功確率大という単純な方程式が、多くの依頼人の頭の中にあるからである。
ちなみに、今回の直接契約のクエストとして依頼人から指名されたハンターは、【つがいの猫】つまりケネスとヴァニラである。
これでもケネスとヴァニラは、【つがいの猫】としてその道ではそれなりに名の通ったハンターなのだ。

シン
『ふぅ～』
岩に腰かけ、砥石でボーンシックル改の刃を念入りに磨ぐ。
双剣は連続攻撃に長けた武器なので、刃毀れしやすい。また研磨の場合は、双剣なので両の剣を磨ぐ必要がある。これらの理由のため、双剣使いにはこまめな研磨が求められるのだ。
シン

『こんなモンか』
シンが磨ぎ終えたボーンシックル改を太陽にかざす。磨ぎたてのボーンシックル改の刃に反射した太陽の光が、シンの顔に眩しく突き刺さる。
ランポス・ジャギィ各１０頭の討伐クエストに来ているシンは、現在までに１７頭のランポスを討伐している。シン
『さっきからランポスしか　出てこねぇな～』
すでに必要以上の数のランポスを討伐しているシンが、ブツブツとぼやきながら林の中をさ迷い歩く。察しの通り、まだ１頭もジャギィを討伐していないのだ。しかし、それがこのクエストのミソだとも言える。
この辺り一帯はすべてランポスの縄張りだ。
ジャギィを討伐するには、ジャギィの縄張りを探さねばならない。
シン
『ホントにいんのか、ジャ　ギィ？そういや、オレ、　この密林でジャギィ見た　ことねぇし…』
縄張りのことを知ってか知らずか、シンのぼやきは止まらない。
今までの密林でのクエストで一度もジャギィと遭遇しなかったのは、単純にランポスの縄張りの中でしか行動していなかったからであろう。
目安でいうと、湖の沿岸側がランポスの縄張りで、奥側がジャギィの縄張りだ。ただ、“奥地”のエリアとなると話は別だ。
そして、支給品の地図を片手に一時間さ迷い歩いて、渓流の方へ向かった時…
ジャギィ
『アア』
ランポスとは明らかに異なる鳥竜種と遭遇した。
頭を覆う耳のようなエリマキが特徴のこの鳥竜種、ジャギィに間違いないだろう。
シン

『やっとか』
妙な達成感が身体中を駆け巡り、それが落ち着く前に背から2本の剣を抜く。
目の前にはジャギィが3頭、ジャギィノスが1頭。
しかし、シンの目にはジャギィが4頭と映っている。ポッケ出身のシンが、ジャギィがオスとメスに分類されていることなど知っているわけがない。
シンは両手にボーンシックル改を構え、横に並ぶジャギィとジャギィノスの群れに突っ込む。
急所への連続攻撃。
のど元を裂かれた4頭のジャギィとジャギィノスは一瞬で沈黙する。
シン
『ふぅ～』
軽く深呼吸し、息を整える。刃に付着した血を振り払い、刃がこぼれていないかこまめにチェックする。
↓［鳥竜種の牙］×2
［ジャギィの皮］×1
［ジャギィの鱗］×1
やはりジャギィも大したことはない。基本はランポスと同じなので、当たり前と言っちゃ当たり前なのだが。
シンはすぐに次のジャギィの捜索に戻る。
日もだいぶ傾いてきた。日の入りが遅いこの地域で日が傾くというのだから、かなり遅い時間だということを察してほしい。
制限時間をフルに使うと言っても、やはり夜間の行動は危険だ。日が完全に沈む前に、床につくか帰るかしなければならない。
シン
『こりゃ、日没まで秒読み　だな』
ジャギィの縄張りを探すのにかなりの時間を裂いてしまったが、見つけてしまえば何のことはない。ジャギィの生息圏に入ったのだから、後は必要な数を討伐するだけだ。

この辺りのエリアは河川が集中している。他のエリアに比べ地形が低くなっており大小様々な川が集まってくるのだ。大河によってエリアが分断されるなど、行く手をはばまれることも少なくない。

シン

『…』

行動するにはなかなか不自由なこのエリアに、初めて足を踏み入れたシンは少々翻弄されている。

日没のタイムリミットまで残り７０分。

四年前の悪夢【新月の恐怖】

ハイネ
『おかわり～♪』
シド
『アンタ、いい加減にしな　さいよ』
アイルー諸君
『ニャ？』
無邪気にほっぺたにご飯粒をつけながら、高らかに皿をかかげるハイネ。
シドの店であるこのストレイキャッツに今のところ客はハイネ一人だけだ。だからというわけではないが、現在はハイネの貸し切りとなっており、何十人分という量の食材を一人で侵食している。
それはハイネの前に高々とそびえる皿の山…いや皿の山脈を見てもらえば、瞬時に理解してもらえると思う。
ハイネ
『何だよ～。もう終わりか　～？』
シド
『“もう”って何よ、“もう”って。アンタどれだけ食べるつもりなのよ。　だいたい、お金はあるん　でしょうね』
ハイネが満足そうなげっぷをしながらそう言うと、シドは猿山の猿のようにキーキーと叫ぶ。
ハイネ
『ＨＲ１のハンターが、そ　んな大金持ってるわけね　ぇじゃん』
ケロッと開き直ったハイネは、腰から取り出した財布の口を開き、それを下にして上下に振ってみせる。
そこからこぼれ落ちた１０枚たらずのコインが、むなしい音を奏でながらテーブルの上に落ちる。
それを見た時のシドの心の内は想像を絶する。

ハイネ
『出世払いってことでよろ　しく♪』
シド
『ハァ』
そうは言っても、こんなことを想定していないわけではなかった。
なんといっても、家族なんだし。
ため息をつきながらシドがハイネのテーブルへ寄ってくる。
シド
『それじゃ、出世しないと　承知しないわよ』
シドは拳をハイネの頭にボンと乗せて、ハイネの前にそびえる皿の山を運んでいく。そのシドに続き、数匹のアイルーたちが集まってきてハイネの前の皿を運んでいく。
ハイネは椅子の背にもたれ掛かり、ぼんやりと外の風景を眺める。
『出世払い』ノリで言ったつもりだったのだが、『出世しないと承知しない』とシドから返された時、妙に現実を突きつけられた気がした。
兄のことだ。
ハイネの兄、イザークは、今のハイネの年齢の頃には、すでに一族を抜け“砂の狩人刀七人衆”の一人としてその名を天下に知らしめていた。それに比べると、自分は何をしているのだろうか。
ハイネ
『なぁ、シド。イザークの　こと知ってるよな?』
シド
『え?』
キッチンで大量の皿を洗っていたシドが、突然のハイネの質問に不意をつかれたような声をあげた。
シド
『…まぁね。ヴェステンフ　ルスとは古い付き合いだ　ったから』
今はこうして店を開いているシドだが、これでも美食ハンターというハンターの端くれでもあるのだ。

その関係でシドはヴェステンフルス一族の数少ない親交のあるハンターの一人だったのだ。

ハイネ

『小さい頃のイザークって　どんなだった？』

シド

『どうしたの、急に？』

皿を洗っていた手を止め、シドはハイネの方へ振り向く。

これまで一族を裏切り滅亡に追い込んだと思っていた兄のことを、ハイネはほとんど口にしなかった。

そんなハイネが、何の心変わりか、突然その兄のことを問いただしてきたのだ。ハイネ

『アルスターのセキレイ様　やヒバリさんがいろいろ　教えてくれたんだ』

シド

『そう、あの子たちが』

それを聞いたシドがゆっくりと窓の外に目を移す。その窓からは、遠くにぼんやりと見える何かの建物の影が確認できた。それは、アルスター一族の居住区にある塔だった。

シドのこの物言いからして、アルスター一族とも何か交流関係があったようだ。シド

『イザークは、ホントによ　くできた子だったわ。頭　はいいし、運動神経抜群　だし、誰にでも優しかっ　たしね。まぁ、ちょっと　無愛想だったけど』

やはりシドもイザークの評価はようなこのものだった。おそらくイザークのことを知った人は、全員が今のシドと同じことを言うだろう。現にかつてのハイネ自身もそう思っていたのだから。

シド

『そんなイザークがなんで　一族を去ったのか。それ　は私にもわからないわ』ハイネ

『…』

シドなら何か知っているかもしれない。そんなかすかな望みがないわけではなかった。
しかし、それすらも打ち砕かれた今、真実は永遠に闇の中という絶望にも似た思いが一気に増大した。
シド
『気になる点っていうのを　強いてあげるなら、イザ　ークが一族を抜ける2、　3年前から急にアンタた　ちのお父さんのアトラス　と仲が悪くなったってこ　とぐらいかしら?』
このことから、父と不仲になったイザークが一族を抜けた。そうとらえることもできなくはない。
しかし、イザークのことをよく知るハイネとシドは、それは絶対にあり得ないと断言できたのだ。
イザークは父と仲が悪くなったぐらいで、一族を抜けるような卑怯者でも臆病者でもない、それを知っているから。
ハイネ
『オレ、あの時見た大剣使　いが、イザークだとずっ　と思ってた…』
あの時、それすなわち、クモによるヴェステンフルス殲滅のあの忌々しき夜のことだ。
――4年前――――――――砂漠奥地、岩石地帯の“鳳凰の谷”と呼ばれる秘境にヴェステンフルス一族の居住区は存在した。
同じ五大部族といっても、村と居住区が一体となっているアルスター一族とは違って、ヴェステンフルス一族の居住区は村から遠く離れた辺境の地に存在した。この日、ヴェステンフルスでは一族にとって重要な会議がなされるため、方々に散っていた一族のハンターたちがこの居住区に帰参していた。
ハイネ
『なぁ、ラミア。なんで今　日、みんな帰って来てん　の?』
当時15歳のハイネが、続々と帰還する我が一族のハンターたちを見て、隣に立つ姉にそれを問う。

ラミア
『なんか、大事な集会があ　るんだって。父さんがそ　う言ってた。兄さんのこ　とかな？』
わかってもらえてると思うが、この時イザークはすでに一族を抜けている。
ハイネの隣の姉ラミアは当時１７歳。ラミアはＨＲ４のハンターであったが、ハイネはまだハンターではなかった。ただ、もう数日でハイネがハンターとなる儀式が行われる予定だった。
ハイネやラミア、その弟や妹たちは重要な会議とやらが開かれる夜まで、久しぶりの仲間たちと暇を持て余していた。
ヴェステンフルス一族は、五大部族に数えられる部族の一つだ。当然、優秀なハンターも多い。以前にも話した“砂の狩人刀七人衆”の内、３人がヴェステンフルスのハンターだった。

その夜、一族の族長であるハイネやラミアの父アトラスを筆頭に一族のハンターを一堂に会して、重要な会議という名目の集会が執り行われた。
当然、ハンターでないハイネはその集会にも参入することは許されなかった。
一応ハンターである姉ラミアも集会に参加する中、ハイネや弟と妹たちはさっさと床につかされた。もうすぐハンターとなるハイネとしては若干納得のいかないところはあったものの、どうしようもないことなのでおとなしく眠りに落ちることにした。

そして、闇夜を照らす光すらない新月の夜、惨劇は始まった。

『ズドーン』静かな夜の大地に、まるで爆弾でも投下されたように響く巨大な地響き。
ハイネ
『な、なんだ』

そんな轟音に、弟や妹たちと並んで寝ていたハイネは叩き起こされた。弟や妹たちも寝ぼけ眼をこすって体を持ち上げる。

メイリン

『どしたの、ハイネ？』

長いオレンジ色の髪をぐっしゃぐしゃにして、ハイネの名を呼ぶ妹メイリン。どうやら彼女は、音の正体がハイネだと思っているようだ。

そんな妹の言葉も耳に入らないハイネは、障子の外が妙に明るくなっているのに気づいた。朝の明るさではない。何か一部が極端に光ってあるような、そんな明るさだった。

ハイネはよろよろと立ち上がり、その怪しい障子に手をかける。すると…

ラミア

『みんな、早く起きて』

ハイネが障子に手をかけた瞬間に、その障子が勢いよく開いた。

ハイネ、メイリン

『ラミア？』

その向こうに立っていたのは、大きく息をきらした汗だくのラミアだった。

そして、そのラミアのさらに向こうに、炎上する集落が確認できた。

そして、ハイネはそれ以上に見るべきでないものを見てしまった。

燃え上がる炎の中に立つコートの男に、武器を手にした一族の者と思われるハンターが三人で一斉に斬りかかった。しかし、そのコートの男が手にする大剣の一振りで、三人のハンターは武器ごと身体を真っ二つに斬り裂かれた。

ハイネ

『』

ラミア

『急いで』

汗だくのラミアが必死に叫ぶ。

ハイネは状況の把握ができないまま、弟と妹と叩き起こし、ラミアの誘導に従って避難する。

メイリン

『ちょっと、これどういう　こと?』

燃え盛る集落の中を、ラミアを先頭に走る。

メイリンの叫びすらも耳に入らないのか、ラミアは無言で必死に走り続ける。

ハイネ

『…』

行き着いたのは石造りの物置。ここなら例え炎が燃え移ったとしても、焼けることはない。

ラミア

『いい、ハイネ。メイリン　たちとここにいて。父さ　んたちのこと見てくるか　ら』

落ち着いた物言いだが、その顔には隠しきれない焦りと恐怖が見てとれた。

『オレもいく』そう言いたかったハイネだが、ラミアの表情や左右で震えている弟や妹たちを見ていると、言い出すことができなかった。しかし、あんな表情の姉をたった一人であの炎の中に戻るのをただ見送るだけというのも、同じくらい辛かった。

ラミアは最後に優しい面持ちで、物置の扉を閉めた。

四年前の悪夢【紅蓮の死神】

―四年前（前回の続き）――『今の自分には何の力もない。せめて目の前にいる弟や妹たちだけでも守らなければ』
そんな思いで姉ラミアを見送ったハイネ。
扉を閉められ外の様子はわからない。しかし、事件の当初に聞いた『ズドーン』という爆発音はひっきりなしに聞こえてくる。
イアン
『祭りじゃ…ないよな、ハ　イネ？』
フレイ
『なんで家燃えてんの？お　母さんは？』
メイリン
『…』
ハイネたちは物置のできるだけ奥の大きな箱の影に、四人で寄り添って身を潜めていた。
自分の左右から問い掛けられる答え難い質問に、ハイネはただ悶えるしかない。ハイネ
『…』
無情にも時間だけが過ぎていく。何もしていないのに、否、何もしていないからこそ時間の流れがより一層鮮明に感じられる。
しかし、どれだけの時間が過ぎたのか、それはわからなかった。
『父さんたちのこと見てくるから』そう言って一人あの炎の中に戻った姉を、一体どれぐらい待ったのだろうか？
１０分？２０分？１時間？
頭の中に浮かぶその数字は、どれもが当てはまりそうだった。
メイリン
『ラミア、遅いね』
ポツリとつぶやいた妹のメイリン。
その一言にハイネはハッと我に返った。

ハイネ
『メイリン…』
メイリン
『え？』
ハイネ
『イアンとフレイ、見てて　くれないか？』
ハイネの両脇にいる弟イアンと妹フレイ。そして左側のイアンのその向こうにいるメイリンに、ハイネは忽然とそう告げた。
ハイネ
『ラミアが戻ってこないな　ら、オレが行くしかない　』
メイリン
『ちょっと待ってよ。まだ　ラミアが戻ってこないっ　て決まったわけじゃない　でしょ』
メイリンは立ち上がり、気性を荒立てて叫ぶ。
しかし、こんな状況でもハイネは落ち着いていた。
ハイネ
『このままここにいるわけ　にもいかないだろ』
メイリン
『でも…』
ハイネ
『大丈夫。見つけられなく　ても１０分たてば帰ってく　るから』
そう言ってハイネも立ち上がり、イアンとフレイに挟まれたその席をメイリンにゆずる。
メイリンはなかなか難しい顔をしていたが、しぶしぶと二人の間に入って、両腕でイアンとフレイを抱えるようにだいた。
それを見たハイネは、先ほどのラミアのような一瞬の笑みを見せて、三人の弟と妹の前から消え去る。
フレイ
『ハイネ、どこ行ったの？　』
メイリン

『ラミアや父さんたち、探　してくるんだって』
この時、父たちを探すために一人で出ていったラミアを待ちきれずにその後を追ったハイネ、すでに何十分何時間と感じられていたのだが、実際には１０分とたっていなかったのだ。

ハイネ
『くっ、何だよ、これ…』物置を出たハイネの前に広がっていたのは、文字通りの火の海。見渡す限り、燃えるものはすべて燃えている。
家々は木っ端微塵に破壊され、燃えるその瓦礫が道をふさいでいる。ハイネはなんとかして、それらの瓦礫を掻い潜り、姉や父を探すべく先を急ぐ。ハイネ
『！』
物置から瓦礫の死角になっていたところに、ハイネは目的のものを発見した。
ハイネ
『ラミアー』
燃え盛る炎の中、ハイネに背を向ける形で、なぜか身構えてたラミアにハイネは声をあげながら駆け寄る。その時のハイネは、案外簡単に見つけられたという安堵感と、生きていたという安心感を覚えていた。
しかし…
『ズシャッ』
無情な斬撃音とともに、血飛沫と火の粉が空を舞う。ハイネの目の前で、ラミアが斬り裂かれた。
ハイネ
『っ』
斬り裂かれた姉の身体は、後方へ大きくふっ飛び、その後瞬時に火炎が発火し燃え上がった。
それを目の当たりにしたハイネは足を止めた。いや、体の動きすべ

てが静止した。
今さっきまで姉が立っていたところに目を移してみると、黒いコートを着用し左手に赤い太刀を持った男が仁王立ちしていた。
ハイネ
『…』
体が静止したまま、恐怖のふるえ以外に体が動かない。
その男は右手の手のひらを物置の方に向ける。するとその手のひらに赤い光が集束し始め、バスケットボールサイズの円球となって放たれた。
そして…
『ズドーン』
例の爆発音とともに物置を木っ端微塵に粉砕した。
ハイネ
『なっ…』
お分かりであろう。今破壊された物置には、ハイネの弟や妹たちが身をひそめていたのだ。
それは地面ごとえぐるように物置をバラバラに爆砕した。生存の希望などないくらいに。
それを見て、両の膝を地面に体勢を落とすハイネ。何が起きたのかわからなかった。
気がつくと、ハイネの目前でコートの男が赤い太刀を振り上げていた。
体勢を落としたハイネは、漠然とその振り上げられた太刀を見上げる。
赤く輝くその太刀は、新月の夜の空の暗黒を照らしている流星ように見えた。
そして、赤く輝く太刀が振り下ろされた。赤き流星が迫ってくる。
『ダメェ』

耳に突き刺さるような叫びが炎の大地に響いた。
そしてその叫びと同時に、ハイネの目の前で赤き太刀を振り上げたコートの男に、同じくコートを着た叫びの主と思われる女が飛びついて抱きしめる。その人物が女だというのは声から判別できた。
ハイネ
『…』
女に抱きつかれたコートの男は、太刀を振り下ろそうとした右手を止めた。
その後、数秒の後に、コートの男は『チィッ』と舌打ちをして、抱きついていた女を振り払い太刀を腰の鞘に納めて、そのまま炎の中に消えていった。
そしてその一瞬にハイネは見た。立ち去ろうと背を向けたコートの男の背に、鎖で縛られた逆さの十字架が描かれていたのを。
この時、九死に一生を得たハイネはまだその実感すらなかった。それ以前に生死の淵にいたことすら理解できてはいなかった。
その後女は、腰を落としたハイネの前に歩み寄ってきた。

シド
『ハイネくん、ハイネくん』
身体を小刻みに揺すられ、自分の名が連呼される。
そんな外世界からの呼び掛けに、死体のように横たわっていた少年は、重いまぶたをゆっくりと開けた。
ハイネ
『…ん？』
むさいおっさんの腕の中で目を覚ましたハイネ。構図的にはあまり良くないものだが、問題はそこではない。
ハイネ
『イエーガーのおっさん…　、…ここは？』
目の前にあるシドの顔を見て、そう呟くハイネ。これが、ハイネの

シドの出会いであった。
シド
『アナタたちの里よ。生き　残りはハイネくん、アナ　タだけみたい』
実に申し訳なさそうにシドはそう言った。
それを聞いたハイネは、昨夜の悪夢が鮮明に頭の中によみがえってきた。
ハイネ
『…ラミア、メイリン…』自分を抱いていたシドを押し退けるようにして立ち上がり、皆を探すように辺りを見回す。
しかし、目に映るものは、焼け焦げボロボロの廃墟となった集落だけだった。
ハイネ
『…』
絶望的な状況を目の当たりにしたハイネは、ただただ己と運命を呪うしかなかった。なぜ一族が滅ばなければならなかったのか、なぜ自分だけが生き残ったのか、そしてなぜ自分には皆を守れる力がなかったのか、と。
村を焼き払った炎は、骨が灰になるほどの業火で、遺体の特定さえできるような状況ではなかった。
その後、ハイネはシドに引き取られ、事が落ち着くまでの間ヴェステンフルスの名を隠し、クロノスの村でひっそりと隠棲していた。
――――――――――――――――――――時代は現代に戻って…
ハイネ
『あの時の大剣使いの男が　イザークだと思ってた』ハイネはテーブルの上に置かれた氷と冷水の入ったグラスを強く握り締める。
ハイネが言う『大剣使いの男』というのは、前話で一瞬だけ登場した、大剣の一振りで一族のハンターを三人もろともに斬り裂いたという大剣使いの男のことである。
シド

『イザーク、今は“砂の狩　人刀七人衆”だっけ？あ　んな裏の世界に名の知れ　た連中に数えられて、何　をしようってのかしらね』

ハイネの瞳がかすかに赤く染まる。

そして、その手に握られている兄から受け継いだ首飾りが、何を意味しているのか。

そして忘れもしない。悲劇が始まったあの時から、未だに覚めることのない悪夢にうなされているハイネ。目の前で姉を殺し、弟妹を殺し、一族を殺した、あの逆十字を背負った黒コートのハンターたちを。

シン

『ハハハ、ジョーダンだろ　…』

日が半分以上地平線のその向こうに隠れた頃、シンの姿は密林の林の中にあった。

そんな薄暗い木々の中、スタジアムをなすかのようにシンの周りをランポスが取り囲んでいる。そして、そんな最悪なスタジアムの中でシンが相対しているものは、

ドスランポス

『アア〝ーー』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6543q/

FINAL HUNTER G ~ファイナルハンターG~

2011年10月29日00時04分発行